

# Paradise Lost Division

陽朧（ゆっくり再開）

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

『現代社会の歯車の一人であった男は、ある日突然胸を刺されて死亡する。』

そして再び目覚めを迎えると、自分の体が自分のもではなくなっていた。

その体の持ち主である墮天司ベリアルは、とある理由からとある世界に干渉したいが為に、男を利用したという。

悪魔の思惑に振り回される日々に四苦八苦しながらも、その世界で出会う人間たちと交流を深めていく話』

\*注意\*

・The Dirty Dawg時代からのスタートです。

・スイッチが入ると元キャラに豹変する設定です。

・通常時は普通に話しています（段々と元キャラに発言が近くなっていく予定）

・pixivに載せているものと同じですが、とある地点から分岐が入ります。

そこからはまた別の視点で進んでいく予定です。

# 目次

## 本編

悪魔、降臨せし時①	1
悪魔、降臨せし時②	20
悪魔、降臨せし時③	43
悪魔、降臨せし時④	61
悪魔、降臨せし時⑤	86
悪魔、降臨せし時⑥	113
悪魔、降臨せし時⑦	134
悪魔、降臨せし時⑧	155
悪魔、降臨せし時⑨	174
悪魔、降臨せし時⑩	197
悪魔、降臨せし時⑪	213

悪魔、降臨せし時⑫

悪魔、降臨せし時⑬

悪魔、降臨せし時⑭

悪魔、降臨せし時⑮

悪魔、降臨せし時⑯

## 番外編

悪魔の共犯者

悪魔の共犯者Ⅱ

## 本編

悪魔、降臨せし時⑰

悪魔、降臨せし時⑱

悪魔、降臨せし時⑲

悪魔、降臨せし時⑳

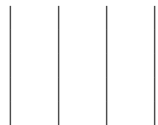
241 261 279 298 319 341 351 363 384 402 423

悪魔、  
降臨せし時

悪魔、  
降臨せし時

悪魔、  
降臨せし時

悪魔、  
降臨せし時



496 476 459 442



## 本編

### 悪魔、降臨せし時①

「熱く絡み合おうじゃないか」

華々しいスポットライトを浴びて佇む男の、赤い双眸がぎらりと輝く。地に伏せた数多の男たちの苦しみに満ちた喘ぎに、その深紅の目に恍惚が滲む。圧倒的な力を見せつけたその悪魔は、高らかに嗑い羽を広げた。

とある男にとって、死は始まりであった。とある男にとって、始まりは死であった。

特別なことをしたわけではない。

いつも通り朝起きて、いつも通り出勤して……。

強いて言えばそこからイレギュラーであった。それだけだ。

通りすがりに、脇腹に一刺し。随分呆気ない最後であったと思う。

ただこのご時世ニュースを付けければ、殺人、自殺、盗難、火災といった様々な事件が絶えず報じられている。

男が一人死んだ事件など直ぐに忘れ去られるだろうと、男は最後に笑った。

男には心残りとなる存在などなかった。

だから、例え自分の死であつても大した動揺などしなかった。

むしろ、死んでからの驚きの方が大きかったと思う。

死後の世界など考えたこともなかった。

極楽浄土でも地獄でも、現世よりも酷いものはない。

男はずつとそう思つて来た。

ふと目を開けると、そこは変わらない世界がそこにあつた。

がたんがたん和揺れる音色は電車の音だろう。

がやがたと騒がしい声たちは人々の声だろう。

ちらちらと感じる視線の波は人々の眼だろう。

どうやら此処は電車の中らしい。



「……」

ぼんやりした頭で、手元に視線を移す。

そして男は内心で首を傾げた。

すると視界に入った手と足に、違和感を感じた。

こんなに自分の手は大きくて、指は長かっただろうか。

こんなに自分の足は筋肉質で、長かったであろうか。

手に持っていた見慣れない携帯の、大きな画面を覗き込む。

「……これ、は」

黒い画面に映し出された顔は、自分のそれとは明らかに違っていたのだ。

艶やかな短い黒髪に、紅玉の瞳、目鼻立ちの良い端正な顔立ちを、何処かで見たことがある気がして、思考停止しかけている頭を何とか回す。

そういえば、そうだ。気紛れでインストールしたアプリに、出て来るあの強烈なキャラクターに、似ている。いや似ているレベルなんてものではない。緊急急速回転のため

にオーバーヒート寸前の頭で、男はそう考えた。

そのアプリを特別やり込んでいたわけではないが、あまりにもインパクトのあるキャラクターであつたために、恐ろしい程記憶に残つていた。

衝撃から忙しく動き始めた心臓と、眩暈すらしてきた視界が揺れる。  
今自分が置かれている状況を上手く飲み込めない。

するとその時、暗くなつていた携帯の画面がふと明るくなった。  
恐る恐る覗いてみると、何かメッセージを受信したらしい。

『○○年○○月○○日 △△時

××駅 ××会場へ』

淡々と画面に浮かぶ誰かからのメッセージを眺める。

それが何を意味するのは、わからなかった。

しかし逆に言えばそれしか、わからないのだ。

「次は××駅、××駅」

タイミングを見計らったように聞こえて来たアナウンスに、男はため息を吐く。

どういう意図があり、どういう思惑があるのかは知らないが、今は従わなければならぬようだ。

減速した電車が滑るように駅へと入る。

一拍置いて開かれた扉に、男は立ち上がった。

駅に並ぶ店の硝子に映る自分を、男は初めて見た。

黒いドレスシャツに羽を模した飾りが、二の腕を飾っている。

同色のパンツとブーツに、ベルトを巻いたシンプルなスタイルだが、長身痩躯ながらも筋肉質な体には良く似合っていた。ただし羽がふわふわと揺れてとても邪魔ではあるが。

そして、この身体がとんでもない多機能型であることに、歩き出してすぐ気が付いた。

人間離れたという表現が似合うかもしれない、視覚に聴力に優れており、少しでも不審な動きがあれば目についてしまうらしい。

男は記憶と同じ名前の同じような造りの駅を、歩いていく。

日本を代表するといっても過言ではないこの駅は、迷宮のような造りをしている。

それだけ利用人数が多いということだが、人で常にごった返しているのだ。

幅広い年齢層の人間が、カジュアルな服をはじめ、スーツやドレス、着物など様々な

服を身に着け行き交う。

そんな人混みの中の、一人の人間が何故か気になった。

赤いパーカーの上に学ランらしきものを着た少年の後ろにぴたりと付いた、黒いスーツの男を注視する。

その時だ、少年が持つバックに素早く手を伸ばしたスーツの男は、何かを掠め取り足早に歩き出したのだ。

考える暇などはなかった。反射的に足が動いていたから。

まるで飛翔するような軽やかさで男は走る。

人混みに足を取られることはなく泳ぐように擦り抜けて、スーツの男の目の前へと回り込んだ。

「ちよつと良いかい、オニイサン」

ぎらりと赤い瞳が輝く。

獰猛な獣のそれように嗤った男に、スーツの男は悲鳴を上げた。

\*\*\*

「あ、あの……!!」

「ありがとうございます!!」

「いや、良いさ。俺が勝手にやったことだ」

柔らかな黒髪を持つ少年は、花緑青と洋紅色の瞳をきらきらという擬音が聞こえそうな程輝かせ、男を見上げる。

「どうやら、駅で使用して適当に突っ込んだ財布がバックから飛び出ていたために、悪い大人に狙われてしまったようだ。」

随分着崩しているが、推測するに中学生ぐらいだろう。

「次から気を付けた。お前が思っているほど、大人は善ではないんだ」

「は……はい、あ、あの何か……お礼を」

「イタイケな少年にお礼をされる程のことじゃないさ。」

「気持ちだけ受け取っておくよ」

形があのキャラクターであるだけに、口調も合わせるべきかと悩んだが、自分には色々

な意味で自分にはあれだけの語彙力はない。というか通報されて逮捕される未来が見える。

愛嬌のある笑みを浮かべる少年に、ドン引きされるのは御免なので、男は男のままて接することにした。

「あ、あの!!」

財布も少年に返したので、男はそのまま去ろうとした。  
しかし、少年に呼び止められて再び足を止める。

「あの……。俺、山田一郎って言います。

もし良かったら、連絡先教えて下さい!」

「一郎君、ね。教えるのは構わないが……」

「い、いやその、ご迷惑を掛けることはしませんので!」

ポケットから取り出した携帯のロックを外して、連絡用のアプリを開く。

すると嬉々とした表情を浮かべた一郎と名乗った少年は、自分の携帯を取り出すと連

絡先を交わした。

互いの連絡先が入った携帯に、ふと男は疑問に思う。

自然に手にしていた携帯を使用しているが、連絡先の名前とか、どうなっていたか。

「べ、ベリアル………さん?」

どうやら、携帯に入った自分の名前は、キャラクターそのものの名前らしい。

外人の名前というか完全にとある悪魔の名前である。

いい年をした大人がこの名前はヤバいのでは、と内心で慌てふためいていると、眉を顰めて何かを考える素振りを見せていた一郎が、ぱと顔を上げた。

「も、もしかして………~~×~~会場で行われる、ラップバトルに参加したり………します?」

「………行先は、~~×~~会場だが………」

「や、やっぱり!!べ、ベリアルさんって「あーちよつと、その名前を叫ばれるとオニイサ  
ン、困るな」

ラップバトルという言葉に疑問を感じたが、それよりも何故か興奮したように大声で

叫ばれた名前に、周りの視線が突き刺さるのを感じて居た堪れなくなる。確かに顔立ちは外人でもいけなくはない気もするが、名前が名前だ。色々な意味で痛い大人、と認識されるのは、とてつもなく恥ずかしい。

「え、じゃあ……なんて呼べば？」

「……うーん。まあ、お兄さんで、良いさ」

流石に本名を言う気にはなれないので、適当に濁しておく。すると、何故か少し恥ずかしそうな顔をした一郎が、小さく呟いた。

「に……兄ちゃん……。俺、弟はいても兄ちゃんはいないから、なんか変な感じだ」

照れたように笑った一郎に、男は少し罪悪感を抱く。

思わず少し視線を逸らすと、駅構内に置かれている大時計が、そろそろ会場に向かわなければならぬ時間を差しているのに気が付いた。

「一郎君も、会場に行くのかい？」



それなら話は歩きながらにしよう」

「やっべ、もうこんな時間……!」

男がそういうと、少年は慌てたように時計を確認した。

どうやらこの少年の目的地も同じであるらしい。

なんにせよ情報不足であることは、否めないのだ。

一郎がいてくれるのはとてもありがたい。

さり気無く話を聞き出す必要があるそうだと、男は溜息を吐いた。

そうして、歩きながら一郎に当たり障りのない質問をしつつも思考を回す。

足を向けている先は、ラップバトルの会場のようなのである。

ラップバトルは、ヒプノシスマイクというものを使って行われる正当な精神的バトル

で、今回のバトルは過去最大で特別な意味を持つバトルのようだ。

一郎が男の名前を知っていたのは、パンフレットに書いてある参加者名簿の中にあつ

た名前を偶々憶えていたらしい。

一通り話を聞くと、突拍子のないことに巻き込まれていることを改めて認識させられ

る。

男は、背中を冷や汗が伝うのを感じた。

ラップなどの経験も知識も勿論無い。それにそのような大会に申し込んだ記憶もない。

ヒプノシスマイクとやらも知らない。どうすれば良いかと頭を抱えそうになる。だが無情にも止められない足は、会場へと近づいて行っているのだ。

「そう言えば、兄ちゃんはグループで参加してんのか？」

すっかり打ち解けてしまったというか、懐かれたというべきか。砕けた口調でそう話しかけられた男は、更に頭を悩ませることになる。

「いや、……違う」

恐らく知り合いはないので、嘘を吐いても仕方がないだろうと素直に返答する。

一郎の話聞く限り、このラップバトルはグループでの参加と個人の参加の両方が可能のようだ。

ただし、最終決戦まで残ることがあれば、個人対グループという過酷なバトルになることもあるそうである。

男はこの時、参加したとしても、絶対に最終決戦などには残れないと思っていた。むしろ、辞退も考えていたほどである。

「兄ちゃん……ごめん、俺グループ参加だから此処で」

「ああ、頑張れよ」

「……なあ、兄ちゃん！」

「ん？」

「今度、遊ぼうぜ!!」

「……ああ」

失念していたが、一郎はグループ参加であるため、仲間との待ち合わせがあるのだから。う。

此処まで付き合わせてしまったことを詫びるべきかと考えた男に、一郎はふと寂しそうな表情を見せた。

そして、一拍置いて明るい笑顔を浮かべると、絶対連絡すつから!!と手を振って去って行った。

「……さて、どうするか」

「お前……!! さっきの……っ!!」

会場のエントランス前に辿り着いたは良いが、正直場違い感は否めない。

このままバックレるのもありかと顔を上げると、目の前には先程の黒スーツを着たスリ男がいた。

怒気を含んだ低い声に男は逆恨みを抱かれていることを、何となく察した。

警察に突き出しておけば良かったかと溜息を吐いた男を、じとりと睨み付けたスリ男は厭味つたらしく笑った。

「なんだてめえも参加者ってわけか!!」

なら丁度良い。俺に恥かかせたこと、後悔させてやらあ」

「自爆したただけだろうか?」

「うるせえ!! いちやもん付けやがって、俺様を誰だと思ってるんだ!!」

気が短いというか、お頭おとしが足りないというか。

触れてはいけない物件だということを態々自己紹介し始めたスリ男は、何も言わない

男の様子を見て調子に乗ったように、がなり立てた。

吐き出される言葉はどれも的違いで、しかも二人がいる場所は人が多く集まる受付のあるエントランス前である。

野次馬の好奇の目が突き刺さっているが、スタツフですらスリ男を止めようともしない。

これから言葉で戦うものが、これくらいで負けては参加資格もないということだろうか。

男は気が長い方であるが聖人ではない。

血走った眼を見開いて詰め寄って来る男に、ぶちりと何かが切れる音がした。

「カツカするなよオツサン。キミじゃ何も感じない。

……前戯以下だ」

くつりと低く喉で笑った男は、蔑みの目を向ける。

その瞬間、一変した空気に会場の空気が止まるのを感じた。

\*\*\*

熱気に満ちた会場内は、このバトルがとんでもない影響力を持っていることを示していた。

あちらこちらに置かれたテレビ局のカメラと、その近くにいたアナウンサー達が忙しく動き回っている。

見渡す限り人で埋め尽くされた広い会場に足を踏み入れた男は、ただ溜息を零した。少々記憶が飛んでいるが、自分はヒブ<sup>戦</sup>ノシス<sup>資</sup>マイク<sup>格</sup>を持っているらしい。

先程の騒動でスリ男が出したマイクに対抗するように、自然と手にしていたマイクは、ガイコツマイクに三対の蝙蝠の翼がカスタマイズされたものであった。

それが悪魔をイメージしているものだということは、何となくわかる。

「……それにしても」

気が付いたらスタッフらしき人々に止められていたが、自分を何をしたのだろう。と首を傾げる。

スリ男如きにぶちぎれた自分に呆れるも、何せ記憶がないのだ。

気が付いたら、受付を済ませて此処に来ていた。それだけだ。

「おい、てめえ」

始まるまでは、まだ少し時間があるので、人を掻き分けて廊下に出る。何せ会場全体が広大な上に参加者と閲覧者が非常に多いため、外に出るのも苦勞をした。

そんな中不意に後ろから掛けられた声に、男は振り返る。

すると、そこには白いシャツに革ジャンを羽織った銀髪の青年がいた。男の赤い瞳とは少し色合いの異なる、切れ長の赤い瞳を男に向けた。

「てめえが、ベリアルか」

「……そうだが？」

「……ふん。気に入らねえ面だなア、オイ。」

俺様はThe Dirty Dawgの碧棺 左馬刻だ」

一郎が世話になったようだが、と鼻で嗤った青年は名乗りを上げた。左馬刻は男を値踏みするように上から下まで、視線を流す。

「さつきとは別人じゃあねえか」

「……？」

「マイク握るとスイッチ入るタイプってか、そりや楽しみだ」

にいと狂犬の如く歯を剥き出して笑った左馬刻に、男は訝しげに眉を顰める。だが男の様子など意に介す様子もなく、煌々と赤を輝かせた。

「精々、上がって来い。」

ベリアル……てめえは、俺様が直々にステージで殺してやるよ」

それだけを言って去って行く青年の後ろ姿を見送りながらも、更に男は混乱する。

さつきとは別人じゃあねえか。左馬刻は確かにそう言った。

さつきというのはきつと、エントランスでスリ男に絡まれた時であろうか。

その時に自分は何をしたのか、思い出そうとしても何も浮かばない。

そうしているうちに、会場内にバトルの始まりの時間を告げるアナウンスが流れた。

こうなってはもう腹を括るしかないようである。



男は仕方なく足を舞台へと向けた。

## 悪魔、降臨せし時②

その男が現れた時、一郎は世界が止まったような不思議な感覚に囚われた。

左の二の腕を飾る羽根を想わせるファーがふわりと揺れ、深紅の双眸が一郎を映す。

一郎が尊敬する一人である左馬刻とも、一郎が持つ片目とも色合いが異なるそれは、宝石のようなうつくしさに悪魔的な魅力ふじゆんを混ぜ合わせたような輝きを持っていた。

筋肉質ながらもすらりとした、長身に黒いドレスシャツを着こなした男は、人目を惹き付けつつも圧倒するような雰囲気ふじゆんを纏っていた。仕草や表情の一つ一つが蠱惑的で、性別関係なく人を魅了する。

一郎も例に違わず、その男に魅入ってしまった。

これは全て『虚飾ベの美しさに溢れる悪辣アで淫ルらな存在』が、『狡知』を以て生命を誘惑するモノであるに由来するのだが、本人すらまだ無自覚である。誰も知りようのないことであつた。

年頃ということもあつてか、一目見ただけの男をただ純粹に『かつこいい存在』として認識した一郎は、去ろうとした男を引き留めた。折角出会つた存在と、此処で別れて

しまうのは勿体ない気がしたのだ。

夢中になって話しているうちに時間が過ぎてしまったらしい。

男に会場まで一緒に、と誘われた時は、自分でも驚く程に心が躍った。

「よお、一郎。随分遅かったじゃねえか……あア？」

この俺様を待たせるとは、随分いい度胸してるじゃねえの」

「さ、さーせん!!左馬刻サン!」

「ごめんなさいだろ、このクソガキ!!」

だから、集合場所に一番最後に遅れて到着した一郎の顔を見たメンバーから不審な目を向けられようが、怒りを浮かべる左馬刻に睨み付けられようが、ふわふわとした心が萎むことはなかった。

「んんん?なあんか、ご機嫌だねえ一郎。遅刻した癖にい」

「…わ…悪いって、乱数」

「どうしたんだい、一郎君。君が遅刻とは珍しいじゃないか」

「寂雷さん!!聞いて下さいよ!!」

集合場所として決めていた、会場の入り口付近にあるベンチに見慣れたメンバーの姿を見つけた一郎は、慌てて駆け寄る。するとまず初めに、腕を組んで仁王立ちをした左馬刻に阻まれた。

ベンチに腰を掛けたピンク色の髪の少年が、飴を片手に頬を膨らませる。

乱数と呼ばれた、可愛らしいという言葉が似合う容姿の少年は、じとりとした目で一郎を見上げた。

必死に謝りる素振りを見せつつも、いつもと違う雰囲気を見せる一郎に、寂雷と呼ばれた白衣を着た長身の男が首を傾げた。

寂雷がそう尋ねた途端に、燦然と一郎の瞳が輝く。

そんな一郎の様子に、余程嬉しいことがあったらしいと察した寂雷は、ゆるりと微笑んだ。

「ふむ……とても興味深い話が聞けそうだ、が。

それは、歩きながらにしよう」

「もう一郎ってば、暢気なんだから。

受付開始時間、とつくに過ぎてるんだよっ？」

「けっ。ガキが浮かれやがって。

ちったあ空気読みやがれ」

ごっつん、という強い衝撃を頭に感じて思わず手で押さえる。

痛みで呻いた一郎を鼻で嗤うと、左馬刻は背中を向けて歩き出した。

大丈夫かい、と苦笑いを浮かべながら一郎を覗き込んだ寂雷に、呆れた顔をした乱数が溜息を吐いた。

待たされることを嫌う左馬刻が、苛つきながらも辛抱強くそこにいたのは、何だかんだいって兄弟分として一郎を可愛がっている証であろう。

ならば、尊敬する兄貴分を待たせた罪はちゃんと受けるべきだと一郎は、ぐつと文句を飲み込むと、左馬刻の背中を追い駆けた。やれやれと可憐な顔を歪めつつも、乱数もそれに続く。

彼らの背中に笑みを深めた寂雷は、吹き荒れる風に紫と灰の髪を靡かせながら、ゆっくりと歩き始めた。

声を弾ませ唇を動かし続ける一郎の話をBGMとして、受付へと足を向ける。

一郎の隣でうんうんと相槌を打つ寂雷と、欠伸をしながらも話半分に聞く乱数、そして興味なさげにしながらも一応は聞いているらしい左馬刻……といったように各自程度は異なるが一郎の話に耳を傾ける。

話を簡潔にまとめると、このラップバトルの参加者の一人であるベリアルという男に助けられたらしい。

そしてその男をすっかり気に入ってしまった、ということだ。

「だっせえ話だなア、一郎よ。財布なんざスられやがって。

てめえがポーっとしてんのが悪いんだろうが」

「つう……いい、急いでたんスよ!!」

「だから時間には気い付けろつつったんだ、ばーか」

はあ、と呆れた顔を浮かべた左馬刻が一郎を見下ろす。

すると直ぐに青筋を立てて嘔み付く一郎に、若いねえと寂雷が笑った。

そのやりとりを見ていた乱数が、見えて来た受付の方に何気なく視線を向けると、雰囲気がおかしいことに気が付いた。

「ねえねえ、寂雷。アレ見える？」

「ん？……おや。何か揉め事が起きているようだね」

メンバーの中で一番身長の高い寂雷に声を掛けて指を差す。

寂雷は乱数が指を差した方に視線を移すと、スーツの男と、黒いシャツを着た男が相対しているのが見えた。

険悪な雰囲気の流れてはいるが、スーツの男がまくし立てているだけであつた。

黒いシャツの男は涼しい顔を見ると、どうやらそのスーツの男が一方的に絡んでいるようにも見える。

口喧嘩をしていた左馬刻と一郎も、それに気が付いたらしく眉を顰めた。

「うるせえ!! いちやもん付けやがって、俺様を誰だと思つてんだ!!」

スーツの男が吠え立てる。

周りは様子を窺うだけで、特に止めるような動作は見せない。

何もバトルが始まる前から争わなくとも、と寂雷が困つたような顔を見せたと同時に、一郎が声を上げた。

「あ！……兄ちゃん!!」

「ああ?てめえに、兄貴なんざ……」

「ほら、今まで話してた……ベリアルさんっス!!」

ふわふわと羽根のように揺れるファーを飾り、心底面倒臭そうな表情を見せているのが、どうやら先程から一郎が熱を上げているベリアルという男らしい。

一郎が顔色を変えて助けなきや、と駆けだそうとした、その時である。

「カッカするなよオッサン。キミじゃ何も感じない。

……前戯以下だ」

それは、豹変という言葉が似合っていた。

赫々と輝いた瞳が、場の空気を全て奪い去り魅了する。

まるで本性を現したように存在そのものを変えた男に、先程の勢いは何処へやら、スーツの男がたじろいで顔を青くした。

それでも周りの目がある今、簡単に引くことが出来ないと思つたのだろう。



スーツの男が、ヒプノシスマイクを取り出したのが見えた。それに低い音を立てて嗤った男が、同じようにマイクを取り出す。蝙蝠を想わせる六枚の羽根を飾ったマイクに、男の唇が近づけられたその時、完全に停止していた時間がやっと動き出した。

「ば……、バトルは……っ、会場内で、お願いします……っ!!」

武器が禁止された世界では、本物の殺気を浴びることはないに等しいだろう。

張り詰めた空気から滲んでいたのは、まさにそれであった。

男の余裕に溢れる表情からするに、本気ではないことが窺える。

声と手と、全身を震わせたスタッツが何とか絞り出した声に、男はまた表情を変えて頷いた。

そうして男があっさりの中へと入っていくと、周囲にいた幾人もの人が腰を抜かして地面へと座り込んだ。

それほどまでに、あの男が放った威圧感は強かった。脅威とも言えるだろう。化け物だ、と誰かが呻き声を上げたが、誰も否定するものはいなかった。

「は……ははは、はははははっ!!」

おもしれえ、おもしれえじゃねえか、一郎!!

ベリアルつつたか、あの男……」

そんな中、一郎の隣で一連の流れを見ていた左馬刻が、高らかに笑った。

男のそれにあてられたように、熱を帯びた赤い瞳が煌々と輝く。

血の気が多く強い者を好む左馬刻は、久々に目にする極上の獲物に、にいと唇を歪める。

その顔を見た一郎は、顔を青褪めさせた。

腕つぶしもラップも自他共に認める腕前を誇る故に、彼は常に餓えている。

一度目を付けたものは、誰であろうとも完膚なきまでに潰す。

そしてそれを自分の血肉として、また強さを手に入れていくのだ。

「あつれ〜? 左馬刻、どこ行くの?」

「野暮用だ。先行つてろ」

凶悪ともいえる笑みを浮かべながら左馬刻は、雑踏へと消えた。

何処に行くかを察した乱数と寂雷は、仕方ないとその背中を見送る。

「……それにしても、凄いな彼」

「あんな感じじゃ、……なかったんすけど」

「あはは〜！何言ってるの。」

ちよーアヤシイじゃん、あのオニーさん、

……いかに、隠してますって感じ〜。

もしかしていちろー、ビビっちゃったの？」

「つな、わけないだろうっ!!むしろ、なんつーか、超カッコよかった……」

「ふふ……」

興奮に頬を赤らめた一郎に、寂雷は口では微笑みながらも目を細める。

あの男は毒であると、彼は思った。

魅惑の毒を振り撒き、地に伏した者を踏み付けて、地に立つ者を炙り出す。

一郎が慕っているの口にはしないが、あの男の本質が『善』ではないことに、寂雷は気付いていた。

チームの年長者であり医者という職業柄もあつてか、人間に対する観察力及び洞察力

が人一倍以上に優れる寂雷は、物事に対して俯瞰した見かたをする。

だからこそ、その男の本質を一目見ただけで見抜いた。

それが例え表面をなぞっただけで、男の深淵までは見えていなかったとしても、寂雷の『変人が好き』という性質を擦るには充分値するものであった。

「……ああ、……確かに、興味深いね」

左馬刻が向かっていった方に視線を向けると、寂雷はうつそりと微笑んだ。

\*\*\*

開幕が告げられるとほぼ同時に鳴り響き始めた軽快な音楽は、さながら始まりのゴングであり、男にとっては死を告げる晩鐘にも等しい。

賽は投げられた今、男に残された選択肢は、断行かあるいは逃避のみである。

それぞれの対戦相手は既に決められているので、自分の番が来るまでは各自待機だ。

試合を見るもの、外に出るもの、携帯ゲームに勤しむもの、それぞれ好きなことに時間を使っている。

とはいえ、長時間に及ぶバトルもあれば、あっさりと終わってしまうバトルもあるの  
で、あまり悠長には構えていられないだろう。

個性的にカスタマイズを施されたマイクから流暢に流れるラップに、会場が沸き立  
つ。

段々と熱を帯びていく会場内を一番上の階から見下げる男は、溜息を吐いた。

しかし何故だか、絶望感はない。

ラップに関する知識も、経験もない。今だって聞き取れない部分も多くある。

それに韻を踏むというのも、母音を揃えるということはわかっているが、皆のように  
咄嗟につくり上げる自信もない。

しかし何故だか、高揚感がある。

くつくつと沸き立つ心臓が、煩い。今にも叫び出しそうになる衝動すら感じる。

こんなにも血が騒ぐことは、一度たりともなかった。

『死』を経験してから、こんなにも『生』を感じるようになるとは、皮肉でしかないだろ  
う。

しかし、汗ばむような興奮の中で、確かに男は『生』を実感していた。

「……」

「あー!!さっきのオニーさんだ!!」

「……………」

「ねえねえ、キミが一郎の言つてたヒトでしょお?」

「一郎…………。ああ、一郎君か」

手摺に凭れていた男は、後から聞こえたトーンの高い声に振り向く。

そこには見覚えのないピンクの髪の少年がいた。

黒い帽子に可愛らしくカールしたサイドの髪、身長の低い体に白い上下の服を着た少年は、男の視線にぱちりと片目を閉じて笑った。

「僕は飴村乱数、いちろーくんのオトモダチだよ!」

「乱数君…………ね」

「ふふ、オニーさんは?」

「…………一郎君から聞いてないのかい?」

「一郎君から聞いたのはベリアル…………オニーさんのMCネームだけなんだよねえ。」

ねえ、オニーさんの本名を教えて欲しいなあ」

「…………」

「ふうん。お口チャックって感じ？」

「なあんか、事情があるのかなー？」

「……そうだ!! 良いこと思いついた」

まるで男の目をカメラとしてしているように、常に目線と仕草を『最高のもの』としてい  
ることが、何となくわかった。

対象となる相手の目線に合わせて、細やかな角度調整をしているとしたら、相当な曲  
者であり拘りの強い人間だろう。

可憐な容姿とは裏腹に、何を考えているかいまいち読めない少年だと、男は目を細め  
る。

「ぱあと青い瞳を輝かせた乱数は、ぐと体を近付けるとお手本のような上目遣いで、男  
を見上げた。」

「僕がオニーさんに勝つたら、教えて欲しいな?」

ネオンブルーの宝石を想わせる瞳が、何かを含んだように深みを増す。

それを見た男は、目の前の少年はただ男に興味を持ったから、という単純な理由で此

処にいるのではないことに気が付いた。

「……何が、目的だい」

「あは！オニーさんに『イイネ』あげちゃう！

でもダメ。まだ教えてあげない」

「……」

「ああ、でも……イッコだけ教えてあげる。

……ねえ、オニーさん」

「……なに、かな」

一つの動作を行う度に乱数の周りに、きらきらとした星が飛んでいるような錯覚に陥る。

にこりと笑みを浮かべた乱数は、男の赤い瞳越しに自分自身の姿を見ているようだ。男を見ているようで、見ていない青の瞳が、ゆるりと歪む。

「僕の駒モウになつてよ」



綺麗に磨かれた爪先が、男へと伸ばされる。

ぞくりとする程の深い青の瞳と少年の色香が、男を誘う。

それは、男が『普通の男』であれば、その甘美な手を取っていたかもしれない程、魅力的であった。

しかし、男は『傲慢<sup>ス</sup>を司<sup>リ</sup>る悪魔<sup>ル</sup>』という墮天のモノ。

ゆえに、男は『人を導き時に陥れるもの』であり、人に仕えるモノではない。

乱数のしなやかな指が男の腕に触れる前に、男はその手を掴み低く笑い声をあげる。

それはバトルの時と同じ、感覚であった。

自分のようで自分ではない。しかし、それは悪い感覚ではない。

むしろ心地の良いものだ、ぼんやりとした意識の中で男は思った。

「ハハハッ！面白いことをいうねエ、君。

お兄さんちよつと興奮しちゃったよ。

……でも残念、今の君じゃあ勃起まで至らない」

長身を曲げて、乱数の顔を覗き込んだその表情は、先程とは別人であった。

先程の男が理性的なそれであるならば、この男は本能的なそれを煌々と輝かせている。

「イケナイ遊びをお考えかい、おチビちゃん。

いいねえ、バイデラスティアー少年性愛と行こうか？

……つて言いたいところだが、お楽しみはもう少し後にしておくことにするよ」

低い嗟い声が、会場を満たす歓声を掻き消す。

鮮やかな赤が、会場に蔓延る人間を掻き消す。

伸びる指先が、巡らせていた思惑を掻き消す。

乱数の世界に再び音が戻った時、そこに男はいなかった。

「……つち」

全てを忘れて惚けてしまった自分に、口汚く舌を弾ませる。

魅せる側である自分が、あの男に魅せられた。

それは乱数にとって、この上ない屈辱であり、この上ない愉悦でもあった。がりつという音を立てて、口にした飴を力いっぱい噛み砕く。

「あはっ……」

少年は去って行った男の姿を思い描いて、可憐さなどかなぐり捨てたような笑みを浮かべた。

\*\*\*

決勝戦の駒を進めていくたびに、男は段々と自分の状況がわかるようになって来た。

基本的にステージに足を踏み入れるもしくは、ヒプノシスマイクを手にすると、それがスイッチとなるように『自分ではない自分』に成り代わるらしい。例外は多々あるが、『自分ではない自分』は、随分と好き勝手にバトルを掻き回すのだ。

マイク越しにぶちまけるのはまさかの、NGワード（ノンワード）瀬戸際の際どい言葉たち。

煽り文句も、初対面のしかも男性に向かつて……。思い出すのも阻まれる言葉を平然と羅列していくのだ。

男が自分の体に慣れて来たからなのか、不思議なことに、次第にその記憶は残るようになって来た。

これに関しては、正直忘れたままでいさせて欲しかったと男は思う。

そして何よりも恐ろしいのが、いくつかのバトルを終えてエンジンが掛かって来た口の制御が出来なくなつて来たことであろうか。

午前中のバトルを終えた男は、昼休憩も兼ねて会場内の自動販売機エリアを訪れた。

この頃になると一通りの試合が終了しているので、バトル内で力を示した者の顔は割れていた。

特に色々な意味で目立ってしまった男に向けられる数多の視線は、おかしなことに何か色を帯びていた。

これに関しては、ベリアルという存在が放つモノの所為であることに間違えはないので、男にはどうしようも出来ない。『ヒトを魅了』するのは『悪魔』の特権であろう。

それを考えると、自分が此処にいて良いのだろうかという疑問が込み上げてくる。だが加減がなされているのか、相手が戦闘不能になる程ではない。

勝敗はあくまでもラップで付いている筈なので、バトルは公平に行われている……と思うのだが。

「おや……君は」

お昼時ということもあり、休憩用に設置されているソファやベンチは満席状態である。

仕方なく壁に背中を預けて、購入したペットボトルの蓋を開けたと同時に、正面から歩いて来た長身の男と目が合った。見知らぬ男だが、真っ直ぐに此方に向かって来る様子から、どうやらまた『一郎君』繋がりであることが考えられた。

「……君も、一郎君のオトモダチかい？」

「ふふ……。流石にもうお見通しかな。」

神宮寺寂雷、以後お見知りおきを……墮天使さん」

純白の衣を翻して、男の前にやって来た男はそう名乗りを上げる。

ふわりと柔らかな微笑みは、物腰柔らかな寂雷に良く似合っていた。

だが、ちゃっかり男の隣を陣取った長身瘦躯の男もまた、一癖ありそうだと男は溜息を吐く。

「……今日は男に良くモテるな。」

それで、君は何の用だい。寂雷サン？」

『外見の』年齢はそうは変わらないだろうと、判断した男は何気なく名前を呼んだ。

一本に結った薄紫と灰を帯びる長髪を流し、同色の瞳を優雅に動かすと、寂雷は困ったように眉を寄せる。

「やだなあ、もう少し気軽に呼んでもらって構わないよ？」

唯さえ年の近い友人はいないに等しいからね、と言った寂雷を見る。  
身長も大体同じくらいであろうか。目線が非常に近い。

「オーケイ、寂雷。君の用件を教えてくださいませんか？」

「別に用があつたわけじゃあないよ。」

偶々噂ベリヤルの男の顔を見かけたから、つい」

「……ふうん」

「それに、私自身……非常に君に興味を持っているからね」

「観察対象としてだろう」

「ふふ、語弊だよ。純粋な興味さ」

交わす言葉が乱数と話していた時よりも碎けていることは、気付いていた。言おうとする言葉は選択出来るが、口調は制御できないらしい。

だがバトルの時のような言葉遣いではないので、ある程度の自制は出来ているだろうと、缶コーヒーを開けた寂雷を横目に思考を巡らせた。

人柄故なのか職業柄なのか、人の話を聞き出すことが非常に上手い。

寂雷のペースに合わせていると、要らぬことまで話しそうになるのだから、意識的か無意識的かは置いておくとしても、性質が悪いとも言えよう。

交わされる他愛無い言葉に、交わされる読めない視線。ふと面倒そうに溜息を吐いた男は、微笑む寂雷に肩を竦めた。

「……君とはお友達にはなりたくないね」

「おや、寂しいことを言うね。」

君と私はもう、オトモダチだろうか？」

くすくすと上品な笑い声を上げた寂雷から、男は視線を逸らす。こうして貴重な昼休みは、過ぎていったのである。



## 悪魔、降臨せし時③

先陣を切る一郎の、猛々しい咆哮が響き、

怯んだ隙を逃がさない左馬刻が、鋭牙の如き猛攻を喰らわせ、

援護に入ろうする周りを乱数が、嘲るように薙ぎ払う、

地に伏せ苦し気に呻く相手に寂雷が、救いとどめの牙を突き立てる。

湧き上がる歓声に、沸き立つ興奮。

会場内の熱は最高潮を迎えていた。

『最終決戦』と高らかに叫ぶ司会の声に、四人はふと上を見上げる。

その視線の先には、最上階にあたる席の手摺に腰掛ける一人の男がいた。

「ハハッ、そんな目で見るなよ。

達しそうになるだろ」

造作の良い顔が獣性を剥き出しにして歪む。

四人もまたそれぞれの笑みを浮かべた。

交差する瞳は、極上main courseの獲物を捉えるようにきらりと輝いた。

「はっ……文字通りこの俺様がイかせてやるぜ、地獄になア。

高みの見物なんざ止めてさっさと降りて来やがれ」

「あはっ！安全地帯てんごくより舞台上じじょうの方が好きなんでしょ？

早くおいでよ。その羽根千切って二度と飛べなくしてあげる」

にいと口角を釣り上げた左馬刻と、星のようなそれに仄暗い色を滲ませた乱数が、ベリアルを舞台上へと誘う。

些か乱暴な誘い文句エスコートだが、ベリアルは愉快そうに目を細めた。

「いいねえ、キミたちもギンギンに昇っているんだろう!!」

だが寸止めストップだ。前戯で達してもらっちゃ困るんでね。

そういきり立つなよ。たっぷり溜めてから来な」

くつくつと喉を鳴らして笑ったベリアルが、遠回しに休憩を促す。いくら四人に余力が残っていようが、全力でなければつまらない。

ステージ上に転がる者たちも、準決勝まで上り詰めるだけの實力は持っていたのだ。全くダメージを受けていないといえ、嘘になるだろう。燃え滾るようでいて冷たい悪魔的ふじゆんな瞳を輝かせたベリアルは、そう言つて奥へと消えた。

悪魔に『魅了』された人間の目が、その背中を追い駆けていく。一拍を置いた後に、我に返つた司会の声が休憩を告げたのだ。

\*\*\*

華奢な細い指先が包装を剥くと、ぶくりと丸い桃色の餡が顔を出す。桜を想わせる唇がそれを啜え、吐息と共に甘い香りが控室に満ちる。くつくつと煮え立つバトル熱がそれぞれの顔に浮かんでいた。静まり返つた控室だが、そこに冷たさはない。むしろ滾る熱により、心地の良い高揚感に包まれていた。

「……漸く、此処まで来たんだ。

あの変態野郎なんざ、蹴散らして泣かせてやらア」

「さ、左馬刻サン、……兄ちゃんを、そんな風に呼ばないで下さいよ」

「あア!? 誰に向かって口答えしやがる……!」

「どう見ても変態野郎だろうがっ!」

すつかり毒されやがって、と吐き捨てた左馬刻は、冷たさを感じるほどにうつくしい紅を細める。

その紅にベリアルを持つ色を重ねた一郎は、その温度差に小さく息を呑んだ。

左馬刻の瞳は、怒り以外の感情をあまり映すことはないが、その奥にあたたかなものがあることを知っている。

しかし、あのベリアルは違う。いくら温度を取り繕っても、芯から凍り付いたそれを隠すことは出来ないのだ。

そのことに気が付いた一郎の背中を、ぞくりと撫でたものは、恐怖かそれとも。  
Wer mit Ungeheuren kämpft,  
dabei zum Ungeheuer wird.  
 「怪物と戦う者は、その過程で  
mag auch in sich  
sich selbst  
zu einem  
Ungeheuer  
werden.  
 自分自身も怪物になることのないように

Und wenn du lange in einen Abgrund blickst,  
blickt der Abgrund auch in dich hinein.  
 深淵をのぞく時、

深淵もまたこちらをのぞいているのだ」

「じゃ、寂雷さん?」

「フリードリヒ・ニーチエの、善悪の彼岸146節の言葉だよ。

怪物と戦う者は、自分自身も怪物になることのないように。

何故ならば深淵を覗く時、「深淵もまたこちらを覗いているのだってヤツですよね!!  
俺、それなら知ってます!!」

椅子に凭れてその長い足を組んだ寂雷の流暢なドイツ語に、首を傾げた一郎が問い掛ける。

すると一郎へと瞳を流して、にこりと微笑んだ寂雷が日本語訳を口にする、一郎は瞳にきらりと星を散らせた。

アニメのキャラクターが言ってたんです、と嬉々として語り始めた一郎を横目に、乱数が口内で飴を転がした。

ころりと音を立てた乱数は、何かを思うように視線を宙へと投げる。

「怪物、ね。……あのオニーさん、そんな生易しいものじゃないと思うよ」

ベリアルと相対した時にみせつけられた、圧倒的な何か。

それは人智を超越した墮天のもの故のもの。

一応制御はされているようだが、その性質は隠しきれない。

バトルとなるとそれが顕著になるのだから、隠す気はないといったほうが正しいのかもしれないが。

け、と吐き捨てた左馬刻は眼光を鋭くする。

彼にとつては、あのペリアルが何であろうとも構わないのだ。

全力でぶつかってもなお、立ち塞がるような、あの精神<sup>強</sup>力が左馬刻の血を滾らせるのだから。

「……」

それぞれの様子を見て、柔和な奥行きのある瞳を細めた寂雷は、足音を立てて近付いて来る時間に静かに微笑む。

「人<sup>だ</sup>でも動物<sup>て</sup>でもない生物<sup>し</sup>の解剖<sup>セク</sup>は、はじめてだが……。

一体何が詰まっているやら。……興味は尽きないね」

かちり、と時計の針が弾んだ瞬間。

The Dirty Dawg  
四人の男たちは立ち上がった。

\*\*\*

そうして開かれた幕が再び閉じるまでは、一瞬であった。

しかし、その一瞬の時に繰り広げられたバトルは、決して満たされることのないベリアルを、熱く震わせたのだ。

頬を滴り落ちる汗に痛み始めた喉など、気付きもしなかった。

身を削りつつも放ち続けた言霊は、幾百か、幾千か。

一人、一人と膝を付いても、最後まで抗おうと噛みついて来る人間の姿に、ベリアルは哄笑を上げた。

ベリアルは、この世に溢れる有相無相は、何かしらに偏っているからこそ意味がある  
と見做すもの。

だからこそ参加者の中でも飛び抜けて、勝利に拘り傾倒する彼らが魅せる、一種の狂  
気に興味を抱いたのだ。

「お楽しみは、ここまで、かな？」

「……つく、……そ、が」

蝙蝠の翼を模したカスタマイズがなされた黒いガイコツマイクを、赤い舌が這う。色を滲ませたその動作は、彼にはまだまだ余裕が残されていることを表していた。予定時間を遙かに越して行われたバトルを、誰もが固唾を呑んで最後まで見届けた。蠱惑の毒を潜ませたベリアルベリアルの言霊ごうげきを、寂雷の純潔なる言霊まもりが弾く。

一郎と左馬刻の怒涛の特攻を躲し、放たれた言霊ごうげきを、乱数の惑いの言葉が攪乱させた。繰り返される攻防ごしだまと、瞳孔を見開き衝突し合う奏者たち、そして……。

他の参加者も見学者も、見るもの全てを巻き込んだ、激戦であった。

上がる声援、歓声。彼らは観客であり義勇軍でもあったのだ。

最高級の舞台を、彼らはずくり上げた。

だからこそ、この日の、このバトルは、伝説として刻まれたのだ。

「ありがとう、堪能させてもらったよ」

それは、紛れもない賛美の言葉であった。

人間の足掻きを、そして限りある生の力を、久しぶりに感じた墮天司としての。



そして、全力を尽くし仰向けに倒れた一郎が、

力が入らない足でなおも立ち上がろうとする左馬刻が、

悔しげに顔を歪め床に拳を叩き付ける乱数が、

床に髪を広げ倒れこむ寂雷が、

本当の『くやしき』を知った瞬間であった。

これ程までにその言葉を噛み締めたことは、ない。

それは、純粹な敗北への思いであると同時に、もつとこの男に喰らい付いていたかたという、ベリアルとのバトルに対する思いでもあったのだ。

「……………つ、ま、て……………」

「ハハッ、まだやる気かい？」

いいねえ……………その目。ゾクゾクするよ」

「ふ、……………ぎげ、」

「オレを、絶頂こころさせるのだろうか？左馬刻くん。

必死に抜け出そうと足掻いている、キミのモノやみはしやぶりがいがあるそうだ。

だから、キミに更なる憎悪バグを贈ろう」

「な、に……………」

「キミはキミ自身を蹂躪レイイブされることを、何よりも嫌っている。まるで聖女聖女の聖域聖域のようだね。

ならば、キミが先に引き金となれば良い。

……破る前に、破ってしまえば、怖くないだろう？」

「てめえ、……なにを、いつてやがる」

「ハハッ、そう怖い顔をしないでくれよ。

今此処で凌辱おつかしたくなる」

膝を付いて睨み上げる左馬刻を、うつとりと愉悦を味わう瞳が見下ろす。

その姿はまさに悪徳だての天使てんしであった。

「……墮天司このオレからの受胎告知サービスさ。

キミ達は実に、イイ顔をする。

此処で終わらせるには、勿体ないからね」

喉を鳴らし狂的に高々と嗤ったベリアルは、彼らに背を向ける。

魅入られるように四人と一人のやり取りを見ていた司会が慌てて引き留めようとす

るも、ベリアルは一度も振り返ることはなかった。

「万雷オの拍手喝采ガズムには、まだ早いが……。

中々の愉快エクスなバトルタシだったよ」

ぐと唇を噛み締めた寂雷は、遠ざかるその背中に……蝙蝠の六羽を見た。

「あ、……あの、ゆ、優勝の、特典として」

「領地退屈なこと獲得なに興味はない。

彼らに全て、譲ろう」

「え、」

「チームとは歯車だ、歯車に個は必要ない。

……だがキミたちは個を求める。

その歪みが亀裂となった時、きつと役に立つ筈さ」

意味深な口振りで言葉を残したベリアルは、そのまま会場を出て行った。

テレビの取材陣が我に返り、慌てて背中を追うも、もうその姿は何処にもなかったの

である。

\*\*\*

星が瞬く夜の帳を、ぎらぎらとしたネオンの光が打ち消している。

会場内に配置されたモニターには、メインのステージが映し出されているため、ベリアルが出て来ることはわかっていたのでろう。

優勝者を一目見ようと群がる、肉眼ひととレンズかめらの視線に一瞥をくれると、擦り抜けるように人波を突破して、外へと出た。

冷たい夜風が、熱を帯びた肌を撫でる。

体や頭に上っていた熱も下りていき、少しずつ冷静な意識が覚醒していくのを感じた。

それでも冷めやらぬ心を持って余しながら、男はふと溜息を吐いた。

「……」

陳腐な言葉だが、凄じバトルであった。

今思い出しても、身が痺れ、鼓動が激しくなる、熱いバトルであった。

他人事だと言われてしまうだろうが、ベリアルという人格は、男であって男ではない。あのチームは、一人一人が凄まじい精神力バツリを持っており、それぞれの持つ力を全力でぶつけて来た。

互いが互いのことを良く理解しあっているのが、良くわかった。

フオローし合いながら織り成されるラップのレベルの高さは、参加者たちの中でもずば抜けていた。

非常に巧妙な駆け引きを得意として、相手を惑わせ魅了するベリアルの放つ言霊は……まさにその名の通りのものだ。

確かに力も精神力も申し分ないが、発する言葉全てがあらゆる意味でギリギリな為に困惑も招いた。

ラップにもスラングは多くあるものの、それとはまた意味合いが異なるのだ。

バトルに聞き入って惚けていたあの報道関係者たちは、きつと編集作業に追われることだろう。

男は段々と冷えてきた頭で、一日のことを振り返っていたが、はたと気が付いた。

そういえば自分の家などはどうなっているのだろうか、と。

優勝賞金も全て置いて来てしまったのだ。

今日一日は凌げたとしても、流石にずっと生活をしていくだけのものはない。何せ持ち物は、財布と携帯の二つだけなのだから。

男の思考がこれからのことに移行したと同時に、図ったかのように携帯が振動する。ふと明るくなった画面を見ると、そこには朝の時と同じような、淡々としたメッセ―ジが表示されていた。

『△△駅 △△ホテル』

どうやら今度はそこに行けば良いらしい。

しかし、ホテルということは……。いつか出てかなければならないし、金銭面も不安である。

くるくると嫌な方向へと回っていく思考を一度止めると、小さく溜息を吐いた。

今男がいるこの場所は、知っているようで知らない場所なのだ。

兎に角、行ってみるに越したことはないだろうと、駅へと足を向けた時であった。

「あ、……あの……!!」

聞いたような声と似たような響きを持つそれが、後ろから聞こえた。

「たた、と走り寄る音から自分に用があるのかと振り返ると、そこには色合いの異なる寶石ひとみが四つ並んでいた。

黄水晶きいろと翠玉みどりを持つ垂れ目の少年と、翠玉みどりと蒼玉あおを持つ勝気そうな少年が、男を見上げていた。

おそらく兄弟であろう。顔つきの似た少年たちは、濁りのない瞳を煌めかせていた。しかし、男にはそれが複雑な色を宿しているようにも見えたのだ。

「あの、ベリアルさん……ですよね？」

男に声を掛けた少年ではない方の、首にチョーカーをしている少年が男にそう尋ねた。

「ああ、そうだが……？」

「あの僕たち、いち兄の……。」

山田一郎の兄弟で、

「俺、二郎って言います!!」

あのバトル……、正直悔しいけど、ちよー興奮しました!!」

「ばっ、ばかつ、二郎!!僕がベリアルさんと話してんだろっ!!」

僕、三郎です。その、バトル……凄かったです。あんなバトル見たことない。

一生忘れません……!」

ジャケットを羽織った中学生ぐらいの二人は、あの一郎の弟らしい。

ならばあの一郎は中学生だと思っていたが、高校生であろうかと男は考えた。

一郎とよく似ている顔を交互に視線をやると、ほんのりと頬を染めた二人が、はにかんだ笑いを浮かべた。

成長期前かそれとも最中か、まだまだ男よりも低い目線を上げて、少年たちは勢い良く口々にそう言った。

「兄ちゃんもカツコ良かったしな」

「ああ、それには同意する。」

あの最初のラップとか、それに中盤のベリアルさんが躲した時とかそれに」

「三郎のクセに、わかってんじゃねえか!」

だが、やっぱ終盤の言い回しが、さいっこうにイケてた!」



頬を紅潮させたまま勢い良く言い合う言葉に、この弟二人が兄を慕っていることがありとわかる。

その陶酔ともいえる表情は、神を慕う天使のそれにも思える。なんていう思考が回ったのは、ベリアルに感化されているのだろうか。

男の目の前で、あれが良い、あれが最高だと、兄とベリアルの覗き合いについて事細かに語り合い盛り上がり始めた少年たちに、ふと笑みを浮かべる。

「キミ達も、ラップをするのかい」

「は、はい……いち兄に憧れて」

「なら……。愉しみだ」

ゆるりと細められた赤い瞳に、少年たちの頬が一気に赤く染まった。

元々ベリアルが悪魔的な魅力は、柔い年若い少年たちを蝕むものである。

本人が意図しようがしまいが、そういうように造られているのだから、男にはどうしようもないことだ。

「おにーさんを、待っているのかい？」

「兄ちゃんは、この後打ち上げ行くみたいなんで。

俺たちはこのまま帰ります」

残念だけど、と言いつつも明るい笑みを浮かべた二郎と三郎であったが、突如鳴り響いたぐぐという低い音に慌てたように表情を崩した。終了時間が延長した所為もあり、もう夜遅い時間である。

ずっとバトルを見ていたのならば、昼から何も食べていない筈なので、無理もないだろう。

「なあ、君たち。おにーさんと楽しいことしようか」

弧を描いた唇に、きよとんとした表情をした兄弟は顔を見合わせる。

そして、男の紡いだ次の言葉に、ぱあと顔を輝かせた。

## 悪魔、降臨せし時④

ラップバトルは、大会によって形式は違うが、今回のバトルは領地争いの真髄といえようものであった。

シンジユク、シブヤ、イケブクロ、ヨコハマの四つの代表を決める為、ヒプノシスマイクを手にする多くの男たちが集結した。

日本の中でも有数の、聖地ともいえるその場所の代表となれば、ハイレベルなバトルが要求される。

よって、今日行われたバトルの全てはどれも手に汗握るもので、初戦から目が離せぬものであった。

二郎と三郎も、兄として敬愛する一郎のバトルを是非見たいと、参加するためのチケット争奪戦に奮励した。

チケットの獲得には二種類の方法が設けられており、一つ目は抽選、二つ目はラップバトルによるものである。

各地域や各県で開かれたチケットを巡るラップバトルにも、多くの人間が押し寄せたという。

二人は抽選に外れた為に、ラップバトルに参加しチケットを入手したのだ。

一郎の背中を見て育った弟たちもまた、優秀なラッパーとして、実力を持ち合わせていたのである。

「すっげえ……!! さっすが、兄ちゃん!! 次、決勝戦……!」

これに勝てば、兄ちゃんが、代表になるんだ!

「いち兄……、かつこいい……!」

でも、……次の相手、って」

The Dirty Dawgの決勝進出が決まった瞬間、会場が沸き立つ。

ステージ上にいる兄に対して、興奮したように叫んだ二郎に、三郎はふと声を潜めた。すると、いつからそこにいたのだろう。

最上階に位置するが、その中でもステージを俯瞰出来る丁度良い席に座る二人は、手摺りに腰掛ける一人の男に気が付いた。

「ハハッ、そんな目で見るなよ。

達しそうになるだろ」

良く通る声は耳朶に馴染む心地の良い低音で、所々に艶つぼさを秘める怪しい音色でもあった。

くつりと笑うその男は、次に兄と戦う相手でもあるのだ。

しかしこの男のバトルは、データ不足な部分も多い為、その実力は不明瞭であった。

巧妙な話術で相手の心を揺らし、一瞬でバトルを手に取る。

後は舐めるように、例えるなら蛇のように相手をじわじわと追い詰めていく。

耐え切れなくなったその殆どが自滅に近い形で、勝負を降りていくのだから、そのバトルスタイルも言動もあらゆる意味で厭らしい男であった。

「はっ……文字通りこの俺様がイかせてやるぜ、地獄になア。

高みの見物なんざ止めてさっさと降りて来やがれ」

「あはっ！安全地帯てんじくより舞台上じじくの方が好きなんでしょ？」

早くおいでよ。その羽根千切って二度と飛べなくしてあげる」

そのような相手に対しても、揺らぐことなき左馬刻と乱数の、好戦的な声が響く。それすらもスパイスだというように会場が沸き立ち、煽りを含んだ声援で満ちる。

この頃になると、観客も何となく応援したい相手が決まっており、まるでライブ会場のような熱気に包まれていた。

「いいねえ、キミたちもギンギンに昂っているんだらう!!」

だが寸止めだ。前戯で達してもらっちゃ困るんでね。

そういきり立つなよ。たつぷり溜めてから来な」

観客、そして対戦相手の機微を読んだように、高らかに笑った目の前の色男の言動は、一々人を惹き付ける。

発言は非常にあれだが、単なる不埒者として片付けられないのは、それが原因となっているのだろう。

手摺りから体を下した男が踵を返すと、二人はその赤い瞳と目が合った。

その麻薬的な艶やかさは、見るものを魅了する、悪魔のもの。

魔性の男は、ぼんやりと自分を見上げる二人を見て愉快そうに笑うと、そのまま会場を出て行ったのである。

それから休憩を挟んで、幕を開けた最終決戦を、二人は……いや、バトルを見届けた

者たちは一生忘れることはないだろう。

舞台の上に立つ、その人は悪魔だった。

蝙蝠の羽がカスタマイズされた、骸骨マイクが、その人のヒプノシスマイクで、

白い円盤に紫の魔法陣のようなものが刻まれた、その人のヒプノシススピーカーであつたのだ。

(後にそれが完全体ではなかつたことを、身を以て知ることになるのだが、この時はまだ思いもしなかつた)

男の毒を含んだ言霊ことげきから、仲間を守り続けた寂雷が崩れ落ちたことが、大きかつた。

それでも、最後まで吼え立てた彼らの言霊ことげきは、男を崩すことは出来なかつたにしろ、伝説と名付けられるに相応しい激闘を見せたのだ。

「う……あああ、兄、ちゃん」

「いち兄、……もう、もう良いです、もう」

「馬鹿言うな、三郎。兄ちゃんは男だ。」

最後まで、精神が擦り切れても……諦めない。

いや、諦めきれねえんだよ」

「そんな、……でも、そつか、それが……」

寂雷に代わり魔性の言霊こつけぎを受けていた乱数が倒れ、左馬刻が一郎を背に庇い地に伏す。

残された一郎は、倒れた仲間たちの意志を引き継ぎ、最後まで戦い続けた。

その姿を見ていた二人は、頬を伝う涙を隠すことなく、その雄姿を見届けた。

もはや勝敗など関係なかった。戦い続ける兄の強さに、ただ二人も応援に声を上げたのだ。

そんなバトルであったからこそ、一郎が倒れた時、会場は拍手喝采となった。

それは、勝利者を称える意味だけではなく、戦い抜いた者たちへの讃美の喝采である。

「……つ、再挑戦avengeだ!!」

オイ、てめえら!!この戦いを、忘れんじやねえぞ!

The おDirty れDawgの、この雪辱……何千倍にしても返してやらア!!」

左馬刻の、ぎらついた眼光と共に放たれた鋭い号令に、仲間たちは身を起こす。

そして合わせられた拳が、彼らの口惜しさを物語っていた。



彼らを燃え上がらせたのは、男が最後に残した言葉と戦利品である。

優勝者が退屈だと蹴った『領地獲得』という賞品と、賞金は丸々彼らに送られることになったのだ。

それを渋々であるが、プライドを曲げてでも受け取ったのは、男の言葉が頭に残っていたからであろう。

こうして、噛み締めた苦みと共に伝説は始まりを告げたのだ。

\*\*\*

「それで、兄ちゃんは……あの左馬刻サンとつるむようになっちまって」  
「でもあれは、僕たちの為ですから。」

それにいち兄には、そろそろ自分の好きなことをして欲しいんです」

偶然にも、男が宿泊する予定のホテルと彼らの家がある駅は同じであった。

方向も大体同じであるので、その近くで適当に食事でもと誘った男は、気が付けば二人にすっかり懐かれていたのである。

初めこそ緊張して、しどろもどろな態度を取っていた二人は、男と言葉を交わす度に

打ち解けていった。

ステージ上にいた時の蠱惑の毒を含んだ表情も言葉も無い、男は、『話しやすいお兄さん』として認識されたのだ。

それ故に、二人は人には話せない心の胸の内を、ぼろぼろと口にしていた。

一郎には話しにくいのが、信頼できる大人を知らない二人にとつては、救いであつたのかも知れない。

「背伸びをしたがるお年頃、つてワケか。

……なら、キミたちも戦えるだけの力をつけないと、話にならないな」

一郎が庇護する二人の雛鳥は、もう翼を得ている。

しかし、その未熟な羽ではそう遠くには飛んでいけないだろう。

それに簡単に手折れる羽など、退屈なだけだと、男は言葉を返した。

それでも、暗さの残る顔を見て男は、二人が気にしているものを察した。

生きる為には、そして教養を得るには、先立つものがある。

この世は不平等で、不公平だ。

彼らがこの先好きなきことをして生きていく為には、傾きゆく天秤を戻すだけの金がい

るのだろう。

男は気付かれないように思考を巡らせていたが、不意に耳を打った声に路地の方へと視線を移した。

夜でも煌びやかな光が絶えない大通りから、一つ外れただけで世界は変わる。都会の賑やかさと、静けさが共存するのが、この場所の特徴でもあった。

「…ああ？ 兄ちゃん、ふざけたこと言ってるじゃねえぞ!!」

「さつさと有り金出せよ。そうすりゃ、ひでー目を見なくて済むんだぜ」  
「つたく、時間とらせんなよなア」

如何にも、といった風貌の三人の男に囲まれたのは、年若い青年であった。

筋肉質な巨体によってその青年の顔は見えないが、どうやら絡まれているらしいことが、聞こえてくる怒鳴り声によりわかる。

揉める声と共に、振り上げられる足と手に、男はどうするかと悩んだ。

ベリアルという男の体を以てすれば、喧嘩だろうが戦争だろうが、何でもありだろう。しかし、二人がいる前であり派手なことは出来ないし、見捨てるのもどうかと思っ

たのだ。

見てしまったものは、仕方がないと、男は二人に近くのコンビニで待つように言い付けた。

この場合最悪なのはこの二人を巻き込んでしまうことだろうと、判断したのである。

「……さて、迅速にイこうじゃないか」

ベリアルは自分の唇に舌を這わせると、路地へと入っていく。  
するとベリアルの気配を感じてか、三人の男が一斉に顔を上げた。

「なんだア、兄ちゃん?……正義の味方にしちゃ、よわっちいなア」

「ハハッ、そんな退屈なものじゃあないさ。」

オレは……:しががない、腐きつたものたちたちの天使サマ。

昇イ天かさせてあげるよ、偶にはそういう遊プレびも悪くはない」

薄つすらと光が差し込む、路地に突然現れたベリアルの、赫々とした瞳に男たちは圧倒される。

ぐと慄きそうになるのを堪えたのか、男たちは次々と口汚く言葉を吐き捨てた。

「お、いいねえ。どんどん言ってくれ」

「邪魔をするなら、てめえもだ。」

「自業自得ってやつだ……恨むならてめえを恨むんだ、な!!」

「……やっぱ微妙だったか。」

「キミたち相手じゃ、オレのサディズムもマゾヒズムも全然擦られない」

「やれやれと肩を竦めたベリアルは、その長い足を振り上げると飛び掛かってきた男たちを次々と薙ぎ払う。」

「あつという間に路地のコンクリートに顔を伏せた人間たちに溜息を落とすと、ベリアルは来た道を戻ろうとした。」

「ちよ、ちよつと待て!!」

「……ああ、そういえば……。」

「キミ、大丈夫かい」

「忘れかけていたが、人助けの為にこの路地に入ったのだ。」

思い出したように自分を呼び止めた青年に視線を移す。

夜空を想わせる紺碧を乱雑に伸ばした、赤みを帯びた瞳の、青年は立ち上がると、ベリアルルの服の裾を掴んだ。

「アンタ、あれだろ!! 幸運の天使さまだろ!!」

「あー。そう呼ばれるのは羨えるな」

「そういうなって! 俺めっちゃツイてるぜ。」

まさか、絶体絶命のピンチにこんな色男に助けられるとはな」

人懐っこい性格なのだろうか。青年はベリアルルを見上げ、にかりと笑う。

「アンタ、喧嘩も強いんだな。ベリアルルさんよ」

俺も会場にいたんだぜ、と勢い良く話し掛けてきた青年は、どうやら観客の一人であつたらしい。

山田兄弟と同じような目をした青年は、有栖川帝統と名乗った。

刺激を好むという彼もまた、何処か偏りのある人間のように感じたベリアルルは、ふと唇を歪めた。

「悪いことは、オレの領分とくぎさ。」

キミもあんまり弾けると……食べられてしまうよ」

見透かしたような強い光を宿す瞳が、帝統の顔を覗き込む。

心の臓を撫でるような冷たさに、ぞくりと背中が震えた。

ギャンブルで感じるものとは、全く異なるその刺激スリルに、帝統はゆるりと瞳を溶かす。

「べ、ベリ兄い……だ、大丈夫か？」

「おいおい、コンビニで待ってろと言っただろう」

「だ、だって、僕たち、ベリ兄が心配で」

随分帝統と話し込んでしまったようで、中々戻らないベリアルを心配したのだろう。

路地の入口から伸びて来た二つの影に、男が顔を上げると、バツの悪い顔をした少年たちが口々にそういった。

「ま、良いか。さっさと行くぞ」

目的は果たした、と男が踵を返して路地を出る。

そして、その背に続いた三人と共に、歩き出したのである。

「え、えーと。お兄さん、誰っすか」

「あ、俺、有栖川帝統ってんだ。

ベリアルにーちゃんのオトモダチ」

「ベリ兄、知り合いだったんですか？」

「いや、全然。さっき拾った子犬クン」

「……はあ!?!じゃあなんで、アンタくっ付いて来てんだ!!」

ベリ兄は俺たちと、『楽しいこと』するんだよ!」

「んー、二郎クン。この町中でそんな大胆なコト言われたら、おにーさんちよつと辛いかな」

「ははっ、ならいーだろ？」

俺もおにーちゃんと『楽しいこと』してえし」

当然のように付いて来る帝統に、二郎と三郎がじとりと睨み上げる。



手を差し伸べたのは自分なので、付いて来るといふのならば止めないが、町中で叫ぶのは辞めて欲しいと男は内心で頭を抱えた。

「にしても、にーちゃん人格変わり過ぎだろ！」

おもしろーけどよ。驚いたぜ」

「ステージで豹変するなんて、珍しいことじゃないだろう」

「確かに、いち兄たちはあまり変わらないですが、他のグループとか激変する人沢山いましたね」

他愛のない会話を交わす度に、帝統もまた馴染んでいく。

こうして四人は向かった先で食事を終えると、連絡先を教え合う仲間となり、次の約束まで交わすことになるのだ。

\*\*\*

「あ、俺たちの家、此処です！」

「ベリ兄……。今日は色々ありがとうございます。」

……あ、あの、また……会って、くれますか？」

「あ！ずりイぞ、三郎!!」

ベリ兄、俺も!!」

「構わないよ。いつでも連絡してくれ」

「おーい、お二人さん。俺も忘れんなよー!」

「てめえはどーせ勝手に付いて来るんだろーが!」

「おつ、じろークンわかかってるじゃん!」

「ぎげんな!!ベリ兄に迷惑かけたら、わかっただらうなア!?!」

山田三兄弟が住まう場所まで送っていくと、二郎と三郎は名残惜しげに男を見上げた。

だが、その隣に立つ帝統が快活な笑みを浮かべながらちよっかいを出す。

すると、主に二郎が目を尖らせて食い付くので、それを更に帝統が揶揄うのだ。

「まあまあ、そんなに喧嘩するなよ。

まとめて遊んでやるさ」

ふと笑みを浮かべた男がそう宥めると、三人は渋々言い合いを止めた。そうして兄弟を見送ると、男と帝統は再び歩き出した。

「なあなあ、にーちゃん」

「なんだい」

「今日、泊めてくんねー?」

あの兄弟につられたのだろう。気が付いたら、帝統にそう呼ばれるようになっていた男は、隣で揺れる紺色の髪に視線を移す。事情は聞いていないが、至る所を転々としているらしい。

留まるという行為を、好まないのか、または嫌っているのか。それを聞くのは無粋という奴だろう。

「構わない、が……」

「マジで?!ちよーラツキー」

「やっぱ、にーちゃんは、俺の幸運だな」

「ハハッ、そう言われるのはハジメてだな」

断る理由も特にないので、男は快諾する。

バトルや喧嘩の時ぐらいしか、ベリアルという人格は出てこない……筈であるので、万が一にでも間違えが起こることもないだろう。

にかり、と明るく笑う青年に、男はコンビニへ寄ることを提案した。

「必要なもの、買ってから行こうな」

「悪い、にーちゃん。マジ助かる」

男にしても、突然知り合いのいない世界に連れて来られた身であるので、知り合いを作って置くことは重要な意味を成す。

例え年下だろうが、心強いことには変わりはない。

財布の中身は確認済みで、カードも使えた。なら口座も存在するだろうと踏んだのだ。

一通りの買い物を終えた二人は、ホテルまで向かう。

そうして、チエックインを終えて部屋に向かおうとした、時であった。

「ベリアル！……驚いたよ、君もこのホテルに泊まるのかい」

「……寂雷」

聞き覚えのあるその声に振り向くと、そこには激闘を繰り広げた一人である寂雷の姿があった。

ほんのりとアルコールの匂いを纏っているが、顔色に変化はないようだ。

男がそう思うと、察したように寂雷が柔らかな笑みを浮かべた。

「打ち上げがあつてね。だが……今日はあまり、飲みたい気分じゃなかったんだ」

「あれ、おにーさんて、あの The Dirty Dog の寂雷せんせー？」

「ああ。そうさ、今日この墮天使に打ち負かされた、神宮寺寂雷。」

君は？」

「有栖川帝統、しがないギャンブラーだ」

「有栖川君、か。ベリアルの友達かい？」

「さつき拾った子犬さ。途中で懐かれてね」

「そう……。ベリアル、君は意外と面倒見が良いんだね」

男の傍に立つ帝統に気付いた寂雷は、驚いたように目を瞬かせる。そして、閃いたと言わんばかりに瞳を輝かせると、寂雷は男に詰め寄った。

「そういうことならば、私も、ご一緒させてもらおうかな」

「あ、……ああ。まあ、別に構わないが。」

広い部屋に、しないとな」

「俺は別に、狭くてもかまわねーが」

屋根があつてベッドがありや、天国だしな。とマイペースに笑う帝統に、男は視線を流す。

「こういう時ぐらい、ゆっくり寝な。」

寂雷、部屋変えて来てくれるかい」

「勿論。構わないよ。私の我儘だしね」

ばたばたと走つて行つた寂雷がフロントで手続きを行い、丁度開いていた広い部屋へ三人は向かった。

部屋に辿り着くと、時間も時間なので、交互にシャワールームへと入っていく。

そうすると、余程疲れていたのか、それとも元々寝つきが良いタイプなのか、眠そうに目をこすり始めた。

「髪、乾かさないと痛むぜ」

「めんどー」

「仕方ないな、来な」

「にーちゃん、やってくれんの?!」

シャワーを浴びている寂雷が出たら、ドライヤーを使うだろうことは予想が付くので、早めに済ませる必要がありそうだ。

なので、ぐだぐだとしている帝統のペースに合わせてはいられない。

濡れた儘の髪で寝られるのは、ベッドは別とはいえ、なんとなく嫌な気がしたので、男は彼を手招いた。

すると、面倒そうな表情は何処へやら。飛んできた帝統の、水気を含んだ髪にドライヤーをあて始めた。

夜を想わせる色の癖毛の髪は、意外にも柔らかくふわふわとしている。

彼のことを子犬と例えたが、強ち間違えではなさそうだ。

丁寧ブラッシングをしようと、タイミング良く寂雷がシャワールームから出て来た。

「ふふ、楽しそうなことをしているね。

私にもしてくれないかい」

190を超える身長の大半を覆うその髪は、言うまでもなく長い。

手入れも大変だろうに、彼の背中を泳ぐそれはさらさらと滑らかであったことを思い出す。

ソファーに座り、帝統の髪を梳いていた男は、隣に腰掛けた寂雷の濡れた髪に触れる。

薄紫と灰が混じった髪は、帝統のものとは異なり固めだ。

柔らかく見えてその芯は頑固であるこの、寂雷という男を良く表しているように。やっつてやるから横を向け、と寂雷に言うと、彼は嬉しそうに笑みを浮かべた。

「……君は、不思議な男だ」

「どうしたんだ、突然」



「ふふ……あのステージの上での君は、淫靡そのものだ。言動も、雰囲気もね。」

だが、今は全く違う。人を惹き付けるそれは変わりないが、取って喰らおうとする欲は見えない」

「ハハツ、そう見えたのかい」

「少なくとも、あのバトルを知るものには……そう見えるんじゃないかな」

「ふうん。……それで、もしオレが『そう』しようとしていたら、キミはどうする?」  
「……ふふ、さあ……どうしようか」

ベリアルという男はどうかはわからないが、男は普通の男性である。

どんなに発言がアレであろうとも、男の意識があるうちは行動に移すことはまずありえない。

そう考えながら、乾いた髪を毛先まで丁寧に梳いてやると、寂雷はくすくすと上品な笑い声を上げた。

「終わりだ。ほら、さっさと寝な」

いまいち何を考えているかを読めない寂雷に、男は溜息を吐く。

横を向いて寂雷の髪を乾かしていた男の背中に、凭れるようにして微睡んでいた帝統にも声を掛けた。

「皆、君に会いたがっていたよ」

「皆……？」

「ふふ、君が打ちのめした……The Dirty Dawgのメンバーさ。」

「勿論私も含めてね」

「それは怖いな。リベンジか？」

「さあ、て。意味合いはそれぞれ……かな。」

「ちなみに私は、友人として君に会いたかっただけさ」

カーテンの掛かっている窓から差し込む、町の光に照らされ寂雷の端正な顔に陰影が出来る。

「一見透明に澄んでいるように見える瞳が、何処となく何かを含んでいるようにも見えるのは、彼が纏う雰囲気の所為であろうか。」

「光栄だね。……それで、キミの目的は果たされたというワケかな」

「いいや、これからだよ。ベリアル」

押し寄せる波のように広がっていく寂雷の声に、男は静かに立ち上がる。

「なら、……キミの目的は、何だい」

見下ろす赤い瞳が、寂雷を捉えた。

同時に、寂雷に浮かんだのは……うつくしい夢の中にいるような、恍惚うっとりとした表情であつたのだ。

## 悪魔、降臨せし時⑤

夜の帳が名残惜しげに下りていく、朝焼けに包まれた時間であった。

今日も良く晴れそうだと男が起き上がると、二人はまだ夢の中である。

それぞれの性格を示すかのような寝相を露わにする彼らに一瞥をくると、男は先に身嗜みを整えに洗面台へと向かった。

必要であれば、各々目覚ましをセットしているだろうと思つたのだ。

暫くすると予想通り、ぴびぴと機械音が部屋に響いた。

部屋に備え付けられたポットで珈琲を淹れると、その匂いにつられたように寂雷が身を起こした。

「おいおい、眠りの神の誘いに乗ると……碌なことにはならねえぜ」

「……ああ、私としたことが……つい、ね」

男の顔をじいと見た寂雷だが何処かまだ虚ろで、今にも夢現を彷徨う瞳を閉ざしそうになっている。

それを見咎めた男は、ふと笑いながらも声を掛けた。

「仕事かい？」

「ええ」

寂雷の長髪が白いシートに紫と灰色の唐草模様を描いている。

彼は溜息を吐きながら頷いた。好きでやっている仕事ではあるが、偶にはゆつくりと寝ていたい時もあるのだ。

決して叶わない我儘を頭の中でぼやいていると、寂雷の目の前に白いカップが現れる。

目を瞬かせた寂雷が顔を上げると、深い色をした双眸と視線が交わった。

「朝食はサービス出来ないが、珈琲ぐらいは出すさ」

「ふふ……贅沢な珈琲だね。ありがとう」

微笑を浮かべた寂雷は、程良い暖かさのカップを受け取る。

直ぐに口に出来る温度に調節したのだろう、飲みやすいそれはやけに舌に馴染んだ。

「そういえば、ベリアルは何処に住んでいるんだい」

「……さあ、てね。空の上かもよ」

「君と私との仲じゃないか。」

「教えてくれたって良いだろう?」

「ああ、確かに……初対面で一夜を共にした仲ではあるけどね。」

「一度に全てを知ってしまうのは、勿体ないだろう?」

くつりと喉を鳴らした男に、寂雷は不満げな表情を見せた。

彼はあまり心の機微を見せないミステリアスな印象があるが、今の表情は子供のそれのようであった。

それほど男に心を許したのか、いつも以上に感情に富んでいたのだ。

「それなら、また会ってくれる……ってことかな?」

「俺は来るものは拒まない主義でね」

口元を彩った艶やかな笑みは、その名に相応しい魅力どくを含んでいた。

男の放つ言霊は魔性だ。じわじわと精神を蝕むそれは、欲深き生物の心を喰い荒らす。

そのことにバトルを通して気付いた寂雷とはほぼ真逆の性質である。

しかし彼もまた人間であるが為に、悪魔の毒を完全に防ぐことは出来ない。

それにヒプノシスマイクを通さなくとも、男の言霊は一人を惑わせるのだろう。

小さく溜息を吐いた寂雷は、また一口珈琲を口に含んだ。

それから、間もなくして寂雷は仕事へと向かっていった。

この場所からだ、彼の勤務先までは少し時間が掛かるので、大分早めの出勤のようだ。

さり気なく連絡先を交換するのと同時に、次は朝食付きで、と、次の予約とモーニングの約束を取り付けていった彼は、全く抜け目のない男である。

寂雷を見送った男は、熟睡するもう一人の男に視線を移す。

無防備な顔をして寝ている帝統は、起きなくても良いのだろうか。

そこまで面倒を見る義理はないだろう。それに彼の背景に足を突っ込む気もないので、チェックアウト時間までは放っておくことにする。

チェックアウトまではまだ充分に時間があつたので、男は昨日出来なかつた所持品の

チェックを行うことにする。

所持品といつても、財布と携帯の2つだけであるが。

「つと、……また、メッセージか」

まず充電をしておいた携帯を手にとると、また指令のようなメッセージが入っていた。

今度は具体的な時間は指定されておらず、明確な場所の名前のみが表示されているのが見える。

「……ヘブンツリー  
天国の樹」

頭に東京と付いているその名称は、聞き覚えがある例の電波塔の名前を弄つたのだろうか。

同じようで異なる世界では、こうして細かい部分にズレが生じているらしい。

それは兎も角として、目的地は強制的に決まったので、あとは行き方を調べれば良い。ベリアルという墮天司が行くには、実に皮肉めいた名前の場所だが他に行く場所はな



い今は、大人しく従っておくことにする。

一通り調べ終えて、何となく一日の予定を頭に描いた男は携帯をテーブルに置いた。そして、ソファアールに凭れるとぐと首を反らす。すると視界いっぱいには広がった赤と、男の赤がかちりと合わさった。

「吃驚した。起きていたのかい」

「ぜんぜん驚いてねえ癖に」

後ろから男を覗き込んだ帝統は、残念そうに唇を尖らせると直ぐにぱつと表情を変えた。

その良く変わる表情と声音だけを見ると、自分の感情に素直なように思える青年は、にっと明朗な笑みを浮かべる。

「ヘブンツリーに行くのか?」

「まあね。用があるんだ」

「ふーん。まあ、にーちゃんなら大丈夫だと思っけどよ。」

「あそこあんま治安良くねーんだよな」

「ふうん」

「観光客やら買い物客でいっぱい人がいるんだけどよ。」

その裏側は、まさに無法地帯ってヤツで、噂によるとヤクザ絡みの人間がうじゃうじゃいるらしいぜ」

「ヤクザ、ねえ」

「別名『矯正施設』っていつて、組抜けしようとした奴や裏切ろうとした奴全員そこにぶち込まれているらしい」

「良く知っているじゃないか」

「まあな、俺にとっちゃ庭の一つよ。」

それにしても……ヤクザつっののも、時代遅れかもなあ」

「どういうことだい？」

「ほら、女尊男卑こな世界ではもう、暴力禁止だろ？」

ま……禁止されたからって、直ぐに辞められたら苦労しねーわな」

「ああ。……そうだね。それでも禁忌を破るのも、快樂の一つなのさ」

得意げに語った帝統に、男は静かに思考に耽る。

暴力を禁じられた世界。女が尊ばれる世界。男が卑下される世界。

それは明らかに元の世界とは違っていた。言動には注意しなければ、大事になってしまっただろう。

「ああ、言い忘れていた。ツリーの中にはマイク持ちの連中がうろうろしてるっつー噂だ。

にーちゃん絡まれねえように気をつけろよ?」

そう帝統は付け加えた。ちなみに彼は散々悪い噂ばかりを言ってくれたが、ヘブンツリーはその裏側へと足を踏み入れなければ、ただの世界一高い展望台付きのシヨッピングモールである。

携帯にメッセージを送って来た相手の意図はいまいちわからないが、流石にヤクザに喧嘩を売ることはないだろうと、男は思考を終えると一つ頷いた。

「なあ、にーちゃん」

「ん?」

「明日にしねーかあ?」

「……何故?」

「明日なら、俺……都合つくんだけど」

付いて行きたい、と言わんばかりのその言葉に、思わず男の唇から笑みが漏れる。何を気に入ったのかはわからないが、すっかり懐かれてしまったようだ。

「ふ。残念だけど……キミとのデートはまた今度にしよう」

物の言い様は最早今更であろう。

ベリアルの唇から吐き出される言葉は、男の意思をまるつと無視することもある。

普通に話している時はそれなりには問題ないが、気持ちが高揚した時などは特に如何わしい方へと翻訳してくれるのだから、頭を抱えなくなる時も多々あるのだ。

男の言葉に目を瞬かせた帝統は、ぱつと表情を明らめた。

「いつ?!?いつにする!?!」

俺、いつでも開けるから!」

「あー、まあ、気が向いたら連絡してくれ」

「わかった!じゃあ明日な!」

今度という曖昧な言葉では納得してはくれなかつたらしい。

詰め寄るように問う帝統は、嬉々とした表情を浮かべている。

その大型犬を思わせる人懐っこさも、また彼の魅力でもあるのだろう。これまた強制的に決定された明日の予定に、まあ良いかと男は頷いた。

\*\*\*

「じゃあ、にーちゃん。また明日な!!」

「ああ、わかつてるわかつてる」

「明日、×時に○○駅待ち合わせだからな!!」

「はいはい」

絶対だからな、とこれでもかと念を押し去っていった帝統に、男は苦笑いを浮かべる。

チェックアウトを済ませた男は、ホテルを出ると、目的地へと足を向けることにした。『東京へブンツリー駅』という、何とも思うところのある駅で降りる。

駅からツリー内部までは直通らしい。こういう所は前のものと似通っている。

取り敢えず訪れてはみたものの、中は普通のショップが並ぶだけである。

特にこれと言つて欲しいものがない今、時間潰しにもならない。

平日の昼間であつても、人混みで溢れかえっているのだから、休日であればもつと賑わいを見せるのだろう。

すれ違う人々の年齢層は様々であるが、学校帰りらしき制服姿の少女や少年たちの姿も多い。

店の店員の呼び声や、老若男女の話し声が雑踏に溶ける。

人と人の間を擦り抜けて休憩スペースまで辿り着いた男は、先ほどから視線を感じていた。

厳密に言うと、ベリアルの聴覚は一定の間隔で付いてくる特定の足音を、感覚は適度センスにコントロールされた同一の視線を、捉えていた。

男に注がれる視線は数多であつたが、その中でも『それ』に反応したのは、敵意が含まれていたからである。

どうするかと考えたが、この人混みの中ではアクションは起こさないだろうことは想像に容易かつた。

ならば、さっさと用を済ませてもらうのが良いだろう。そう判断した男は、人の気配

のしない非常階段へと通じる扉へと近づくと、重々しい鉄の扉を開けて中へと入った。がしゅん、と扉が閉まる。冷たい風が肌を撫でると同時に特有の閉塞感に襲われる。あまり使用された痕跡のない真新しい階段を昇りきると、再び扉が開いた音が聞こえた。

「一晩の相手をお探しかい？言っておくが……オレは高いぜ」

階段の上から見下ろす男を、入って来たそれが見上げる。

男が尾行に気付いていたことにも、大した動揺は見せていない。

己を見下げるその赫々とした瞳にも、反応はなかった。

すつぽりと黒いフードを被っているのでその顔は見えない。わかるのは、ベリアルと同じくらいの高身の男ということだけである。

「……お前が、ベリアルか」

「どのベリアルを指しているのかわからないが、そう名乗っているよ」

「そうか。ボスがご指名だ」

「ボス？」

「この『天』に君臨する、身の程知らずさ」

「ふうん、それは……興味があるね」

機械的に淡々と話すその男は、それ以上を語ろうとはしなかった。

それに業を煮やしたベリアルは、ゆっくりと階段を下りていく。

近づいて来るベリアルを、ただじつと見つめるそれは人形のようにも見える。

ベリアルは男の前に立つとゆるりと笑みを浮かべて、蛇を想わせる口ぶりで言葉を放った。

「それじゃあ……フェアじゃないね。おにーさん。

オレにステージくわの上えに立てつて欲しいんだらう？」

「……」

「なら、可愛らしくおねだりして素直ドに吐ビいて貰ミおうか。君の知リつていドることを教ミせてくれ」

ベリアルからすれば、大分優しく、搾り取るように話を聞き出す。

そうすると小さく溜息を吐いた男は、このまま素直に応じる様子はないと悟ったのだらう。ぼつぼつと話し始めた。



その男が言うには、今日は偶然にも組のボスが視察に来る日であったらしい。

駅には組の人間たちがうろついていたらしく、そこでベリアル姿を発見したようだ。

ヤクザの世話になった覚えは全くなかったが、その答えは組頭が最近熱を上げているものにあつた。

「ヒプノシスマイクを持つ者を、連れて来るようにと言われている」

ラップバトルにハマっているという組頭は、ヒプノシスマイクを持つ者をこうして中へと誘っているらしい。そして塔の途中途中に組の人間を配置し、負ければその時点で身包みを？いで全部没収するようだ。

組頭に勝てれば無傷で解放されるが、今までにその例は無かったと男は言う。

「これで満足か？」

「いいや、まだキミの顔を見ていない」

「……必要はない」

「そう。ならベッドの上でなら、そのボールを取ってくれるのかな？」

じゃあ、また帰りに」

揶揄うように笑うベリアルに、やはり男は反応を見せなかった。

この塔は二重構造になっており、一般の客などが出入りするエリアを表、主に組の者たちが出入りするエリアを裏と呼んでいる。専用のICチップによって嚴重に管理されている扉が開かれると、中は煌びやかな空間が広がっていた。

ヤクザが好みそうな豪華な空間は、赤い絨毯やら金を基調とした置物やら絵画が並べられている。

入って来たベリアルに気付いたらしい、スーツの男たちが一斉に動き出した。

ガタイの良い体に黒いスーツを纏い、襟元にバッジを付けた、強面の男たちは如何にもという風体である。

「ハハハッ！なんてこった……乱交<sup>オ</sup>パーティー<sup>ジー</sup>かよ！

ヤバイ、達する達する！」

高らかに笑みを浮かべたベリアルは、興奮を浮かべた瞳をぎらりと光らせる。

あからさまな動揺は見せないが、ベリアルの様子に一気に緊張を高めた男たちはそれ

ぞれの構えを取った。

一階のエリアにいる者たちは戦闘員らしい。

上の階まで辿り着く為には、ヒプノシスマイクを持つだけではなく、喧嘩の腕を持つことが条件のようだ。

「いいねえ……、オレも喧嘩喧嘩もバトルバトルももイケ使る口なんだ。

さあ、ヤろうか」

そう高らかに笑い両手を広げたベリアルは、艶やかな悪魔悪魔であった。

思わず足を止めた男たちを容赦なく薙ぎ倒したベリアルに、漸く正気に戻った仲間たちが応戦し始める。

そうして、暴力が禁じられた世界で羽を広げた悪魔は、禁忌を破る快楽に酔いしれるのであった。

\*\*\*

とある組の占拠シマ地にその男が訪れたのは、頭がそこに来ているという情報があったか

らである。

警察せいぎのシンボルである桜の代紋を携えたその男は、赤い手袋をした手でアンダーリムの眼鏡を上げた。

すらりとした長身の顔の良い男は、一見すると普通の警察である。

しかし、日本に巢食う薬物の排除する為に警察せいぎとなつた男は、いつしか背負う正義さくちを黒ずませていた。

ヤクザの世界にも精通し悪事にも手を染めながら、腐敗した正義を抱える、歪んだ警察おとしこなのである。

警察せいぎにして正義ならずもの。それが彼の裏の顔であつた。

質の良いスーツを着こなした男は、腰のホルダーと背広のポケットを確認する。

そこには正義けいの味方んの武器しゆと、正義けいの免罪符ちようが納められていた。

男はそのまま塔の中に入っていくと、とあるルートを通つて人気の少ないエリアへと迷うことなく足を進める。

「はっ、相変わらず面倒臭エ仕組みだ」

外見にそぐわない荒っぽい口調でぼやきながらも、男はとある部屋へと入っていく。

中は薄暗く、ずらりと棚が並び様々な備品が整列しており、一見するとただの物置にも思える。

しかし、それはただのカモフラージュであつた。

男は一番奥の棚をずらすと、『とある回数』ノックをした。

するとぱかりと壁の一部が開き、小さな機械が姿を現す。

これは小型であるが最先端の技術の結晶であり、超高性能な認証装置なのだ。

手慣れた様子で携帯を取り出すとICコードを呼び出し、装置に近付ける。こうすることで、電源が入る仕組みだ。

嚴重なセキュリティに守られた塔（うらのせかい）の中に入るためには、ICコードと虹彩認証の二重

認証が必要となるのである。

男の目を読み取った機械が再び沈黙すると、かちやりという音が聞こえた。

装置がある場所と、解除された扉は場所が異なるので、男は一度部屋を出ると別の部屋へと向かう。

「……今は、取込み中だ」

「おや、貴方が出迎えるとは珍しい。

カチコミでも起きましたか」

「似たようなものだ」

「ほう……それは愉快、いや失礼。大変な時に来てしまったようですね」

男の目の前に現れたのは、黒いフードを目深く被ったあの男であった。

交わされる言葉からして、顔見知りであることが窺える。

男はポケットから警察手帳を開いて取り出すと、フードの男へと翳した。

そこには正義の印の下に顔写真とその男の名前が書かれている。人間銃兎。それがスーツの男の名前らしい。

「ま、これも仕事ですから。通してくれますね」

緑を帯びた切れ長の瞳が、鋭く光る。

フードの男は暫く黙っていたが、やがてくるりと背を向けた。

「いいだろう。ただし安全は保障しない」

「ふふ、何を今更」

くすくすと上品な仕草で笑う、その目は蛇のように鋭い。含むような眼を隠そうともせず銃兎は、先を行くフードの男の後を追う。

この塔の中は蟻の巣だ。至る所に道があり、迷路のような構造にもなっている。無なるもの侵入者が入り込むと容易には出れない造りで、逃げることは決して許されない。

それとは真逆に、塔組の中の者達が逃げ出すのは非常に簡単で、いざという時の襲撃に備えルートをちゃんと確保されている。

故に、協力者ではあるが塔の者ではない銃兎が案内されるのは、来客者専用の通路なのだ。

毛の長い絨毯が引かれうつくしい調度品が並ぶ通路は、全て表面上のものである。

しかも並べられた調度品や、飾られた絵画は全て類似したものであり、まるで同じ場所をずっと巡っているような錯覚にも陥る。要するに、記憶に残りにくく迷いやすい造りとなっているのだ。

もし案内人がいなければ、たちまちこの塔は円環の牢獄となり、侵入者を喰らう招かざる客だう。

「それにしても、静かですな」

「……」

最上階にあるそのエリアは、まさに塔の名前に相応しい造りとなっている。

通路に点在する窓の外には遮るものがなく、ただ一面の青空が広がっており、少しずつ傾いていく太陽の橙に染められていく様子が描き出されていた。

もはや大地の色を忘れた天空の回廊を進んでいくと、やっと目的の部屋に通じる扉が姿を現す。

銃兎が零した言葉に、フードの男は何も返さなかった。

いつもならば、下層階は常に人の気配と声で賑わっているのだが、今日はそれが全くないのだ。

ボスの視察であったとしても、人の気配まで無くなることはないだろう。

寧ろボスは警護の人間を山ほど連れて来るので、人の気配は増す筈であるが。

「……天が、堕ちたか」

何かを察したようにフードの男がそう呟きながら、ひと際大きな扉へと手を伸ばした。

ドアノブの部分には指紋認証装置が取り付けられている。



ちなみに、扉の中央部位には組の紋を象った金の飾りがあり、それが顔認証及び虹彩認証装置となっていた。

過剰なほどのセキュリティが付けられたその扉が、ゆっくりと音を立てて開く。

「やあ、待っていたよ」

銃兎の目に飛び込んできたのは、窓枠に腰掛けた一人の男の姿であった。

そして耳朶を打った奥行きのある声が、今色々な意味で話題の男のそれと同じものであることに、銃兎は直ぐに気が付く。

昨日開催された日本最大規模のラップバトルを制したのは、無名の番狂わせであった。

テレビでも全国放送がなされるほどに注目された舞台で、最も熱を博したのは最終決戦である。

優勝候補として名高くそれに似合う人気を誇るThe Dirty Dawgと、無名の男は、見るもの全てを魅了するバトルを繰り広げた。そのバトルは、SNSにおいても爆発的に拡散され、ラップに興味を持たなかった者たちをも惹き付けた。

故に、一夜明けた今日のどのテレビ番組でも報じられていた。

特集番組も組まれており、インターネットやSNSでも話題が絶えない。

中でも優勝賞品などにも目もくれず、立ち去った優勝者は、素性が全くと言って良いほどわからなかったのだ。天から墮ちた天使の名を冠する者は、忽然と姿を消した。

そのミステリアアスさが更に関心を高め、報道関係者をはじめとした数多の人間がその男を血眼となつて探しているのである。

開放的なガラス張りの部屋は、空中庭園を想わせる造りだ。

その背に広がる広大な青空はベリアルという男に、酷く不釣り合いなようにも、とても馴染んでいるようにも見えた。

「だけど、残念だね。キミの待ち人は、オレが喰らつた」

「……映像通りの、不埒者ですね」

「ハハハッ、そうオレのマゾヒズムを擽ろうとするなよ。」

「勃起するだろう」

「気持ち悪いんだよ、この変態野郎が。」

誰に向かってモノ言つてやがる、しよつぴかれないのか？」

「ほう、拘束プレイをご所望かい。」

「いいねえ……趣味が合いそうだ」

「ああ!?ざけんな!!てめえと一緒にすんじゃねえよ」

愉快そうに口角を上げ赤い瞳を向けるベリアルという男が、銃兎が映像で見た通り……いやそれ以上の如何わしい男であることを知る。仕事であった為に会場には行けなかつたものの、銃兎もまたネット配信をされたバトルの映像を目にしていた。それを知った今、その映像がスタツフたちの努力の賜物だということも気付かされた。この男の発言をそのまま垂れ流しては、警察じぶんの仕事が増えそうだ。

青筋を浮かべた銃兎は、にやにやとしたベリアルの表情に思わず口調を崩す。しかし、それは目の前の男を悦ばせるスパイスにしかならなかつた。

「落ち着けよ、兎のお巡りさん。」

用があるんだろう?」

「……はあ。もうなくなりましたよ。誰かの所為でね」

「そうかい?」

「まあ、その誰かさんが……その男に取って代わって組の頭張るってんなら話は別だがな」

「ははっ、そりや面白い。だが生憎オレはそんな退屈な「……用件を言ってもらおうか」

赤い手袋で額を覆った銃兎が、ふと瞳をベリアルに滑らせるとゆるりと口角を上げた。

それを軽く受け流そうとしたベリアルであったが、今まで静観をしていたもう一人の男が口を挟んだのだ。

ベリアルは思いもよらないその言葉を発したフードの男を見るが、相変わらずその表情はわからなかった。

「この組織は実力主義だ。強いものが上に立つ。

ルールはそれだけ」

「……オレは、火の粉を払っただけだ。

キミたちとは違って身包みだけを剥ぐような、勿体ない真似はしないよ」

「元々この組頭おとこに、頂点に立つ資格はなかった。

丁度良いタイミングであろう」

「おいおい、オレを巻き込む気か？」

「それについては、気は向きませんが私も賛成しましょう。

此処こゝが倒れては……チンピラ共の抑止力が失われる。

治安の悪化は、仕事の増加ですから」

「悪徳警察、って顔してるねえ」

「お気に召しませんか？」

「いや、凄くそそられるぜ。寧ろそっちの方が、好みだ」

「はっ……：そうだろうなア、悪徳ベリアルの悪魔ベリアルさんよ。

「てめえこそ名前通りじゃねえか」

この塔の役目は、治安維持における必要悪も担っていた。

見境のない悪を刈り取ることで、免罪符を得ていたのである。

ベリアルベリアルの足元で伸びているボスであった男は、どうもその辺がわかっておらず、駆逐すべき悪と手を結ぼうとしていたのだ。よって組の中も大荒れとなっていて、組を抜けようとする者たちが多く現れたのもそれが原因の一つであった。

フードの男が意図することを、ベリアルは理解していた。

何やら含んだ眼をした銃兎が、ベリアルベリアルを利用する計画を立て始めていることにも気付いていた。

「……まあ、構わないけどね。ただし条件がある」

だが、彼らは知らない。ベリアルという男に潜む大いなる悪魔は、その名の通り墮落させるものだ。

今は理性ある悪としてそこにいるが、それがいつ破綻するのかわからないのである。

恐ろしい残酷性を秘め、息をするように人の尊厳を最悪の形で踏みにじる悪魔が誘う場所、それは今いる場所とは真逆であろう。

「Paradise Lost<sup>本 当 天 国</sup>の、はじまりだ」

緩やかに孤を描く唇にぎらりと輝いた赤い瞳は、かつて神が生み出した最愛の存在を誑かしたとされる蛇を想わせる、妖しさを滲ませていた。

## 悪魔、降臨せし時⑥

結果的に、男が告げた『とある条件』を組は呑んだ。そうして、つい数時間まで組のボスとして扱われていた男は、乱雑に塔外へと連れ出されて行つた。これにより、ベリアルは空を手に入れたことになつたのである。

ベリアルを塔の内部へと案内した、黒いフードの男は、ボスの世話役であり秘書でありながらも、実質ボスに次ぐ権力を持つていたらしい。そんな彼は、一連の事柄を部下たちに通達する為に、部屋を出て行ってしまつた。

よつて、部屋に残されたベリアルと銃兎の二人であつたが、腹の探り合いの真つ只中であつた。

「キミはオレのことを知つている。だが、オレはキミを知らない。」

「これじゃあフェアな取引とはならないだろう」

「はつ、殆ど素性を明かされていない男の、全力ではないバトルを見て何がわかると言うのかね。」

「フェアを望むのならば、明かしたまえ」

「ふむ……。そんなにオレのことを知りたいのかい？  
ならまず、スリーサイズでも教えてあげようか」

ベリアルにしる銃兎にしる、この日にヘブンツリーを訪れたのは全くの偶然である。そして、偶々ボスの気紛れにより、ベリアルが塔内に招かれ、そして塔を制した。

実力主義を謳う組織にとっては、自分で招き入れ、組を巻き込み、抗争を起こした挙句、無様に負けた者を、そのままにしておくわけにはいかない。そこでボスを打ちのめしたベリアルに白羽の矢が立ったのである。ベリアルからすると、全てはただの戯れに過ぎなかったのだが。

銃兎は、ベリアルという男がラップバトルの賞品を拒んだことは知っていた。

全国放送された一面で、統治することを退屈だと吐き捨てていたのが、印象に残っていたのだ。

だからこそ、このヘブンツリーの裏側に拠点を置き、この辺りを牛耳る組のボスを、条件はあれど引き受けると言ったことに引つ掛かりを感じていた。

職業柄銃兎は、話を聞き出すことにも精通している。そして、話をさせることにも慣れている。それを繰り返すうちに、秘密を抱える人間も、そしてそのような人間の吐かせ方も、顔を見ればわかるようになっていた。



だからこそ、不敵な笑みを浮かべる男が、どれほど厄介な存在であるかを見抜いていたのである。

仕草と言葉で、巧みに人を惑わせ翻弄し、決して本心を明かさない。それはベリアル  
のバトルスタイルと共通するものがあり、まさに『蝶のように舞い、蜂のように刺す』と  
いったところか。

道化師紛いの表情を見せる男に、銃兎は目を細める。

此処は一度引いた方が良いでしょう。そう思った彼は、腹の中に納めていた計画の一端  
をベリアルと告げた。

「いいねえ、クソみたいな偽善者共より

……キミのように悪ぶっている人間の方が好みだ」  
タイプ

「やめろ、反吐が出る」

「ハハハッ、そういきり立つなよ。」

オレたちは、大事な共犯者あいぼうとなるんだ。

ああ、折角だから肉体関係なにかよしになるかい？」

「はっ、舐めたことを。」

いつでもわいせつ罪でしょっぴく準備は出来てんだ」

「ほう……いいぜ。」

その腰にぶら下がっている立派なモノで、拘束してくれよ」  
「ためえなんぞにぶつ放す弾丸も、手錠もねえ。

変態不埒野郎に構っている暇はないものでね」

「放置プレイかい、まあそれも悪くはない」

「……はあ、貴方を放っておくと被害者が増えそうですね」

「酷い言い様だね。だがそれがイイ……」

「その気持ちの悪い目を止めなさいよ。」

「仕方ありません。……この俺の、監視下に置いて差し上げましょう」

「ほう、監視プレイかい。キミも多趣味だね……益々気が合いそうだ」

「下種野郎が。一緒にすんじゃねえつつただろ」

本質を捉えようにも、捉えられない言葉と視線の応酬が続く。

深く溜息を吐いた銃兎は、濡れたように光る赤い瞳を見据えた。

「私の情報は渡しました。今度は君の番ですよ」

「ふ。キミが勝手に話し出したことだろう。」

……なんてね、冗談さ。オレだつて対価があれば、相応の支払いはする。何を知りたい？」

「ベリアル、貴方は……昨日のバトルで得た賞品を全て捨てた。にも拘わらず何故この場所を？」

「別に、必要としていたワケじゃない。

だが……天から堕ちる快樂は、知っている。

あれは良い、ソドミーとはまた違った、オーガズムが得られる。

それこそ、やみつきになりそう……そう中毒性があるんだ」

「……なんの話だ」

「ハハハツ、そうか……キミたちにはわからないよな。

まあ、アレだ。人間は、墮落する時に一番の快樂を得る。

所詮人間は動物。本能は捨て切れないのさ」

「お前は、薬<sup>ヤク</sup>でも広げるつもりか……？」

「それよりも、もつと原始的なコトの方が好きでね。

まあ……キミがいうならキメてやっても良いぜ。

文字通り、ぶっ壊れるまで……な」

「ナマ言つてんじゃねえ、俺は薬漬けにはならねえよ」

「そうだろうね……。何せ、キミは……取り締まる側の、お巡りさんだ。

ハハハハツ!! そんなキミを、薬漬<sup>キ</sup>けさせたら……?」

ああ……考えただけで、イッチまいそうだ」

「てめえ、……あんまりふざけたこと抜かすと……」

歪んだ瞳に宿る狂気は、禁忌的なうつくしきさを感じさせる。

恐らくベリアルは、それが銃兎の地雷だとわかつて踏もうとしているのだ。

唸るように怒りを露わにした銃兎は、思わず赤い手袋に覆われた手で、腰に付けたホルダーに触れた。

「オレなりの愛撫さ。冗談だよ」

そんな銃兎の様子に、低く笑ったベリアルは静かに目を伏せる。

「理由などありはしない。退屈凌ぎの……ほんの気紛れさ。

どうせなら、愉<sup>バートナー</sup>しいコトしたいだろう?

だからキミの共犯者になってあげるんじゃないか」

甘美なその声音は、銃兎の疑心を掻き立てるものでしかない。

だが、飄々としたその態度や好色的な言動は、扱いやすいとも思った。

羊の皮を被った狼が蔓延る世界で、欲望に忠実で本能を滲ませる人間は、餌さえあれば裏切ることはない。彼は経験上、そう考えていたのである。

「……仕方、ありませんね。」

これから取引を重ねれば重ねるほど、貴方と私は一蓮托生となっていく。

少しずつ皮を剥いで差し上げましょう」

「ハハハッ、オレの皮はもう剥ずけてるいるむけ

物騒な物言いに、愉快そうに口角を釣り上げたベリアルを見て、銃兎は心の中で深く溜息を吐く。

「……その言動、なんとかありませんか」

「なんとかして欲しいなら、躡けてみるかい？」

返されたのは、相変わらずの酷いものである。だがもう、まともな答えに期待はして  
いなかった。

この男がこの男である一つの特アムテンテイティ徴だと思ひ込むしかなさそうである。  
銃兎の薄い唇から、再び溜息が零れ落ちた。

そうして話が区切りを迎えた頃には、窓の外はもう夜の帳に包み込まれていた。

特殊なコーティングがされているらしい窓は、普通の窓とは違い、夜でも鮮明に外の  
景色を見ることが出来る。

墨を撒いたような空に、星が散らばっているが、その輝きは弱弱しい。町のネオンに  
光を奪われている所為でもあろう。

「なあ、お巡りさん。そろそろお仕事は終わりだろうか？

……少し遊んでいかないかい」

ずっと腰を下ろしていたベリアルは、窓辺から立ち上がると、ゆつくりとした足取り  
で銃兎へと近づいた。

銃兎は訝しげに目を細めると、その顔を見上げる。

ベリアルは薄い笑みを携えながら、形の良い唇を動かした。

\*\*\*

そうして、意図せずに拠点を手に入れた男は、用意された服を身に纏う。悪魔<sup>かれ</sup>の性質から、組だけではなく、組の人間たちを陥落させることは簡単なことであった。

何があつて何をしたかは伏せておくが、一夜明けた塔の内部は昨日と様子が、がらりと異なっていたのである。

昨日の朝から触れてもいなかつた携帯を確認する。そこにはずらりと着信と受信を知らせる表示が並んでおり、昨日一昨日で出会つた人間たちの名前が並んでいた。

するとその時、画面に着信を告げる表示が浮かぶ。

『有栖川 帝統』と浮かび上がった名前に、通信開始ボタンを押した。

『やーつと出た!! ったく、何度も掛けたんだぜ!』

「あー。それはすまないね。色々取り込んでたんだ」

『取り込んでた? ……なんかあつたのか!?!』

「まあ、大したことじゃないさ」

『そーなのか？ま、にーちゃんがそう言うなら、今は聞かねえけどよ』

「それで、何かあったのかい」

『いや。ぜんっぜん、連絡が付かねえから心配してただけだ。』

無事なら良かったぜ。今日の約束、忘れてねえよな』

「憶えているさ」

昨日のあの一連の出来事の所為もあるが、普段の習慣的にも、男は、仕事に関するこ  
と以外で携帯を弄ることは少なかった。それこそ空き時間に少しゲームをするぐらい  
である。だからこそ、確認が遅れてしまったというのは、言い訳に過ぎないだろうが。

帝統からの通話が終了すると、改めて届いていたメールや、メッセージ専用アプリの  
受信ボックスを開いていく。書き方は人によって異なるものの、その内容の殆どは、都  
合が良ければ会わないかというものであった。

予定を組み立てながら、一つ一つに返事を打ち込んでいくと、そろそろ帝統との待ち  
合わせ時間が近づいていることに気が付く。その殆どの相手が男が、返事を打ち込んだ  
瞬間に、既読のサインを付けたので、直ぐに確認したことはわかった。だが、まさか返  
事が打たれるとは思っていなかった。次々に帰って来る返事を、確認する時間はもう無  
い。



内心で謝罪しつつも、男は身支度を整えると、部屋の外へと出た。

もはや完全に別人格であるベリアルが、成したことを男は全て記憶していた。

ヘブンツリーという、微妙に聞き覚えがある巨大電波塔の内部が、このような造りになっていたことにも、そしてヤクザが牛耳っていたことも、帝統から多少は耳にしていたが、改めて驚いた。そしてまさか、それを自分が乗っ取ることになるとは、微塵も思っていないかった。

「……しかし、広いな」

昨夜あの後、黒いフードの男が、内部機密が詰まった資料を持って来た。

その中の一つに、塔の構造が緻密に描かれた地図があり、ざっくりと目を通した所、どうやらこの塔には裏向きにも様々な施設があるらしい。主にギャンブルといった大人の遊びをする場所だが。

ベリアルという男の脳は、直ぐにその地図をインプットしてくれたので、塔で迷うことはなさそうである。

表のフロアに出た男は、そのまま待ち合わせ場所へと向かった。

「あれ、……だよな」

平日の朝と昼の間という中途半端な時間であっても、ヘブンツリーから人混みが消えることはない。

相変わらず賑わいを見せる駅もまた、同じである。

良く待ち合わせ場所としても使われる、駅に飾られたモニュメントの近くに、その姿はあつた。

少し早めの時間に到着したのだが、それよりも前からそこにいたらしい。

男は思わず目を瞬かせてしまう。出会ったからまだ間もないが、時間にルーズな方ではないかと勝手に判断していた為である。人は見かけと正確に寄らない部分があると、反省と罪悪感を抱きつつ、青い髪の青年へと声を掛けた。

「やあ、待たせたかい」

「にーちゃん!!全然、丁度来たところだ」

男の声に、ぱつと顔を上げた帝統は、星が散るような明るい笑みを浮かべる。

そして、手にしていた携帯とイヤフォンをポケットに捻じ込むと、空いた手で男の手

を引いた。

「よっし、行こうぜ！この有栖川帝統が、にーちゃん専属のガイドになってやる！」  
「それは心強いね」

太陽の光を弾いて、いつそう鮮やかに輝く青い髪が、ふわりと靡く。

半歩先を歩く帝統に、ふと笑みを浮かべた男は今日のプランを彼に任せることにした。

そうして、帝統の案内により、ヘブンツリーの中を歩き回ることになった。

彼が紹介する店は、何とも年相応で中々センスが良い。

服やアクセサリーなど拘りはなくとも、時間がある時は好きな店をチェックしているらしい。

「サイコロとか、カードとか、こういうのが良いんだよなあ。

なんつーか、ツキが来そうじゃん」

メンズ向けのアクセサリーが揃う店で、目を輝かせた帝統が指を差したのは、ピアス

やイヤリングが並ぶコーナーに展示されていた、トランプやらサイコロをモチーフにしたものであった。

彼の左耳から流れる髪飾りにもサイコロがあしらわれている。

話を聞いていると、どうやら縁起ものをモチーフにしたものも好むらしい。

それを聞いた男は、ふと頭に思い浮かんだものを探すため、他の商品棚へと目を向ける。

「にーちゃん、どうした？趣味じゃなかったか？」

「いや、そういうものが好きなら、ああいう石とかもどうかかなと思ってね」

自分の話が過ぎてしまったか、と焦りを見せる帝統に、男は笑う。

この青年は、人の顔を読む癖があり、更に人の感情の動きに敏感だ。

「ああ、天然石パワーストーンか。好きだぜ」

「上手い組み合わせを知っているんだ。組んであげようか」

「え、マジか!!ちよーうれしい!!」

男がそう提案したのは、無意識のことであった。

鉱石類はそれ程詳しいわけではない。だが、気が付けば唇はそう動いていた。心底からの喜びを表すように帝統は、頬を赤らめて男に飛び付いた。

その仕草に静かに笑みを零した男は、丸くカットされた石が種類別に並ぶケースに近づく。

パワーストーンと呼ばれる石には、一つ一つに意味がある。そして一つ一つに相性がある。

そして、同じ石でも微妙に力が異なるのだ。そこは、流石墮天司の目と感覚センスといったところであろうか。不思議と、石から放たれる力を捉えることが出来た。

メインとなる石の中から、一番強い力を秘めた石を取る。そしてその石の力を、より高める組み合わせを選んでいく。

方法は簡単なことだ。メインの石の隣に他の石を置けば、感じる力が上下する。後は、その様子を窺いながら、帝統の腕一周分の長さと同じだけ石を選べば良い。

ちなみにメインは、運を上げると謳われる石を選んだ。

長い指が一つ一つ確かめるように石を摘むと、赤い瞳がそれを見透かすように覗き込む。

その様子を帝統は、ただじつと見つめていた。

「さて、……このままプレゼントしても良いけど、折角だから賭けをしないかい」  
「つ!!いいぜ!!大歓迎だ!」

男は、完成したブレスレットが綺麗に包装された箱を手にして、そう帝統に提案する。  
得意分野だとばかりに、顔を輝かせた彼は、その提案に勢い良く飛び付いた。

「キミが勝ったらこれを無条件で渡そう。」

でも、オレが勝ったら……一晩つき合ってもらおうか」

「へ?……それだけで良いのか?」

「おや、安直な判断はいけないな。……貞操みの危機を招くぜ」

拍子抜けした表情を見せた帝統に、ベリアルはくつくつと喉を震わせて笑った。

その笑い方を見て、目を大きくした彼の脳裏には、あのラップバトルでベリアルという男が見せた表情が再生される。どうやら勝負になると人格が変わるのだと、この時彼は確信したのである。

賭けに乗った帝統を、今度はベリアルが案内する番となった。

会話をしながら足を進めているうちに、気が付いたら迷路のような場所に足を踏み入れていた。

そして、ベリアルが案内する儘に進んでいくと、目の前には重厚な大きな扉があったのだ。

こうして、とある部屋に足を踏み入れた帝統は、驚きを露わにすることになる。

ヘブンツリーの裏側にカジノらしき施設があるらしい。という噂は耳にしていた。

しかし、それは都市伝説と同じで、何の確証もない噂に過ぎなかつたのである。この瞬間までは。

「に、にーちゃん……こっ……こっ……」

「大人の遊び場さ。さあ……熱く絡み合おうじゃないか」

扉の両端に控えた男たちによって開かれた、その先の世界。

それは、若いながらもそれなりの場数を経験して来た帝統でも初めて見る、本物の世界であった。

中にいる人々の服装は、表にいるそれと変わらない。悪目立ちをしないように、昼間の時間は、ドレスコードは存在しないのだ。

帝統を圧倒し滾らせたのは、人々が見せる獣の瞳であった。

少し離れた所から獲物を俯瞰するような、それは、鋭利な静けさを滲ませている。

それが、部屋に満ちた緊張感の正体であろう。

じりじりと、確実に、足音を潜ませるハンターたちが、心の底から狩りを楽しんでいるのだ。

「あの中に入るのは、大事なものを失くしてからだぜ。坊や」

点在するカジノテーブルに、釘付けになっている帝統に笑みを零しながら、ベリアルはその肩を叩いた。

まだ法律的にはアウトで、この場所にいるだけでしょっぴかれる対象となるであろう。だが、そこは嚴重な警備と監視、そして取引がなされているので、そういう意味では安全地帯なのだ。

とはいえ、未成年であろう青年を、堂々とテーブルに上がらせるわけにはいかない。そう思ったのは、ベリアルではなく男の意志が働いたからであろう。ただし、言い方が言い方であったが。

二人は、更に奥の部屋へと向かう。このカジノには、VIPルームがいくつも備え付



けられており、お忍びで訪れる人間たちにも対応しているのだ。

個室の中も広く造られており、部屋の中にはカジノテーブルが置かれている。その周りにゆったりと座ることのできるソファアが配置されていた。

カジノテーブルの奥には、黒いスーツを纏う、専属のディーラーが控えている。

「ポーカーは知っているかい」

「ああ。こんな本格的にはやったことねえがな」

「なら問題ないか。じゃあ、キミはこの勝負にいくら出せる？」

ソファアへと腰掛けたベリアルは、瞳を流して同じように座った帝統を捉える。

挑発的なその目に帝統は熱を浮かべた目をぶつけた。

そうして、ゆるりと口角を上げると、彼は財布を取り出してテーブルの上に置いた。

「俺は中途半端な賭けはしねえ」

「いいねえ。キミのそういう所……堪らないよ」

脳汗アドレナリンが噴き出るような刺激は、帝統が常に求め続けているもの。

それは、ベリアルが求めるものにとっても近いのだ。

「では、オレもキミと同じ額を。だが、それだけじゃあフェアじゃないな。

……こういうのはどうだい。キミが勝ったら、オレの全てをあげよう」

「待ちな。……俺も、俺を賭ける。」

俺が勝てば、アンタは全てを失う。アンタが勝てば、俺は全てを失う。

中々、刺激的だろう？ぶつとんじまいそうだ」

「ハハハッ、キミもイかれてるね。」

「じゃあ……これは、敗者の首輪としよう」

先程のブレスレットを台に乗せたベリアルは、愉快そうに顔を歪ませる。

そして、静かに時を待っていたディーラーに合図をした。

「にーちゃん相手じゃ、いかさまも出来ねえな」

「ふ、してくれても構わないよ。」

「ただし……見つからないように、上手くやることが条件だ」

シヨーのような、鮮やかな手つきで切られたカードが、二人に配られていく。  
それを手にしたベリアルと、帝統は、お互いの武器を確認すると、獯猛ともいえる笑  
みを浮かべたのであった。

## 悪魔、降臨せし時⑦

へブンツリー内にあるのは、シヨッピング施設だけではない。

フードコートやレストラン、そしてカフェなどの飲食店も豊富に揃えられている。

落ち着ける場所として選んだのは、色々な国の珈琲が楽しめるといふ喫茶店であった。

帝統の好みの店らしい。相変わらずこだわりはないが、好みの強い男である。

店に入ると、しつとりとしたクラシック音楽と、珈琲の香りに包まれる。

適当なものを注文した帝統は、向き合って座る男に目を向けた。

「にしても、強え……ってか、性格悪いなにーちゃん」

「ははっ、そう言うなよ。」

「キミがあまりにも手馴れているから、つい熱くなっちゃってしまっただけだろ」

「良く言うぜ。俺が一喜一憂してんの、楽しんでいただけだろ」

店の雰囲気似合うシックなテーブルに、頬杖を付いた帝統はその唇を尖らせる。

その腕には、艶やかな光を纏うブレスレットが嵌められていた。

帝統として年齢には似付かわわしくない程の、腕を持つている。

それに、勘の良さも、勝負時を見極める眼力も、大勝負に打って出る度胸も、素晴らしいものであった。

天性のものであるかはわからないが、ギャンブルという運と勘が勝負の世界で、彼が磨き上げたものであろう。

「あーあ。俺も自信あったのによ」

「それがギャンブルなんだろう。」

盤の上では全てが平等だ。経験も実力も、運によつて覆る。

理屈を取つ払つた世界。俺も嫌いじゃない」

「そうーそーなんだよ、流石にーちゃん!!」

……あの世界なら、生まれも育ちも、何もかも関係ねえ。

その時の運だけが、勝負の世界。それが……俺が、求めるもんだ」

男の言葉に、顔を明るめた帝統であったが、直ぐにその瞳を伏せてしまう。

一般の人間は、ギャンブルという言葉に顔を顰める。実際に帝統の生き方を否定する

人間は少なくなかった。ごく一部の人間は帝統のような生き方をしていて、彼らは肯定してくれた。だがしかし、彼らもまた時間と共に多数派の人間になっていった。

とはいえ帝統は、別に受け入れて欲しいとは思っていない。

ただ、自分の考えと違うことを糾弾し疎ましがるのは、器量が狭いにも程があると、彼は思っている。

彼からすれば、多かれ少なかれ生きることそのものがリスクであり、大いなる博打なのだ。

「俺は、俺に人生を賭けた。

それが当たろうが、外れようが、自分の尻拭いぐらい出来る。

他人にとやかく言われる筋合いはねえ」

ぼつりぼつりと零していく帝統の話を、男はただ聞いていた。

彼はまだ若い。だからこそ、広い世界を求めることが出来る。

男は何も言わなかった。いや、言う必要などないと思っていた。

「腹を括っていることを、俺に言っても仕方ないだろう」

「いいんだよ。にーちゃんに聞いて欲しかったんだ」

「お悩み相談というわけかい。まあ、偶には良いさ」

「渋谷の、スクランブル交差点あるだろう？」

なんつーか、俺……ああいうの嫌いなんだよなあ。

皆が揃って同じ方向を向いて、同じ信号しじに従って……。

少しでもはみ出ると、即バツシング。窮屈にも程があると思わねえ？」

「逆に言うと、それが人間の流れさ。」

一番楽な方法であり、間違えのない生き方……。

箱に収まってしまえば、非難されることはない」

「そりゃ、知ってるけどよ」

「キミは流れを読むことに長けているから、余計に気持ち悪く感じるのだろうね」

「ギャンブルでもな、極めればすげーんだ。」

打った相手のことは……何となく、わかる。

だけど、イマイチにーちゃんのことわかんねー。

アンタの本当はどつちなんだ？

「……さあ、ね。どつちに見える？」

カードを手にしていた時の、ベリアルという男は、ポーカーを楽しむというよりも帝統の反応を愉しんでいるようにも見えた。今冷静になって思うと、終始掌で踊らされていただけだったのだろう。

思い返すだけでも悔しくて堪らないのだが、それ以上に何となくそんな気はしていたのだ。

勝負中、相手の考えを読もうと、視線、息遣い、声音を五感を全開にして探った。だが、そうすればそうするほど、ベリアルの策略に嵌っていったのだ。

その感覚は蟻地獄で足掻く蟻にも近いのかもしれない。

そうやって足掻く帝統を、赤い瞳は嗤っていた。

しかし勝負が終わってカジノを出れば、その人格は一変した。

優雅に珈琲カップに口を付ける男は、穏やかな好青年という印象を受ける。

青年とって良い年齢であるかは、置いておくとしよう。

「まあ、いいや。俺は俺の全部を賭けて、アンタに負けちゃった。

飼い主のことを探る趣味はねえさ」

「随分素直だね。……だが、俺は別にキミを飼い慣らそうと思っただけだよ」

「あ？そーなんか？にーちゃんのことだから、てつきり……」



「ふふ、心外だな。キミのような男は、縛り付けてしまおうと逆に面白くなくなる。

……だが折角キミが乗り気になってくれたんなら、話は別だ」

「なーんか、俺墓穴掘ったような……」

「嫌なら言ってくれて構わないさ」

「い、いや……やる、やるぜ！男に二言はねえ」

「そうかい、なら一つ頼もうか」

ふと細められた瞳に深い色が浮かぶ。

短い付き合いではあるものの、帝統はその表情の意味を理解していた。

「カジノディーラーをしてみる気はないかい？」

「あ？……ディーラーって、あの？」

「そうさ、ゲームの見届け人だ」

「……悪いがそりゃ、無理だ」

「理由を聞こうじゃないか」

「俺はギャンブラーだ。ディーラーなんて、俺からすればお預けを喰らうようなモンさ」

「なら、打ちたい相手がいれば好きにすれば良い……という条件を出そう」

「ちよ、ちよつと待ってくれ。にーちゃん、なんでそんな」  
「……ああ、言っていないかったかい」

突然の話に驚いた顔をした帝統だが、考えるように腕を組むと、不思議そうな顔を向けた。

そんな彼の仕草を見て、そういえばとベリアルは、昨日の話をし始める。

「は、はあ!!? ヤクザと喧嘩した……っ!!?」

「ハハハツ、喧嘩ではないさ。ゲームに招待されただけさ」

「そ、それで……のしちまった……のか?」

「折角のパーティーだ、楽しませてもらったよ」

「……さ、……流石に、びっくりした……」

「アンタ、……すげえんだな。色んな意味で」

笑みを含ませてくつくつと笑うベリアルに、脱力したように肩の力を抜いた帝統は、大きく息を吐いた。

「軍資金が足りなくなった時の、繋ぎで構わないさ。」

キミがバニーボーイになってくれると、盛り上がりそうだ。色々とね」

「なっ!!ば、ばにーって、俺に!!」

「そう喜ばないでくれよ。冗談だ。」

キミが着たいというなら、着てくれて構わないけど」

「ぜってえー嫌だ。それなら、やらねえ」

「ほう、やってくれるのかい?」

「え、あ……ち、ちくしよう」

「男に二言はない、だったかな。」

悪いようにはしないさ。別に組に入れと言っているわけじゃない。

それに、キミも勉強になるだろう」

「……あー、もう、にーちゃんには敵わねえなあ」

がしがしと頭を掻く素振りを見せた帝統は、小さく両手を上げる。

こんな巧妙なとも言えないチープな口車に乗せられたこともあるが、目の前の男が何を考えているのか興味が沸いていた。

「もう一つ条件を付けさせてもらうぜ」

「なんだい？」

「……使われるだけじゃ、性に合わねえ。

アంతタの腹ん中……教えてくんねえかい」

「ふふ……別に大したことではないさ。

情報を集めたいんだ」

「情報……？」

「いつも、オレは体張ってばっかりだからな。

偶には気持ちイイ思いをしたいんだよ」

「……にーちゃんも使われる側っつーことか？」

「ああ、そういうこつた。

だが……此処では思うようにやらせてもらうさ。

その為に、情報は武器になる」

「……」

「モノ足りなそうな顔、しているね。

だが……まだ秘密さ。

我慢を重ねれば重ねるほど、感度が増す。

キミだって、気持ちイイ方が好きだろう？」

体を椅子に凭れさせ長い足を組むと、また赤色の瞳は色を変える。

微かなその変化を読み取った帝統は、一つ息を吐くと追及の手を納めた。

ベリアルは、そんな帝統の様子に愉快そうに口角を上げた。

今は人格の一つといえど、元々ベリアルは自分を愉しませる存在以外には興味を持たない。

そんな狡知の悪魔が、こうして彼に時間を割いているのには、勿論理由があった。

有栖川帝統は賢い人間だ。使い勝手の良い人間と言つても良いだろう。

彼は、檻の中にいることに疑問を持ち始めた、獣だ。

その性質は野生に近く、故に弁えることも知っている。

要するに、『ベリアルにとつて』有能な人間でありながら、誰しもが持つ『聞かれたくないこと』に、無暗に突っ込まない嗅覚を持ち合わせている帝統は、都合の良い男となるのだ。

「それで、どんな情報が欲しいんだ？」

「ああ、それについては話しておこう」

帝統とて、使われてばかりの立場に甘んじるつもりも、負けてばかりでいる気もなかった。

いつか腕につけたブレスレットを、ベリアルに贈り返すつもりであるし、いずれラツプバトルを挑む腹積もりである。だがそれには、まずベリアルという男を知る必要があると帝統は考えたのだ。

勝負師にとって、相手の情報を得ることは、相手の癖を見抜く上で重要なことだ。

考え方、行動パターンを読み、そこから次の手札を推測する。

本来ならば勝負中にそれを行うのだが、何せ相手が悪い。

だからこそ、帝統は、ベリアルの頼みを逆手に取ろうとしたのだ。

「……」

しかし彼はこの時、何故そこまでして、ベリアルに勝とうとしているのか、とは考えなかった。

ギャンブルに勝つだけならば、何度も挑み続ければ良い話である。

勝負を受けてくれるかは別として、だが。

帝統はずっと心に引つ掛かっていたことがある。

相変わらず底の見えない微笑を浮かべる、ベリアルが、自分の名前を呼んだことはない。

彼はそれが、無性に腹立たしく感じていた。

「にーちゃん、その仕事はいつから行けば良いんだ？」

「いつでも構わないよ。」

あくまでも、キミにスタイルに合わせるつもりでいるからね。

気が向いたら連絡してくれ」

「わかった！」

喫茶店を出た二人は、そろそろ解散にしようと駅の方へと向かった。

少し視線を彷徨わせた帝統が、男を見上げる。

それに、ふと穏やかに微笑んだ男は、彼に言葉を返した。

「じゃあ、また会おう」

「……あ、……ああ、また、連絡する」

集合と同じ場所に辿り着くと、男は帝統に別れを告げた。

珍しく歯切れ悪い口振りを見せた帝統は、踵を返した男の遠ざかる背中を暫く見つめていた。

\*\*\*

太陽が姿を消すと共に、灯り始めた光たちが、夜の街を彩り始める。

都心に輝く星々は、ひどく人工的なものであった。

空高く聳えるビル群から光が消えるのは稀のことで、中には、休みなく瞬き続ける星もある。

職種にもよるだろうが、女尊男卑世界であつても、サラリーマンの生活に変化はないように見えた。もしかしたら、中央区と呼ばれる場所に行けば違うのかもしれないが、ベリアルにはどうでも良いことだ。

日が落ちてから輝きを増す都市の一つである、新宿に足を向けたベリアルは、雑踏に溢れる街を歩いていた。行き交う黒いスーツを着た男たちの、世を憐んだ顔をした男た



ちを見て、ベリアルは静かに口角を上げた。舌なめずりさえしそうなその顔は、何か悪いことを考えているに他ならない。

ベリアルが、吟味するように人間たちの顔を見ていると、突然何か割れる音が聞こえた。

結構派手な音であったので、周りの人々も音が聞こえた方へと目を向けている。

音の発生地は、少し離れた所にある店からであった。

「ああ!? ふざけんな!! 舐めた口聞いてんじゃねーぞ!! この軟弱野郎っ!!」

「お、お客さん……困ります、あの」

「困るんはこつちだよ!! 商売だろうがっ!!」

随分一方的な怒声と罵声が、賑わう街を凍て付かせる。

声のトーンが安定していないことから、酒に呑まれた人間が、騒動を引き起こしていることは予想が付いた。

店の方に近づいてみると、想像通りの男が店の外に出されたらしい。

洒落たデザイングレーのスーツに身を包んだ男に詰め寄り喚いている。

後ろから男を止めようとしているのは、店の従業員の一人であろうか。

道行く人間たちは、興味深げに視線を向けるものの、関わる気はなさそうだ。

騒ぎを大きくしないという意味では、その態度は理に適っているのかもしれない。

ベリアルはただその様子を見つめる。

すると、顔を真っ赤に染め上げた男は腕を振り上げると、スーツの男の顔を殴った。

軽く受け身は取ったようだが、殴られた頬は痛々しい痕が残ってしまった。

口角付近を切ったらしく、白い肌に赤い筋が浮き立つ。

「…………へえ」

スーツに汚れが付かないようにだろうか、素早く血を手で拭いたその男に、ベリアルは目を細めた。

そして、その顔に愉しそうな色が見えたかと思うと、ベリアルは騒動の方へと足を向けたのである。

「この店の評判、下げたくなければ…………わかるよなア兄ちゃん」

「…………」

唇を噛み締めたスーツの男は、一瞬顔を歪ませるも、直ぐに顔を取り繕った。

店の雰囲気や恰好などを見るに、その男はホストなのだろう。

立ち上がった男は、さっとスーツを払うと衣服の崩れを直す。

常に人の目を気にする職業であるが故に、いつまでも無様な姿を外に晒すわけにはいかない。そのような気迫すら感じさせる、男の金の瞳はうつくしく輝いていた。

だがその表情は、目の前の男を煽るものでしかなかつたらしい。

酒が入っている為か、相当沸点は低くなっているようにも見える。

血走った目を剥いた男が、再びその腕を振り上げた動作に合わせて、ベリアルも動いた。

「おいおい、公衆の面前でSMプレイをお楽しみとは……イイ趣味してるじゃないか。

オレも混ぜてくれよ。3Pとイこうぜ」

後ろから男の腕を掴んだベリアルは、喉を震わせるように笑う。

突然現れたベリアルの姿に驚いた男は、慌てて抵抗を見せるが、掴む手は離れない。

後ろを振り向こうとする男は、視界の端に映った赤い瞳に、目を見開く。

そこには、見ただけで全身の肌が泡立つぐらいの、何かが潜んでいた。

「う…………あ…………」

「さて、店の評価を下げたくなければ…………どうすれば良い？

首輪でもつけて、ペットにでもなれば良いのか？

それとも…………そこのおにーさんと、姦淫でもしてみせようか」

「ひ、ひいいい…………!!わ、悪かった…………!!」

「…………なんだ、そそり立っていたのは態度だけ…………か。

まあ良いや。大丈夫かい、ひよこちゃん」

「ひ…………!!…………ごほん、ま、まあ、取り敢えず。

助けてくれてありがとう。お兄さん」

別に睨み付けたわけではないのだが、一般の人間にとっては刺激が強すぎたらしい。

文字通り尻尾を巻いて逃げて行った男に、溜息を吐いたベリアルは、啞然とした表情を浮かべる派手な男に視線を移す。新宿のネオンが似合う、眩しい男だ。

柔らかな色合いの金糸と、同色の瞳に、落ち着いた色のスーツは良くフィットしていた。

一見派手も感じるが、そのセンスの良い色遣いもあり、明る過ぎない印象を受ける。

ベリアルは視線に、男ははっとしたように目を動かすと、居住まいを正した。

上品な姿勢で下げられた頭と、その後に向けられた笑顔に、様子を窺っていた野次馬が黄色い悲鳴を上げる。

「僕は、伊井冉一二三。この店のホストです」

「……ふうん？」

その瞳の輝きは、シャンデリアのようであった。

光を受けて七色に輝くクリスタルは、確かにうつくしい。

だがそれは、ベリアルが先程見た輝きとは比べ物にならないほど、人工的であった。光に合わせて色を変える職業故か。それとも彼の性質故か。

今此処でその顔を剥ぎ取ってしまおうか、とも考えたが、そこで『制御』が掛かった。

「その顔よりも、さっきの顔の方がタイプだ」

ベリアルは、徐に一二三に顔を近づけると、薄らと赤が残る唇の端を指でなぞる。

いくら造作の良い顔とは言え、至近距離で男の顔を見ることになった彼は、一拍置い

てのけぞった。

「な、なにを……っ!!」

「そうそう、その顔。イイね……オレのサディズムを擦る顔だ」

くつりと低く喉を慣らして、ベリアルは目を細めた。

周囲からの一段と黄色い悲鳴が上がり、無造作に携帯のカメラが向けられていたのだ。

ベリアルとしては、例え目の前の男とのキスシーンだろうが、ラブシーンだろうが、カメラで取られて拡散されようが構う事ではない。だが、その向けられる無数のカメラに、一二三の身体が強張ったのを感じた。

それは、見知らぬ男に触れられていることによる恐怖ではない。そのカメラ自体に向けられた感情であることを、ベリアルは察していた。

「青姦<sup>やがい</sup>でハメ撮り<sup>さっえい</sup>かい?……それならキミたちも混ざると良い。

ふふ……許可を得ていないのはお互い様だろう?」

するりとその赤い瞳をカメラに流したベリアルは、深い笑みを浮かべてそう言った。カメラ越しでも、はつきりとわかるその深い色に人々は一瞬時が止まった。吸い込まれるようなそれは、開けてはいけないうパンドラの箱にでも触れるようで。皆、うつくしさと恐怖が入り混じった感覚に、囚われたのだ。

「さて、これ以上の営業妨害は……無意味だろう。

……また縁があれば、会おう」

「ま、待つて。お兄さん!!これ、僕の名刺……!」

「……受け取っておくよ」

一時的にカメラを止めさせたとはいえ、どんどん集まって来る人々に、引き時を感じたベリアルは、一二三に背を向けた。だが慌てて小走りて寄って来た彼は、ベリアルの服を掴むと、名刺を差し出す。

普段はそのような乱暴ともいえる動作は、少なくともスーツを着ている間はしないのだが、遠ざかりそうになる背中を引き留めたかった。

「こ、今度……是非、お店に来てください。

お、俺……じゃなかった、僕、サービスするので！」  
「……ほう、サービス……ね」

リップサービスでもしてくれるのかな、と再び喉を鳴らして笑ったベリアルは、その長い指を伸ばすと、手入れがなされた一二三の唇に触れると、揶揄うように言った。

そして、思わず目を見開いた一二三に、一瞥をくれると、ベリアルはそのまま去って行ったのである。

「意味が、……違う、だろ」

取り残された一二三は、いくら年上の男だとはいえ、完全にペースを掴まれて振り回された自分に、頭を抱えなくなった。だが、こうしている間にも彼を待つ女性は多い。それに、一連の騒動の詫びもしなければならぬのだ。

一つ息を吐いて、自分を自分へと切り替えた一二三は踵を返して店へと戻って行った。



## 悪魔、降臨せし時⑧

昼夜その光を絶やすことはない、不夜城。

そこは絶えず人に溢れており、華々しい装いをした女性や、スーツ姿の男性、制服姿の少女や少年が、迷宮のような街を行き交っていた。

楽しそうに笑いながら、弾むような足取りで、道を行くものもいれば、沈んだ顔のまゝ重い足取りで、道を帰るものもいる。

それがこの街、新宿。ネオンの光に生き急がされる街だ。

今日は花の金曜日と称される休日前であることもあり、酒気を帯びたサラリーマンたちが、続々と店から出て来る姿が見える。男もまた、その一人であった。

しかし、男の顔は暗く沈んでいるようにも見える。というのも、それもまた仕事の一環であったからだ。まだ勤務中であるといっても、差異はない。

男は酒は嫌いではないが、酒の席が苦手であった。しかし、そうも言っていられないのは、人との付き合いを仕事にしている故の、弊害であろう。

スーツを着た瘦身の男は、店から出ると、気力を振り絞って最後の仕事を行う。

『今後ともよろしくお願いします』と告げたセリフは、実にチープで、リップサービスにもほどがあるものだが、逆に言う、当たり前障りない使い勝手の良い言葉だ。

深々と下げられた頭に、ご満悦といった顔を見せたのは、男の仕事相手であった。

手厚い接待を受けご機嫌なその男は、心の中で立てられた中指と、突き出された舌を、知ることはないだろう。

それを知っていて尚、笑顔を見せられるような、器たの大きな男きではないことは、リサーチ済みである。

営業という仕事は、相手の裏と表、時にはその奥を覗き込むことも求められるのだ。取引相手となる人間のデータは、全て男の頭に入っている。

「……………はあ、」

やっと訪れた解散の時に、伸ばしていた背を丸めた。

思わず今までずっと堪えていた分の、重みのあるため息が零れた。

時刻はもう深夜を過ぎており、人の波は幾分か落ち着いていたが、男にとってはこれもまた日常なのだ。

草木も眠る時間であつても、活動を続ける人間たちで賑わう街に、感覚はもうすつか

り麻痺をしていた。

いつそのこと、このまま仕事に向かつてやろうか、とも自暴自棄にもほどがあることを考えたが、ふと男は明日は久しぶりの休みであることを思い出した。

すると、一気に体の力が抜けるような気がして、軽く頭を振る。

自ら進んで休日出勤するほど、酔狂ではない……答だ。そう強く思った男は、酒の回った頭で、ふらふらと歩き出した。

今日はいつともよりも飲まされたので、視界がちちらと点滅していた。

仕事の酒は断らないのが、この業界の暗黙のルールとされていた。

彼の上司は、昔はもつと酷かったと毎回のようというが、楽しくない席で飲む酒ほど不味いものはない。

そういくら思っても、立場上断れないのだから仕方のない話だ。

「つと、失礼。大丈夫かい？」

判断能力が著しく低下し、視界も安定しない中で、この街を歩ける筈がなかった。

いくら慣れた街とはいえ、不規則に変わる人の波を読むことは不可能である。

どん、と何か固いものにぶつかった衝撃に、男の意識はブラックアウトした。

それは衝撃故のことではなく、偶々そのタイミングで意識を失っただけであつただ。だ。

「酷い顔、しているねおにーさん」

店先には、似たように酒に潰れてぐったりとしているサラリーマンの姿が多くあつたので、道行く人々は、大した関心も寄せずに通り過ぎていく。

ぶつかられた方の男は、ぐたりと動かなくなつた男を支えると、その顔を覗き込んだ。深い隈が浮き立つ顔は、良く良くと見ると端正な造りをしていることがわかる。

血色の悪い肌に、落ち着いた色合いの赤毛が、妙にマッチしているように見えた。

赤毛の男を受け止めた男は、少し考える素振りを見せると、足元に落ちた荷物を持ち上げる。

そして、赤毛の男の体を抱き上げると、人気の少ない路地へと入っていったのである。

「まあ、仕方ない……か」

意識も身元も不明の男を、このまま抱え込んでいるわけにはいかないだろう。

スーツのポケットや通勤鞆を探ると、携帯を失敬する。

パスワードは幸いのに、指紋認証であったことから、ついでに指紋も失敬した。そうして開かれた携帯画面に、まずメール画面を開く。

完全にプライバシーの侵害ではあるが、無防備に倒れた自分を恨んでもらうことにはしよう。

メールの内容から仕事関係以外のメールを探す。

その殆どが、事務的なメールであったが、中には買い物頼むような内容のものも含まれていた。

そしてメールの送信者の名前をタップすると、メールアドレスと電話番号が表示される。

「……イザナミ、ね」

日本神話を彷彿とさせる苗字を呟くと、続いて電話番号をタップする。

そして、通話画面が開かれると呼び出しのコールが始まった。

『はいはい！どうしたの、どっぽちん。』

今日飲み会つしよ？もしかしてお持ち帰りされちゃった？』

時間も時間だというのに、三コール以内に聞こえてきた調子の良い声は、何処かで聞いたような気がした。

何処であつたかと頭を回しつつも、男は現状を説明する為に口を開く。

「なんだ、テイクアウトオツケイだったのかい。早く言ってくれよ」

『……………誰？……………いや、ちよい待ち、その声は、さっきのイケてるおにーさん？』  
「ほう、良く声でわかったね」

『いやアンタのその声、間違える方がおかしいつしよ！』

あ、さっきはマジ助かった!!さんきゅ！

それで、なに、アンタ今、どっぼちんといるの?』

「彼なら隣で寝ているよ」

『う……………ええええ!!うつそ、マジで!?!』

「嘘は言わないさ。それで、そろそろ時間なんだが……………起きないんだよねえ」

『……………い、いや落ち着け俺っち……………』

わ、……………わかった、それで、何処にいんの?』

「ハハハッ、悪いね。あまりにも情熱的な抱擁だったから、連れ込ませてもらったよ。寝取ってしまったかい？」

『ね……っ!!!お、俺と独歩はそんな関係じゃ』

電話越しに慌てふためく男は、どうやら面識があるらしい。

独歩と呼ばれた男と偶々ぶつかり、偶々介抱をした男、ベリアルは静かに笑みを浮かべた。

そうして、思わせぶりの口振りで状況を伝えたのは、電話の向こうの相手の反応を愉しんでいるからであろう。

好みの反応が返って来たことに、更に笑みを深めながら、電話越しの男から家の場所を聞き出す。

「わかった、送り届けてあげる」

『……なあ、アンタってそっちの人？』

「そっち、というの？」

『その……同性でも、オッケーな感じ？』

「ふうん……初心なことを言うね。性的快感に性別などありはしないさ。」

寧ろ構造がわかっているd『あー!!!もう、良いって!!兎に角、どっぼちん連れてきてちよーだい』

「……聞いておいて、切るとは……酷いね」

切られてしまった携帯をしまうと、すっかり寝入っている男を再び抱え上げた。

そして、教えられたルートを辿り、彼らの家へと向かったのである。

\*\*\*

「……はあ、……ちよつと、おにーさん、話盛り過ぎつしよ。

俺つち、めつちやテンパったんだぜ?」

「ほう?……参考までに聞くが、どんな想像をしたんだい?」

「え……つ、そりや、どっぼちんが、おにーさんに美味しく食べられちゃったのかと」

「具体的にだ。もつと詳しく教えてくれよ」

「う、そ……そんなん言えるかよ……」

赤毛の男を送り届けると、出迎えた金髪の男に中へと招かれた。



煌びやかな金糸に同色の瞳は、少し前に助けたあのホストであったのだ。

派手な髪や瞳に埋もれないその整った顔を見て、やっとベリアルは気が付く。

それと同時に金髪の男は、濃厚な酒の匂いを漂わせ、完全に寝落ちている様子の同居人を見て、自分がただ遊ばれていただけということを理解した。

「そいつは観音坂独歩。そして、俺たちは伊弉冉一二三つっ一の。

おにーさん、あのベリアルサンでしょ？」

「ふうん、随分有名なものだねオレも」

「そりや俺っち、伊達にホストやってねーから。

じゃんじゃん情報が入ってくるワケよ」

「……情報、ねえ」

「そそ。ベリさんを新宿でみたーとか、どこどここの通りでみたーとか。

ちよーモテモテよ？」

「ははっ、監視プレイには慣れてるさ」

ベッドに独歩を寝かせると、仕事着から着替えた一二三に晩酌に誘われた。

リビングとして使っている部屋は、生活感のあるものの、きちんと整頓はなされてい

る。

二人は仕事柄あまり家にいることはないらしく、休みが被るのも一年に一回あれば良い程度らしい。

明日はそんな貴重な日であるそうなので、懇意にしている『先生』の所に顔を出すのだと、缶ビールを開けてベリアルに手渡した一二三が笑った。

どうやら、ベリアルという男の存在は随分話題となっているらしい。

一二三が言うには、SNSでも目撃情報が随時流されているようだ。

とんだ珍獣扱いな気もしないではないが、ベリアルは気にした様子はなく、酒を呷る。

「……」

「……もしかして、ベリさんそんなにビール得意じゃない感じ?」

「いや、気にしないでくれ。」

それにしても……仕事の時と、雰囲気が違うね。

オレはそっちの方が好みだ」

「……なーんか、ベリさんに言われると狙われてる感あるわ」

「ははっ、そんなに警戒しないでくれよ。」

オレだって誰彼構わず食い散らかしているわけじゃないさ」

流石ナンバーワンホストの座にいるだけはある。

ベリアルが見せた微かな表情の変化を読み取ったらしい一二三は、軽い口調とは裏腹に、心配げに眉を下げた。

根は素直で優しい男なのだろう。

さり気なく話題を変えたベリアルに、彼はおどけて笑った。

元々食べるという行為を必要とはしない堕天司の体は、一見すれば便利である。

しかし、人間界では、逆に不便に感じる人が多いのだ。

その理由の一つに、『人間の食べ物に対する味覚の欠如』がある。

先天的なものか後天的なものかは、彼のみぞ知ることであるものの、成り代わってしまつた男にとっては、いくら美味しそうに見える料理を口にしても、何も味を感じないというのは、中々に辛いことであつた。

「ねえ、ベリさん……、ホスト、興味ない？」

「……ホスト、ね。興味はあるよ」

「マジ!?……さっきのあの騒動で、新人が逃げちまつて。」

たださえ人不足だつつののに、ほんつとちよー最悪。

なあなあベリさん、興味あるから……助けてくれない？」

「面白そうだね、良いさ。キミを助けてあげよう」

店でも相当量の酒を飲んでいる筈だが、一気にビールを飲み干した一二三は、机に突っ伏した。そして酒の勢いというのも相俟って、ついついそのようなことを口にしてしまったのだ。

ベリアルルの性質がホストに向いていると直感はしていたものの、普段の彼であれば、出会って間もない男に、相談などしていなかったであろう。しかし、この時彼は相当参っていたのである。

一二三の勤める店は新宿でも名の通った店であった。

だが、職業柄人の入れ替わりも激しく、また最近では良いと思える新人がいなかったのである。

興味本位や小遣い稼ぎで入って来るものの、今日のように事件が起きれば直ぐに辞めてしまうのだ。

よって、人手不足となった店は、かつてないほどの危機に陥っていた。

人気店であるが故に、呼び掛けをしなくとも客足は絶えない。

だがそれによって、一人のホストが受け持つ客が増え、大した休憩も取れずオープン

からクローズまで、引つ切り無しに働く羽目になっていたのである。

とはいえ、いきなりホストにならないかと言われて、即答するような人間はいないだろう。そう一二三は、項垂れていたが、返された言葉は、彼の予想と反していた。

てつきり断られるかと思っていた彼は、思いもよらぬ言葉に勢い良く顔を上げる。

「でも、オレを動かすんだ。それなりの報酬はもらおうよ」

「給料は、まあ、店と相談して……」

「おいおい、報酬が金とは言っていないだろう?」

「……じゃあ、」

「それに、キミがオレに依頼をするのなら、キミが払うのが道理。

そう思わないかい?」

一二三を見下ろす、紅玉は深い色を帯びていた。

無意識に息を呑んだ彼は、目の前の男を改めて見る。

漆黒の闇に星を散りばめたような黒髪に、つるりとした紅玉は覗き込みでもしたら、引き摺り墮されそうな妖しさを秘めていた。その時、脳裏を過つたのは、彼が信頼を置く『白衣の男』だ。

あちらを神聖と表すならば、ベリアルは魔性のそれに近いと、なんとなく感じ取っていたのである。

観察するように自分を見る、一二三に、ベリアルはふと口角を上げた。

神聖なる存在でありながらも、堕ちた天使は、祝福もうつくしき堕落もたいた持ち合わせていた。

毒杯どくと祝杯しゅくを両手に掲げ、悪魔ベリアルに魅了された人間たちに、知恵の実を授けるのが彼の愉悦なのだ。そして授けた分の代償はきつちりと回収する。

要するに、ベリアルに願いをすると、高くつくということだ。

「も、もしかして……カラダで払えって!？」

「ははっ、それも良いな。」

「キミのカラダ……オレにくれる?」

「……っ!？」

「ふっ。……冗談さ。安心しなよ」

「な……、なーんだ……って言ってられねえよ

ベリさん、ほんつと洒落になんねえ……」

「なんだ、期待してたのなら「してない!!してないから!」」

愉快そうに細められた瞳を見て、一二三は脱力したように再び机に突っ伏す。

この男は自分の反応を愉しんでいるだけ、であることはわかっていたが、どうも一々乗せられてしまうのだ。

話術を売りに行っている身としては、非常に悔しいが、一枚も二枚も上手であることは間違いなさそうだと、深い溜息を吐いた。

「オレが欲しいのは、情報さ」

「情報？」

「そ、ちよつと探し物をしていてね」

「それなら俺たちにお任せを！」

仕事柄……この街のことは、大体知ってるぜ」

ぱつと目を輝かせた一二三は、そう言って胸を張る。

ホストという職業は、人を相手にする情報ありきの商売だ。彼は店のナンバーワンの座を欲しいままにする男でもあるので、その情報網は幅広い。

「違法マイクを、知っているかい？」

「もち。国に登録してない、ヤバい効果のあるマイクだろ？」

「……その中に、ヒトのマイクを盗み取る効果を持つものがある」

「はあ!?! そんなん、あるのかよ……!?!」

「……そうか。キミも知らない……か。」

「まだ動き出していいようだね」

ヒプノシスマイクを手にした人間は、国の監視下に置かれている。

その為に登録が法律で義務付けられており、勿論破れば罰則が下るのだ。

だが、中には登録をせず私利私欲の為にマイクを用いる人間がおり、彼らが持つマイクを違法マイクと呼んでいた。

違法マイクはその大半が、一二三の言うように『ヤバい効果』を持つものであり、犯罪に用いられることが多い。

一二三もその違法マイクが起こした事件については、度々耳にしていた。

だが、ベリアルが言った、『他人のマイクを盗み取るマイク』というものについては、聞いたことがなかった。

「まあ、そんな話を聞いたら教えてくれ」



「……………わ、かった。」

「な、なあベリさん……………マイクを、盗み取るって」

「ヒプノシスマイクは、その人間の精神を具現化したものだ。」

「普通なら自分以外の人間が触れることは出来ない、がそのマイクを使えば……………簡単に盗めるのさ。」

「そして、盗めるマイクに制限はない」

「……………っ!?!?」

「もし……………マイクが一か所に集中するようなことがあれば、恐ろしいことが起きる」

「そ、……………んな、」

「……………オレは、それを防ぎたい。」

「協力してくれるかい?」

「も、もちろん……………!」

「でも、なんでベリさんがそんなこと……………」

「まあ、そうだね。それについては追々話すよ。」

「……………それでこの話は、キミとオレだけの秘密だ」

「……………!」

「こう見えて、俺はキミを買っているんだ。」

いくらお利口さんでも、口が緩ければ萎えちまう。

それにキミなら、私欲の為に情報売買はしなさそうだし、興味本位で突っ込んで来ないだろう？」

一二三に対して信頼しているように仄めかすベリアルという言葉は、釘を刺す言葉であり、脅しにも近い意味を持っていた。

警察官である銃兎にも、協力者である帝統にも、話さなかったそれを敢えて一二三に言うことで、彼を巻き込んだのだ。

根が素直で、頭の回転も良く、口も堅い。

そんな人間は、基本的に他人の信頼を裏切ることを恐れるきらいがある。

ベリアルはそれを、見抜いていた。

「オレが求める条件は、情報伝達と、それに関する他言無用。

それさえ守ってくれば、手を貸そう」

「……おっけ、交渉成立だ。ベリアルさん」

言っていたことを鵜呑みにするならば、ベリアルという男は、悪い男ではないだろう。

それに、『他人のマイクを奪うマイク』があるのだとすれば、一二三にとつても他人事ではない。

正直に言うと、あの『先生』に聞いてみたい所ではあるが、そんなことをすればベリアルとの約束を破ることになる。

どうしてだか、それは酷く恐ろしいことに思えて、考えただけで彼の肩は震えた。

「そろそろ夜明けが近いね。キミも休んだ方が良い」

「げ。もうこんな時間……！ほんつと休みで良かった……！

そうだ、ベリさんも泊まつてって！

布団もあるからさ」

「そうさせてもらおうかな」

小さな窓から見える紺碧が、朧ながらも橙色に染まり始めた。

慌てて立ち上げた一二三は、ベリアルに向けて笑みを浮かべる。

それに一つ頷くと、ベリアルもまた立ち上がった。

## 悪魔、降臨せし時⑨

伏せていた臉を開ける。

暫く眠っていただけあって、開かれた視界というのは随分久しぶりな気がした。

体を動かすと、ふと視界に映った手に違和感のような懐かしさを感じて、良く良くと自分の体を見る。

「……」

幾分か低い目線に、就職祝いに仕立てたスーツと、愛用の腕時計。

それはあの日に身に着けていたものであった。

視界を染めるオレンジの光に、辺りを見回す。

何処かの廃城だろうか、至る所に瓦礫が散乱し荒れ果てても、尚悠然と立つ残された柱たちを見上げる。

元々は白亜の、立派な柱だったのだろう、荒廃という名の色に染まったそれらは、すっかり時の流れに吞まれていた。

神殿のようにも見えるこの建物を、沈みゆく陽が、退廃的な雰囲気鮮やかに映し出す。

「オハヨウ、やっと目が覚めたようだね」

「……お前、は」

ファンタジーの世界にでも迷い込んだかのような、見たことのないうつくしきに見える入っていると、上の方から声が落とされた。男が声の聞こえた方向を見上げると、そこには見慣れたようでそうではない姿があった。

柱の上に座った男の背中には、蝙蝠を想わせる六つの羽が生えており、黄昏の光を受けて地面に影を描き出している。

そのシルエットは、まさに悪魔というところか。

悪魔の持つ赤の瞳が、観察するかのような色を以て、男を見下げていた。

「ベリアル」

「お目覚めかい、マイ・ダーリン。」

キミは良くやってきているよ、想像以上だ」

「何が、したい？」

「そうがつつくなよ、何せ久しぶりの再会だろう？」

感動的にいこうじゃないか」

「久しぶりだと……？」

「……ああ、そうかい。」

「キミの記憶は……」

甘さを含んだ少し擦れた声と、濡れたような瞳は、男が鏡越しに見るものとは異なっていた。

例えば外身にくたいが同じであっても、中身せいしんが異なるのならば、視線のやり方も仕草も、全て違うものとなる。それがはつきりとわかる瞬間であった。

ベリアルという言葉に眉を顰めつつも、男は彼の表情を注視する。

「まあ、良いさ。そろそろキミと話をしないといけないと思つてね」

「……随分遅い挨拶だな」

「そうカッカしないでくれよ。その身体で感じるのが一番だろ？」

それにオレだって、ナカに入れる相手は選ぶさ」

「お前の中に入ると考えただけで、吐き気がする」

「フフフ……。中々便利なカラダだろう？」

感度良好なうえに、なにより質がイイ」

「ただそう造られているだけだろう」

に、と口角を上げたベリアルが、艶やかに瞳を光らせた。

艶美ともいえるその仕草は、確かに魅力を通り越して毒である。

だがそれに誘われて行きつく先は何とやら。

悪びれる様子無く言われた言葉に、男は溜息を吐いた。

「にしても、ストイックな男だな……。キミは。」

少しぐらい味見をするかと思っただのに、一度も手を出さないなんてね」

「どのことを言っているかは知らないが、俺はお前とは違う」

「……………ふうん？」

揶揄うような言葉を、男は一蹴した。

だが、それに対して意味深な笑みを浮かべたベリアルに、男は違和感を憶える。

「ベリアル？」

「さて、前戯は此処までにしておこうか。

キミを俺のナカに挿れた理由について、話そう」

「下らんことを……。さっさと話せ」

「気が早いなあ、相変わらず。

そんなトコもイイんだが」

「……」

「つれないな。オレとしては、もう少し前戯を愉しむのも「話せ」」

元々の性質なのか、それとも堕ちた影響なのかはわからないが、ベリアルという墮天司に対して、まともに会話をしようとするほど、そのペースに吞まれることはわかってる。

翻弄され攪乱され、いつの間にかベリアルの掌中で踊らされているのだ。

睨むようにベリアルに視線を投げると、彼はその赤い舌を己の唇に這わせた。

「ああ……ぞくぞくするね、やはりキミのその目が一番くる」



「……」

「わかったわかった。よせよその目。」

話どころじゃなくなるだろ」

「さっさとしてくれ」

「焦らしプレイは嫌いかい？」

「ベリアル」

「……！」

男からすれば『いい加減にしろ』と目で訴えただけであるが、放たれた言葉とその瞳にベリアルは動きを止めた。

見開かれた瞳に、ベリアルの驚愕が表れている。

予想外の反応に、男は訝しげにその顔を見ると、逃げるようにベリアルの顔が逸らされた。

「おい、どうした？」

「……なんでもないさ。話を進めよう」

「お前が滞らせてただけだろ」

「キミを招いた理由は、オレがこの世界に干渉する理由でもある」

「つまり、お前の目的の為に俺は巻き込まれたということか」

「そういうことになるね。」

オレとしてもこのやり方は不本意だったけど……」

「……お前の意志ではないと？」

「いくら堕天司といえど、世界を越える力は持たない。」

オレの役割は……此処の世界でも体を張ることさ」

「雇われ、ということか」

「全く嫌になるけど、今回の条件は悪くなかったからね」

「条件……?」

「さあて、それは今は内緒にしておこう。」

どうしても知りたいというんなら「いや、良い。それより目的について話してもらおう」

直ぐに調子を取り戻したベリアルは、男を呼んだ理由について話始める。

世界を越えることの出来る力を持った雇い主からの、命令らしいが、どうも曖昧だ。

ワザと暈しているのかと、問い詰めようとしたが、取り敢えず話を先に進めることを

優先させることにした。

「この世界で『違法マイク』と呼ばれるものが流行っていてね。

殆どが取るに足らない小物だが、その中の『七つ』にヤバいものが含まれている」

「違法マイクは話に聞いていたが……。

その七つというのは？」

「此方の世界から無断で持ち出されたもので、悪魔憑きの道具さ」

「……何故それを、お前が？」

「こつちも色々あるんだ。

別にオレじゃなくても良いのに、全くヒト使いの荒い連中だよ」

「お前はヒトではないだろう」

「フフフ……。七つの大罪を知っているかい？」

「……」

「人間の悪を分類したものと思ってくれば良いさ。

負の感情を七つに分けて、戒めとして封じたもの。

それぞれ象徴とする悪魔がいてね。

守護者によって、封じられていた筈なんだけど……。

「どうやら逃げ出したらしい。しかも厄介なことに、異世界に」

「如何にも。厄介なことにこの世界は、キミも知つての通り、力ではなく精神がものを言う世界だ。」

悪魔には居心地の良い世界だね。ヒプノシスマイクに寄生した悪魔たちが、好き勝手人間を操っているってわけさ」

ベリアルの世界で封じられていた悪魔たちが、此方の世界に逃げ出した。

それらの回収を命じられた為に、彼は此方の世界に干渉している……。というのが事のあらましであるようだ。

その悪魔というのは、七つの大罪に対応するものらしい。

とある書物通りだとすれば、〃人間を罪に導く可能性がある」と見做されてきた欲望や感情のことを指す〃ものが七つの大罪とされ、『傲慢、憤怒、嫉妬、怠惰、強欲、暴食、色欲』に分けられている。

まさにファンタジーといえる内容のベリアルの言葉に、男は小さく息を吐いた。

「それでオレが回収役として、来たというワケさ。」

だが、回収方法が難しくてね。

オレの世界なら、文字通り殺してでも奪い取れるんだが……。

何せ別世界だ。当然ながら理も、神々も管理人違う」

「他所の世界で、簡単に暴れられないと?」

「下手すればこつちがやられちまう。」

凌辱には慣れていますが、存在すら消されるのは、いくらオレでも御免だ」

「だから、俺を利用したのか?」

「悪魔に憑かれているかはわかってても、悪魔を引き離すことが出来なければ意味がない。

だが、オレが人間の心というものがわからなくてね」

「……」

「そこで、死にかけていたキミを引っ張って来たというワケさ」

「俺のような普通の人間を取り込んだところで、役には立たないだろう」

「おいおい、そう謙遜するなつて。」

キミは『本質を捉える目と嗅覚』を持っている。

それを使わずに死ぬなんて、勿体ないだろう?」

確かに、非現実的すぎる言葉たちを受け入れるには『経験』が必要であつただろう。

あの日死を味わってから、現実離れの連続であった男には、もはや抵抗はなくなっていた。

「それで、俺にどうしろと？」

「いいねえ、従順なところもそそられる。

キミの役目は至極簡単なことだ。

オレが見つつけ出した悪魔憑きを、キミが口説き落とせば良いだけ。

後の処理はオレがやるさ」

「……それを、俺にやれと？」

「方法は一任しようじゃないか。

なんなら口だけじゃなく、カラダも使ってもらって構わないぜ」

「面倒だ」

「ああ、そういえばキミってヴァー「黙れ」

強制的に関与させられた今、自分に拒否権などはないことはわかっていた。

しかし、この悪魔相手に、言われるがままではいられない。

このベリアルという悪魔は、一言でいえば底なし沼だ。

言動は変態的だが、その裏に潜むのは情け容赦ない闇である。

『人の心がわからない』という言葉の通り、彼は他者に対する情を持たない。

あるのは、目的を遂行する為に、如何に己を満たせるか、それだけである。

いくら死んだ身だとはいえ男は、自分の尊厳すら投げ捨てて、この悪魔に付き合う気はなかった。

男は目を鋭くしてベリアルを睨むが、当の本人は更に笑みを深めるだけだ。

「目的を果たした後は、どうなる？」

「ああちゃんと、導いてやるさ。」

そこは安心してくれて構わない」

「……悪魔おまえの言葉を信用しろと？」

「酷いなあ。こう見えて約束は守るタイプなんだぜ」

「まず自分の顔を見てから言え」

膝を立てて柱に腰掛ける悪魔にそう吐き捨てると、不意にぐらりと頭が回る感覚に襲われた。

ちかちかと点滅を始めた視界に、身体が揺れる。

男の様子を見たベリアルが、そろそろ時間のようだ、と呟いた。

それを問い返す間はなかった。力が抜けていく体が崩れ落ちるのを感じた時はもう、  
瞼が閉じられていたのだ。

そのまま意識を失った男は、柱の上にはいたベリアルが降り立ち、あろうことか男の崩れ落ちる体を支えたことなど知る由もなかったのである。

「これでキミとオレは一、心同体であり、一蓮托生だ。

墮天司に魅入られたが最後、キミはもう楽園へと還れないのさ」

低く喉を鳴らした悪魔は、意識を失った男にその顔を近付ける。

「共に墮ちようじゃないか。

さあ……失楽園を、始めよう」

高らかな哄笑が、荒廃に沈んだ神殿に響く。

悦に浸るような悪魔的表情を浮かべたベリアルは、男を抱えたまま背中  
の翼を羽搏かせた。



\*\*\*

再び訪れた覚醒と同時に、疲労感に襲われる。

最悪の目覚めといっても過言ではないかもしれない。

好き勝手しやがって、とあの造作だけは完璧な顔を殴っておけば良かった。なんて物騒な思考が頭を過った。

朝焼けと共に眠りに就いたので、時刻は朝と昼の間ぐらいだろう。

睡眠を必要としない体であるために、肉体的な疲労はなく、身体を起こすのは容易であつた。

こういうところは、便利な体である。

「……」

「っ、！」

態々短時間の睡眠の為に布団を用意してもらうのも、気が引けたので、結局ソファアを借りた。

一二三が選んだというソファは、彼らしく洒落た色をしていて、柔らかい。体を起こした男は、ソファに腰掛けて髪を軽く整えていると、何か視線のようなものを感じる。

そちらに顔を向けると、赤髪の痩身の男の疲れた目と視線が交差した。

驚いたように見開かれた瞳に、その男が昨日ベリアルが珍しく拾った男だということを思い出す。

「気分はどうだい、おニイさん」

「えっ、あ……、頭が痛いぐらいで……」

「そう、ならもう少し休んでいると良い。」

「二日酔いに効くものを作つてあげよう」

「あ、あ、あの……！す、すみません……貴方は？」

「あれだけ酔つていれば記憶にない、か」

疲労の滲む顔に、男が思わずそう声を掛けると、戸惑つたような表情が返つて来る。

疲れが溜まっていたところに酒を入れたからであろうが、ベリアルにぶつかり、そのまま意識を飛ばすぐらいだ。

記憶が曖昧でもおかしくはないだろう。

そう思つて、男が口を開こうとした途端嫌な予感が走り、一度口を閉ざした。

「まあそう警戒しないでくれ。昨日カラダを委ねた仲だろうか？」

「……は？」

「記憶にないかもしれないが、キミから凭さそつてれて来たんだぜ」

「ちよ、ちよつ、と待て！……俺、もしかして……」

「ははっ、中々刺激的な一夜だったよ」

艶やかに吊り上げられた唇は、良からぬことを想像させるには充分であつた。

絶句といった様子で口を開けたその男に、ベリアルは低く喉を鳴らす。

疲れと酒の抜けきれない頭は、処理能力が遅くなっているのか、赤毛の男が慌てふためくまで、少々時間を要した。

慌てて視線を彷徨わせる男に、ベリアルが再び口を開こうとすると、微かな足音と共に煌びやかな金髪が姿を現したのだ。

「おっはー、あれ？どつたの、独歩ちゃん？」

「ひつ、ひふみ……！どうしよう、俺……。とんでもないことを……！！

慰謝料いや、賠償金、ああ俺もう逮捕されてくる……」

「わっ、落ち着けよ！あーもう……ペリさん！

独歩ちゃんイジメたでしょ！」

「そんな愉しいことはしてないさ。

昨日のことを話したただだよ」

「ほんとにいい？」

「お、俺……！ちゃんと、責任取りますから……！」

「ほう？」

「あ、あの……名前は」

「……ベリアルと呼んでくれて構わないよ」

「べ、ベリアルさん！俺、ベリアルさんに嫁ぎま」はーい、独歩ちゃんそこまで。このおにー

さんにそんなコト言ったら、最後よ？」

「オレは構わないけどね」

「俺つちが構うの！全く、独歩ちゃん意外と純情なんだから、あまり揶揄わないでちよーだ

」

眉を下げて動揺を見せる赤毛の男を、一二三は手慣れた様子で宥める。

そして大体のことを察したのか、呆れた表情でベリアルを見た。

肩を竦めたベリアルは、残念だと呟くと、再び赤毛の男へと視線を移す。

「嘘は言っていないさ」

「はあ……。独歩ちん。」

昨日飲み会だつて言つてただろう？

何処まで記憶があるかわからないけど、

泥酔した独歩ちんが、ぶつかつたのがこのおにーさん。

そのまま気を失つた独歩ちんを連れて来てくれたつてわけ」

「あああ……。俺なんてご迷惑を、す、すみません……。…」

「ほんとぶつかる相手は選ばなきやダメ。」

俺っちも、手遅れかと思つてた」

「お前には言つてないだろ！」

それに、ベリアルさんは俺の恩人だぞ……。!?

あんまり失礼なことを言うなよ」

「……。恩人、ねえ。独歩ちん純情過ぎない？」

いくら日本とはいえ、新宿はあらゆる人間が集まる街だ。路上で無防備に倒れた人間を助けようとする者もいれば、助けるフリをして悪さをする者もいるだろう。

顔を青くした独歩に、何とも言えない顔をした一二三。

二人の反応を見て、ベリアルは目を光らせた。

「何ともなくて良かったよ、独歩クン。

今にも死にそうな顔をしていたからね。心配だったんだ」

「そ、そんな心配なんて、俺には勿体ないです」

「いいや、キミの顔を見ればわかるさ」

「ひえ……つべ、ベリアルさんそんな近いです！」

少し肌は荒れているが、その表情は実にベリアルの好むものである。

遠慮なしに近づいたベリアルは、疲れと焦燥が浮かび陰鬱さを感じさせる瞳を覗き込む。

上手く隠されているが、仄かにかおる狂気の気配に思わず唇が緩んだ。

その表情をどう捉えたのか、独歩は体を強張らせたが、引き付けられるかのようにベリアルベリアルの赤い瞳に見入る。

「……………そうか、キミが」

ぽつりと呟かれた言葉に、一二三の眉が動く。  
ベリアルは体を離すと、再び独歩に向き直った。

「独歩ちゃん、シャワー浴びてくれば？」

昨日酔い潰れてそのまんまだろ？」

「あ、ああ……………そういえば」

「ほらほら、さっさと行った行った」

その間に昼食用意するから……………な、ベリさん」

「何なら一緒に浴びようか？」

「え……………いい、いいん」ベリさん、アンタはさっさとこつちだ」

一二三に腕を引つ張られ、強制的にキッチンの方へと連れて行かれるベリアルを、独

歩はぼんやりと見つめる。

ベリアルルの纏うその雰囲気、いやに馴染むような、心地好きを感じたのだ。

自分を見つめるその視線に気が付いていたベリアルルは、含むような目で、視線を返す。絡み合うようなその瞳に、はつとした表情を見せた独歩は、慌てて浴室へと向かった。

「それで、独歩ちゃんがどうかした？」

「……ああ。気付いていたかい」

「とーぜん。ナンバーワンホストを舐めたら痛い目に合うぜ」

「今朝の話、憶えているだろ？」

彼……大分摩耗しているようだけど」

「そりゃ、独歩ちゃんの仕事がハードだから……」

「いや、それだけじゃない。」

彼……。植え付けられているね」

「……詳しく、教えてくれ。ベリさん」

明るい色の瞳が真剣なものに切り替わる。

一二三は、ベリアルルの言葉に思い当たることがあった。



少し前から、独歩の体調と精神が安定していなかったのだ。

不眠症に食欲不振、増えた独り言に、涙み始めたその瞳。

見ているだけでも痛々しいものだが、一二三がいくら言っても、独歩は病院にも行くことしなかった。

最も信頼する幼馴染である彼は、一二三にとって家族同然の存在である。

彼以上に彼を心配した一二三は、やっと今日予定を合わせて、最も信頼する医師である寂雷のもとへ行くという約束を取り付けることに成功したのだ。

一二三の頼みに、ベリアルは考える素振りを見せた。

「今日、寂雷のもとへ連れて行くんだらう？」

「……そうだけど。」

あれ、ベリさん、せんせーのこと知っていたの？」

「対戦相手のことぐらいは、憶えているさ」

「あ！そつか……そーいうことね」

「取り敢えず、彼に診てもらおうと良い」

「えー。ベリさん何か知ってんだらう？」

「オレは医者ではないからね」

緩やかに笑みを浮かべたベリアルに、一二三は唇を尖らせる。

だが、ベリアルはそれ以上その話題に触れることはしなかった。

焦れた一二三が、もう一度問いかけようとしたのだが、間の悪いことに独歩がシャワーを浴びて出て来てしまったため、彼もまた口を噤むことになる。

「ねえベリさん。せんせーの話聞き終わったら、話してくれる？」

「……良いよ。その代わり寂雷が何て言ったか、教えてくれるかい」  
「わかった」

視線を交わさずになされた密約に、男は心の中で溜息を零す。

ベリアルという悪魔は全貌を明かさなかったが、これは随分長い任務となるであろうことだけは、男にもわかった。

ふと視界に入った林檎を手にする。

真つ赤に熟れたその実は、何処かベリアルの瞳を彷彿とさせた。

## 悪魔、降臨せし時⑩

しとしとと落ちていく雨粒が、天から零れおちていく。

分厚い雲によって月が隠され、濡れた夜の街は一層にネオンの光を引き立たせていた。

光の乱反射<sup>マジック</sup>によって彩られた街を見下ろすことに出来る、とあるビルの屋上に立ったベリアルは、傘も差さずにただ天を仰いだ。

「雨やまぬ 軒の玉水 かずしらず 恋しきことの まさるころかな」

ぱしやり、とコンクリートで固められた床に溜まった水を、弾くような音が雨音の間から響く。

それでもベリアルは振り向く素振りは見せなかった。

くすりと微笑む声が聞こえたかと思うと、そんなベリアルの視界の端に紫色が映る。骨数が多いそれは、和傘と呼ばれるものであろう。

上品な紫色に優美な柄が飾られたそれに隠され、相手の顔は見えない。

「良い月夜ですね。実にあなたが降り立つに相應しい夜だ。

ねえ……天使さん」

その男の纏う袴と着物が、夜風に靡き優雅に広がる。

くるりと傘が悪戯に回されたかと思うと、花卉のように香のかおりが散った。

口元だけを覗かせた男にベリアルが視線を移すと、再び軽やかな笑い声が一つ落とされた。

「申し遅れました。小生は有栖川帝統というしがないギャンブラーです」

「へえ、有栖川帝統は家で留守番しているはずだけど」

「……あなたが、彼の飼い主でしたか。」

「これは失礼。知らなかったものですから」

「そう。それで、何か用があるんだろう？」

「実は、僕、あなたの熱狂的ファンなんです。」

「このような場所に、あなたの姿があったものですから、つつい付いて来てしまいました」

視界を過る雨、視界を遮る傘。

だが、ベリアルベリアルの赤い瞳は、その向こうを見通していた。

紡がれる物腰柔らかな言葉も、伽藍洞伽藍洞な声では台無しである。

「キミの名を聞いても意味はないようだね、偽フェイりの姫君カミ」

「……さあ、てね。妾にはわからぬ話で御座います」

「浅いようで深く、深いようで浅い。まさにマヤカシの男だ。」

キミのことは、子犬ちゃんから聞いているよ」

「あれは、口が本当に軽い男……。」

ただの単細胞であります故、ゆめゆめ騙されぬようにご注意を」

「ははっ……違ちがうさ。」

あれは、ただ飢えているだけ」

「……と言いいますと？」

「嘘うその裏側は、真実とは限らない。」

でも、嘘吐ウソきと嘘吐ウソきが相対した時、もしかしたら、そこに微かにでも真実まことを見るこ  
とができるかもしれない」

「要は、いつものギャンブルというわけか」

「蜃気楼同士、いつまでも目を凝らしている意味はないだろう。」

「どうだい。オレとおしゃべりをしないか、夢野幻太郎<sup>バク</sup>」

「良いでしょう。その代わり、一つ条件があります」

静かに後ろへと下げられた傘と共に露わたなった、その男の顔。

緑を帯びた瞳は、行燈の中で揺れる炎を想わせる幽玄さが宿っていた。

ネオンの光を反しても尚、品を損なうことはないそれが、ベリアルを見上げる。

実は、お互いに帝統からお互いの話を聞いたことがある関係であったのだ。

帝統は、ベリアルには幻太郎のことを『言っていることは曖昧だが憎めない友人』と説明し、幻太郎にはベリアルのことを『腹の中は良くわからないが付いていきたくなくなる』と説明していたのである。

幻太郎は、何となく話を聞いているうちに、そのベリアルという男を想像するようになっていた。

ミステリアスでいて、相手を惑わすことに長けている。時には真実を嘘に変え、嘘を真実に変える、悪魔のような男を主人公に置いて、物語を書き出そうとしていたところであったので、更に興を惹かれたというわけだ。

結果的に言うと、幻太郎の行動は当たりであった。

偶然視界に飛び込んで来た男を見たとき、彼はその男がベリアルであることを直感していた。

何故ならば、幻太郎の思い描いた通りの男であったからである。

そこに存在しているだけで、引き寄せられてしまふ、何かが男にはあった。

自分の行動がまるで、火に群がる虫のようであったことは自覚していたが、そうせざる負えない何かがあったのだ。

「あなたを、題材に書かせてもらいたい」

「……それは面白いね。だけど」

「だけど、なんです?」

「オレのモデル料は、高いよ?」

闇の中に浮き立つ肌に、ペタリと張り付いた漆黒の髪を掻き上げて、ベリアルは笑った。

その仕草一つ一つに幻太郎のインスピレーションが刺激され、自然と脳内に嬾やかな文章として形作られる。なんとも執筆欲の擦られる男に、彼は喉を鳴らした。

「俺に支払えるものならば、喜んで払おう」

「フフフ……。交渉成立だ」

不意に濡れた手が、幻太郎へと伸ばされる。

正直彼は、あまり人に触られることを好んではいなかった。

その行為はまるで、自分の塗り固めた世界を壊そうとしているようで。

己の奥深くに閉じ込めた、夢野幻太郎 真実を守るために、例えば友好の証としてのものであったと

しても、それを拒んでいた。

久しぶりに感じた、他人の肌は氷のように冷え切っていた。

だが、幻太郎にはそれがとても心地の良い温度に感じられて、頬に宛てられた手に

そつと自分の手を重ねたのであった。

\*\*\*

「そんで、にいちちゃんに付き纏っているわけか」

「そんな野蛮なことを、余がするわけないであります。」



小生はただ、かの人の行動を観察して記録し、よりリアルに書き上げようとしているだけ」

「あのなあ、それをストーカーっていうんだぜ」

「それに、小生に興味を持たせたのは君ですよ。」

今更接近禁止令だなんて、随分身勝手ですね」

「……あー。確かにすっげー後悔してる」

頭を抱えた帝統を、温かくも冷たい目で見た幻太郎は、あの日からずっとベリアルと共に行動していた。

ベリアル自身は何も言わなかったが、ふらりと幻太郎を巻いて何処かに行ってしまう時がある。

今もこうして置いて行かれた幻太郎は、いつも通りに振舞いながらも、不機嫌さが見え隠れしていた。

幻太郎が、ベリアルについてわかっていているのは、このヘブンツリーを裏で牛耳っているという事だけ。それ以上を知ろうとしても、中々尻尾を出してはくれない。

それに何よりも、彼が驚いたのは、帝統といういい加減なギャンブラーが忠犬のよう

なんの真意が潜んでいるのか、本人も理解していないままに、このヘブンツリーで働いているというのだ。

いい加減ながらも、警戒心が人一倍強く根無し草を好む帝統という男の、根底をひっくり返すような行動に、幻太郎はただ驚愕した。

そして同時に、ベリアルベリアルの裏を見ようとしないう帝統に呆れもしたのだ。

「君はいつまで、彼の掌の上にいるおつもりですか？」

「……その話はもう良いだろ」

「いいえ。だって、疑問に思いませんか？」

あの男ひとが何を目的に動き回っているのか」

「そりゃ、俺だつて気になるさ。正直知りたくて堪んねえ。

だけだよ……。それを知ったら、俺は」

珍しく尻窄みに言葉を発した帝統は、そこで言葉を切った。

彼には、それだけ恐れていることがあつたのだ。

「なら表舞台には、私が立つ。

……君は、協力をしてくれるだけで良い。これならどう？」

「……」

「君は、彼を裏切るわけではない。」

ただこの私に、唆された。それだけ。

中々良いシナリオでしょう？」

幻太郎は、ベリアルという理想の『主人公』を知り尽くそうとしていた。

その行動は全て、己の書く小説のためであり、その胸に抱えるもののためであった。

月がその姿を変えるように、道化を演じる彼が、珍しく感情を露わにしているのを見て、帝統は口を噤んだ。

「パンドラの箱の中身は、災いだけとは限らない」

帝統の心を見透かすように、幻太郎は言葉を綴る。

低く呟かれたそれは、重く帝統の心を擽ったのであった。

\*\*\*

白と黒に彩られた盤上は、静かな戦場のよう、何処か神聖で高潔な雰囲気、漂わせていた。

猛々しい馬を模った騎士ナイトが歩兵ポーンを打ち砕き、不動なる王キングを守る王女クイーンが狡猾なる司教ビショップに鉄槌を下す。

戦場を俯瞰する、蒼翠にしよくの双眸の色味が目まぐるしく変わるのを、赤が愉快そうに見つめていた。

底の见えない腹を読み、駒を展開する。

しかし、何十もの先を読んだ定跡セオリーは、いとも簡単に崩され、最善の一手が最悪の一手に覆る。

足掻けば足掻くほど、弄ばれる焦燥感と苛立ちが、未熟なポーカーフェイスに表れていた。

「フフフ……」

どうしたんだい、坊や。手が震えているじゃないか」

「……っ!!う、うるさいです……!」

「まあ、気楽に考えなよ。」

今回の戯れに、制限時間はないんだからさ」

柔らかな日差しに照らされる、殺伐とした戦場。チエスボード

喫茶店の窓際の席で繰り広げられるそれは、ベリアルからすれば戯れに過ぎないが、三郎からすれば決戦にも等しかった——。

三郎が、テーブルに頬杖を付いてあでやかに笑うこの男と出会ったのは、本当に偶然のことだ。

偶々学校が午前中までしかなくて、偶々立ち寄ったヘブンツリー内のゲームセンターで遊んでいたところ、偶々見慣れた姿を見つけた。

透けるような白い肌に、すらりとした長身の、浮世離れをした雰囲気纏うベリアルを見つけることはとても容易かったのである。

「兄さん……!」

「ああ、キミか。奇遇だね」

「は、はい、本当に……」

「丁度良かった。実は時間を持って余しているんだ。

良かったら、オレと遊ばない？」

「是非！」

「フフフ……。」

「じゃあ、何をして遊ぼうか」

「僕は、なんでも……。その、ベリ兄と一緒に遊べるなんて、それだけで……」

「そう。いいコだね。」

だが、オレの暇潰しに付き合わせる以上、キミの要望も聞かないとフェアじゃないだろう？

「……それとも、そんなにオレと突き合いたい？」

「っ、……!!」

「ぼ、ボードゲームか、カードゲーム……が、良い、です」

三郎は、慌ててゲームを終了させると、人混みを掻き分けて声を掛けた。

だが、ベリアルに驚きの表情は見当たらなかった。

突然の出会いである筈なのに、相変わらずのしつとりとした微笑みを浮かべ、三郎をゲームに誘ったのだ。

一番好きなゲームを三郎に通ったベリアルは、彼がボードゲームやカードゲームを好むことを知るや否や、場所を移すことを提案したのである。

そして、三郎が連れて来られたのは、違う階層にあるこの喫茶店だ。

どうやらその店はベリアルの行き付けらしく、入店と同時に一番奥の席へと通された。

ベリアルが何か合図をすると、上品な制服に身を包んだ一人の女性が、チェスボードを手にとって来て、慣れた手付きでテーブルの上にそれを広げたのであった。

大理石とオニキスで作られているという、うつくしいチェス盤と駒は、やけにベリアルという男に似合っていて、駒を片手に推考するその姿に、思わず見入ってしまう。

尊敬する兄である一郎とも、一郎と良くつるんでいる青年とも、異なる『色』を持つ男を、三郎は密かに慕っていたのだ。それは、もう一人の兄である次郎が、一郎に抱いている心酔あこがれにも類似しているのかもしれない。

「チェス、ですか」

「おや、嫌いかい？」

「いえ……。得意です。」

ただ周りにやる人がいなくなつて。

人と勝負するのは、初めてなので」

「キミのハジメテをもらえると、光栄だね。

まあ、今日はのんびりやろうよ。

時間制限なんて、野暮なものは抜きにしてさ」

あの兄たちの背中を見て育ったからか、物心付く頃には『神童』の名を背負っていた三郎は、常に対等な相手に飢えていた。勉強のみならず、頭脳プレーが必要となる遊ゲームびでも、彼に並ぶものはいなかったのである。何となく憶えたチェスも、その一つだ。

テレビや携帯で出来るゲームが溢れるこのご時世、三郎の年齢でチェスや将棋といった類のゲームに手を伸ばす子供はそう多くない。だからこそ、駒を進めれば進めるほど、三郎の胸は歓喜に満ちていったのだ。

しかし、ある程度を過ぎると、その歓喜に悔しさが滲み始めたが、それがまた堪らなかつた。

「そういえば、オニーサンは元気？」

「……」



駒を片手に問われるも、次の手を考えることに精一杯な頭は上手く回らない。

いつもならば、横から話しかけられようが、電話が掛かって来ようが、何れにも支障を来すことなく対応出来た。しかし、その性格を反映するかのようなベリアルの指す手が、あまりにも容赦なく三郎の読みを打ち砕くので、次第に自信が失われていき、自らの思考にすら疑心暗鬼が生じていたのだ。

そのため、時に初歩的な、時に高等な手を織り合わせながら、繰り出していくベリアルに、付いていくのが精一杯となっていた。

聞き逃しかけた、その言葉を懸命に咀嚼した三郎は、ふと顔色を変えた。

ベリアルからすれば未熟ではあるものの、兄二人ほど感情の機微を表に出さない三郎のポーカーフォイスが、完全に剥がれ落ちた瞬間であった。まだ少し幼さの残る、整った顔が歪んだかと思うと、宝石をはめ込んだような瞳に、悲痛ともいえる色が浮かぶ。

「……いち兄、最近様子がおかしくて」

「ふうん？」

「いつも、なんか苛立っているというか……」

僕たちに当たることはないんです。

でも、喧嘩して来ることが増えて、体中傷だらけで帰って来ることが多くて」

水面に落ちた一粒の雫は、三郎の心を巢食う片鱗であったのかもしれない。

手元に並ぶ駒の中から、艶やかなオニキスの丸みがうつくしいそれを手にしたベリアルは、静かに微笑む。

それを俯いてしまった三郎が目にすることはなかったが、盤の守り人たちには、きつと見えていただろう。

天使と呼ぶにはあまりにも邪悪で、悪魔と呼ぶにはあまりにも高潔な、ベリアルの表情を。

三郎が再び顔を上げたとき、ベリアルは手にしていた駒に口付けてみせると、最強の前に、最弱を置いた。

チェックメイトと口遊んだ唇に、つるりとした紅玉が三郎を捉える。

「前戯は此処までにしておこうか」

吸い込まれる、なんて生易しいものではない。

呑み込まれる、ほどに圧倒されるベリアルの瞳に、三郎は呼吸すら忘れた。

## 悪魔、降臨せし時①

机上に散らばる薄い紙に、姿勢を正して並ぶ文字たちに気付いたのは偶然のことであつた。

『其の方は、体に血が滴るような薔薇そうびを飾り、心に赤椿を咲かせていた。

その顔には白椿が彩られ、蠱惑的な視線で、いとも簡単に人を傀儡と化させるのだ』  
無機質な赤い瞳が文章をなぞつたかと思うと、やれやれというようにその男は肩を竦めた。

「派手に飾り立てた文章だ」

自然に唇から零れ落ちた溜息と共に、部屋の奥に佇む鏡へと視線を向ける。すると、薄暗い部屋にぼんやりと浮き上がる、妖麗なる男と目が合った。しつとりとした顔立ちに添えられた、艶やかな口元が笑みを描く。

「オイオイ、そんなに見つめられたら即イキしまうぜ。ダーリン」

「お前……。喋らなければ、ほんと芸術品かんげきだな」

「フフフ……。そう造られているからね」

「……。花言葉を、知っているか？」

「花は愛であるものであり、蜜を滴らせるものだ。

甘やかな悲鳴ききょうせいは聞いたことがあるが、言葉はないな」

「赤椿は『心のままの美しさ』、白椿は『完全あるいは理想』、薔薇は『美と愛』だ。

……。夢野幻太郎、だったか。中々に鋭いぞ」

「面白いじゃないか。

ああいう人間は、タイプさ」

「この本は、悪魔の書になりそうだな。

宗教画でも見ている気分だ」

姿見に映し出されたベリアルが、男とは異なる表情と口の動きを見せる。

薄笑いを湛え、奥深い瞳を愉快そうに細めるベリアルに、男は呆れた。

ベリアルの目的は、この前に聞いたが、その本質はまだ明かされていないのだ。

この愉快犯にとつてのハッピーエンドは何なのか、男は知らない。

違法マイクというものを回収して、その後どうするのかも、わからない。

だが、その不明瞭な点を詰問しようとするほど、男に興味があるわけではなかった。

この先がどうなるうとも、男が死んだという真実は覆らない。

覆りたいかと問われれば、男は即座に首を横に振るだろう。

男にとつて、今この時は猶<sup>モラトリアム</sup>予なのだ。

それ以上でもそれ以下でもなかった。

「それで、これから俺に仕事をしろと?」

「良くわかつているじゃないか。」

「流石オレと一つになっているだけあるな」

「……」

「待った、その視線……最高だぜ。」

「もつとこう蔑んでくれたって構わないよ」

「そのような趣味はない」

「ふうん。どうやら随分……戻って来ているようだ」

「何を、言っている?」

「フフフ……」

それは、また後でのお楽しみさ。

キミはあのサラリーマンと坊やに接触してくれ。

前から言っているが、手段は問わない」

「独歩クンと、一郎クンだろう。」

あの二人が持っているってことか」

「尋問でも、拷問でもお好きにどうぞ。」

オレとしては快樂漬けをおススメするよ。

イキ狂わせて従順にしてやれば、後はオレがやる。

Parade's Lustを共に開こうじゃないか」

「……趣味ではない」

「そうかい？キミも中々に好きモノだと思っただけだね」

男と対照的な表情を見せる、鏡に映った悪魔は飄々とした姿勢を崩さない。

ベリアルがワザとらしく肩を竦めたのを横目で見た男であったが、不意になんとも淑やかな足音が耳を打ったのに、視線を扉へと向ける。

すると一拍置いて開かれた扉から、ひらりと小袖が覗いたかと思うと、月を思わせる色をした男が中へと入って来た。

さり気なく鏡に視線を戻すと、そこには全く同じ表情をした男が映っているだけで

あった。

「あれ？どなたかと話してらしたのでは？」

「ああ、聞こえてしまったかい」

「お取込み中でしたか、これは失礼」

「夜中に男がスることなんて、限られているだろう？」

「存じませぬね。小生に教えて下さいますか？」

「いくらオレでも、好んで空蟬を抱く趣味はないさ」

「意外なことをおっしゃる。この私では、相手になりませぬか？」

軽やかな微笑を浮かべ、ベリアルスの腕に白い指先を這わせた幻太郎は、真上にある赤い瞳を見上げた。

何処か優美さを感じさせる視線遣いであるが、瞳の奥に見え隠れする色に気付かない筈がなかった。

部屋の一角を占拠した彼は、ベリアルスの一挙一動を観察し、記録するように机に広げた原稿用紙に筆を走らせるのだ。

先ほどの一文も、そこから抜粋したものであるが、殆どが没となってしまうていた。

「キミの目には、オレがこう見えるのか」

「ええ、ですがまだ足らぬのです。」

貴方を表現するだけの、言葉が、足りない」

「知的好奇心を満たすことは、一種の自慰行為さ。」

けど、それが満たされないことは、イきたくともイけないということ。

さぞ……辛いだろうね」

言葉では同情的なようにも見えるが、その顔には嘲笑にも似た表情が在った。

「ええ、その通り。小生は今、とても苦しんでいるのですよ」

「……好奇心は猫を殺すって知っているだろう」

嘘と真実を絶妙にブレンドし、飾り立てた言葉を贈り合う二人の間に流れる空気は、それほど悪くはなかった。

それは、即興曲を奏で合うが如く交わす物語を、互いに楽しんでるからであろう。

柔らかく微笑んだ幻太郎は、手にしていたとあるものを、ベリアルへと差し出す。



白い指先が支える濃緑の茎の、その先にはぼつてりとした大輪の赤が咲いていた。

「見ていると、ぼたり赤い奴が水の上に落ちた。

静かな春に動いたものはただこの一輪である。

しばらくするとまたぼたり落ちた。あの花は決して散らない。

崩れるよりも、かたまつたまま枝を離れる。

枝を離れるときは一度に離れるから、未練のないように見えるが、落ちてもかたまつているところは、何となく毒々しい。

またぼたり落ちる。ああやって落ちていっているうちに、池の水が赤くなるだろうと考えた」

柔<sup>ベ</sup>らかで暖<sup>ル</sup>かみのある声<sup>ト</sup>質<sup>ホ</sup>が紡<sup>イ</sup>いだのは、夏目漱石の『草枕』の一節であった。

幻太郎は、静かに目を伏せると静かに笑む。

闇に浮き立つような青白い肌と、目の前の男が纏う雰囲気、やはりその花は良く似合っていた。

ベリアル<sup>ル</sup>の瞳越<sup>ベツ</sup>しに、その赤を見た男の脳裏に、たった一瞬何かの映像が流れた。

それが何かを考えるまでもなく消失してしまったそれに、男は心の中で眉を顰める。

「その花は、落ちる時にばさりという音がするんです。

花弁を散らすことなく落ちるその姿が、首が落ちることを連想させる。

だからこそ、縁起が悪い花とされてきました」

「……首、」

「上古大椿なるもの有り、八千歳を以て春と為し、八千歳を以て秋と為す。

長寿の花として演技がいい花でも、あるのですがね」

「それで、何故キミはコレをオレに？」

「ふふ。それが、貴方だからですよ」

品の良い口元が、歪む。

どうやら厄介な人間が現われてしまったようだ、とベリアルは目を細めた。

薄暗い部屋に差し込む月の光に、幻太郎のエメラルドが輝く。

元の世界でもそうであったが、人間の中には、稀にこう鋭い者もいる。

齢たったの二十幾つの青年に、何処まで『見る』ことが出来るのか。

良い暇潰しが出来たと喜ぶべきであろう。

「中々に、興味深いね」

「……それは光栄だ」

交わった視線に、浮かぶのはそれぞれの笑み。

ベリアルは幻太郎の横を抜けると、振り返ることなく部屋を出て行った。

ぱたりと扉が閉まり、広い廊下に出る。

ガラス張りの廊下は、別名天空回廊とも呼ばれ、その名の通り空を歩いているような錯覚陥るよう、計算して造られていた。高所恐怖症の人間にとつては地獄の場所であるが、元々は空の民であったベリアルには、大地よりも見た景色である。

「知っているかい？椿の花言葉には、もう一つあるんだ」

果てのない空を見上げ、ベリアルは呟く。

「You, re a flame in my heart  
 どうだい。情熱的だろう？」

笑い声を混じらせた言葉は、暫く静寂の中を彷徨うと、ひっそりと消えていった。

\*\*\*

ネオンのもとで咲き誇る、夜の華たちの館は今日も大盛況を迎えていた。

華美な装飾の施された店内を泳ぐ黒服たちと、洗練された動作で客をエスコートするホストたちを横目に、ベリアルはグラスを叩る。

テーブルの上には、名の知れた名前が巻かれた酒瓶が並び、申し訳程度に置かれたグラスコンポートには、綺麗にカットされた林檎が乗っていた。

初対面にも関わらず、一二三に頼まれた『仕事』は、彼の見立て通りベリアルにフィッシュトした。

ベリアルがこの店で働くようになってからというもの、客数が格段に増えたのである。

新宿で知らぬ者はいないほどの知名度を誇るこの店は、一二三を筆頭に精鋭が揃っており、元々売り上げも客数も悪くはない。寧ろトップレベルであった。そんな店にベリアルが呼び込んだ客、その多くは男性客であった。

ホストクラブの中には、男性客を禁止してる店もあり、これは主に他店のスパイの侵

入を防止するためであるようだ。

そのような店を除いて、意外にもホストクラブに通う男性客も多いらしく、夫婦で来店するケースも多い。

「あ、あのベリアルさん」

「ん？なんだい」

「お酒、足りていますか？なんなら、僕」

「フッフ……」

そう先走るなよ。余裕のない早漏は嫌われるぜ。

初めての来店でもあるまいし、ゆっくり楽しもうじゃないか」

部屋の中央に咲く、シャンデリアから落とされる光が、白い肌を滑り落ちる。

熱に浮かされた顔で、ベリアルを見つめる客はすっかり太客となってしまう男であつた。

言い換えれば、哀れな犠牲者というところであろうか。

例え、胃や肝臓が煮え返るほどの度数を飲み干しても、顔色一つ変えることはないベリアルは、何人の客の間を歩き来しても調子を乱すことはなかった。

特別おねだりせずとも、次々に飛ばされる注文に、今日も店が沸き立つ。

だがそれはベリアルルの構うところではない。

こうして、甘やかな戯れの声に時間を忘れ夢を見る客たちは、夢見のままに店を後にしていった。

「ベリさん、お疲れさま」

店仕舞いとなる時刻を迎え、いつもの服へと着替えたベリアルルに、一二三が声を掛ける。

一二三の格好は未だスーツのままだが、彼はそのまま帰宅をすることが殆どであるので、今更気にならなかった。

胸のポケットに差された、シャンパンゴールドの薔薇が、甘い香りを散りばめている。

「精神的な疲労だと、先生から言われた」

「……そうかい。まあ、妥当だろうね」

「でも、せんせーを疑うワケじゃないんだけど……」

「納得がいかないのだろう。」

一番近くでカレを見ているキミの直感は、間違つてはいないと思うよ」

「つ、独歩ちゃん……。仕事で、なんか事件を起こしちゃったらしいんだ」

「へえ、」

「それで謹慎くらつちやつたみたいで、今家にいるんだけど……。」

部屋から出てくれなくて」

「……」

「ねえ、ベリさん。教えてくれるだろうか？」

「この前に言つてた……。植え付けられたとかいう、話……」

「フフフ……。構わないよ。」

「キミがいてくれた方が、上手くいくだろうからね」

煌びやかな夜道を、二人並んで歩く。

対照的な色合いの二人が交わす会話は、何処となく重い雰囲気か漂っていた。

独歩を案じる一二三は、先日寂雷のもとに彼を連れて行ったことを話した。

日に日に暴力的且つ自虐的な言動が目立っていく独歩は、どう見ても異常であり、寂

雷すらも目を見張る状態であつたのだ。

元々明るい性格ではないが、それでもラップに関すること以外では、自制は効くタイ

プの人間であることは間違えがない。

幼馴染という、長い付き合いの中で見てきたことが、それを証明している。

そう、少なくとも彼は物に当たる性格でも無いし、根は臆病ながらも優しい男なのだ。だが今や手当たり次第物に当たり、自傷すら起こすようになって来たのである。

そして挙句の果てに会社で事件を起こしたことが原因で、謹慎を命じられたというのだ。

これを異常と言わずして何と言おう。

あの寂雷も彼の状態には、手を上げざる負えなかつたのだろう。これは当然のことである。

まさか悪魔という非科学的なものが関与しているなどと、誰が思うか。

「まずは、カレから引き離さないといけないね」

「引き離す……?」

「そ。悪いモノはさっさと除去しなくちゃ。

まあ任せてよ。医者 of 真似事は一度したことがあるんだ」

「ちよ、ちよつと待って！まさか手術みたいな感じ?」

「さてね」



「ベ……ベリさーん、あんまり独歩ちゃんいじめないでちよーだい」

「酷いなあ。ちゃんと可愛がって優しくしてあげるよ」

「それもそれで、安心できないんだケド」

に、と緩く口角を上げたベリアルに、一二三は脱力を感じて項垂れる。

だがそれは決して悪い意味ではなかった。

言動は確かにアレな部分はあるが、一二三には決してこのベリアルという男が、悪いことをするようにには思えなかったのである。もちろん、それが危険な信頼であることは薄々気が付いていた。

彼は夜の街を生き抜いてきた人間であるのだ。その『審美眼』にはあらゆる意味で鍛えられている。

「だけど、気い付けてね。ベリさん。」

独歩ちゃん今……相当気が立っているから」

「問題ないさ。ああ、そうだ念の為、先生を呼んでおいてくれるかい？」

「せんせーを？でも出てくれるかわかんねーぜ」

「その時はその時だ」

そのようなやり取りを行うと、ベリアルは一二三に寂雷への連絡を任せて、中に入っていた。

先日訪れたばかりである記憶に新しい部屋は、すっかり様変わりをしているようだ。随分暴力的な模様替えだな、と眩きながらも、気配がする方へと足を進めていく。恐らく一二三の手によって作られたのであろうドアプレートに、目的の人物の名前が書いてある、一番奥の部屋の前に辿り着くと、中から荒々しい呼吸音が聞こえてきた。ベリアルは中の人間の様子を察したように笑うと、ゆつくりとノックを響かせた。

「……誰だ」

獣の唸り声にも似た低音に、思わずベリアルは笑い声を零す。

膨張しきった彼の苛立ちが手に取るように分かったのだ。

「ひふみ、か?……だめだ、いま、来るな」

「相当溜まっているようだねえ、今にもはち切れそうじゃないか」

「……っ!!その、声は……」



「……ひ、ふみ……」

がちやり、と重い音を立てて開かれた扉の、その先には……。

「随分イイ顔をしているね」

乱れた赤髪に、濁った瞳……。

いつも以上に生気を失い、まるで生ける死人のような顔。

やつれた体が、痛々しかった。

乱れ切った部屋の真ん中に蹲るその男へと、近づいていく。

ぼんやりとベリアルを見つめていた独歩は、目の前で足を止めた男に突然顔を歪ませた。

『ひい……っ!!』

く……クルナ、来るなクルナ来るなクルナ!!オマエは……!!なぜ!!』

「はあ……。いいよねえキミたち。」

やりたい放題しちゃってさ。まあ、オレも言えたことではないけど？

にしても、誰の手を煩わせていると思つていいのかな？」

『ベリアル……なぜ、ここに……つ！』

オマエは、あの男の死「まあまあ、そういき急ぐなよ。先ずはごめんなさい、だろう？」

独歩の声がしやがれたそれに変わつたかと思うと、短い悲鳴を漏らす。

床にへたり込んだそれは、ずりずりと後退していくが、勢い良く伸ばされた手がその首を掴んだ。

ベリアルは、そのまま体を持ち上げると、ぐいと顔を近付ける。

「いつもなら、このまま始末ヤッしちゃうんだけど……。

少しばかり楽しませてもらおうじゃないか」

『ぐ……つ、クソ……マダ、ナニモ』

「ああ、そうだね。キミは悪魔としてどうかと思うくらい、ナニも出来ていない。

こんなイイ餌に憑り付いたというのに、まさかキミって勃起不全朴念仁なのかい？」

独歩の細い首に、ベリアルの指が食い込む。

片手で軽々と持ち上げられた彼は、息苦しさに喘いだ。

「俺だったら、もうとつくに調教して開発済みだろうけど……」

まあ良いや。カウンセリングのお時間だ童貞くん」

「っ、げほっ、げほ……」

そのままほいとベッドに抛ると、暫くの酸欠と何が起きているのか把握できない恐怖が、独歩を襲う。

ベリアル目は、独歩の中にいるそれを見透かしていた。

「ふむ、まだ浅いね。良く頑張ったじゃないか」

「……………え……………」

「キミの体に根付いたソレは、まず精神を汚染する。

だがキミの精神はまだ、綺麗なままさ」

「……………俺は、」

「もう大丈夫さ、それを追い出してあげよう。

俺に身を預けてくれるかい？」

「……ベリ、アル……さん」

精神的に脆く見えた独歩という男は、そこまで弱くはなかったようだ。

一二三の支えと、寂雷の治療の成果もあるだろうが、これからは簡単に取り出せそうだと男は判断した。

「さて、それじゃあマイクを出しな。

俺が相手になってやろう」

「えっ!？」

「君は取り憑かれているが、乗っ取られてはいない。

慰められるよりも、引っ叩かれる方が良いだろう」

「え、ベリアル……さん。ごめんなさい、まだ俺、状況が……」

「安心してくれ。後でちゃんと説明してやるさ」

柔らかく細められたその赤い瞳に、戸惑った表情をしつつも独歩は小さく頷いた。

独歩自身、自分が一体どうしてしまったかは、正確には理解していない。

だが、自分が自分ではなくなる時があるのだ。

始まりは、いつもと違う過度な苛立ちからであったか。

それが日に日に、怒りに変化し、そして憎しみに変わっていった。

同居人にすら暴力的な態度を取ってしまった日から、独歩は自分が怖くて怖くて仕方がなかったのである。

信頼している寂雷からも、困ったように首を横に振られた日は、絶望しかなかった。

ある日、職場で起こした『事件』により独歩は謹慎を言い渡されてしまったのである。それからというものの、人と接することが怖くて堪らなくなつた。

一二三の顔も見れなくて、部屋に閉じ籠る日々を送っていた中に、現れたのがこのベリアルという男であったのだ。

「……救世主さま」

ぼつりと呟かれた言葉は、何とも宗教染みたものであった。

だが、この状況から救いを齎す存在を、そう呼んでしまったのは可笑しいことではないのかもしれない。

常に親身になって、自分の話を聞いてくれる寂雷にも同じことを思ったことがある。それとは似て異なる意味であつたが、不思議としつくりと当て嵌まる気がしたのだ。



独歩の言葉を耳にしたベリアルは、ただ目を伏せて笑うだけであった。

「さ、キミの中を掻き乱してあげよう。」

怖がることはない、恐れることはない、待つのは極上の快樂だけさ」

顕現したマイクに、施された悪魔の翼など独歩の目には入らなかったのである。

\*\*\*

「俺の出る幕、あつたか？」

深々とソファアールに凭れた男は、小さくそう呟いた。

前々から引つ掛かっていたのだが、ベリアルは言葉巧みに人を惑わせるのを好む悪魔である。

先ほどの独歩の件であっても、特別男が何かをしたわけではない。

人の心がわからなくとも、然も理解しているかのように振る舞うことだって出来る筈だ。

込み上げて来た疑問に、男は内心首を捻る。

思考を放棄しかけているとはいえ、喜んでベリアルベリアルの駒となる従順さは持ち得ていない。

「君も、容赦のない男だねえ。」

独歩くんには何か恨みでもあるのかい？」

「ははっ、愛故にというヤツさ。」

いつまでもあのままじゃ、カワイソウカワイソウだろ」

「……ふむ、それもまあ一理ある……が。」

取り敢えず治療は終わったよ。あとは一二三君に任せよう」

視界の端を過った、灰と薄紫の糸に男は思考を打ち切る。

病院から急いで駆け付けてくれたらしい寂雷は、いつも身に纏っている白衣を翻すと、男の隣に腰を下ろした。

「それで、どういうことだい」

「……どうということも何も、俺はカウンセリングをしただけさ」

「にしては随分荒っぽいやないか」

「フフフ……。時には、肉体でぶつかり合うのもイイ治療になるのさ」

「勉強になるな。もっと聞かせてくれないかい？」

「君に聞かせるものではないさ、センセイ」

きつちりと一つに結び上げた髪と、真っ白な手袋はその性格を表しているかのようだ。

好奇心と興味に満ち溢れた深い色の瞳が、男を見つめる。

「独歩クンが目を覚ましたら、ちゃんと説明するさ」

「……わかった。それを信じよう」

月明かりに映える、寂雷のうつくしい横顔が、静かに微笑みを湛える。

その透き通るような白い肌を見て、不意に男の脳裏にあの椿の花が蘇った。

ベリアルがああの花を受け取ったときに感じた、フラッシュバック。

一瞬であったので、記憶にも残らなかつたものの、男の心に微かな爪痕を残していたのである。

「……あれは」

豊満な椿の花、それは血溜まりのように赤かった。

その血のような赤が引つ掛かったのは、確か、そうだあの日自分が刺された、あの瞬間を思い出させられたからではなかっただろうか。そう考えると男は、今までに感じていた霽が晴れるのを感じた。

——流れ出る血、じくじくと体を巡る痛みと熱、そして胸を深く抉る赤い刃。

男はふと、考える。

自分を殺した犯人は誰であつたのだろうか。

その疑問は、憎しみや恨みから来るものではない。ただの純粋な、興味であつた。

「どうしたんだい、ベリアル」

「いや、何でもない。ただの戯言だよ」

心配そうに覗き込むその瞳に、男は軽く微笑みを返す。

何はともあれ、あとはベリアルに任せるしかないのだ。

「仕事帰りだろう、センセイ。

少し休んだらどうだい」

「ふふ、そうしたいところだけど……。」

「誰かさんの所為で目が冴えてしまつてね」

「……へえ」

「私はどうも、釈然としないことがあると寝付けない性格なんだ」

「厄介な男だねえ、君も」

「誉め言葉として受け取っておくよ」

柔らかさの裏に鋭さを隠した寂雷の口先だけの笑みに、男は目を細める。

その表情は、最近ベリアル周辺の周りをうろつく幻太郎のそれに似ているものがあつた。

この世界はどうも勘の良い人間が多いらしい。そう何処か他人事のような言葉を、心の中で転がす。

薄紫に灰が混じつた神秘的な瞳は、何処までを見透かすのだろうか。

男は小さく笑うと、ソファーに深く凭れ、ただ天井を見上げた。

## 【引用】

上古大椿なるもの有り、八千歳を以て春と為し、八千歳を以て秋と為す

(大昔には、大椿という木があつた。八千年の間が春で、八千年の間が秋だというものだ)

中國の古典「莊子」内篇・逍遙遊より

## 悪魔、降臨せし時⑫

社会という権力者のエゴが渦巻く世界で、溺れるように生きて来た。

生きるために身体を擦り減らすこの生活は、冷静になつて考えれば下らないことかもしれない。

だがその冷静さすら摩耗され、気が付けば此処まで来ていた。  
それだけの話だ。

たとえ、情けないと蔑まれても、『溺れる者は藁をもつかむ』ような生き方しか出来な  
くて。

だけど、醜態を晒しても、社会にしがみ付く日々を送っていた。

自分の、在り様に疑問に感じたことはいくつもある。

生き方、なんて流れに乗っている内に考えることを止めてしまったけど。

好きに、自由に、生きてきたいなんて間違いだっただらうか。

流転<sup>るてん</sup>し、いつか輪廻の時を迎えたなら。次はきつと……。花の様になって……。理想<sup>ゆめ</sup>を抱くことすらも忘れてしまった。

幼馴染である一二三は、まるで白鳥のようだ。

磨きに磨き上げたうつくしい純白で、湖面を優雅に泳いでいる。

自分は、その水面下で繰り広げられる彼の努力を、苦悩を、葛藤を、全て見て来た。だからこそ彼には、自分がこんなことで悩んでいるなんて知られたくなかった。

自分が情けなくて死にそうになるから。

全てを吐き出すには、下らないプライドが邪魔をした。

これは先生にも同じことだ。

先生は常に自分の心に寄り添ってくれる、天使のような人だ。

柔らかく受け止めながら、そっと背中を押そうとしてくれる。

だが優しいだけではない。

筋の通った一本の筋を持ち、信念を持つ強い人である。

尊敬しない筈がなかった。

とても最低な自白をしよう。

俺には二人が眩しすぎた。



一二三も、先生も、木もれ日をいく人だ。

でも俺は……。どう頑張っても、片陰にしかゆけない。

あたたかな二人の言葉は、時に毒となつて俺を蝕んでいたのだ。

それが、自分がどんなに矮小で、意味のない人間か、思い知らされているようで。

二人の強さと、俺の弱さに押し潰され、吐いたこともあるほどだ。

だから……。

その人に魅かれたのかもしれない。

光の中にいながらも、形を保ち続けるその人に。

「オハヨウ、お目覚めかい？」

「……………」

「フフフ……。まだ夢見心地のようだね」

「……………!!なっ!!なっ、べ、べべべ……ベリアルさん!？」

ぼんやりとした視界に、朧な人影が映る。

どうやら自分を覗き込んでいるらしいそのの、輪郭が段々と浮き立つ。

それと共に覚醒へと向かう意識が、不意に鮮明なものとなった時、独歩は思わず身を跳ねさせた。

「気分はどうかかな？」

「え？……え、え……。」

「なんか、すごい……軽い……？」

「なら良かった」

ゆるりと細められた瞳は、とても優しいもので。

まるで木もれ日の中を揺蕩うような、温かさを感じた。

「独歩ちゃん!!良かった、大丈夫!？」

「身体、痛くない?ベリさんになんもされてない!？」

「ひ……っ、ひふみ……」

「ふむ。先日よりも顔色が良くなっているね」

「せつ!!せんせい……!!」

「ああ、起き上がらなくて良い。

先ずは診察を済ませてしまおう」

ばん!と勢い良く開いた扉に、雪崩れ込むように入つて来た一二三は、目を開けている独歩の姿を見ると、ベッドサイドへと駆け寄つた。続いて入つて来た寂雷も、独歩の顔を見ると安心したように微笑む。

同居人である一二三は兎も角、まさか寂雷が家にいるとは思っていなかったのも、独歩は驚愕に目を剥いた。

慌てて体を起こそうとした独歩を止めると、寂雷は聴診器などの商売道具を取り出す。

ベリアルは、独歩の部屋に置かれたクッションの上に腰を下ろし、その様子をじつと見ていた。

「……うん、問題はなさそうだ。

今日はこのまま寝ていると良い」

「う……す、すみません、俺、」

「良いんだよ。それよりも、独歩君。」

君は知らなくてはならない」

「え……?」

「自分の身に何が起きたのかを、ね。」

「そうだろう、ベリアル」

「わかっているさ、センセイ。」

だからお寝坊さんのお目覚めを待っていたんじゃないか」

ベッドに背を預けて寛いだ姿勢のまま、ベリアルは喉を鳴らして笑う。

その様子を見た寂雷はベリアルの傍へと座り、一二三はベッドに腰を下ろした。

「せ、先生、ベリアルさん！お話ならリビングでも……!」

お二人を地面に座らせるなんてそんな恐れ多い……っ!」

「いいや、私もベリアルも構わないよ」

「なんならオレの上に座るかい?」

「ぶっ!!」

「ちよ……！独歩ちゃん！大丈夫？」

もうベリさん！純情ビュアなんだから椰揄ビュアっちゃダメって言ったでしょ！」

「フフフ……」

慌てて上半身を起こした独歩に、ふわりと寂雷が口元に笑みを飾る。安心させるような寂雷の心遣いも、ベリアルの一言で打ち砕かれた。

「……さて、何から話すのが良いか」

「まずは独歩君の症状について話してくれないかい」

「ふむ、そうだね。」

病名を言うとなれば『悪魔憑き』ってトコかな」

「はあ!?ベリさんマジで言ってるの?」

「オレはいつも真実しか口にしないのさ」

「嘘でしょ?」

「フフフ……」

突拍子のないベリアル言葉に、一二三は眉を顰める。

疑うわけではないが、始めから信じられる話ではなかった。少し考え込んだ寂雷は、ベリアルに視線を合わせる。

「要するに、トランス及び憑依障害ってことかい？」

確かに極度の興奮、トランス状態、睡眠時遊行<sup>夢遊病</sup>、パニックなどといった症状も見られただけ」

「現代医学というのは、実に夢がないね。」

まあ仕方のないことかもしれないが……」

「先生もベリさんも、もーちよいわかりやすく言ってくれる？」

「ふふ。なら、『精神的に汚染された』というべきかな。」

最近ヤバい人間に接触したことはないかい？」

「ヤバい……？」

「ベリさんそれ、抽象的過ぎない？」

「あつ………あり、ます！」

「……あるんだ」

「つい最近、中途採用でやって来た新人がいるんですけど……。」

なんかいつも怒ってるっていうか、態度がすごく悪くて。」

それを注意すると、どうしようもなく暴れるんです。

……その時の、彼、なんか目がおかしくて」

「目がおかしい？何かの疾患かい？」

「なんていうか、病気とかそういうのではないと思います。

目がつり上がるというか、兎に角凄い形相になって」

「……ふむ。なんか不動明王のようだね」

「そう！まさに、そんな感じなんです」

何となく話が読めて来たような気がして、一三は独歩を見た。

ヒプノシスマイクという非肉体的な武器が出回った日から、この世界が武力から精神的な支配に切り替わったことは周知のことである。その結果、精神的に屈強な人間が勝ち上がり、脆弱な人間が地を這うことになる。武力から精神力に変わっただけで、実質歪んだ争いも支配も、何一つ変わらずに行われているのだ。

それだけではない。弱り切った人間が、精神的な支配を受けることもある。

違法マイク、という非正規のものも出回っているが、精神的攪乱に特化したマイクを持つ者もいる。

それらを悪用した犯罪が、横行していた。

「キミたちもヒプノシスマイクを持つ身なら、わかるだろう？」

精神を武器として戦う、キミたちなら……ね。

相手を惑わす能力モノを持っていても、おかしくはないんだ」

「……なら、独歩くんは操られていたってコト？」

「少なくとも、影響は受けている筈さ」

「でも、ベリさんは植え付けられたって」

「その相手が、どのような能力を持っているのか……。」

はつきりさせないことには、確証は言えないけどね。

キミたちの支えが無かったらきつと……自我を保つことすら、出来ていなかっただろ

う」

「……っ！ベリさん……それって、どういうこと？」

「精神的な支えがあつたということだよ。」

信頼ともだちできる親友と先生の存在。

あと、センチの癒しの力も進行を遅らせたということさ」

ベリアルという言葉に、独歩はぱつと顔を上げる。



じわじわと迫り来るあの何とも言い難い焦燥感、劣等感が全て怒りに変わった瞬間を、独歩は鮮明に憶えていた。それから、だ。

時折記憶が飛ぶようになり、時と場所を問わず荒れ狂うようになったのは。

それに耐えきれず、一二三に同行してもらいながら、寂雷のもとへと通った。

そうすることで、一時的であつても怒りが消失し、自分に返ることが出来たのだ。

自分は守られていたのか、と込み上げる何かに独歩は再び顔を伏せた。

「でも、元凶がそのままじゃ……独歩ちゃん仕事に戻れないんじゃない」

「君のことだ、何か考えがあるのだろう。ベリアル」

「フッフ……。一つだけ、提案があるんだ」

一二三と寂雷の視線を受けて、ベリアルはその笑みを深めたのであつた

\*\*\*

狭く深い都市、東京。

区間を通る交通網は非常に発達しており、移動には事欠かない。

男は電車を降りると、様々な店が立ち並ぶ通りへと足を向けた。モードにパンクス、アメリカンカジュアル……。

色とりどりの服に身を包んだ若者たちが行き交う。

今日は休日であつたので、私服に身を包んだ人たちが多いようだ。

道沿いに並ぶ店を横目に、気が向くがままに歩いていく。

そしてふと、とあるものが目に入ると、自然と足がそちらを向いた。

「いらっしゃい、ま……せ……」

すつきりと落ち着いた店内に似合いの、上品な恰好をした女性スタッフが顔を上げる。

淑やかな化粧の施された顔が一瞬硬直したが、直ぐに佇まいを正した。

洒落たスーツが並ぶ棚を颯爽と抜け、店の外から見えたそれに近づく。

男はこうした服に、特にこだわりは持っていない。

こうなる前だつて、仕事着には頓着していなかつたのだ。

だが、今の体の持ち主は案外選ぶらしく、その審美眼は中々のものであつた。

「そちらは、今人気の若手デザイナー様がデザインしたものでございます。もしよろしければ、ご試着なさいませんか？」

控えめなヒールの音が、男の後ろで響いた。

シツクなデザインのスーツだが、内側に施された『遊び心』が堅苦しさを感じさせない。

所謂抜け感というやつであろうか、とファツションに疎い男は内心で首を捻る。

非常に腹立たしい話だが、このベリアルという男の体は、基本的に何でも着こなせるのだろう。

「なら、試着させてもら「あーっ!!オニサンじゃん!なんで此処にいんのっ!」

男が店員に視線を向けようとした、その時である。

店の自動ドアが開かれたかと思うと、聞き覚えのある声が掛けられた。

顔をそちらに向けると、鮮やかなピンクの髪が視界に焼き付く。

「……やあ、奇遇だね」

「うんうん、まさかオニイサンが僕の仕事先にいるなんて。

し・か・も、そのスーツ、僕がデザインしたんだ！」

「キミが、かい？良いセンスをしているね」

「でしよ〜？自信作なんだ。」

オニイサンちよつと着てみてよ！

絶対、似合うから！」

「ははっ、それじゃあ……そうさせてもらおうか」

少年のようにも見える青年、飴村乱数を見た途端に切り替わった意識に、男は溜息を吐いた。

この乱数に、ベリアルは何かしらの興味を抱いているのだろうか。

あの最終決戦では、相手を攪乱するラップを武器とするため、ただただ厄介な男であつたことを記憶しているが、それ以外に特に変わった印象は抱かなかつたが。

腰から垂らしたベルトといい、何処か胡散臭さを感じる点といい、確かに似てはいる。そう考えを一巡させた男であつたが、やはり答えは出なかつた。

「わー！すっごいカッコいい！！

流石オニイサン……!」

ねえ、ベリアルって呼んで良い? いい、よね?

僕……ベリアルのために、デザインしてあげてもいいよ?」

「ほお、それは随分贅沢な提案だね。

それで……キミの望む報酬は何だい?」

「あははっ! バレちゃった?

うーんとね、それは……。僕のアトリエに来てくれたら教えてあげちゃう」

「キミの? ……大胆なお誘いだ、ナニをされるかわからないぜ?」

「ふふふっ、何をしてくれるのかなあ?」

質の良い素材を使用したシャツに、スーツは、ベリアルの持つ妖艶さと見事にマッチした。

普段の言動があまりにも先行しているため、そちらに目を奪われがちだが、均整のとれた体と造作の良い顔は浮世離れたうつくしさを体現するものである。

自らデザインした服に袖を通したベリアルに、乱数は目を輝かせた。

それは、紛れもない彼の本心からの行動で、この時乱数は自分の理想を描き出したような人物の存在に、興奮を隠しきれなかったのだ。

「このおねーさんとお仕事をしてくるから、終わるまで待っててよ。ね？お願い」

「……構わないよ。オレは待つのは得意でね」

「ほんと!?良かった。じゃあ、ちよつと待ってて！」

直ぐに終わらせてくるから！」

天真爛漫な笑みと言動に滲む快哉かいさいの色に、ベリアルは笑みを深める。

乱数に急かされて、慌ただしく店の奥に消えていく二人を見送ると、凶つたようなタイミングで携帯が鳴った。ぶるぶると身を震わす携帯をポケットから取り出し、液晶に浮かぶ名前を見る。

そうして、幾分か考える素振りを見せると、ベリアルは通話ボタンをタップした。

『あ、あの……観音坂独歩、です』

「ああ。キミか。何かあったのかい？」

『……い、いや、その、……ベリアルさんの、コトが、なんていうか……。気になって』

「フフフ……。それは嬉しいね。」

キミがオレのことを考えてくれるだなんて。  
ズリネタにして

それで、どう？ スツキリしたかい」

『ずっ!??!……な、なななそんな恐れ多いことできません!!』

「冗談だよ、俺なりの愛撫マッサージュさ」

カチカチに強張った声に、電話の向こう側の男の緊張が伝わる。

ベリアルからすればリップサービスのようなものだが、生真面目な独歩は真摯に受け止めてしまったらしい。動揺に震える言葉に、ベリアルは愉快そうな笑みを口元に飾った。

「問題ないさ。キミも体調を戻しておいてくれよ。」

何せ、キミがいなければ始まらないパーティーなんだから」

『は、はい……。俺、頑張ります……。!』

「詳細はまた、連絡する。」

何かあつたらいつでも言ってくれ」

『あつ、あの……。!』

「ん？」

『あの、……。明後日、もう一度会えませんか?』

「明後日? 構わないけど」

『……その日、一二三が一日いないから……。その』

「フフフ……。そんなイイ方されると、期待しちゃうな」

『ちっ、違っ!!お話したいことが、……あつて』

『隠さなくたって良いんだぜ?』

『う、うう……。ほんとに、違うのに……。っ』

「明後日、ね。わかったよ。」

「キミの家に行かせてもらおうか」

口遊ぶ戯れの言葉を一通り吐き出したベリアルは、独歩の誘いを受け入れた。

独歩という男は、思慮深いが、自分の思いを伝えるのが極端に下手なのが致命的であった。

そして『あの場』でも、何かを話したそうにしている仕草をベリアルは、何度も見かけていたのだ。

「それじゃ、また」

「誰と話していたの?」

「……ふふ。オトモダチさ」



「ふうん」

悪戯にリップ音を弾ませると、電話越しに慌てたような声が聞こえる。

予想通りのリアクションに満足げに笑いベリアルが電話を切ると、ぽふんと腰に軽い衝撃が走る。

ベリアルに抱き着くような体勢で上目遣いに見上げる乱数の瞳が、一瞬、鋭い光を滑らせた。

「ねえ、どんなヒト？」

「そんなに気になるのかい」

「そりゃ、ベリアルのおトモダチなんですよ？」

……きつとおもしろいヒトだろうなうって」

「お褒めの言葉として、受け取っておくよ。」

「そうだね、……『ただ自生する花の様』な、男さ」

「……なにそれ？意味わかんないんだけど」

「ふふ……。謎掛たわむれだよ。」

「さ、キミのアトリエおに招待してくれるんだろう？」

「あつ!!そうそう、そのためにお仕事すつごく頑張ったんだから」

「エライエライ」

「でしよ〜?つて、もう、ベリアルつたら……!」

もうちよつと真剣に褒めてよ!

「ハイハイ、……はあ、オレはいつもワガママを聞く役だよ」

眉を下げて溜息を吐いたベリアルの表情に、爛漫な笑みを見せた乱数はふわりと服の裾を翻し、店の外へと向かう。そして、仕方なさそうにその背中にしたベリアルも、スクランブルの雑踏に姿を消していったのであった。

## 悪魔、降臨せし時⑬

ガラス越しに差し込む斜陽が、その男の影を落とす。

逆光となったその男の顔に、二つの紅玉がぎらりと浮き立った。

薄い笑みを湛えたベリアルはその表情が、また乱数の脳内にリフレインさせる。

『ハハハッ！面白いことをいうね、キミ。

ちよつと興奮ほつきしちゃったよ。

……でも残念、今のキミじゃあオレをイかせられないな』

『イケナイ遊びをお考えかい、坊や。

フフフ……。偶には少年せうじゆう性愛せいあいも良いが……。

お楽しみはもう少し後ごにしておくことにするよ』

雑踏の中で際立つベリアルという男を初めて見たとき、乱数は『自分と同類』のものだと直感した。

相手の心に入り込み、時に飴を与え、時に乱すもの。

秩序や法に捉われず、時に善を与え、時に悪<sup>あしく</sup>すもの。

もしかしたら良きパートナーとなり得るかもしれない、可能性を秘めたものに見えたのだ。

ミルクに珈琲を流し込むように、可憐な顔に少しの思惑を滲ませた乱数は、目の前の赤を見上げて微笑む。

ベリアルはそれに薄い笑みを浮かべただけであった。

乱数に案内された先は、とある一等地にある見晴らしの良い広い部屋であった。

シンプルな壁や床に、最低限の家具が配置されている。

しかし、それ以上のものは存在しなかったのだ。

部屋の主は、洒落た可愛らしいともいえる服を好み、爪などの細部にも気を使っている。

そんな彼の部屋が、こんなにもシンプルであることを誰が想像するであろうか。

人間の部屋は、深層心理を具現化したものである。

などと心理学者を気取るつもりなど毛頭ないが、足を踏み入れたその場所は……。

あまりにも伽藍洞で、寒々しいものであった。

「そこに座つてよ。すぐに用意するからさ。」

あつ、そうだな何か飲む?」

「お任せするよ」

足の長い椅子に座り、ベリアルは頬杖を突いた。  
しんと静まり返る空間に、乱数の動く音が響く。

「意外だね。キミがこんな趣味をしていたとは」

「あはっ、びつくりした?」

「そうだよ。此処は僕の部屋さ。」

「仕事部屋とも違う……正真正銘僕の住んでるトコ」

「ふうん、良い部屋じゃないか」

「でしょ? 気に入ったなら一緒に住んでも良いよ?」

「フフフ……。魅力的なお誘いだけど、

眠れなくなりそうだから、辞めておくよ」

「え〜? ベリアルって意外と神経質なタイプだったりする?」

「オレのは凶太いんだが……」

まあ、色々あるのさ。キミのようにね」

かたん、と小さな音を立ててテーブルにカップを置いた乱数は、ベリアルと向き合うように座る。

着けていた帽子を外した彼の髪が、無機質な空間に色を飾った。

「……ねえ、ベリアル。聞きたいことがあるんだけど、良い？」

「何でも聞いてくれた構わないよ。」

その為にオレを誘ったんだろう？」

「ふふっ。さつすが、お見通しだね」

「口実まで語って、オレを連れ込んだ理由……」

刺激的なモノであれば良いんだが？」

「焦らないですよ。……こういう前戯が好きなんですよ？」

「フフフ……。だがあまり長すぎる前戯は良くないぜ。」

焦らされ過ぎても萎えちまう」

「わかってるって、ベリアル。」

ならこつから先は……うつつつけ、かなあ」

星のような笑みを振りまいた乱数の表情が、一変した。

それは豹変ともいえよう変化で。

きらきらと光を散りばめていた瞳に、重厚な色が差し込む。

水面を想わせるその瞳から、普段の天真爛漫さはもう見受けられない。

高いトーンで明るい言葉を紡ぐその唇も、淡々としたものに切り替わったのだ。

「お前のその力は、何だ？」

「ふふっ。それが本性というワケかい。」

「イイじゃないか。可愛らしい顔で蔑まれるのも悪くない。」

「……別に教えてあげても良いんだが。一つ条件がある」

「……言ってみろ」

「オレと姦淫しないかい？」

「オレもキミの、その体には少し興味があるんだ」

「は？……おにーさん、サイテーなんだけど」

「これでも譲歩してるんだぜ？」

何せ、オレの服は秘密でつくられていてね。

それを明かすということは、全裸になるというコトなんだ」

軽々しい笑みを零したベリアルは、片目を閉じると乱数に視線を投げる。

揶揄うようなその眼差しの裏に見え隠れする、試すような色。

それに気付いた乱数は、ぴくりと眉を上げた。

乱数の表情の変化にベリアルは笑みを深めると、長い指先でカップを掬い、黒を煮詰めたような色の珈琲に口を付ける。

「冗談だよ。そんな顔するなって。

取り敢えず話を聞こうじゃないか。

キミの手札はカードはまだ切れるだろう？」

「……。その精神力はちから異質だ。

あの時、お前のラップをこうげきを聞いて直ぐにわかった」

「ほお？」

「少なくとも、今まで感じたことのない力だ。

だが、アレは本気ではないんだろう」



「確かに、アレを本気の「rb：腰使い」>「ファック」だと思われちゃ困るが。だけどそれが……どうしたって？」

あの最終決戦の時に垣間見たベリアルの方に、乱数は圧倒されると同時に、とある考えが頭に浮かんでいた。それは己の成そうとしている計画に、ベリアルを組み込むという事。

その力を手にすることが出来れば、それを成すことは非常に容易くなるだろうと、彼は知略を巡らせていたのである。

「人間どもを殺すために、その力を貸して欲しい……と言ったら？」

「それは随分、盛大な計画だ」

「……笑うか？」

「フフフ……。いや、そういうの好きだぜ。」

人間をこの世から消して、キミは何を望む？」

「今は言えない。だがお前が協力するといえば……直ぐにでも」

「ふうん。じゃあ、何故オレに？」

「一目見たときから、直感した」

「一目惚れかい、情熱的じゃないか。照れるね」

ベリアルの一挙一動を注視する乱数が、その容姿に似つかわしくない程の低い声で告げた。

憎しみと恨みの籠ったそれに、ベリアルは目を細める。

あくまでも調子を崩さずに、俯瞰する瞳を向けるベリアルに、乱数は眉を顰めた。

「言っておくケド、これ冗談なんかじゃないよお?」

「ははっ、わかっているさ。キミのその目を見れば、ね。

だが……キミの計画に手を貸すことはできない」

「っ、何故?」

「まだ時じゃあない。キミだってそう思っている筈だ。

だから、その立場で大人しくしているんだらう?」

「……」

「それに、オレもまだこの世界には用があつてね。

キミの計画が始まってしまうと、少々都合が悪いんだ」

「用、というのは?」

「フフフ……。オレに切れる手札は此処までや」

何処までも見通したような口ぶりから滲む、余裕に乱数は溜息を吐いた。

質問しているのは己で、主導権を持つのも己であった筈なのに、気が付けば逆転している。

相手の手札を捲っている筈なのに、気が付けば己の手札が捲られていくのだ。

背筋に氷が這うような、ぞくぞくする感覚に乱数の脳内にとある声が蘇る。

「怪物と戦う者は、その過程で

自分自身も怪物になることのないように

気をつけなくてはならない

深淵をのぞく時、

深淵もまたこちらをのぞいているのだ」

チームメンバーの一人が零したその言葉は、薄気味悪いほど当たっていたのかもしれない。

そして確か、その言葉に返した自分の言葉もまた……。

「さて、この話は此処までにしておこうか。

ピロートークの時間が無くなっちゃうからね」

「あーあ、手強いなあ。もう！」

僕の言うこと聞いてくれないの、君くらいだよ」

「それは光栄だよ。

オレを手籠めになりたいなら、キミのご自慢のマイクで酔わせてみるよ。

話はそれからさ」

椅子に深く凭れたベリアルは、そう言つて深い笑みを浮かべた。

深い溜息を吐いて、両肘を付くと組んだ手の上に己の顎を乗せる。

そうして頬を膨らませると、じろりとベリアルを睨んだのである。

\*\*\*

入り組んだ路地に伸びる無数の影があつた。

ばたばたと忙しく交差する足音は、全くと言つて良いほど時間を考慮していないが、この街では日常茶飯事となっているので、態々首を突っ込もうとする人間もいな

かった。

カンカン、という鉄階段を昇る音と、飛び交う罵声が、ネオンに染められた街を賑わせている。

「ツチ。おい、クソガキ!!ふざけんじゃねえぞ!」

漂う不穏の空気を切り裂くように、声を上げた男がいた。

ネオンの色さえも弾く鋭い銀の色に、殺伐とした瞳を持つその男は、青筋を立てて叫ぶ。

周囲には若い男たちがおり、見るからに不良とわかる出で立ちをしていた。

人気のない古びたビルの屋上には、不良たちとその男と、もう一人黒髪の少年の姿があった。

「……っ、ぐあっ……!も、もう勘弁、してくれ……っ!!」

「……」

「ひ、ひいいっ!!お、俺が悪かった、だからもうっ!ぎゃああっ!!」

一見すると不良の喧嘩が勃発している所だが、それは違った。

派手な服に身を包んだものたちは、もう既に虫の息であったのだ。

あるものは地面に転がり、あるものは腰を抜かして座り込んでいる。

阿鼻叫喚といった悲鳴が絶えず上がる中、その黒髪の少年はまた一人の胸倉を掴み上げたのである。

「やめろ!! 一郎……っ!! 殺す気か!」

銀髪の男はその腕を掴むと、一郎と呼んだその少年の頬を殴りつけた。ばき、という硬い音を立てて、振るわれた拳が柔い頬にめり込む。

「っ、さ……ま、ときさん、……お、れ」

「ツチ。面倒掛けやがって。」

ちつとは正気に戻りやがったか」

「え、あれ……。俺は」

「ふん、話は後だ。さっさと帰んぞ」

焦点のぼやけた虚ろな瞳に、はつきりとした色が戻る。

それを確認した左馬刻は短く舌を鳴らすと、一郎の腕を離した。

己に突き刺さる畏怖の視線たちと、コンクリートの上に倒れこむ男たちを呆然と見た一郎は、混乱したように目を彷徨わせる。

状況判断が追いつかず立ち竦む一郎を見かねた……というよりも、痺れを切らした左馬刻は、乱暴な手付きで再び一郎の腕を掴み、強く引っ張った。

「うわっ！ちよ、ちよつと左馬刻さんっ!!」

「うっせえ!!トロくせえことしてんじゃねえよ!」

左馬刻は一郎と共に階段を降りると、一郎に向き直る。

まだあどけなさの残る少年の瞳は、困惑と不安と恐怖に濡れていた。

それを見た左馬刻は、強く舌を打つ。

左馬刻の子分として、後ろをちよろちよろと付いて来る一郎を、彼は良く面倒を見ていた。

目つきや口は悪いが、懐に入れた者には甘く面倒見が良くなる、まさに兄気質な左馬刻を、一郎は純粹に尊敬して懐いていた。

良くも悪くも素直で、頭の回転も悪くはなく、文句が多いが従順である一郎を、彼も認めてはいたのだ。

だからこそ、一郎の暴走は目に余るものがあり、信じられなかった。

兄貴分としても放つてはおけなかったのだ。

いつからであつただろうか。一郎が『こう』なつたのは。

ある日突然タガが外れたように、一郎は暴力的になつた。

一度暴走をすると、歯止めが効かなくなつたのである。

なんとか左馬刻が手荒な方法で正気に戻しているが、あくまでも一時的なものに過ぎない。

心配というと彼は認めないだろうが、気になつた左馬刻は、一郎の弟たちを訪ねたことがあつた。

彼らもまた敬愛する兄の豹変に困惑しているようで、左馬刻が妹にそうしているように、あれほど大事な存在として語っていた弟たちにすら、暴言を吐く時があるらしかつた。

「てめえ、一体どうしたつてんだ」

「そんなの……っ、俺の方が、知りてえよ……っ!!」



真正面から聞いても、意味はないことは理解している。

発作のように一郎の意識関係なしに起こる、それに一番苦しんでいるのは本人だということも充分理解していた。だが、治しようにも原因がわからない。

短絡的な考えだが、こうして一郎本人に直接問うしか方法はないように思えた。

「ツチ。こうなりや……しようがねえ。

おい、寂雷んトコいくぞ」

「……寂雷、さん？」

ふと左馬刻は、同じチームの中に精神的治療も行っている医者が出たのを思い出したのである。

随分遅い閃きであるが、それだけ彼もまた一郎の変化に心を痛めていたのであろう。本人は決して認めることはないであろうが。

左馬刻はポケットから携帯を取り出すと、電話帳から目的の名前を引つ張り出した。そうして電話を掛けようとしたその時である。

「あ、ああ……。また、また……。アレが、来る。

声が、声が聞こえて……」

「おい、どうした？」

「さ、まときさん……。俺、また……。っ!!」

「落ち着けっ! てめえ、まさか……」

「あ……。あ、あああああああっ!!」

突然頭を抱えたかと思うと、両手で耳を塞ぎ苦しみ始めた一郎に、左馬刻は目を見開いた。

段々と血走っていく一郎の瞳に、左馬刻の背中にぞくりと悪寒が走る。

もがくように抗う一郎であったが、悲鳴にも似た雄叫びを上げると、唐突に左馬刻を殴りつけたのだ。

反射的に一郎の拳を交わした左馬刻であったが、一瞬隙が生じてしまう。だが彼の隙をつける敏捷さは、一郎にはなかった筈である。

「つぐ……。っ、この……。クソガキがっ!!」

予想外の素早さで、一気に距離を詰めた一郎は、勢いのまま左馬刻の腹部を膝で蹴り上げた。

鳩尾を穿たれ息を詰めた左馬刻であったが、膝を折ることはなかった。

弟分にやられて無様な姿を晒すなど、己のプライドに掛けても許されなかったのである。

繰り出した一撃カウンスターにより、地面へと吹っ飛んだ一郎だが、猫を想わせる身軽な動きで立ち上がると、左馬刻がいる方とは逆方向へと走り出したのだ。

「っ!!てめえ!!まち、……やが、れ……」

遠退いていく背中に足を動かそうとした直後、ぐらりと視界が揺れた。

踏ん張りが効かず崩れ落ちた体は、何故か力が入らなくなっていた。

心の中で何度も悪態を吐き捨て薄れゆく意識に抗うが、そんな左馬刻を嘲笑うように広がる闇が、彼の意識を奪い去っていったのである。

——ぼつり、ぼつり、

宵闇に塗り潰された空が、冷たい雫を左馬刻の頬へと落とす。

覚醒を促すようなそれは、徐々に激しさを増していき、あつという間にコンクリートの色を変えた。

「カワイソウに。カレ、芽吹いてしまったようだね。

おや、悲しいのかい？ オレというモノがありながら、妬けるじゃないか。

フフフ……。まあ、キミがそういうのなら……」

左馬刻と一郎がいたビルよりも、更に高い場所から見下ろす存在がいたことを知るの  
は、泣き濡れる天のみであろう。

## 悪魔、降臨せし時⑭

移り変わる季節を反映するかのような、鮮やかな青を濁流の如く飲み込んだ灰の雲。

やがて雷を伴いぽつぽつと雫が落ちていく、めいど暝怒雨。情緒に富んだ日本語には雨を表現するだけでも1000を軽く超えるため、このような突発的な天気を伝えるにも事欠かない。

バベルの塔を想わせる天に近いこの塔は、天の唸りがよく聞こえ、チラつく稲光が陰影を成す。

そんな天を窓越しに見上げる、赤い瞳は何を考えているのだろうか。

愉悦と嘲弄を供する瞳は、常に飄々として決して感情の色を見せない。

あけすけな言動に惑わされがちだが、その所作と佇まいは奥ゆかしさを美とする幽美さと、妖艶さを漂わせている。

それがどうしようもなく、人を惹きつけて止まないのだ。

手に持ったペンを置く。

自分の理想通りの男を見つけたのは良いが、それを表現するだけの言葉が未だに見つからない。

善ではなく悪、悪かと思えば善といったように好き勝手に動き回る、この男の本質がまだ掴めていないこともその原因の一つでもあることは、わかっている。

だから、出来るだけ行動を共にしているわけだが、これもまた厄介なのだ。

猫のように気紛れで、時に突拍子のない行動に出るのだから、付いて行くのも大変である。

しかし……だ。それがまた、楽しいと感じてしまう自分がいた。

嘘と真実を織り交ぜて作った夢野幻太郎という男は、嘘吐きだ。

嘘と真実を織り交ぜて惑わせるベリアルという男は、嘘吐きだ。

とはいえ、『俺』の嘘がベリアルに通用しているとは思えないし、『小生』の嘘をベリアルが見抜いていないとは思えなかった。

「さて。……今日は、何を話そうか」

「そうですねえ。貴方の拾ってきた、銀猫についてお尋ねしましょうか」

笑みを含んだ、中身のない言葉。

笑みを湛えた、探るような言葉。

しかし、それは本心でもある。

つい数時間前に、豪雨と共にこの塔に帰って来たベリアルは、ぐったりとした青年を抱えていた。

全身ずぶ濡れで、頬には殴られたような大きな痣があったが、それ以外に目立った外傷は見当たらない。

その青年が、今この東京で知らぬものはいないであろうメンバーの一人であることに、気付いたが、その時は特に何も言わなかった。

帝統に彼を任せたベリアルは、いつもと変わらぬ様子でシャワーを浴びて着替え、今に至る。

そろそろ事情を聴いても良いころだろう。

そう判断して口火を切ったというわけだ。

「さて、ね。オレもよく知らないんだが……。仲間割れらしい」

「……仲間割れとは」

「フフフ……。オレは通り掛かりの一人でしかない。

事情は彼が目覚ましてから、聞くことにしよう」

「なら質問を変えましょうか。何故貴方が拾ったのですか？」

「ほお？どうしてそんなことを聞くんだい」

「珍しいからですよ。貴方は、例え死に掛けていたとしても拾い上げる男ではない。何か彼に興味を引くものがありますか？」

「それは、キミが書き上げるオレのことだろうか？」

理想それの主人公を妄信することは、ただの偶像崇拜さ」

「……それならば、貴方は慈愛の心を以てあの銀猫を拾ったのですか」

「フフ、どうやらキミはオレを誤解しているようだが……。」

オレにだって慈悲はあるさ」

「それは驚きました」

「ま、キミたちに比べれば純度は低いけどね」

「自覚がありますか？」

「オレが聖女に見えるかい？」

「いいえ、全く」

テーブルランプの灯光と、唸る雷光が、互いの顔を浮き立たせる。

口元を飾る軽薄な笑みと、言葉遊びでもするかのように滔々と告げられる言葉は、相変わらず胡散臭い。

思わず眉を動かすと、嘲笑にも似た笑い声が近付いて来た。



「キミは、もう少し頭を柔らかくした方が良い。

そうすれば凝り固まった文章も解れるだろう。

ああそうだ、ついでにカラダも解してあげようか」

「……。余計なお世話ですよ、ベリアル」

「おっと拗ねるなよ、冗談だって」

向かいのソファーに腰を下ろしたベリアルは、足を組むとその上に頬杖を付く。ぎらりとした赤い瞳が闇に強調され、まるで闇に咲く薔薇のようだと思う。

「キミは、自分に足りないモノを知っているかい」

「突然なんです？」

「フフフ……。人間は、不完全なモノさ。

欠けているものをつい求めてしまう生き物だ。

だからキミたちは、与えられた。

傲り、怒り、妬み、怠り、卑いやしげ、餓え……そして」

細められた瞳と唇から、噎せ返るような薔薇の香を感じたのは、気のせいであったのだろうか。

圧倒されるその色香かおりにこれ以上はいけないと、何処かで警報が鳴り響いた。

「……貴方こそ、知っているんですか？」

自分に足りないものを」

「オレは完成品でね、生憎不足はなかった筈だが……。」

決定的なものをなくしてしまっただんだ」

「それは？」

「欲張りだね、キミは。実に人間らしい。」

だが、物事をオネダリする時は、相応の姿勢つてもものがあるだろうか？」

呆れを含んだその笑みに、何処か優しきを感じてしまうのは可笑しいのだろうか。

ふふ、と自分の唇から勝手に零れたそれと共に立ち上がると、ベリアルベリアルの隣に腰を下ろす。

身に着けているフレグランスの香りを、直ぐ傍に感じながら、真上にある赤を見上げた。

すると、それが合図であったかのように……。ばあん！と部屋の扉が開いた。

「はああつ、つつかれたー。」

んあ？何だよ、二人してこんな暗い部屋で何やってんだ？」

「フフフ……。どうやら邪魔が入ったようだね」

「……ええ、残念です」

「はあ!?アンタら、俺にアイツの世話任せて何やってたんだよ！

めっちゃ大変だったんだぜ!？」

「ご苦労サマ。キミには後で、ご褒美をあげようじゃないか」

「……!!」

「……はあ、随分単純なつくりをした脳をお持ちですねえ」

「あ？なんか言ったか？」

「いいえ。脳が綺麗そうだなによりですよ」

「……馬鹿にしてんだろ！」

何とも騒がしい声を上げて入って来た男は部屋の電気を付けると、ベリアル隣の座る。

同じ身長の人に両端を囲まれたベリアルは、ただいつものように笑うだけであった。

「それで、銀猫チャンの様子はどうだい」

「銀猫?……ああ、アイツか。」

「寝てるぜ、相当覽されてたが落ち着いたみてーだ」

「そう。なら様子を見に行かないとね」

「態々にーちゃんが行く必要ねえだろ、俺が行くぜ」

「ふふ、彼に用があるんだ」

「……それなら、良いけどよ」

大型犬が尻尾を振って、飼い主に絡んでいるようにも見えるが、単細胞いや失礼。この単純明快な思考回路の持ち主は、すっかりベリアルに懐いてしまっているようだ。

べつたりとベリアルの腕に腕を絡ませて、身を寄せる帝統は、いつだって後先を考えない。

「考えないからこそその、フットワークの軽さなのだろうけれど……。それが、少し。いやなんでもない。」

「なあ……にーちゃん、昨日は何処にいたんだ？」

俺ずつと待つてたんだぜ？」

「昨日？……ああ、昨日は友人と会っていてね」

「友人？貴方に友人が？」

「フフフ……。オレにだつてオトモダチぐらいいるさ」

視線を帝統から此方へと映したベリアルの、その赤を見上げる。

自分でも無意識であつたが、どうやら俺は彼の持つ赤と黒を気に入っているらしい。

ベリアルが言うように、『人間は自分にないものを求める』のならば、自分に無い色を求めるのは自然なことなのだろうか。

自分の感情を素直に曝け出す向かい側の男に、そしてそれを拒むことなく受け入れる男に、抱くこの感情おもいも……。

ふと静かに目を伏せる。このままでは、自分が自分で無くなるようなそんな気がした。

だから気付かなかつた。

此方を見た帝統が向ける視線の色に、そしてベリアルの表情に――。

小生がそれを知るのは、もう少し先のことである。

なんてつまらない締め言葉を添えておくとしよう。

（——全部、嘘なんですけど）

\*\*\*

その夜は、ひどい夢をみた。

自分の中の消化しようがない過去が圧縮されたような夢であった。

塞がらない傷口を抉じ開けられたかのように、尾を引く鈍痛に全身から汗が噴き出す。

「っは……っ！」

抑圧された呼吸が、やっと正常に戻る。

反動で荒らぐ胸を押さえ、途切れ途切れの息を吐き出し吸い上げた。

肺に痛みを感じるまでそうしていると、次第に呼吸だけではなく思考にも落ち着きが戻っていくのを感じた。

——コン、コン、コン

等間隔のノック音が聞こえて、そちらに視線を移す。

そういえば此処は何処なのだろう。そして何故此処にいるのだろうか。と今更ながら、体に緊張が走った。

だがそれも、扉の向こうから現れた男によつて解されたのだが。

「やあ、調子はどうだい」

「つてめえ……、何で！」

「いくらオレがキミの天使だからって、そう興奮しないでくれよ」

「天使だと……?」

「フフフ……。生憎頭の輪は捨ててしまったけれどね。」

倒れているキミを見つけて、此処まで連れて来たのはこのオレさ。

少しは感謝したかい? ならオレと姦淫しようじゃないか」

「……倒れて……っ!? そうだ!! 一郎はっ!」

あのクソガキはどこ……っぐ、」

「ああ、あまり動いてはいけないな。」

肉体の方のダメージは軽いものだが、精神的なダメージは大きい」

「ツチ、構うモンかよ!!」

黒いシャツに軽薄なその笑みは、忘れるわけがなかった。

己らを打ち破ったベリアルという男を、どうして忘れることが出来よう。

だがそれよりも、ベッドから勢い良く身を起こした左馬刻は、優先すべきものを思い出したのである。

起き上がろうとした左馬刻に、ゆつくりと近付いたベリアルであったがそれ以上止めることなく、その様子を見下げる。

そして、崩れ落ちた左馬刻の体を支えると、再びベッドへと戻したのである。

「わかっただろう? キミは何も出来ない。少なくとも今はね」

「っ、ふ……ぎ、けんな……っ」

「まあまあ、落ち着きなよ。」

別にとって喰おうなんて思っていないさ。

「一郎クンを助けたいんだろう?」

「てめえ、何でそれを……」

「フフフ……。キミが言ったんだろう。」



だが今助けに行つたところで、キミも捕食されるだけだ。  
 sacrifice a sheep to God 以下の、無意味な犠牲になりたい  
 というのならば、止めないけどね」

再び起こそうとした体をシートへと押し付けられ、憎たらしいその赤が己を見下げる。

左馬刻にとつてそれは屈辱でしかなかった。

しかし己の身体のこととは、言われるまでもなく理解していた。

激情型で自分の感情のままに突っ走ることもある左馬刻であるが、ベリアルはその瞳に映る己の顔を見ているうちに、ふと張り詰めていたものが緩むのを感じて、息を吐く。白いシートに散らばる銀が、朝日を浴びてきらきらと輝く。

嵐の後の空はいつもよりも澄んでおり、淀みのない青が広がっていた。

広い窓が印象的なこの部屋は、この男のものだろうか、少し余裕を取り戻した頭で考える。

「……ハハハハ」

「ああ、オレのアジトさ。中々素敵だろうか？」

「はっ、てめえさえいなければな」

「フフフ……。あまり煽らないでくれよ。」

「思わずサディズムを満たしたくなるじゃないか」

一つトーンを下げた音が左馬刻の背筋を撫で上げかと思うと、己の顔を覗き込む赤のその奥に何かがチラついたのを見た。調子が良く軽快で雄弁なこの男の持つ、薄ら寒さは何なのだろうか。

己が身を置く世界においても、この男以上に得体の知れない存在はいないだろう。

そう考えることが、まるで怖気づいているかのようで、それがどうしようもなく癩に障った。

「何があった、と聞くのは愚問かな？」

「てめえには関係ねえ話だ」

「そういうなよ、キミとオレとの仲じゃあないか。」

「キミの大切な弟分の豹変について、気になっているんだらう？」

「な……っ！てめえ、なんで」

「フフフ……。」

キミの弟分を犯したモノに用があつてね。

どうだい、オレと手を組まないか？

ああ別に手じゃなくても構わないよ」

「……」

「利害関係の一致つてヤツさ。

いくらオレが信用ならないとはいえ、キミの可愛がつている一郎クンのためだ……。

清濁併せ呑むつてコトも必要だぜ、坊や」

「はっ、なめてんじゃねえよ。

清も濁も関係ねえ。俺はもう、そういう世界に首まで浸かつてんだ。

問題は……ベリアル、てめえの存在なんだよ」

例の最終決戦で番狂<sup>ジョウ</sup>わせ<sup>カ</sup>として、あつという間に栄光を掠め取った、この悪魔の名前を冠した男が、何を思つてか、東京を牛耳るヤクザの中でも一番問題視をされていた組の頭を打ち取ったという知らせを聞いた時は、驚愕と同時にベリアルが隠し持つ企みに興味を惹かれたのも事実だ。そしてカタギではないことに、妙に納得したのを憶えている。

生まれてからずっと、左馬刻の周りには闇が付き纏った。

裏切り、暴力、喪失、絶望を繰り返す輪廻を、どれほど恨んだことか。

だがそんな闇を生き抜いて来たからこそ、それを見抜くだけの嗅覚は鍛えられていた。

目の前の、男が漂わせる濃厚な闇のにおい。

関わったら最後だと、己の勘が告げていた。

「……てめえの、知っていることを全部話しやがれ」

「ほお、キミも欲張りサンだね。」

だが悪くはない。人間、強欲さも大事だ」

謀るその瞳は、左馬刻を苛立たせ同時に引き寄せる。

同じ色味でありながら、もっと暗い何かを持つ赤は、己の中に渦を成す闇を包み込む不思議な安らぎがあったのだ。

「だが良いのかい？」

キミにとって、『清』弟分は劇薬でしかないのだろう」

「……『濁』お前に言われたくねえよ」

交差する視線に、左馬刻は嫌な汗が伝うのを感じた。

まるで、麻薬だと思っただのだ。

甘い夢と共に地獄へと導く、麻薬あくまの男だと。

この男に感じる心地良さは左馬刻が最も憎悪する、依存性であった。

人の心の隙間に入り込み、心地よさを与え、依存させ、突き落とす。

どくり、と心臓が大きく唸った。

大きく息を吐いて息を吹き返していく悪夢きおくを、また殺す。

「……」

その開きかけた瞳孔を、乱れた鼓動を、ベリアルは黙したまま見下げた。

腕を組み、指先を顎に当てると、観察でもするかのように左馬刻を見ていたのである。

「彼もキミも、同じ精神的びよ外傷きさ。

病名は同じでも症状が違うだけのね」

「……ああ?」

「フッフ、肉体をいくら鍛えようとも……その精神はそうはいかないだろう？

キミたちの持つマイクの性能が異なるように、それぞれ感じるポイントが違うんだよ」

「……」

「マニアックなイキ方でしか、イけなくなると悲惨だぜ。

だから今のうちに矯正してやらないといけない。

手取り足取りじつくりと」

「さっきから何の話をしてやがる」

「いや、大したことではないんだが……。

キミの穴は随分気持ち良さそうだと思うね」

低く喉を鳴らしたベリアルは、その爪先で左馬刻の胸を突く。

その仕草は、左馬刻の抱える闇をお見通しだと言外に告げているようにも思えた。

完全に相手のペースに呑まれてしまっていることに、目を鋭くした左馬刻であったが、突如意識がぼやけた。それは突然訪れた眠気であり、強烈なそれは、実に抗いがたいものであったのである。

「フッフ……。オネムのようだね。

もし夢の中で声がしたら応じない方が良いでしょう。

甘い口説き文句は、奴らの常套手段さ。

わかったかい？

それじゃあ、おやすみ」

朧と霞む意識の中で、その声は明瞭に聞こえた。

しかしその言葉の意味を問おうとしても、吸い込まれるように落ちていく意識を留める手段を、左馬刻は持ち合わせていなかったのだ。

## 悪魔、降臨せし時⑮

——漆黒。

一寸の隙間なく塗られた墨の上から、更に漆をコーティングしたような、艶やかな黒であつた。

四面をその黒で囲まれた空間に、たった一筋の光が差し込んでいる。

その光に浮き立つように配置された、一つの椅子があつた。

玉座と言つても過言ではないほど、上質で品のある装飾が施されたそれは、黒の世界で唯一の色を放つ。

赤と紫が掛け合わさつたような深紫色を基調とし、縁取る銀色、紅玉と蒼玉の宝石が散らばる。

ただ黒に囲まれる空間に、それはひどく不釣り合いであつた。

その椅子に座る一つの影があつた。

項垂れるように顔を伏せたその脛は、固く閉ざされている。

耳が痛くなるような静寂と、闇に包まれた空間で、それはただ眠り続けていた。

かつん、と打ち鳴らされた、その一つの音が静寂を切り裂くまでは。



「逢いたかったぜ。ダーリン。」

「随分長い休暇だったじゃないか、楽しめたかい？」

「……」

「フフフ……。不機嫌な顔も堪らないな。」

「そう、怒らないでくれよ、キミの出番はこれからだろう」

「俺が退屈を嫌うことぐらい、知っている筈だが？」

「ああ、もちろん。」

「オレはキミのことを良く知っているつもりさ。」

「……今のキミよりも、ね」

「度の過ぎる秘密主義は止せ。目障りだ」

「ははっ、悪いね。性分なんだ。」

「何せ『そう』造られているものでね、こればかりはどうも変えられない」

「……変える気がないだけだろう」

「手厳しいなあ、相変わらず」

「……要件のみを言え。」

「お前の戯言に付き合う気はない」

「つれないね。ああ、わかったよ。オレにとつての本題はまた後にしよう。」

……今のところ、動いているのは『憤怒』だけだ。

人間たちに影響を与えながら元気に動き回っているよ。

大丈夫、全て想定内さ」

「影響？」

「フフフ……。単なるイライラ病だよ。」

奴は、内に秘めた怒りを増幅させて、解き放つ快楽を教える。

たっぷりと溜めたものを吐き出す瞬間は、さぞ気持ちいいだろう。

キミも知っていると思うが、人間は快楽に弱い。

本能のままに行動する獣と違って、中途半端な理性を持つ分……背徳に弱いのだ」

「……」

「怒りを解き放つ気持ち良さを味わった人間は、またそれを繰り返す。

そして、ウィルスの如く蔓延し感染を広げるところを。

まあ、要するに大規模な自慰行為のところさ。

オレとしては、そっちの方が好みの展開だけど……。

今回ばかりはそうも言っていられなくてね」

闇と、光の境で足を止めた『それ』は猫のように目を細めると、座した男へと近付いていく。

長い足を組んだ男は、軽薄な笑みで飾られた青白い顔を、ただ硝子の瞳で見下げただけであった。

「趣味が悪いな」

「興味深いだろう?」

「……何故そう思う?」

「言っただろう?」

オレは誰よりもキミを知っているんだ」

「……」

「ふふ、何も特別なことではないさ。

負の感情なんて、誰にでも持ち合わせるモノだ。

じわじわと確実に降り積もる、雪のようなモノ。

ソレの重さに器が耐え切れなくなった時が、問題なだけだね。

ほら、大きさはイれるモノのサイズに依存するだろう?

ただ単に大きければイイってものでもない。

オレは大きい方が好きだけど、好みってものがある」

「何の話をしている。」

……はあ、この世界ではお前は救う側なのだろう？」

「そう、キミもオレもこの世界では救う側さ。」

だがこうは思わないかい？

テンシが、常に正しく在る理由はない。

テンシが、常に善であるとは限らない。

善と悪の天秤なんて個体差でしかない。

……キミは、それを良く知っている筈だ」

男の後ろへと回り込んだベリアルは、椅子の背凭れに腕を置くと、ゆつくりとその顔を近付ける。

内緒話でもするように、耳元に唇を寄せると、ベリアルは小さく笑んだ。

「悪意は悪魔の温床となり得る、用土。

腸に根を張り、精神を喰<sup>くいはみ</sup>蝕、開花する。

うつくしい花ほど、養分が豊富な証拠さ」

それは、睦言でも囁くような甘さを秘めた声音であった。  
軽やかな笑みを零しながら、ベリアルは言葉が続ける。

「開花を迎えたものに、温床を持つものが、接触するとどうなると思う？」

……たつぷりと種を植え付けられるのさ。これが非常に気持ちイイらしくてね。  
ソレだけで飛んじまうものもいるらしい。

種付けされるのが人間だけだなんて、勿体ない話だよ」

「お前の性癖などに興味はない」

「酷いなあ。そもそも、オレを欲求不満にしているのは……。」

おっと、話を続けようか。

咲いた花は、次に花となり得るものを呼ぶ。

ともなき  
共鳴とも言つてね、無意識のうちに引き寄せられるんだ」

「……無意味だな」

「そう、その連鎖を止めることに意味はない。

神にだって欲は付きものさ。そして神を模して造られた人間にも、ね。

だから、オレたちの仕事は欲に潜む7つの悪魔を刈り取る。それだけだよ」

「フフフ……。そんな顔をしないでくれよ。

キミが面倒がることはわかっているさ。

だからこうして、オレがまた体を張っているんだらう？」

「元凶を呼び寄せるつもりか」

「流石オレの、ダーリンだ。

悪魔というのは実に狡猾で欲深い生き物だ。

より強い悪意ちからを求めて、常に寄生先を変える。

……この世界は都合が良いのさ。

精神力がモノを言う世界というのはね」

ベリアルが珍しく本筋を饒舌に話した為に、この世界で今何が起きているのかを男は把握した。

精神に直結する武器、ヒプノシスマイク。

それを用いて戦いが行われているこの世界では、良くも悪くも精神状態がものをいう。

強い意志は強い力となる。だが、時にそれは諸刃の剣となる。言葉で付けられた傷は目に見えることはない。

だから、どんなに大きな傷を負っても、傷口が膿んで腐り落ちても、隠すことが出来てしまう。

皮肉にも、精神力の強い人間ほど耐えてしまう傾向にあった。

そうして治療を怠った強い人間が、もしも開花することがあれば、誰も止めることが出来なくなる。

その影響力も相俟って、更に感染は拡大し、人間たちは徐々に悪魔によつて理性を奪われ、やがて精神のみではなく肉体による抗争が起きるだろう。

今はまだ小さな暴力事件で済んでいるかもしれないが、いつか世界に終わりを齎す可能性を孕んでいるのだ。

だが、別の世界から飛来した悪魔に、世界を滅ぼされるのは理不尽な話にも思えるが、それは同時にベリアルにとつても男にとつても関係のない話だ。

男は小さく溜息を吐くと、以前から疑問に思っていたことを口にしようとして、やめた。

何故、ベリアルがこんなにも動き回っているのか。

その目的を聞いたかったが、まともな答えが返ってくるとは到底思えなかったのであ

る。

後ろにいるベリアル顔の顔は、男からは窺うことは出来ないが、核心へと誘い込むような口振りの裏には、狡知の名に相応しい策を張り巡らせていることは、わかつていた。

「別にオレは、この世界自体に興味はないさ。

人間が滅ぼうが、世界が終末を迎えようがね。

オレの目的は、ソレじゃあない。

フフフ……。このオレが世界を救うなんて、皮肉にも程があると思わないかい」

「似合わん話だな」

「だろう？」

この世界に連れて来られてから、男はベリアル顔の行動を見て来た。

その思考、その言動の意味を全て把握しているわけではないが、何となく確信を持っていることがある。

男は一度目を閉じると、再びその瞳を開いた。

「——蟲毒か」



「……………」

「お前の考える策ぐらい、わかる。

お前らしい狡猾で欲深い、畏など……………」

「ふ、ふふふ……………ははははっ!!」

完敗だよ。濡れたぜダーリン、今の一発で蕩々だ」

「……………お前が目を付けているあの人間たちは、器となるだけの力を持っている。

使い様によつては囷にも、餌にもなるだろうな」

「ああ、そうさ。彼らはとても甘美だ。

そそるんだよ、凄く。

だがまだ……………足りない。

彼らにはもつと、底を知ってもらわないとね」

「……………」

「フフフ、わかっているよ。

いくらオレでも、世界の制約ルに爪を立てる気はないさ」

男がその抑揚のない声音で口にした、ベリアルルの思考の一部は、あまりにも無慈悲なものであった。

悪魔を引き寄せるために、敢えて力ある人間を利用しようとしていて、ベリアルが『彼ら』の相手をする理由は、そこにあつたのだ。

男は小さく息を吐く。やつと納得のいく答えが一つ手に入った気がした。

このベリアルという悪魔が、やけに人間に関わろうとしていることが、ずっと引つ掛かつていたのである。

「この物語は、実に単調で、退屈なものだ。

素人が描き出すチープなものがたり絵空事のようにね」

「……」

「そもそも、単に7つの悪魔を狩ればそれで終わりという所が納得出来ないんだよ。

ポルノ映画の方が、よっぽど刺激的で興奮する。

——キミだって、そう思うだろう？」

「それがお前の目的か？」

「フフフ……。オレは作家だね。物語を書くのは得意なんだ。

オレがこの世界ぶたいにたつのなら、そんな無為無聊むいぶりようなストーリーなんて掻き乱してやるさ。そうして彩られた舞台は、何よりもキミに相応しいものになるだろうから」

「全てお前のエゴに過ぎない」

「全てキミの為さ。信じてくれるだろう？」

「……もう、いい。お前の考えは把握した」

「ふ、それは良かった。」

もう少し眠っていてくれ。舞台を整えよう」

「俺に、お前の作った舞台で踊れと？」

「言っただろう？キミとオレは、一蓮托生だ。」

……これからも、ずっとね」

ばさりと、と羽搏きの音が聞こえたかと思うと、微かな光を遮り影が描き出された。

蝙蝠を想わせる六つ羽が、大きく伸ばされもう一度羽音を響かせる。

それを子守歌とするように、男は再びその瞳を閉ざしたのであった。

\*\*\*

しとしとと降り続く雨粒が、街のネオンを乱す。

鮮やかな光たちが曖昧にぼやけ、霞んだ景色が広がっていた。

様々な色が重なり合い、虹色にも見える光を作り出す光景は言葉にすれば、風情ある

美しさを感じさせるかもしれないが、ベリアルベリアルの瞳には、水溜りに漏れ出た油が作り出す虹虹とそう変わらない。

使い込まれた廃油廃油が水に膜を張り、光の屈折が変化して生まれるという、汚れた虹虹と同等のそれを見下げる赤の瞳は、ただ無機質にそこにあつた。

良くある造りをしたアパートの一室。

決して広いとは言い難い空間に浮き立つその存在を、スーツ姿の男が呆けたように見つめていた。

「ん？ああ、お帰り。オジヤマしているよ」

「え、あ、は、はあ……ど、うぞ？」

当然のように窓辺に佇む男の姿に、情けないながらも独歩はそんな間の抜けた言葉を返すことしか、出来なかつたのである。

その日、独歩はベリアルと会う約束をしていた。

今夜は同居人がいない日であるので、『とある話』をするために呼び出したことは、も

ちろん記憶に新しいことだ。だが、肝心なことを伝え忘れていたことに独歩が気付いたのは、三徹を終えてやっと帰宅出来ることになった、先ほどのことである。その瞬間、さっと体中の血が引く音が聞こえたのは言うまでもないだろう。そういう面で、独歩は真面目な男であった。

もしかしたら、連絡が入っているかもしれないと、帰路の途中で携帯を確認してはみたが、ベリアルからの連絡は入っていないかった。それならば、もしかしたら、いい加減な約束を取り付けてしまったことを、怒っているのかもしれないと、血が引きすぎて眩暈すら感じる中で只管に罪悪感を嘔み締めていたのだが、事態は家のドアを開けてから急転したのである。

玄関を開けると目に飛び込んできたのは、見慣れない革靴であった。

同居人のものかとも思ったが、サイズと靴底を確認すると、違うことに気付いた。

彼は職業柄ファッションには強い拘りを持っている。それこそ頭の先から爪の先まで、細部に至るまで。

部屋の隅に積まれた箱に描かれた、彼が好むブランドマークを独歩は何気なく憶えていた。

そして、彼の靴底にはそのマークが確かに刻まれていたことを知っていたので、それがない革靴は彼のものとは違うことを、頭で理解した。

その瞬間。独歩はまた違う意味で、血の気が引くのを感じた。

——この革靴は誰のものであろうか？誰か中にいるのだろうか？泥棒の類だろうか？

だが、強盗が入るようなアパートでもないし、金目のものは置いていなかったと思う。

あるとすれば同居人のものだが……。

彼はああ見えて警戒心が強く、大切なものや価値のあるものは、他の場所に金庫を借りてそこに入れていた筈である。

どくどくと嫌な音を打つ自らの心臓に、空回りする思考回路が、更に言い知れぬ緊迫感を急き立てるが、いつまでも玄関で佇んでいるわけにもいかない。

記憶にない靴があったぐらいで、大の男が警察に駆け込むのも、何となく恥ずかしかった。

それに、一時帰宅した同居人が、何かの理由で置いたものである可能性も、なくはないだろう。

そう思った独歩は、出来る限り足音を消して家に上がると、そろりそろりとリビングを抜けて自室へと向かった。

同居人と折半しているが、自分の家には変わりはない場所で息を潜めるなんて、何を

やっているのかとも思ったが、日々物騒なニユースが絶えないこのご時世に、ありえないということとはありえないのだ。

いつ自分がニユースのネタになるかは、わからない。

脳内に分泌されたアドレナリンにより、体が戦闘態勢に入っていくのを感じるが、そこは所詮現代を生きる人間。本能として戦うことを知っているだけであって、体は動いてはくれない。

寧ろ強張ってしまつて、使い物にはなりそうもなかった。

しかし、独歩には一つ、武器があつた。

ポケットの中にある固い感触を確かめた独歩は、微かに息を零す。

いざとなればそれを起動することも視野に入れていたが、増していく危機感とは真逆に、呆気なく自室に辿り着いてしまったのだ。見慣れた自室を前にして安堵したのか、少し冷静になつた頭でふと思ひ付いた。

部屋を物色するような音も、気配も、何一つしないのだ。

杞憂であつたか、と独歩は自室のドアをゆっくりと開けると……。

「……………」

薄暗い部屋の窓際に、それはいた。

降り続く雨に乱された外からの光は、いつもより暗い。だがそれが、その青白い肌に良く映えていた。

身に纏う黒い服は、不思議なことに部屋の暗さに溶けることなく、はつきりとそこに在る。

全く予期しない侵入者の姿にも、悲鳴一つ上げなかったのは、独歩自身も解せない安堵を感じていたからに他ならなかった。呆然と立ち竦んだ独歩は、侵入者が振り向くまで、ただその背中を凝視していた。

「あ、あの……なんで」

「そういえば、デートの時間を決めていなかったと思っただけね。」

連絡しようとは思ったが、キミも忙しいだろうから、直接来ちゃった。ってワケさ」

「でも、鍵……」

「フフフ……それは内緒だよ。」

さあ、そんな所にいないで、こっちにおいで。

オレに話があるんだろう？」



白い顔に落ちる陰影により、その表情はより一層に艶やかなものとなる。

浮世離れをしたその人は、ただそこにいるだけで、世界を非現実なものへと変えてしまうのだ。

香り立つその人の匂い。香水だろうか。以前もその人がこの家を訪れた時に同じ匂いがした。

霧立つ脳内に染み入るような甘ったるさが苦みに代わり、やがて残香を引き摺りながら消えていく。

自分の痕を残すような、その香りと、その姿に、この場所が自分の部屋では無いような、夢でも見ている気分になりながら、独歩は誘われるがままに足を踏み入れた。

「一段とひどい顔だ……。何かあったのかい？」

「大したことじゃないんですけど……。最近徹夜続きで」

「それはイケナイな。不眠はさぞ辛いだろう？」

作業効率も低下するし、意識も曖昧になる」

「……辛い、けど。仕事……。だから」

「えらいね、頑張っているじゃないか」

「……っ！」

顔立ちは整っている分、独歩のそのどす黒い隈は目立っていた。

陰影の差した生氣のない顔は、陰鬱な印象を与えると同時に、何処か艶やかさを飾っているようにも見える。

独歩の自分自身に言い聞かせるような言葉に、ベリアルが口にしたのは慰みの言葉でも何でもない。

子供を褒める時に使う、安価で幼稚な言葉であった。

だがそれが、独歩の心の琴線に触れたのだろう。

じわじわと己の内に染み入るその言葉と、優しさと甘さが混ざり合ったような声音に、独歩は思わず視線を下にして俯いてしまう。だから、彼はそれを目にすることはなかった。

——ゆるりと弧を描いた、その唇に。

「と、取り敢えず……！珈琲でも、淹れますね」

「ふふ、その前に着替えが必要だろう？」

オレのことは良いから、先にシャワーでも浴びて来なよ」

「う……。す、すみません……！」

もしかして、その、におったり……とか？」

「うん？……フフフ。」

確かに、キミからはイイ匂いがするね。

オレのようなものを、引き寄せる匂いだ」

「ひえ……。」

あ、あああ！ご、ごめんなさい！

す、すぐシャワー浴びてきます……!!」

ぱつと顔を上げた独歩は、目の前の男が侵入者であることをすっかりと忘れていた。

客人を立たせたままということに、慌てた素振りを見せると、口早にベリアルへと言う。

その様子を喉を鳴らして笑ったベリアルは、『揶揄い』の言葉を口にしただけであったが、徹夜続きで碌に風呂にも入っていないかった独歩は、違うように捉えたらしい。

普段は、営業職ということもあり、会社に泊まり込みをするにしろ、備え付けのシャワー室を利用しているが、今回は書類の山を消化するための徹夜であり、その間外回りも入っていないかったので、疎かにしてしまったのだ。

独歩の様子だと、ベリアルの言葉を正確には聞いていなかったのだろう。

更に顔色を悪くして、慌てふためいた独歩は、そのまま適当な服を手にとると部屋を出て行ってしまったのである。

「別に、オレは構わないんだけどね。

寧ろ、そつちの方が色々と都合が良い」

再び静けさが戻った部屋で、ベリアルは笑みを零した。

嘲笑にも、侮蔑にも見えるその歪んだ笑みは、主なき部屋に良く響いたのであった。

## 悪魔、降臨せし時①⑥

冷たいタイルを打つあたたかな水の粒が、白い肌を弾く。

この時期の雨は、空気を湿らせるため、唯さえ通気性の宜しくないスーツを普段着としていた人間にとっては、不快度数が上昇するだけである。

昔は雨上がりに感じる熱が蒸れたような、あの夏の匂いを好ましく思っていた。

だが、それを感じる余裕すら無くなった今、雨は革靴を汚し、スーツを湿気で濡らし、汗臭さの原因ともなる不快なものではない。

服の中で籠っていた様々なものを、シャワーによって洗い流していく。

そうすることで、やっと柵しがらみから解放されていくのだ。

例えそれが、ほんのひと時の安堵だとしても、その心地良さがあるから独歩は己の生を実感出来るのかもしれない。

「……」

普段ならば、頭を占めるのは会社のことだ。

一日にあつたことがまるで走馬燈のように蘇り、時に独歩を責め立て、時に独歩を罵倒する。

上司の罵声や取引先の怒声といったネガティブな声が、頭の中を駆け巡り、動けなくなることもあつた。

浴室の壁を殴りつけて駆け付けてきた同居人に心配されたりしたこともある。

後悔の後味を、いつも独歩は噛み締めていたのだ。

あの時こうすれば良かった、こんなことを言わなければ良かった。

同居人はそんな独歩のことを、気にしすぎと言つて慰めたが、独歩にとつて『人の目』はこれ以上ないくらい恐ろしいものであつたのだ。厳密にいうと、人の目が映す己の姿に怯えていたのだが、兎に角独歩という男は自己嫌悪の塊ともいえる性格をしていたのである。

「……」

排水溝へと流れていく、シャンプーの泡を見送るその瞳は、呆けているようにも見えた。

苛立ちも、恨みも、水と共に流し切ってしまったような、すつきりとした爽快感が、胸

を占めていたからである。だが、もう何年も味わっていないその感覚が突然訪れたことに、独歩は戸惑っていた。

「……もし、かして……俺」

心当たりは、あった。

それは、付き合いの長い幼馴染ではなく、心底から信頼する先生でもない、出会ったばかりの素性も知らない男が口にした『たった一言』が、独歩の頭を離れてくれないのだから。

子供にでも言い聞かせるような、何処か呆れを滲ませて、でも優しくてあたたかな、その一言。

「……」

人間とは自分勝手なものだよ、と言ったのはとある先生であったか。

自分という個体を認められなければ死んでしまう、下手をしたら兎よりも繊細な生き物だと、彼は言った。

確かにその通りだと思う。

自分自身が一番自分を否定しているのに、人から否定されると傷付き、自棄になる。良く本に書かれているような大層な言葉で認められても、逆に自分が惨めに思えてくる。

だから、あの程良い温度の声に乗せられた言葉は、独歩にぴつたりとフィットしたのかも知れない。

浮付いた頭の中で、一つ一つを自分の気持ちを紐解いていた独歩は、そこまで考えてシャワーを止めた。

どっぴりと考え込んでしまつて忘れていたが、ひよつとしたら結構な時間が経つてしまっているのではないだろうか、気付いたのである。

文字通り飛び出ていった独歩の後ろで、ぴちゃん、と雫の弾ける音がまた一つ響いたのであつた。

どたどたと騒々しい足音が廊下を駆ける。

下の階から苦情が来そうだが、それどころではなかつた。

尾を引くように、乾ききつていない毛先から雫が滴り、きらきらと宙を舞い落ちる。



明かりの点いていたリビングを目にすると、独歩は中へと飛び込んだ。

「す、すみません……！お待たせしました！」

「ほお、顔色が良くなったね。」

何発又いて来たんだい？

オレも誘ってくれば良かったのに」

「な……っ、そ、そんな、してませんよ……！」

「フッフ、恥ずかしがる必要はないだろう？

参考までにつてやつさ。」

あまり溜め過ぎるとカラダに良くないぜ」

猫を想わせる仕草で目を細めたベリアルから、もう影を感じることはなかった

ソファーで寛いでいるベリアルが、薄く笑って言った言葉に、待たせてしまったことへの怒りが込められていないことに、独歩はまず安堵するが、別の意味で慌てふためくことになったのである。

『ベリさんの揶揄いは色んな意味でキワドイから、聞いちやダメだよ独歩ちゃん！』

ふと、以前同居人の言葉が脳裏を過った。

わたわたと視線を彷徨わせていた独歩は、ふとベリアル顔を見たかと思うと、その目を見開いた。

体を起こして自らの膝に頬杖を付いたその顔に、相手の反応を意地悪く弄ぼうとしているのならば、もつと悪い顔をするべきであろうと、心の中で叫んだ。

——優しいのだ、その瞳が、そしてその顔が。

慈愛といっても良いのかもしれない。

かつて一度も誰からも向けられたことのない、あたたかな表情であった。

「……………」

「悪い悪い、少々イジメ過ぎたようだ」

「……………ほんとに、わるいと思っっています?」

「フフフ、思っているさ。」

お詫びにイイものを作ってあげよう」

「……………いいもの?」

「おいおい、そう警戒するなよ。」

まあちよつとそこに座って待っていてくれ」

「あの……………、一応俺の家……………」

「つて、聞いてないよな」

完全に子どもを扱うようなベリアルの言動に、気恥ずかしさと、ムズ痒いような妙な気持ちになる。

じとりと己を睨む瞳に笑みを深めたベリアルは、おもむろに立ち上がると、何故か慣れた足取りでキッチンへと向かった。

一々その言動に突っ込むほうが、無粋なのかもしれないと感じさせるその男に、独歩は深い溜息を吐く。

そうして大人しくソファアに座り、黒い背中をぼんやりと見ていると、暫くしてそれは酒瓶らしきものと、グラスを二つ手に戻って来た。

主に同居人のものであるが、様々な形をした酒瓶が並ぶ。

ほぼ家では飲まないの封は切られていないが、貰い物であったり、気紛れに買って来たりしたものだ。

独歩は、しなやかな指先が動くのを、またぼんやりと見ていた。

ガラスタンブラーに落とされた氷が軽快な音を立てる。

からん、と響いた冷やかな音は、風鈴のそれと同じくらい耳馴染みが良く、郷愁を想わせるものであった。

だが次に注がれた液体によって、その透明感のある爽やかさは崩壊する。

テキーラ、クレーム・ド・カシス、レモン・ジュースを使用し、ジンジャー・エールでタンブラーを満たしたそれは、血を想わせる『赤』をしていたのだ。

「キレイな色だろう？」

目の前に差し出されたグラスに、独歩はただ目を惹かれていた。

禍々しいその色を持ったカクテルは、どうしてか息を呑む程にうつくしいものに見えるたのである。

基本的に仕事以外でアルコールを口にしない独歩にとって、酒は付き合いで仕方なく飲むものであった。

飲んでなんぼであった営業職も、昔に比べると改善されたように思われるが、人間の習慣というのはそう簡単に無くなるものではない。

仕事という大義名分の為に、麻痺なまひさせた舌と肝臓は、酒の味わいや美味しさというよりも、如何に量を飲めるかということに重点を置いたつくりになってしまった。

「……」

「俺はバーテンダーでね。カクテル作りに凝っているんだ」

「……………え？ベリアルさんそれ、本当だったんですか？」

「ふふ、氷が解け始める前に飲んでくれよ。」

「飲むなら濃い方がイイだろう？」

「また、そうやって誤魔化す……………」

「ありがとうございますと、差し出されたグラスを受け取ると同時に小さくぼやいた独歩に、くつりと喉が鳴らされた。短い付き合いではあるが、この男は言葉を『交わす』ことよりも『躲す』ことの方が多くのように思える。ミステリアスな男といえば聞こえは良いが、独歩はベリアルについて何も知らないのだ。

「秘密主義、といえばあの先生にも似た雰囲気はあるな、と独歩は手にしたグラスに目を移す。」

「たふんと揺れる濃い紅の液体は、目の前の男の瞳をそのまま溶かしたような色をしていて、禍々しくも見えるそれに独歩は少しの間見入っていたが、やがて恐る恐るといった様子で、グラスの淵に唇を付けた——。」

「さて、そろそろ本題に入ろうか。」

キミの話が聞きたい」

「あ、……はい、」

とろりとした喉ごしと、血のような見目とは相反する爽やかさに、無心にカクテルを口に運んでいたらしいことに気付いた独歩は、頬を赤らめながら、再びベリアルに視線を合わせた。

手元の赤と、同じような色合いの赤が、じつと独歩を見下げている。

そのことに微かな緊張を走らせながら、独歩はその口を開く。

「一二三は、ここ最近俺のこと変だっって言いましたけど、俺としてはここ数日……なんと  
いうか、やけに楽しかったというか、そんな悪い気はしていなかったんです」

「……」

「寧ろ、一二三と先生が何で必死になって、俺に色々言うのになんて。」

……最悪な、ことを言います、正直、その」

「疎ましかった？」

「そんな、こと……っ！」

「キミも、不器用なニンゲンだ。」

力を抜くことを知らないらしい。

オーケイ、そんなキミにオレがレクチャーしてやろう」

「え……？」

「折角カクテルイイ潤滑油があるんだ、楽しもうぜ。

溜まっているモノ全部、オレに吐き出してみるよ。

……キミのドロドロとした濃いモノを、飲み干してあげる」

テーブルの上にグラスを置いたベリアルの、落とされた声のトーンに、まるで耳元で囁かれているかのような錯覚に陥る。甘ったるいその声に、脳が揺れる感覚がひどく心地良かった。

気が付けば、独歩の口は勝手に開いていて、濁流の如く言葉が流れ出していたのである。

「そう、そうなんです。俺はこんなにも気持ち良いのに、何で皆止めるんだ……？」

俺が苦しんでいる時は、何も、何もなかったのに。何故、満たされている時に、色々言ってくる？

邪魔だったんだ。そう、ベリアルさんの言うように、疎ましかった。

俺が『こう』なったのは俺自身の所為だ、それを否定するつもりはないんです。でも、俺には、こんな生き方しか出来ないから、だから、何を言われようとも、ヘラヘラ笑って、じつと耐えて……。

本当は、聞きたかった。それなら俺はどうすれば良かった？俺は、俺の……生きる、意味は——。

わからない、わからないけど、ただ、否定はしないで欲しかった」

「……キミは、悪魔の浸蝕によって満たされていた。

だからこそ、それを邪魔するものへの苛立ちが募っていった」

「ええ、おかしな話ですよね。こんなの。

だってあなたと俺は、出会ったばかりなのに、それなのに、一二三よりも俺を知っている。

いや違う、あいつを否定するつもりも責めるつもりも、ないんです」

「わかっているさ。キミの苛立ちは、キミ自身でさえも制御不可能であった。

暴発寸前だったんだ。そして意図せずその引き金を引いたのは……」

「……」

「フフフ、それにしても良く頑張ったじゃないか。

本人の前では堪えていたんだろう？」



「……そんなんじゃないんです。」

単にその時はシヨックで、何も考えられなくて。

会社で仕事をしていても、その言葉が離れなくて」

「ふむ……。歯に引つ掛かっていたそれを、漸くそこで咀嚼したってコトか」

「今、思えばそうなんでしょうね。」

何で彼の言葉が引つ掛かっているのか、やっとわかった時にはもう遅かった」

ぐと呷るようにカクテルを流し込んだ独歩は、悔いるように目を閉じる。

そんな独歩の中にある渴望に、ベリアルは気付いていた。

「さぞ、気持ち良かっただろう？」

「……………」

「溜まっていたモノが一気に昇りつめて、解き放たれる快感は代えがたいものだ。」

沸き立つ脳汁アドナリン、ソレだけのことしか考えられなくなる脳内、お預けを喰らっていた分

その快楽は深みを増す。……忘れられなくなるくらいに、ね」

「……。ははっ、参ったな。全部知って、いるじゃないですか」

「そんなことはないさ」

「……ベリアルさん、つて、嘔吐きなんですね」

「ふふ、心外だね。オレは嘘というモノを知らないんだ」

溜め込んだ怒りという感情を爆発させたその瞬間に、体中を駆け抜けた快楽を忘れられずにいたのだ。

我慢に我慢を重ねていた精神が、解き放たれる快楽は半端なものではなかった。

それが癖になってしまったのかもしれない。家に帰っても、病院に行っても、少しのことでも人に噛み付く凶暴性を、受け入れつつあったのは。

そんな独歩が本当の意味で我に返ったのは、あの日同居人がこのベリアルを連れて来て、憶えてはいないが己に憑りついていったという『悪魔』を引き剥がした時からであった。

正気に戻ってから、今までのことを思い出して、頭を抱えるどころか飛び降りたくなつたが、何よりも独歩を悩ませたのはその快楽に依存してしまっている己自身である。

「後遺症つてやつさ。」

快楽に、依存性があることは身を以てわかっているだろう？

特にキミのは、悪魔による性質の悪いものだ。

前にも言ったように、本来ならもう既に自我を失つていても可笑しくはない」

「……情けなくて、しかたないんです

そうやって助けてくれたのに、俺は……」

「一応言っておこう。

このまま快樂に流されて、壊れるのも一つさ。

人間であることを捨ててしまえば、二度と苦しみを味わうことはないんだ。

まあ生も死も関係なくなるんだけどね」

「……っ、それは、嫌……です」

「何故そう思う？」

「だって、俺は……！俺が、選んだ道を逃げ出すことはしたく、ないから。

どんなにどうでも良い人生だとしても、それでも、全てを捨てて楽になるなんて、望んでいない」

「フフフ……。わかったよ、キミがそう言うのならば」

独歩の耳には、もう外の雨音は聞こえてないなかつた。

——甘い残渣を残す声。それが悪魔の囁きと等しいものであることを、彼は知り得な

い。

妖しさを滲ませたそれが、いつからか心地の良いものとなる。

調整コントロールされた抑揚が穏やかに鼓膜を揺らす。

己のどうしようもない思いを、婉然とした微笑を浮かべつつ傾聴し、決して否定の言葉を口にしない。

独歩は、雑多なこの空間が、教会の懺悔室にでもなったように感じていた。

実際に行つたことはないが、テレビか何かで見たことがあつたのだ。神聖という排他的な雰囲気を感じながらも、悩める人間を拒まずに受け入れるというかの場所を。

一つ、二つと瞬きをする内に、目の前の男の瞳がぼやけていく。

雨粒に濁らされたネオンの光のように、朧に輝くその赤は……まさに完成された美しさであつた。

「それでキミは、オレに何を望む？」

「俺は、ただ俺自身を、……取り戻したいんです」

「嘘吐ダウトき」

穏やかな笑みが、歪んだ。

嘲笑するように、憐れむように、それは独歩を見下げる。

「なら問おうじゃないか。

キミ自身は、一体どっちなんだ？」

「え？」

「怒りを振り翳すキミも、我慢を貫くキミも、どちらも同じモノだろう？」

なら何故、欲望を開放する自分をそんなに否定する？」

「……ちがう、違う……！俺は、」

「キミが、手にしたモノはそう悪いものじゃない。

それを免罪符にして、何をしたっていいんだぜ？」

……今回ばかりは、キミが主役さ」

「……やめ、て、ください……俺、は」

「ならオレの目に映ったキミを見てみるといい。

どんな顔をしている？嘆いている？悲しんでいるのかい？

いいやキミは、愉しんでいるんだよ」

「やめろ……!!」

「キミが重視するのは、秩序？正義？調和？」

もちろん、くだらないとは言わないさ。

でも……。それって、何のためのものか考えたことは？」

「っ、」

「汚い人間が、汚い矜持を守るために立てた、醜いルールさ。

頭を回してみろよ。キミがそれを守っても、それはキミを守らない。

使用済みの汚物コンドームと同じだ。いざとなったら、キミを徹底的に否定して糾弾する。

だから、キミ一人が理性を飛ばしたところで、何の問題にもならないのさ」

「……やめてくれ！もう……それ以上、今の、俺を……肯定しないで、……お願い、だから、」

「ぶふ、おねだりの仕方が違うんじゃないかい？

オレはキミの本性を暴いてあげているだけだよ」

己を守るように俯いて自らの手で耳を覆った独歩の、悲痛な叫びにベリアルが耳を貸すことはなかった。

音もなく立ち上がったベリアルは独歩の隣へと腰を下ろすと、白い手が守る彼の耳へと唇を近付ける。

「残念だけど……。」

上辺だけの言葉を、軽々しく吐けるほど軽率な男ではないものでね。それに、そんな生温い同情なんか所詮オトナの玩具でしかない」

耳を塞いでも、目を閉じてても、その赤は独歩に沁み込んでいく。

初めからそれを恐<sup>も</sup>れ<sup>と</sup>めていたとでもいうように。

独歩が今日ベリアルを呼んだ理由を、彼自身噛み砕けずにいた。

己の中に生じる『矛盾』を、誰かに聞いて欲しかった。

怒りの快楽に惹かれる自分を、止めて欲しかったのかもしれない。

だが、そんな自分を否定されるのも、嫌であったのだ。

なんて身勝手な矛盾なのだろうと、自己嫌悪に襲われた時、脳裏に浮かんだのがこのベリアルであった。

しかし、ベリアルは、理性よりも本能を肯定した。

はつきりとは口にしていないが、独歩にはベリアルが言外に『そのままが良い』と告げているように見えたのだ。

手の甲に感じるベリアルの吐息が、生々しく独歩を擦る。

「なあ……。キミの歪で醜い深淵ななみを見せてくれよ。

何ならお互いに見せ合っても構わないぜ。

興奮するんだ、キミのようなニンゲンを見ているとね。

だから、もつと、もつと暴きたくなるんだ」

くすくすと零れる笑い声が、塞いでいる筈の独歩の耳に流れ込んで来た。

先ほどから霧掛かっていた視界に比例して、徐々に思考もぼんやりと曖昧になっていく。

「……心配することはないさ。

最初に言った通り、オレが全部飲み干してあげよう」

その言葉を聞いた直後、ぐるりと世界が回ったかと思うと、体中から力が抜けていくのを遙か遠くに感じた。そのまま意識を失った独歩の体を支えたベリアルは、小さく息を吐く。

「本能では咲くことを望んでいるのに、周りがそれを抑え込んでいる。



根元を縛られて達することも出来ず、たらたらと蜜を垂れ流すしか出来ない。

そしてその密に誘われて来る虫たちが、またキミを刺激するんだ。

ふふ、実に哀れな男だ。萎えることもイくことも許されず、ずっと寸止め状態だなんてね。

想像しただけで、気が狂いそうになるよ。本当に、カワイソウだ」

閉ざされた瞳を覗き込むその顔は、先ほど独歩に見せていた顔とは異なっていた。

快美な優しさは、艶美な妖しさに姿を変え、見るからに毒を孕むその表情が、禍々しさすら感じさせる笑みに歪む。

「——だが、それが堪<sup>イ</sup>らない」

からん、と熱に溶かされた氷が、空となったグラスの赤い残滓<sup>ざんし</sup>へと崩れ落ちる。

低く喉を鳴らして嗤ったベリアルは、ゆっくりと口角をつり上げた。

「覗き見だけじゃ、物足りないだろう？」

そろそろキミも混ざりなよ。

ああそういうプレイが好きなら、もっと見せつけてあげてもいいけどね」

開け放たれた扉から吹き込んだ風に、ふわりと髪が舞い上がった。

## 番外編

## 悪魔の共犯者

ふと自然に目が開いた。

どうやら寝てしまっていたみたいだと、突つ伏した姿勢のままぼんやりと思う。

今年は特に長かったゴールデンウィークもあつという間に終わりを告げた。

次の祝日は遙か彼方である。まあそれも、学生か社会人かでも異なり、社会人であつたとしても職種によってまちまちであらうけれど。

片手に持ったままの携帯に電源を入れる。

表示された時刻を見て溜息を吐き、寝落ちる前に見ていたそれに改めて目を移す。

とあるSNSの小説の一頁である。

最近の二次創作は、個人サイトよりもSNSへアップする人が増えてきたように思う。

そういった手軽さから、二次創作を見る人だけではなく実際に投稿する人も増えて来ているように感じて、毎日チェックする身としては、嬉しいことこの上ないことだ。

二次創作は自由な世界だ。ゲームや漫画といったフィクションの世界のキャラク

ターを、クロスオーバーさせてつくり上げる作品がある。そしてそういった作品の中では、異なる世界のキャラクター同士の会話であったり、戦闘であったり、もしもの世界を迎えることが出来る。

投稿者というのは、物語という船の進路を示す重要な羅針盤である。

羅針盤が狂えば船は迷い、読み手である乗船者に不安と戸惑いを与えてしまうのだ。

しかし安定した旅路というのもつまらない。

あつさりとした船旅は、何の感情も抱けないままに終点を迎える。

海の波打つ衝撃に揺れる船は、様々な感情を乗船者に与えるだろう。

この感情の揺さぶりこそ、人間の記憶に残る交通手形となるのだから。

船と共に味わう喜怒哀楽を乗り越えて、辿り着いたその先が終点といえよう。

……まあ、それがどんなに難しいことかは、言わずもがなといったところか。

なんて、コメンテーター染みた言葉を脳内で転がしながら、再び羅列する文字列の波に乗る。

まさに十人十色の発想で織りなされる数々のストーリーが並ぶ中、それを見つけたのは偶然のことであった。

とあるゲームの悪役であるベリアルというキャラクターが、関連性も何もない世界に干渉する。

しかも彼は、彼ではないもう一人を連れてその世界に飛び込んだのだ。

そのもう一人というのが、主人公であるのはわかるが、どうもはつきりとはしない。二次創作には特殊なジャンルがいくつ也存在する。

クロスオーバーというのも中々なように思えるが、それ以上に特殊なものがあった。それが成り代わりというジャンルである。

良くあるパターンでは、平凡に生きていた人間が、多くの場合『死』というきっかけを得て、フィクションの世界に登場するキャラクターに成ってしまうのだ。

この作品も、はじめはそれと同じパターンから始まった。

ベリアル体を得た彼ははじめは戸惑う素振りを見せていたが、次第に順応を見せていく。……のだが、ベリアル自身の意識もあるらしい。

一つの体に二つの自我を持ち、入れ替わりながら、その世界の住人と交流を進めていくのだ。

そして物語の進行につれて、ベリアルのは明かされてはいく。

それがミスリードか、それとも真実なのかを知るにはまだ情報が足りないだろう。何せ真相を知るものはベリアルしかないのだ。

狡知の墮天司がそんなに素直に何もかもを話すわけではない……。

となれば、考察する余地があるのもう一人の存在である。

謎に包まれている彼は、どうも『とある男』のようにも思えて仕方がないのだ。

そんなことを思っていると、再び眠気が襲ってくるのを感じた――。

\*\*\*

「やあ。初めましてというべきか、久しぶりというべきか。

キミはどれだと思う？」

揺らぐ空間に、聞き覚えのある声とその姿に、これが夢であることに間違えはないと思つた。

「キミが何処にいたのかで、決まると思うんだけど……。

心在らずといった顔をしているね。もしかして夢だと思つているのかい？

キミがそう思いたいのなら、それでイイさ。寂しいけどね」

ひどく鮮明な夢だ。

耳に残るように発音されているかのような、その抑揚が生々しい。

「フフフ、なんでかって？」

当然だろう？ キミはオレの共犯者パートナーなんだから。

うん？ 共犯者になった記憶はない？

記憶になくとも、キミは今これを「みている」んだ。

そして、オレが此処まで何をして来たかを知っている」

すらりとした身長に、がっしりとした肉体美と非の打ち所のない顔は、まさに完成美といったところか。

そんなところもまた目の前の男の、非現実的な存在感を増していた。

「そんなキミにご褒美をあげようと思ってね。

ああ、警戒しないでくれよ。とてもイイことだからさ。

そうだな……。改めて、これまでのことを振り返ってみようじゃないか」

何かを潜ませる赤い瞳。

それは描写にもあつた通りの、無感情で無機質な硝子玉であつた。口元に浮かぶ笑みとは全く以て合致しない、それをただ見上げることしか出来ない。

「始まりは、あの戦いからだつたね。

ラップバトルだっけか。あの世界では精神で殴り合うらしい。

興味深い世界だよ、本当に……。

何故オレが『彼』をあの大会に参加させたと思う？

……そう、彼にあの世界がどういう世界かを理解してもらふ必要があつた。

オレがターゲットを見つける為にもね。

なんのターゲットかつて？

フフフ……。キミは知っている筈だよ」

長い指先がその顎に触れる。

逐一反応を窺うように、その瞳がじいと向けられていた。

「あの世界のニンゲンたちと関わっている理由も知っているだろう？

そして……オレが最終的に何を目的としているのかも。



ほお、良い質問じゃないか。何故悪魔を刈るのか、ね。  
さて……。キミはどう考える？」

にやりと口元が弧を描く。

綺麗な三日月のようなそれだが、何処か不穏な気配がするのは何故なのだろうか。

「ページを捲る中で、キミの目は何処にあつたんだい？

どの立場で、誰に感情移入し、誰に心を許していた？

それによつてキミの考えも違うだろう。それでいいんだ」

それは物語の中でベリアルが独歩に向けていた、甘い肯定そのものであった。

「そこで、だ。提案があるんだ……。

共犯者たるキミとはある程度情報共有が必要だと思つてね。

キミの質問に答えようと思う。

だから——。条件としてオレと姦淫しないかい？」

誘うように光る赤の瞳を見ていると、身を焦がすほどの炎に飛び込む虫たちの気持ちがわかるような気がした。

「方法は至ってシンプルだ。

キミの思いをオレにぶっかけてくれ。

そしたらまたキミの夢枕に立って、その思いごとしやぶってやるよ。

内容は問わないさ、ただ解答するのはオレだ。

……この意味はわかるよな？」

愉快だと言わんばかりの弾んだ声に、良からぬことを考えているのではと疑ってしま  
うのは……。

このベリアルルの性質を知っているからであろうか。

「フフフ……。さて、そろそろ時間切れだ。

また会えることを願っているよ——」

ベリアルがそう言った途端に、ぼんやりと視界が歪む。

白んでいく世界に、いつまでもその赤は鮮明に残っていた。

\*\*\*

夢を引き摺ったような気怠い頭のまま迎えた目覚めは、只管重々しいものであった。周囲を見渡しても見知った部屋がそこにあるだけで、何も変化はない。手を伸ばして携帯を手にする。

——かさり

携帯の画面の上に置かれた、見覚えのない紙が音を立てた。なんだろうと思って、それを見してみる。

白い紙に添えられた一言は、差出人のサイン替わりにもなっていた。

『欲望の吐き捨て先を示そう。』

放置プレイもイイが、折角なんだノツてくれるだろう？

語り合おうじゃないか、たつぷりと……ね』

\* 続く?  
\*

## 悪魔の共犯者Ⅱ

結局その上質な洋紙へとペンを滑らせたのは、自分の中の好奇心に負けたのであって、まさに悪魔の囁きとも誘惑ともとれる言葉に屈したのではない……と思いたい。

今日も今日とて慣れ親しんだ布団へと身を投げる。

同時に枕元に置いた携帯に手を伸ばし、日課をこなすためにホームボタンを押した。その時である。不意に鼻を擦った香りに、はっと辺りを見回そうとして……。

「やあ、特異点。逢いたかったよ」

気が付いた時には、寝転がっていた筈のベッドも手にしていた携帯も無くなっていった。目の前で小馬鹿にしているようにも、笑っているようにも見える、その二つのルビー

が輝く。

「うん？不思議そうな顔をしているね。

ああ。フフフ……これは失礼。

とあるヒューマンと同じ顔をしていたものでね、ついそう呼んでしまっただけさ」

くつくつと、意味深な笑みが零れる。

それにしても此処はどこであろうか。

前とは異なる場所であることは、一目見てわかった。

照度の低めに調整された広い部屋に、光沢のあるカウンターテーブルと脚の長い椅子が並んでいる。

所々に置かれた蠟燭の淡い光が、薄暗い部屋をシツクな雰囲気へと飾り立てていた。

テーブルの向こうに立つベリアルの後ろの棚に並ぶ瓶といい、バーのような場所である。

顔を合わせて直ぐに誰かと間違えられたらしい。

悪びれる様子もなくそう言うと、彼は椅子に座るように促した。

「オレのことが気になって仕方なかった？」

それは悪かったって。でも……キミも、イケないんだぜ。

あまりに濃厚なモノをたつぷりとくれるもんだから、吟味あじみに少々時間が掛かってね。

まあその分、ゆつくりと舌先せんたんから根本まで、啜すすえて、しゃぶつて……フッフ、堪能させてもらったさ」

透けるような……いや、むしろ青白い指先に白い紙が挟まれていた。

それは自分の中の好奇心に敗北して、書き出してしまったものであった。

「さて……。散々焦らしてしまっただろうから、早速ヤろうか。

オレも限界が近いんだ」

背中を緩やかに曲げてテーブルに頬杖を付いたベリアルは、此方に視線を合わせる。

浮かべる笑みは何処その不思議な国に出て来る猫を連想させるものだ。

「ねえキミは、自分が自分である証拠って何だと思う？」

……ああ、突然過ぎたかな？

他の人間と何が違うのか、考えたことは？」

空のワイングラスを指先で掴んだベリアルは、意図のわからない質問を口にした。

「キミがオレのことを何処まで知っているかはわからないが……。

オレは狡知を象徴とし司るモノだ。

即ちオレがオレとして個を成す理由は、創造主から与えられた役目があるから。

それに……純粹無垢な乙女なんてツマラナイと思わないかい？」

小さく溜息を吐くと、再び口元に笑みを刻む。

「何故オレが、狡知であるのか。何故狡知は狡知なのか。

フフフ……。それはオレが、気持ち悦いことが好きだからさ」

くつくつと喉が鳴る。

その言葉の意味は、わかるようでわからない。



「ああ、そうだ。言い忘れていたケド、これは一問一答にしよう。

オレの回答に満足イできないなら、何度でも相手ケしてあげる。

イイだろう？ キミとの会話を、長く愉しみたいんだ。

ん？……狡いつて？ だって狡知だもん」

此方の回答に、ベリアルが答える。

だが再び質問したいならば、もう一度あの紙に書いて送らねばならないようだ。効率が凄く悪い気がするの……。

「なあ？ 別に疑問だけじゃなくてイイから、付き合つてくれよ。

そうだ、悩み相談にでも乗ってあげようか。

こう見えてオレはカウンセラーなんだ」

それを察したように、小さく首を傾げて、じいと思つめる。

ヒトを惑わす悪魔というのは、本当に性質が悪い。

「ふふ、アリガトウ」

まだ何も言っていないのだが、と言ってもきつと聞いてはくれないのだろう。そんなことを思っていると、ベリアルは突然自らのドレスシャツのボタンに手を当てた。

「そうだ、キミはこの服をどう思う？」

オレは元の世界ではデザイナーでね。中々センスがイイと思うのだけど……。

露出が多い？そうかい？だって服は飾りだろう？

知性なき獣と区別するため、秩序を保つため、……『敬語』と同じさ。

一枚脱ぐ度に本能を取り戻していくんだ」

わざとらしい動きをする指先が、視線を誘う。

「要するに、オレはこの服を気に入っているんだ。

此方の世界でもそう目立つものではないし……。

え？目立つって？なら、キミがデザインしてくれるかい？

……なんて、冗談さ」

片目をぱちりと瞑ってみせると、おもむろに体を起こしたベリアルは、後ろの棚にある瓶を何本か取り出した。

「キミの好きな飲み物は？」

並べられた瓶のラベルを見て、その中の一つを指差す。

「回答だけじゃ、退屈だろう？」

——乾杯しようじゃないか」

洗練された、という表現はこういう時に使うのだろう。

優雅な手つきでワイングラスへと注ぐと、此方へとグラスを差し出す。

「キミは『主人公』の正体について、非常に興味を抱いている。

オレとの関係性、オレが抱いている感情……。コレが気になるんだろう？  
素晴らしい審美眼を持っているじゃないか。

うん？ 賤してなんかいないさ。褒めているんだよ」

うつとりと目を細めたベリアルは、くるりとグラスを回した。そのグラスに入った血のような色の液体が、重々しく揺れる。

「カレは、欠片さ。オレにとつてとても大事なもの。」

そう。……共犯者キと同じくらいね。

嘘臭ミいって？ そいつは酷いな」

そう言つて目を伏せると、グラスの淵を指でなぞる。

「フッフ、キミはオレのことを良く知っているようだ。」

カレの中にいるのが……ファーさんだと思つているのだろうか？」

常に張り付けられていた軽薄な笑みが、一瞬消えた。

「キミがその考えに至つた理由を、当ててあげようか。」

一つ、オレのカレに対する態度

一つ、カレの言動

一つ、……カレの変化」

ぺろりと、その液体のように赤い舌が己の唇を這う。

それを見てみると、頭の中に蛇が浮かんできた。

「だがどれも確証がない。中途半端で……もどかしい。

今キミは寸止め状態ってワケさ。つらいだろう？だが、それがイイんだ」

ぎらぎらと赤い瞳が、燃えるように輝く。

「そしてキミは、オレにとってファーさんがどんな存在かを知っている。

だからそんなキミに提案があつてね」

視線。その視線が、有無を言わせてはくれない。

「勝負をしよう。ルールはシンプル。

カレの正体が明かされるまでに、決定的な証拠を掴んでオレにぶち込むことが出来たら……キミの勝ちだ。

その時はそうだな……。キミの望みを一つ叶えよう。

安心して構わないよ。悪魔は契約やくそくには煩いからね」

喉奥に隠した笑みが、時折零れ落ちる。

信用できない、いや信用してはいけないのだろうその甘やかな言葉の裏には、何が隠されているのだろうか。

「ああ、そうだ。

この世界のニンゲンは、また違った面白さがあると思わないかい？」

勝手に進行していく話に溜息を禁じ得ない。

問いかけておきながら、此方に決定権はないのだろうか。

「お気に入りにはいるのかって？」

フフフ、オレは元々子犬のようなタイプが好きでね。

擦り寄って来るように懐柔して、ある日突然突き放す。

するとどうだ、戸惑いながら泣きそうな顔をして追い駆けて来るんだ。

ああ、ぞくぞくする。なんて哀れで、——馬鹿なんだろうってね」

ふと浮かべたその……愛でるような、慈愛の瞳。

だけでも、背中に走るこの寒気は何だろう。

「キミのおすすめは？」

……ああ。カレか、趣味が合うじゃないか。

最も、オレが共犯者パートナーに選ぶくらいのニンゲンなんだから、当然かな？」

くすくすと笑ったベリアルは、再びテーブルへと頬杖を付いた。

「さて、名残惜しいが……。

そろそろ乾杯フナイナレの時間だ。

キミがこの時間を気に入ってくれたようで、嬉しいよ」

目の前の二つのルビーは、終始奥深い何かを浮かべていた。

「続きはあるかつて？」

言っただろう、キミとは長い付き合いになるとね」

ベリアルはワイングラスを手にすると、此方へと向ける。

「では……また、夢で。サヨウナラ」

——かしやん、とグラス同士のぶつかる音が、小さく大きく耳に響いた。

\* 終わり \*



## 本編

### 悪魔、降臨せし時⑰

開け放たれた窓から吹き込む夜風に、ふわりとカーテンが舞い上がった。靡いた髪がぱらぱらと落ちていき、黒を基調とした服の上を滑る。

床に、長い影が伸びた。しなやかな爪先が、フローリングを踏みつける。

「そうそう。キミは、出会った時から『そんな目』でオレを見ていた」

「……」

「だから直ぐにわかったよ。キミは、オレと似ている」

「……」

「ふふ、だんまりかい？」

それともいつもの雄弁きは、キミの本性を隠すべールなのかな」

「言いたいことは、それだけか？」

「おっと、怒らないでくれよ。」

興奮するだろう？」

姿を現したその男は緩慢な足取りで、ソファーに座した悪魔へと近付く。

初めから気付いていたのだろう。ベリアルはその顔を見上げると、いつものように微笑む。

その膝の上には、赤毛の男が意識を失ったように目を閉ざしていた。

「何を盛った?」

「軽い睡眠薬さ。おくすり」

ひどい顔をしていたからね」

「軽い……? 冗談じゃあない。」

「これは市販品のもので、も正当な治療薬でもない……!」

「流石、ホンモノのお医者さんだ。」

「コレは匂いがキツイんだけど、効き目は抜群なんだ」

「……ベリアル、君は」

「安心してくれよ。危害を与えるつもりはないさ。」

「キミだつて聞いていただろう?」

「俺は心理学に心得があつてね。」

「こうやって、心を病んでいるニンゲンの話を聞くのが得意なんだ」

「……君の口ぶりは、……洗脳のそれだ。」

心弱い人間は君の言葉を、簡単に飲み込むだろう」

「洗脳？オレはただ、ありのままを肯定しただけだぜ。」

間違っていることを正しいと教えることは必要だ。」

「ただ、間違っていることを否定することは……果たして正しいのかな？」

「それは、私たちの独歩くんに対する態度が間違っていたと言っているのかい」

「フフフ……。キミは、少々物事に対して穿ち過ぎるきらいがあるようだね。」

確かにキミの目は素晴らしい。洞察力も観察力も、大したものだ。」

常に一歩引いたところから客観的に物事を捉える、なんて。お手本のような医者じゃないか。」

探る視線と、それを揶揄う視線が絡み合い、言外に互いの意図を伝え読み合う。

ぐったりと眠る独歩の相変わらず顔色は良くないものの、その寝顔は安らいでいた。

テーブルに転がっている包装シートに書かれている名前へと目を滑らすと、正当な薬とは言えないものの害はないことは良く知っていたので、取り敢えず安堵する。

その会話を聞いたのはただ偶然であった。

独歩を訪ねようと連絡しても応答はなく、何かあったのかと思ひアポなしで乗り込むと、玄関先に置かれていた見覚えのある靴に思わず上がってしまったのだ。

ちなみにカギを預けたのは彼の同居人である。万が一のことがあった時にと、心配した彼が手渡ししたのである。

そうしてリビングに入る前に聞こえてきた会話に、その足は止まった。

『そう、そうなんです。俺はこんなにも気持ち良いのに、何で皆止めるんだ……？』

俺が苦しんでいる時は、何も、何もなかったのに。何故、満たされている時に、色々言ってくる？』

邪魔だったんだ。そう、ベリアルさんの言うように、疎ましかった。

俺が『こう』なったのは俺自身の所為だ、それを否定するつもりはないんです。でも、俺には、こんな生き方しか出来ないから、だから、何を言われようとも、ヘラヘラ笑って、じつと耐えて……。

本当は、聞きたかった。それなら俺はどうすれば良かった？俺は、俺の……生きる、意味は——。

わからない、わからないけど、ただ、否定はしないで欲しかった』

それは、悲痛の慟哭であった。

それが、彼の本心であった。

己の患者が、友人が、決して自分にも、同居人にも、口にしなかった叫びであった。

それを引き摺り出した男は、甘ったるい声で、無責任な言葉を連ねる。

だがそれを問ひ掛けたかったのは――。

「そう。キミは、否定も肯定もしなかった。

興味があつた筈さ。自分の患者が、どう壊れていくのかについてね」

「……わかつているだろう、ベリアル。

私は、」

「フッフ……。もちろんさセンセイ。

キミにも立場つてもものがある。

カレの暴力的な感情を肯定するわけにはいかなかったんだろう」

「気にはしていたんだ。だが、どうしてもそれを認めるわけにはいかなかった」

「……本当に？」

「何が言いたい」

「本心を言ったってイイんだぜ？」

「此処にはオレとセンセイしかないんだ」

「……穿っているのは、君の方だよ。ベリアル」

「そうかい？それなら、似た者同士ってことだろうね」

その視線の使い方といい、言葉の抑揚のつけ方といい、催眠術にでも掛けられているようだ。と寂雷は眩暈のする目を抑える。気が付けばコントロールされそうになるのだ。だがそれと同時に、マイクを通さなくとも、このベリアルという男は精神攻撃が出来るのだろうか、彼は自分の中の好奇心が疼くのを感じた。

「フッフ……。その顔は、オレに興味があるって顔だ」

「否定はしないさ。私はキミに興味を持っている。」

「それこそ出会った時からね」

「いいねえ、中々熱い告白じゃないか。オレもキミのような男はタイプでね。」

「好奇心で動くタイプの、ニンゲンは……わかりやすくてイイ。」

「興味があるものには熱烈に。だが興味が無いものには冷酷に。」

「最高だよ。無理矢理にでも姦淫したくなるくらいには……ね」

挑発的な目をしたベリアルが、そう言つて寂雷へと微笑む。

それを見た寂雷は、前から抱えていたベリアルに対する違和感を再び思い起こした。『あのラップバトル大会の会場で会つたベリアル』と『今自分の目の前にいるベリアル』は、何処か違うように感じた。職業柄異変を察知することに長けていた寂雷の目には、どうも目の前の男が、初めて会つた時とは違う存在のように思えてならなかつたのである。

もし違ふとするならば、考えられる可能性はいくつか挙げられる。

その中でも一番現実的なのは、解離性同一性障害（人格）をはじめとした精神的な疾患や、双子の存在であろうか。寂雷は別に精神を専門としているわけではないが、ヒプノシスマイクにより攻撃を受けた人間の治療を行っていることもあり、少し踏み込んだ勉強したことがあつた。

だがそれを口にするには憚られた。

ベリアルは別に己の患者でもなく、そもそも今は友人として接しているのだ。

それに根拠がない。この飄々とした男が、真実を口にするとは到底思えなかつた。

考え込むように目を細めた寂雷に、ベリアルはふと笑みを零す。

「フフフ……。キミがもし、植え付けられ開花を迎えたら……」

ぼつりと落とされた眩きに、寂雷は首を傾げた。

だがベリアルはそれ以上言葉を続けることはなかったのである。

「まあ安心しなよ、センセイ。

あともう少しすれば時が来る。

元凶さえやってしまえば……。元通りさ」

「ふむ。確かに、突発的な暴走は治るかもしれないが……。

それは本当に治癒したとは言えないだろう」

「おいおい、コイツはキミのペットなのか？」

そこまで面倒を見る必要はないだろう。

怒りという感情は誰にでも持ち合わせるもの。

それを消すよりも、発散してあげればイイ話だ」

「……。発散、か」

「まあそれについては、キミの好きにすれば良い。

そうだ。別件で、一つキミに頼みがあるんだが……。



——聞いてくれるかい？」

ふわりとカーテンの影が動いた。

再び吹き荒れた夜風に寂雷の髪が、舞い上がる。

床に落ちた影が扇状に膨らみ、やがて滑らかに落ちていった。

薄い笑みを浮かべた唇から告げられた言葉に、寂雷はそつと目を伏せたのであった。

\*\*\*

降り続く雨が、コンクリートに覆われた東京の大地を濡らす。

その灰色の地面は所々劣化しており、窪みや罅割れに雨水が溜まっていく。

——ばしゃ、ばしゃ、

薄く水の溜まったそれを蹴り上げ、無心に走る影があった。

時刻はもう深夜を指示しており、その影の主の出歩く時間はとつくに過ぎていくように思える。

艶やかな黒髪は、雨に打たれ水が滴る。鳥の濡れ羽色というがまさにその色をしていった。

あどけなさの抜けない齡の少年は、まるで何かを追われるようにひた走る。左右で異なる色合いをした瞳からは、恐怖が滲み出ていた。

「はっ、……はっ、は……あ」

乱れ荒れる息を整える間もなく、一郎はただ足を動かす。

「——待て」

突然一郎の前に、人影が飛び出てきた。

随分大柄で筋肉質なそれは、見知らぬ男で。

よくよく見ると日本人離れた堀の深い顔立ちをしていることがわかる。

弱弱い街灯に照らされ、浮き立つ青い瞳が一郎を見下げていた。

「こんな時間に何をしている、少年」

「っ!! アンタには……っ、カンケーねえ、だろ……っは、あ」

迷彩服に身を包んだ一見外人にも見える男に、一郎は思わず怯んだ。

しかしそれと同時にずくりと胸に沸き起こった衝動に、やべえと心の中で呟いた彼は、立ち塞がった男を睨み上げる。

「この国は青少年保護育成条例が制定されている。

少年のような年齢の子供の出歩き時間は、この場所だと午後11時〜午前4時までだ」

「つち、うるせーよ、てめえには、かんけーねえ、……つ、ぐ、……」

「……? どうした、怪我でもしているのか?」

「っ、さわん、な……。くそ、また……。抑え、らんね……。っ」

元々表情を表に出さない性格なのだろうか。

警官のように固い口調と表情から、もしかしてこの男は見回りの警官なのだろうかと一郎は思った。しかし男の服装は上下ともに迷彩服で、警察関係者の着る服ではない。

どくり、と震えた心臓に思わず座り込んだ一郎は、顔を覗き込むように地面に膝を付いたその男が伸ばした手を振り払った。おそらくは心配して伸ばしてくれた手なのだろうが、それに気を回す余裕はもはやなかったのである。

「つ、……おっさん、離れ、な……つ、」

「む。小官はおっさんでは……、——っ!!」

どく、と更に大きく脈打った心臓が、まるで戦えとでも言っているかのように震えた。決して抑えることのできない激しい衝動が、再び彼を襲う。

兄貴分でさえも、手に掛けてしまった一郎はもう歯止めが利かなくなっていたのである。

込み上げてきた深い怒りに、理性を奪われていく。

何故、何に対して、怒りを感じているのかすら、わからないまま。

考える余地はなかった。いや、思考すら怒りに支配されていたのかもしれない。

気が付けば一郎はまた、その拳を振り上げていたのだ。

「……ふむ、理由はわからんが、わかった」

無茶苦茶に振り下ろされた拳を掴んだ男は、そこで初めて一郎の目を見た。

ぐるぐると滲み出る『異様な』憤怒を目の当たりにしたのである。

そしてすぐに男は、一郎が正常な状態ではないことを察した。

この街には色々な人間がいることを彼は知っていたので、その表情はブレることはなかった。暴力が支配する世界で生きる人間、薬に乱された人間、そしてヒプノシスマイクに影響された人間などを彼は山ほど見て来たのだ。

実はこの男、警察ではないが、ある意味で似た職業に就いていた。

なので、一郎から薬の匂いがしないことや、その様子から男は一郎がヒプノシスマイクによる影響を受けた人間ではないかと推測したのである。

「……っーな、……この、力は、」

不意に、掴んでいた筈の一郎の腕が振り解かれる。物凄い力であった。

一度後ろに飛んだ彼は、再び男へと飛び掛かる。

男は反射的に素早い動きでそれを受け止めたが、先ほどとは比べ物にはならない力に押し負けたのだ。

ばしゃん、と地面に溜まっていた水を弾く勢いで転がった男は、すかさず伸びて来た追撃に蹴りを放つ。

男の長い脚がその腹部に命中したかと思うと、一郎は大きく吹っ飛んだ。

しかし宙で身を反した一郎は軽やかに着地をすると、体を起こしかけていた男に馬乗りになる。

そして足で腕を抑え付けると、容赦なく無防備となった顔を殴り始めたのである。

「つ、ぐ……、あ……、」

一郎の軽い体など、男からすれば直ぐに撥ね退けられる筈であった。

しかし何故か体が錆ついたように重く、動かせない。

どれ程力を入れようとも、指一本動かなくなっていた。

「……………」

「ふっ、ふふふふ……あはははは——!!」

男は自分を殴り続ける少年の顔を見上げる。

目を庇うために細められた視界の中で、赤くなつた拳を振り上げる一郎は……笑つていた。笑いながらも大きく見開かれた目から零れ落ちる。彼は笑いながら、泣いていた。

狂気的なその表情であったが、男はその中に深い悲しみのようなものを感じた。

男は思わず手を伸ばすが、段々と強くなつていく力に押し返され、骨すら砕かんとする力に圧倒されてしまったのだ。

「おい……っ、正気に、戻れ……！」

叫ぼうとも、掠れた声しか上げられない。

何かがおかしかった。

少年とは思えない相当な力で殴られ続けたからだだろう、男は段々と視界が霞んでいくのを感じる。このままではいけないともう一度抵抗をするために、体に力を込めて……。そしてふと、耳元で何かが弾けたのを聞いた。

——ぱしやり、と水を蹴るような音であった。

「見つけたぜ、坊や。

つたく……欲求を解消するのはいいが、ちよつとオイタが過ぎないかい？」

頭上から降って来た第三者の声は、その低さとトーンから男性のものであることがわかる。すると、男に押し掛かっていた重さがなくなったかと思うと、少年の体がふわりと浮いたのだ。

突然現れたその男にむんずと首根っこを掴まれた一郎は、ぴたりと動きを止めた。がくりと項垂れたかと思うと、ぐるりと一郎の目が動きと男を睨み付ける。

それは、この世のものとは思えない形相であった。

「あ、あ、ああああ!!……離せ、はなせ……ハナセ……!!」

その声はノイズ混じりのひどく歪なもので、寒気すら感じる。

初めに聞いた少年の声とはかけ離れたそれに、地面に伏せた男は目を見開いた。

「あーあ。こんなに咲いちやつて。

敏感なんだね、キミ」

呆れつつも笑みが混ざった声で、その男は平然とした顔で一郎の目を覗き込んだ。



「…………ふむ、まあいいや。」

「摘出手術の準備は整っているから、イイ子にしてくれないかい？」

「グ、アアア……オマエ、……………ナゼ、」

「んん、元気なのはイイことだが……。」

「そんなに元気だとやり難いんだよな。」

「そうだ、そのキミ……見たところまだ精力が残っていきそうだね」

「…………つ、ああ、問題、ない……………」

「フフフ……。絶倫だね。最高だよ。」

「ご自慢のモノを出しな。オレとズリ合おうじゃないか」

ベリアルがいつの間にか手にしていた骸骨マイクに、ふら付きながらも身を起こした男は自らのマイクを取り出す。トランシーバーのようにも見えるそれを握り締めた男は、指示を待つかのようにベリアルを静かに見据えた。

「オレとしては直接やり合った方が早いんだが……。」

「まあこっちの方が、効率はいイからね」

ふと口元に笑みを浮かべたベリアルが指を鳴らすと、そこはあつという間にラップ用の会場と化す。

ベリアルからすると随分遠回りな手段となるが、敢えてそれを選んだのには理由があった。自分の世界とは異なる世界に身を置いて以上、最大の禁忌はこの世界の存在を殺めることである。それを避けるためにも、これは有用な方法といえよう。

「……っ、兄、ちゃん、」

「少しは正気に戻ったかい？」

だがキミには、少しお仕置きが必要なようだ」

溜息に隠されるように吐き出された言葉は、誰にも聞こえることはなかった。

虚ろな目をした一郎もまた、自分のマイクを震える手で取り出す。

すると少しだけ、その濁った瞳に光が戻る。

「さて、巻き込まれただけのキミは現状理解が不十分だろうけれど、昇天するほどの快楽を与えよう。だから、少し我慢してくれないかい？」

指示はオレが出そう。キミは黙って身を委ねてくれれば良いさ」

そう言つて片目を閉じて見せたベリアルに、男はただ黙つて頷いたのであった――。

「おっと……!」

鳴り止んだ音と同時に周囲は元居た場所へと姿を変える。  
崩れ落ちた少年の体を受け止めたベリアルは、ふうと息を吐いた。

「怪我は？」

「問題ない」

「そう。それは良かった。」

……キミのは大きくて、サイズもぴったりだ。

もう少し味わっていたが、此処までにしよう。

中々楽しめたよ、アリガトウ」

「……?」

「フフフ……。此処でお別れということさ」

「待ってくれ、上官」

「ん？」

「まだ理由<sup>わけ</sup>を聞いてはいない」

「……。納得できない、ということかな」

「……。いや、それが貴方の命令ならば、」

「わかったよ。付いて来るといいさ」

「……………」

戦いの中で何度か指示を送っているうちに、いつしか男はベリアルを『上官』と呼ぶようになっていた。頭の回転も速く、的確で、真つ直ぐな男をそう邪険にはしないように、十センチ以上差のある身長を見上げると、ベリアルはそう言つて折れたのである。

ぱつと目を輝かせた男はベリアルが抱えている一郎を受け取ると、歩き出したその黒い背中を追う。

そうして、ネオンの光が入り乱れる街の中へとベリアルとその一歩後ろを歩く男は消えて行つた。

霧雨のような細かな雨が降り注ぐ空は、分厚い雲に覆われてどんよりと暗い。

そんな空とは裏腹に、その男の足取りはとても軽いものであったのだ。

## 悪魔、降臨せし時⑱

宵闇に紛れるように、霧雨の中を歩いていく。

東京の都心であっても、こう天氣が悪いと人も少ない。

いつもならば深夜を回つてもぼつぼつと人が歩いているのだが、今夜はしんと静まり返っていた。

大通りを避けるように路地に入り、迷路のような道を迷うことなく突き進む背中を、黙つて男は追い駆ける。

そうしてどのくらい歩いただろうか。前に行く背中がぴたりと止まった。

「どうやら、此処のようだ」

濡れた髪を掻きあげたベリアルは、その建物の中へと入っていく。

そこは、新しくはなさそうだが小奇麗な印象を受ける所謂雑居ビルであった。

二階へと上がると自動扉を一枚隔てた先に、受付らしきカウンターが置かれていた。

中は煌々と明かりが点けられており、中が良く見えた。

所々にこの場所の名前だと思われる文字や、受付時間らしきものから、此処は診療所であることがわかった。だがこのような診療所が深夜にやっているものだろうか、と男は首を捻る。

「とりあえず、奥に寝かせてくれるかい。

キミの怪我の治療はその後にしよう」

そう言ってベリアルはいくつかあるうちの扉の一つを指し示した。

一つ領いた男はその部屋の中に入ると、担いでいた一郎をベッドに寝かせる。

「アリガトウ、それじゃあキミはこっちに……」

いやその前にシャワーを浴びると良い。

その肌にはびたりとくっついた服を、替えないとね」

水の滴る、まではいかないが男もベリアルも濡れ鼠状態であった。

どうやらこの診療所には、シャワー室が設置されているらしい。

男の頭から爪先まで、視線を這わせたベリアルは自らの顎に手を当てながらそう提案

した。

「しかし、濡れているのは上官とて同じ……。

小官は慣れている故、先に、」

慌てたような素振りです。男はベリアルを見た。

黒々とした髪から落ちた雫が、その首筋を伝っていく。

毎日のように訓練を行う男は身体ともに鍛え抜いており、その程度濡れただけでは支障はない。

良く理解はしていないが、男にとってこのベリアルは恩人にあたる。

義を重んじる男は、性格上それを無視することは出来なかつたのである。

「さつきはあれほど従順にオレの指示を聞いてくれたじゃないか、なあ？」

「……。承知、した」

「フフフ……。Good boy  
いいコだ」

ふと男を見上げた、その赤い瞳は有無を言わせる気はないようだ。



交わった視線に、ぐと息を飲んだ男は一つ頷く。

そしてすつと背筋を伸ばすと、静かにその頭を下げた。

それにしても一つ一つの動作が型に嵌っている男である。

女性のそれとは違い固く機械的ともいえるが、高潔でうつくしいともいえよう。

身を返してシャワー室へと向かっていく迷彩の背中を見つめ、ベリアルはゆるりと目を細めた。

「また、拾ってきたのかい。ベリアル」

「今回は拾ったわけじゃないさ。付いて来たんだ」

「……それで私に彼の手当てをしろというんだらう？」

「良くわかつているじゃないか、センセイ」

「はあ……君は人遣いが荒いね」

「フフフ、それはキミが使えるからさ。」

「それに協力を申し出たのは、誰だっけ？」

「ふつ、君に言われた通り私も少し欲を出そうと思っただけね。」

「また興味深そうなことを企んでいるんだらう？」

「だから、君の掌の上で暫くは大人しくしておくよ。」

その方が尻尾を掴みやすそうだ」

「……抜け目がないなあ、キミも」

「それが好みなんだろう？」

「フフフ、……わかつているじゃないか」

視界の端に白色が映るのと、その口元が弧を描いたのは……ほぼ同時であった。紫の髪を結び上げ白衣を纏った寂雷は、手袋をした手でベリアルベリアルの頬を拭う。

「随分、男前な顔をしているね」

「知らなかったのかい？元からさ」

「ふふ、気付かなかったよ。」

「……それで彼の名前は？」

「ああ……そういえば聞いていなかったな」

「はあ。相変わらずだね、君は」

頬に手を当てた寂雷は、深い溜息を吐いた。

口振りでは興味のあるように装っているが、その根本は基本的に他者に興味を微塵も

持っていないのだ。

それを示すように、ベリアルはヒトの名前を呼ぼうとはしない。

「まあ、彼のことはセンセイに任せるよ」

「あのねえ、ベリアル……」

「おや、オレの為に踊ってくれるんだろう？」

……ひよつとして、アレはリツプサービスそだったのかい」

「……わかったよ。男に二言はないさ」

ふう、と息を吐いた寂雷は、口元に笑みを浮かべる。

何処か妖しさを漂わせるベリアルのそれとは違い、慈愛という言葉が似合う笑い方であった。

寂雷はまだベリアルの思考も、腹の中も見抜いているわけではない。

だが匂わせるミステリアスさも、彼が彼たる所以であることを飲み込んでいた。

「……君は、まるで蛇のようだ」

「……それは、褒めているのかな？」

「さあ、ね。じゃあ頼んだよセンセイ」

どのような相手であれ、一度全てを飲み込受け入れるむ。

そして体内へと取り込んだ相手を、じわじわと溶かし消化していく。

まるで、そう大蛇の如く。

瞳に滲む慈愛のそのもつと奥に鎌首を擡げる不穏な光を、ベリアルは見ていたのかも  
しれない。

ゆつくりと瞬きをした悪魔は、寂雷に背を向けると奥の部屋へと消えていった。

「……蛇、か」

かつり——と靴音を響かせベリアルとは反対方向に足を進める。

そして窓辺へと辿り着くと、壁に身を預け外に視線を向けた。

暗い空から降る雨は、涙のようで。

弾ける雨だれの音が、声のようで。

このような日は決まって、彼を追想へと誘う。

小さく息を吐いた寂雷は自らのヒプノシスマイクを顕現させると、それに絡みつく蛇を指先で撫でる。

ベリアルが発音した『蛇』という言葉に、彼は『医学の象徴』たる杖を思い出していた。

医神として現在も医学の象徴的存在となっている、アスクレピオス。

ギリシヤ神話に登場し、優れた医術の技で死者すら蘇らせたという神が手にしていたのが『アスクレピオスの杖』だ。

その熟達した技術で死者蘇生すら成したアスクレピオスは、冥王ハデスに「世界の秩序を乱すもの」として訴えられ、全能神ゼウスに雷で撃ち殺されたという。

「人が人であるが故に、免れない——四つの苦しみ。

生まれること、年をとること、病気をすること、死ぬこと……」

神宮寺寂雷は日本で彼を知らぬものはいない、世界的な名医として、そこに君臨していた。だが彼自身はその肩書に意味を見出していなかった。

彼は知りたい答えを、探している。それだけなのだ。

人の生を、死を、そしてその先にあるものを、真摯に捉えようとしている。それだけ。

報酬を顧みず、答えを得るために奔走する彼を人々は御仏のようだと言う。

確かに彼にとつて、患者一人一人は大切な存在だ。

そして同時に、一人一人が答えを得るための欠片セントなのである。

こう表現すると、まるで彼の医者としての在り方に語弊が生じるかもしれない。

助けを求める人々の手を決して振り払うことのない寂雷だからこそ、その心は常に求め続けている。それだけのことなのだ。

「*The sole meaning of life is to serve humanity.*  
「人生の唯一の意義は人のために生きることである」

寂雷が良く口遊む言葉。それは彼の座右の銘でもあり、その心を表すものであった。

思想家・説教者としても活躍したロシアを代表するとある文豪の名言は、彼が深く感銘を受けた言葉だ。

常に自分のためではなく、人のために在ること。それは医者としての、在り方であった。

『キミが重視するのは、秩序？正義？調和？

もちろん、くだらないとは言わないさ。

でも……。それって、何のためのものか考えたことは？』

『汚い人間が、汚い矜持を守るために立てた、醜いルールさ。』

頭を回してみろよ。キミがそれを守っても、それはキミを守らない。

使用済みの汚物コンドームと同じだ。いざとなったら、キミを徹底的に否定して糾弾する。

だから、キミ一人が理性を飛ばしたところで何の問題にもならないのさ』

だからだろう。嘲りを含んだその言葉は、声は、彼の心の深く刺さった。

寂雷とて神ではない。助けようにも助けられなかった患者を多く看取ってきた。

その中で一番残るのは、唐突に失われた命を嘆く遺族の声であった。

——何故？——あなた医者でしょう？

——どうして？——助けてくれなかったの？

——なんで？——この人が死ななければならぬの？

彼らは感情が滅茶苦茶になり、行き場のない思いを突発的にぶつけただけ。

それは良くわかつているし、その苦しみも悲しみも憎しみも……。わかつて、いた。

それでも尚、治療にあたった医療関係者を、そして医者を含み続ける人間もいる。

寂雷はそれに反抗するつもりはない。寧ろそれで少しでも心が休まるのならば、いくらでも受け入れた。

しかし彼もまた、人間である。

その肩書や経験に比例して、心の何処かに蟠りを積み上げていつていたのかもしれない。

医者であり、そして名医である彼を対等に扱うものは少なかつたことも、その原因だろう。

医学の世界は功績がものをいう、色々な意味で人間らしい世界である。相談できる相手も、心を許せる相手も、いないに等しかつた。

だから、己の感情を吐き出せるラップを好んだのかもしれない。

だから、己の感情を見通しているかのようなベリアルに協力しているのかもしれない。

『なあ……。キミの歪で醜い深淵なかつみを見せてくれよ。

何ならお互いに見せ合つても構わないぜ。

興奮するんだ、キミのようなニンゲンを見ているとね。

だから、もっと、もっと暴きたくなる』



もしかしたら、あのベリアルという男は――。

そこまで考えて一度寂雷は思考を止める。

あの男について考えれば考えるほど、迷宮の奥へ奥へと手招かれているような気がした。

それ以上はいけないと、己の中の何かが止める。

それ以上進めばきつと、己の中の何かが変わる。

……そんな気がした。

「I swear by Apollo the physician, and Aesculapius,  
医の神アポロン、アスクレピオス、――」

気が付けば寂雷は、『命』を背負った日に口にした誓いの言葉を口にしていた。

それは、医師の職業倫理に関するギリシャ神への宣誓文であり、彼が医者としての意義を見失いそうになった時に口にする、初心に戻るための呪文でもあった。

「……Hippocratic Oath  
ヒポクラテスの誓い」

「……！」

ぼつりと呟いたそれは、静かな診療所に小さく響いて消えていくだけ……の筈であったが、とある声がそれを拾い上げたのだ。

驚いて振り向いた寂雷は、迷彩服からラフな服に着替えたその男を見て、再び笑む。患者に対しても柔らかく接する彼の微笑は、とても優しいものであった。

「聞いたことが、ある」

「ほう、知り合いに医学関係者がいるのかい？」

ヒポクラテスの誓いは、自ら人を診る立場としてどうあるべきかを示した神への誓いの言葉なんだ」

「……。ああ、確か軍医に聞いた」

「軍……。そうかい。」

ああ、そうだ君の名前を教えてもらって良いかな？」  
「すまない、申し遅れた。」

小官の名は毒島メイソン理鶯、理鶯と呼んでくれて構わない」

「理鶯くん、ね。私は神宮寺寂雷。」

今はまあ、ベリアル専属の医者つてどこかな」

理鶯と名乗ったその男は、筋骨隆々とした長身の男であった。

その体つきであるので、軍という言葉が彼の口から出ても特に驚くことではない。

会話をしつつ寂雷はさり気なく目を動かして、観察する。

頬が腫れ、口角に血が滲んでいる。歯は抜けていなそうだ。口を中心とした顔に外傷、それ以外は異常はなさそうである。これなら消毒で済みそうだと治療方法を決定した。

ベリアルに関わってから何だかんだで呼び出されているので、専属という言葉も間違つてはいないだろう。そう言っておどけるように笑った寂雷に、理鶯は首を傾げる。

その様子を見た寂雷の笑みが、苦いものになつた。

「まさか、お互いに自己紹介をしていないとはね……」

君を此処に連れて来たあの男はベリアルというんだ」

「……ベリアル、殿」

「さて、理鶯君。そこに座ってくれ。

治療をしよう」

「別に、大した怪我では……」

「ふふ。これもベリアルからの『指示』なんだ。

我慢してくれるかな？」

「……承知、した」

ベリアルの名を出すと途端に従順になる理鶯の様子に、寂雷は内心で弱みでも握られたのではと考えたが、その表情が何故か輝いているようにも見えたことから、即座に否定された。

理鶯が軍に属しているのであれば、基本的に規律正しく生真面目な性格であろう。

もちろん全ての人間がそうとは言えないだろうが、お手本のように背筋を伸ばして座り、次の指示を待つかのように黙したまま寂雷を見上げる理鶯は、それに当てはまることが想像できた。

消毒液とガーゼを取り出した寂雷は、いくつか理鶯と言葉を交わす。

「此処は、閉院した診療所なんだ」

「……閉院？それにしては清潔で、水回りもしっかりしているが」

「ああ。つい先日閉じたばかりだね。

院長が私の知り合いだったから、譲ってもらったんだよ。

研究所にでもしようかと思っただけど、暫くはこのまま使いそうだ」

「……………？、そういえば、先ほどの少年は……………？」

「一郎くんのことかい？」

彼は、ベリアルの知り合い、かな。

少々ワケありだね。手術が必要な状態なんだ」

「……………病気、なのか？」

「……………。そう、だね。」

心配することはない。摘出すれば直ぐに回復する筈さ」

「……………」

「うん。これで大丈夫だよ。」

もしまた痛みが出たら言ってくれ」

「感謝する、先生」

かしやん、とアルミのトレーにピンセットと血の付いたガーゼを置いた寂雷が、にこりと微笑む。

理鶯は静かに頭を下げると、青い瞳を再び寂雷に向けた。

「ベリアル殿は……」

「一郎くんの様子を見ている筈だよ」

「そう、か」

「理鶯くん。君は帰らなくて大丈夫なのかい？」

「ああ。……問題ない」

「なら泊つていくといい。」

「この診療所は仮眠室もあるんだ。好きに使ってもらつて良いよ」

「ありがたい言葉だが……。先生たちは？」

「私とベリアルのことなら気にしなくて良い。」

「おそらく時間が掛かるだろうからね」

「だが……。いや、……。わかった。そうさせてもらおう」

寂雷の話を聞いた理鶯は、小さく頷いた。

正直疑問が多くあつたが、今、それを聞くのは何となく憚られたのである。

「すまないね。また明日……。ああもう今日か。」

朝になったら話そう」

「承知した、ではまた朝に」

謝罪の言葉を口にして眉を下げた寂雷に、理鶯は強く首を横に振る。

そもそも押し掛けたのは此方なのだからと立ち上がると、もう一度深々と頭を下げた理鶯は仮眠室へと向かって行ったのだ。

「……」

その背中を見送り、寂雷もまた立ち上がる。

そして奥の部屋へと続く扉へと、手を掛けたのであった。

## 悪魔、降臨せし時⑬

ざああああ、と激しさを増していく雨脚に、ちらちらと雷鳴が混ざり始める。

薄暗い診察室の備え付けられたベッドの上で、ぐったりと身を横たえた一郎が眠っていた。

厚い雲に絡むように雷光が点滅し、その度に一郎の白い頬に陰影が浮かぶ。穏やかな眠りとは程遠いであろう顔で、眠る一郎をじっと見る影があった。ベッドに腰掛け、足を組んだその男の、赤い瞳が暗い部屋に浮き上がる。

「もう少し育ててあげても良いケド……。

少しオイタが過ぎるんだよねえ、キミ」

欲が欲を呼び、欲が悪魔を呼ぶ。

人間は欲がなければ死んでしまう生き物であるが、身に余る欲によって溺死することもある。

ベリアルからすれば、人間は善と悪の間に置かれた天秤だ。



どちらかに傾倒する人間も、上手くバランスを取る人間もいる。

その中でベリアルが好むのは、完全に傾いたものであった。

人間に特別興味があるわけではないが、どうせ関わるのなら面白い人間の方が良い。

あくまでも獲物を引き寄せるための撒き餌に過ぎないが、退屈はしていないのも事実であった。

「まあ、今回は運がなかった。ということにしようか」

ベリアルはその手を一郎の胸へと翳す。

すると紫掛かった黒い霧が、ベリアルの手を包み込んだ。

「グ……、」

「オハヨウ、お目覚めかい。」

「じゃあ死オんヤんでくれ」

淡々と言葉を紡いだベリアルは翳していた手を、そのまま振り下ろした。

間一髪のところを身を翻したそれは、高く跳躍すると、ベリアルの前へと降り立つ。

「ほう？大分ニンゲンの体に馴染んでいるじゃないか。

さては相当お愉しみだったようだね」

左右異なる色をしていた瞳が、不気味な赤色に輝く。

人のそれとは異なる禍々しいそれが、ベリアルを睨み付けた。

それをふと鼻で笑うと、激情を湛える瞳とは真逆の赤が、冷やかに流される。

底冷えをするような瞳に、一郎の形をした悪魔は身を強張らせた。

「き、さま、……！ベリアル、ナゼ、ニンゲンを庇う……！」

ワレラを裏切るつもりか、」

「フフフ、下級悪魔と一緒にはしないでくれよ。

そもそもキミらのボスが厄介なことを仕出かしてくれたのが原因なんだぜ」

本能ではわかつてはいた。かつて天司たちを統括した男の片腕として、君臨していたこの墮天司に敵うことはない。しかし同時に解せなかった。この世界に散らばった

『七つの大罪』は、ベリアルには関係はしない筈だ。態々世界を越えて、しかも人間を助けるような真似さえしている。それには何かしらの企みという名の理由があるのだろうが……。

「だが実に、好機よ……」。

貴様のことは、以前より気に食わなかった。

天界そらの存在でありながら、神に抗い地に堕ちた貴様らが、地の底でも好き放題しおつて……！かねてより魔界ちを治めし我が王を追放し、あるうことか地の底へと封じ込めた！

「……そうだったっけ？」

二千年ちよつとばかり寝不足が続いている所為で、記憶が曖昧だね」

「キサマ……！何処まで我らを侮辱すれば……！」

「まあまあ落ち着きなよ。キミにはもう用はないんだ」

肩を竦めながら、興味がないと言わんばかりに視線を逸らしたベリアルに、それは憤怒の表情を示した。

怒り一色に染まった瞳を嘲笑うように見下ろす、一人の悪魔。ちかちかと点滅する雷

鳴が、その顔に影を落とす。ぐと奥歯を噛み締めた『それ』は、苛立ちをぶつけるように床を踏み鳴らすと、ぎろりとした目でベリアルを見据えた。震える手に力を籠めると、人間の爪がまるで鷹のように鋭利なものへと変わる。薄く開いた唇から覗くのは、獐猛な獣のような牙で。

——雷鳴が轟いた、次の瞬間であつた。

ぴかりと放たれた雷は目を眩ませ、微かな隙を生じさせる。

その隙を突くように、床を蹴り上げた『それ』は、その爪を、その牙を、剥き出しにしてベリアルへと飛び掛かつたのである。

「シね……い！」

眼前に迫るのは、肉を削ぎ落し内臓を抉り出すほどの鋭さを持った悪魔の爪と牙。眉一つ動かさずに、ただ足を組み替えたベリアルは、ゆるりとその口角を上げた。

\*\*\*

——かちちゃん、

ピアニストのような指から、零れ落ちたチップがテーブルの上でくるくると踊る。

自然と手から擦り抜けていったそれに、何か嫌な予感を憶えるのは、落とし主がジんクスを信じるタイプの人間であるからであろうか。

明け方に近い時刻。客のいないカジノに一つの人影があった。

肩に掛かるほどに長い夜空色の髪を流した男の、その明るい色味の赤は、照度の落とされた部屋の中で浮き立つ。落ちたコインを拾い上げた帝統は、一つ息を零すと、暗い空を仰ぎ見た。

ヘブンツリーは、何処にいても空を見ることができる構造となつている。至る所に張り巡らされた、特別性の窓に天氣が良ければ、果てのない大空がうつくしく広がる。ヘブンと聞くと、多くは天国という意味で用いられるが、大空という意味もある。

その名に相応しい空と共に在る塔だが、生憎この夜は暗澹とした雲に包み込まれていった。

「……昨日も帰らなかつたしな」

小さな眩きと共に、磨き上げたチップを一つ、一つ、積み上げていく。

自分以上に風来坊で神出鬼没な彼の雇い主は、先日ふらりと帰って来たかと思うと、

『拾い物』を置いてまた何処かに行つてしまった。『拾い物』は昏々と眠り続けており、目を覚ます素振りすら見せない。

帝統は特に命じられたわけではないが、時折その様子を見に行つていた。何かが、起こっている。

ベリアルや寂雷の様子を見て、帝統はそう確信していた。

しかし何が起こっているのか。それを問おうにも、本人が不在ならどうしようもない。

それに、ただではきつと教えてはくれないだろうことも予想が付いていた。

ベリアルという男は無知を嫌う。彼と行動してそれだけはわかつていた。

だから、帝統は契約通り『情報』を集めた。

そもそも彼がこのカジノで働き始めた目的は、それであった。

このカジノを訪れる人間は、何かしら重要な立場にいる人間たちである。

ゲームの間に、そしてゲーム前後に交わされる会話は、とても重要な意味のある会話が殆どであった。

もちろん、それらは他言無用が暗黙の了解であるが、帝統は彼らの話を記憶し、ベリアルに報告していた。所謂スパイのような業務内容だが、報酬も良く、尚且つ気紛れ勤務で構わないとのことであるので、彼にぴったりの仕事であったのだ。

何気なく働いているうちに、いつの間にか気紛れ勤務が普通の勤務へと変わっていった。

目の前で繰り広げられる熱いゲームも、狡猾な駆け引きも彼の興味を誘うものであったし、帝統の目を盗んで行われるイカサマも見応えがあつた。良くイカサマの共犯になつてくれとチップを握らされた時もあるが、そこは相手の手腕を見抜いた上で対応していた。これについて、ベリアルから言われたことは『尻尾を掴まなければ、ご自由に』であつた為にそうしているのだ。言い換えれば、尻尾を掴まれた瞬間ゲームオーバーとなる為、共犯になるにせよリスクが伴うので、慎重に選択しなければならなかつた。

そうしている間に、帝統の洞察力及び観察力は鍛えられていた。

元来優れていた直感力も、嗅覚もより鋭くなつたと思う。

これは久々にゲームをしに行つた時に気付き、自分でも驚いたものだ。

「なーんか、つまらねえんだよな」

帝統が明け方のこのような時間に仕事場にいるのは、偏ひしえに眠れなかつたのである。

自室として許された部屋から出た帝統は、ベリアルが帰つて来ていないのを確認する

と、何気なくこの場所へ足を向けた。そして積み重なるチップの輝きが鈍いことに気が付いて、磨き始めた。

ちまちまとした地味な作業は好きではないが、ギャンブル道具であり仕事道具となれば話は別である。

その器用な指先を動かして、無心にチップと向き合っていた彼は、そうして自分の心の整理を付けていた。

コンクリートの地面を打つ雨音が激しさを増していく。

今の空模様のように、晴れない心の原因がわかった気がした。

「……兄ちゃん、いつ帰ってくっかな」

読み切れてしまうゲームほど、退屈なものはない。

それならパチンコでもスロットでも、機械を相手にしていた方がマシである。

だが対等の、いやそれ以上の相手であるならば、これほど興奮して熱くなれるものはないだろう。

もしも今、ベリアルにリベンジしたら前よりは良いゲームが出来るのではないか。

そう考えると、彼の中にあつた退屈が段々と薄れていく。



手にしていたチップを重ねた。積み上がったチップは綺麗に磨かれており、シャンデリアの控えめな輝きを反射して鋭く光る。それに満足げに笑った帝統は、少しずつ感じ始めた眠気に、再び部屋へと戻ろうとした。

「おう……こんな時間に電話か」

ポケットに入れていた携帯が振動し、帝統はその足を止める。

そして表示されたその名前に、彼は慌てたように指を動かしたのであった。

\*\*\*

ぼたり、ぼたぼた――。

血肉を抉り突き立てられたその間から零れ落ちる赤が、青白い肌へと流れていく。そうして落ちる赤が、黒に染み入り吞まれていくのを、ベリアルはただ見ていた。

「いいモノを持っているじゃないか。

キミのその太いモノの所為で、オレの大事なトコがぐちやぐちやだよ」

剥き出しの首筋に、その牙を突き立てたそれは、勢いのままに首にある太い血管を嘯コトドみ切った。この程度で殺せはしないだろうが、相応のショックを与えることは出来る筈だと考えたのである。動きを停止させることぐらいは可能であろう、そう思っていた。

「余裕ぶって抵抗しない」様子のベリアルに無意識に挑発されていたのだろう。何故避けようとしなかったのか。それを考えるには、頭に血が上りすぎていた。

「オレをイカせることは出来なかったようだが、良い目覚ましにはなった。フッフ、お礼代わりに一つ教えてあげる」

何やら嫌な予感がした『それ』は、牙を引き抜こうとするも、ベリアルの手によって頭を抑え込まれ身動きを封じられる。抉り取った肉から次々と血が溢れ、舌先から喉奥へと流れていく。吐き出そうにもできず、鉄の味のそれを喉を上下させて飲み込んだ。人間の血肉であれば糧となり力となるが、悪魔の、そして極めて上級のそれは、毒にしかならないのだ。

次第にぼんやりと波打ち始めた意識に『それ』は、悲鳴を上げようとするも、それすら封じられている。

動くこともできず、淡々と口から毒を流し込まれ……殺される。はじめからそれが狙いであったのかもしれない。やはり敵う相手ではなかったのだと、白んでいく視界に『それ』は目を閉じた。

「思考を停止させた奴ほど、操りやすいものはないのさ。

天司だろうが、悪魔だろうが……人間だろうがね」

蔑むような嗤い混じりのその声は、消えていく『それ』に届いただろうか。

悪魔の牙から人間の歯に戻り、爪も同様に貝殻のようなそれに戻る。

傷口を抉っていたものが抜けたことで、ベリアル of 皮膚は再生を開始した。

一郎の口周りに散った血を服の袖で拭う。

薄く開いた口内や歯には、ベリアル of 血が残っていたが、起きたら自分でどうにかするだろうと、そのままベッドに寝かせた。染み込んだ血によって固くなり、血の匂いを漂わせる上着を脱ぐと、壁に掛かった鏡に視線を映した。下級とはいえ、悪魔によって傷付けられたそこは少し治りが遅い。だが問題なく組織が塞ごうと蠢いているので、時期に元通りになるだろう。

——コン、コン、コン、

結局一步も動くことはなかったベリアルは、そのノック音を聞いてそこで体を動かした。

「ベリアル?……入る、よ、……!」

「ああ、キミかい。もう問題はないさ。

……暫くは、ね」

「っ、!いや、それは良かったけれど、どうしたんだい?

ひどい怪我じゃないか……!」

「問題ないよ。直ぐに塞がる」

「そんなわけな、っ……!?!」

結わいた紫混じりの灰の髪と、真っ白な白衣が先ず視界に飛び込んでくる。

ドアを開けた寂雷は、ベリアルの首を見て盛大に顔を顰めた。

一般人であれば失神していたかもしれない、グロテスクな光景が突然現れたのだ。当然の反応であろう。寧ろそこで悲鳴を上げなかったのは、流石若くして熟練した医者というべきであらうか。

ベリアルのは首は、その半分が抉り取られ欠損していた。首には脳へと至る太い血管があるが、それも見当たらない。肉の合間から骨のようなものが見えており、それが頸椎であることを寂雷は察した。

さつと顔色を変えた寂雷はベリアルへと駆け寄ったが、ふと違和感を覚える。

血が、少ないのだ。人の急所である血管が完全に千切られているのにも関わらず、飛び散ったであろう血は僅かであり、傷周りは赤く染まっているものの、それ以外に血痕らしきものは見当たらなかった。

それにこれだけの傷を受けながらも、何事もなかったかのように座り、首を動かして、会話までしている。

寂雷は目を細めると、その生々しい傷口を覗き込んだ。

「……………塞がって、いる……………」

逆再生でもしているように、肉と肉がくっついていき、血管が再生されていく。ありえないその光景に、目を見開いた寂雷だが取り乱すことはなかった。

「……………ベリアル、」

「言つただろう。すぐに塞がるつてね」

「君は、……人間では、」

じくじくと元に戻っていく組織が、皮膚によって閉じられる。

失われた首の半分はもう再生が完了し、傷は何処にも見当たらなかつた。

ありえない。ただただ寂雷は茫然とした考えを巡らせていたが、同時にまるでパズルがびたりと嵌つたような、漠然とした直感を嘔み締めていた。

「さて、本来であれば此処で退場願うか、記憶を奪うところなんだけど……。

キミはニンゲンにしては有能つかえるだし……。」

ベリアルがこの世界にいる条件として、『この世界の人間には手出し無用』が絶対である。

それにベリアルの傷が塞がる過程を目にしている時の、寂雷の『目』は実に好みであったのだ。

とある男を彷彿とさせる『研究者』のそれは、ベリアルを案じ駆け寄つた医者が見せた、好奇心という名の純粹な欲望を忠実に表していた。

神宮寺寂雷という男の本質は間違えなく善である。しかしその深淵<sup>なかみ</sup>までがそうであるとは、限らない。ベリアルには、彼の中で揺れる天秤が見えていた。そして傷口を覗き込んだ瞬間、その天秤がとある方へと傾いたのが……。

「キミの質問に答えよう。」

「ご明察の通り、オレはニンゲンではない」

「……」

「ふふ、驚いているようで驚いていないね。」

「勘付いていたということかな？」

「いや……。わからないが、納得している自分がいるんだ。」

「今まで君が見せた言動から、只者ではないとは思っていたけれどね」

「ふうん？」

「ベリアル、ひよつとして君は天使なのか？」

「……」

「……ベリアル？」

「うふふふふ……、ははははははっ！

天司ね、オレがそう呼ばれるのは、何千年ぶりだろう」

「……………」

「ああ、本当にキミは勘が良い。

今のでわかっちゃったかな？」

「…………君の名前は、…………まさか、本当に？」

「答えを出すのは、いつだって人間の役割さ。そうだろう？」

まさか本名だとは思っていなかった。

『悪魔の中で最も狡猾で、うつくしく、悪徳に満ちた墮天使』

そう謳われた悪魔が、目の前の男なのだろうか。

寂雷は乾いていた唇を舐める。

そうだとすれば、惑わすような言動も、誘うような仕草も、このベリアルの本質なのだ。

「フフフ……。警戒しているのかい？」

「何故、悪魔が悪魔を追う？」

「ほう、素晴らしい柔軟さだ。彼とは大違いだ」



「彼……?」

「ふふ、オレの空の玩具さ」  
おともだち

人の形をしておきながら、人ではない存在。

とんでもない事実をすんなりと飲み下した様子の寂雷に、ベリアルは目を瞬かせる。人が悪魔に抱く感情は、大きく分けると畏怖と嫌悪であろう。それは、天使は善い存在で、悪魔は悪い存在だと誰しもが教わっているから。

しかし寂雷の、その瞳は凧いでいた。

畏怖に震えるわけでも、嫌悪に騒ぐわけでもなく。

ただ事実を事実と受け止め、ベリアルを見据えていた。

ふとベリアルの口元が弧を描く。

反吐が出るほどの真っ直ぐなそれには、憶えがあつた。

「手に入れたいものがある。

これは大サービスだぜ、センセイ」

そうやって立ち上がったベリアルは、寂雷に背を向けた。

知らなくて良いことを教え、人間を惑わせるのは古来からの悪魔の手口である。嘘に一滴の真実を混ぜればそれは嘘ではない。ベリアルは嘘と甘言の中に、微かな真実を投げ落とすのを好んでいたが、その言葉は紛れもない真実そのままであった。

「もう寝ると良い。きつとイイ夢が見れるだろう」

首だけを動かして振り返ったベリアルは、そう言つて笑つた。そうしてそのまま扉の向こうへと姿を消したのである。

\*\*\*

「……ふ」

残された寂雷は、ゆつくりと顔を上げると空を仰ぐ。

稲光がその顔に光と影を落とし、その瞳をぬらりと輝かせた。

「ふ、ふ、ふ、ふ……。ああ、本当に……」

恍惚を滲ませた声を上げ、寂雷は笑う。

「君には興味が尽きないよ、ベリアル」

寂雷の脳内に、あのグロテスクな傷口が、それ自体が一つの生き物のように再生されていくシーンが何度も何度も再生される。

「……君ならば、私に答えを齎してくれるんだろう。

その為に私は……。君の駒になると言ったんだ」

憑き物が落ちた顔でぐっすりと眠る一郎を見下ろして、寂雷は呟く。  
傷一つないその体を見て、彼はまた一つ答えを見つける。

「例え君が悪魔と呼ばれる存在でも、それが悪とは限らない」

一郎の体に毛布を掛けると、寂雷は立ち上がる。

そして一郎に「おやすみ」と声を掛けると、彼もまた扉の外へと出て行つた。

「……」

彼はそう言ったが、間違えなくベリアルの本質は悪なのだ。

目的の為に手段を選ばず、平気で他者を貶める、まさに悪魔そのものである。

もし寂雷が、求める答えの為に手段を選ばず、他者を顧みなくなつた時。即ち天秤が完全に傾いたその時——。ベリアルは手を差し伸べる代わりに、彼を地へと墮とすのだらう。

「……」

近くで、雷の落ちた音が轟いた。

闇を切り裂くように落とされた一筋の光が、眩く地上を照らす。

強烈な雷光に、その影は照らし出される。

澄んだ青の瞳が、瞬きを忘れたようにそこにあつた。

悪魔、降臨せし時<sup>20</sup>

夜の帳に、光が滲み始めた。

黒から紺へ、橙色を帯びた光が闇を照らししていく。

夜明けと同時に降り続いていた豪雨は止み、澄んだ朝の空気に満たされていた。

朝露の落ちる音が聞こえてくるような静寂。人の目覚めにはまだ早い時間である。

そんな目覚めの静けさを裂いたのは、可愛らしい鳥の囀りではない。

——ぶおおおん、という力強いエンジン音が帝統の気分を高揚させる。

爽やかな空気を全身で感じながら、コートを靡かせて、ひたすらに人気のない道を往く。

颯爽と駆けていく一台のバイクは、何とも彼らしいカスタマイズがなされており、所有物を持ちたがらない彼のお気に入りの一つでもあった。

彼がそのバイクを見かけたのは、ベリアルと行動を共にしていた時である。

都会で生活する彼にとって必需品でも何でもないが、何故か心を惹かれた。

帝統の様子に気付いたベリアルが、珍しく背中を押したというわけだ。

そんなこんなで、手に入れたバイクは、何だかんだ言つてベリアルの足にされている

のである。

もちろん運転するのは、帝統であるので、体よく運転手付きのバイクをベリアルは手に入れたということであろうか。何だかんだ言つて、ベリアルには恩があると帝統は思っている。だから、そう使われることには不満はなかった。出来れば時間帯を考えて欲しいと思うが。

「にしても、突然『スーツ持って来い』だもんな」

普段ならば深い夢の中で、例え携帯が鳴つても気が付かなかつたであろう時間に掛かつてきた電話。偶然、眠れずにいたので取る事が出来たが、まるで謀つたような夕イミングである。度々そのようなことが起こるので、一々突つ込む気はないが、監視でもされているのかと思つてしまう。

そんな夕イミング良く掛かつてきた電話の相手は、言うまでもなく雇用主であった。『スーツが届いている筈だから、持ってきてくれるかい?』と尋ねられたが、それは彼の耳に命令にも等しい響きを与えた。

ベリアル部の部屋を帝統が覗くと、最近良く名前を聞く店の名が刻印された小洒落た箱が置いてあった。宛名の下に『衣料品：スーツ』と書かれていたので、それをそつくり

そのまま持ち出したのである。

「やっべ、もうちよい急がねえと遅れちまう……！」

ふと視界に入った時間に、帝統のバイクは更に唸りを上げることになったのだ。

\*\*\*

何とも騒々しい音が、大通りから外れた路地の一角に響き渡る。

窓辺に立っていたベリアルは窓から、それを見下ろす。

細く、凹凸の目立つ少し荒れた道路を縫うようにやって来たそれは、診療所の前に停まった。

そして颯爽とバイクから降りると、荷物を手にする。

ヘルメットを脱いだ帝統は、髪を掻き揚げると、ふと上を見上げた。

暗めの赤と、明るい赤が交差すると、ぱつと帝統の表情を明らむ。

おーいと手を振る彼に、ベリアルはいつものように微笑んだ。

入ってこいと告げる代わりに、その青白い手で手招いた。

そうして、弾んだ足取りで、帝統は診療所へと駆け上がったのである。

「にいちちゃん！持ってきたぜ、これだろ？」

「……正解だよ。ご苦労サマ。」

「じゃあ開けてくれるかい？」

「りよーかい」

両手で持ってきた箱を差し出すと、ベリアルは目を細めて頷いた。

続いてなされた指示に帝統は、テーブルの上に置かれた錠を手にする。

「それにしても、いきなりスーツなんて何に使うんだ？」

「フフフ……。気になるのかい？」

「そりや、にいちちゃんがスーツ着てるところ見たことねえし」

箱を開けると、嚴重な包装がなされておりそれを取り払うと、落ち着いた色合いのスーツが綺麗に折り畳まれているのが見えた。見るからに上質なそれを見て、帝統は目を瞬かせた。

誰も彼もが同じで、堅苦しいスーツを帝統は昔からあまり好きではなかった。



見ているだけで不自由で、窮屈なそれは彼にとって囚人服にも等しかったのかもしれない。

「規律、統率を象徴する服は嫌いかな？」

まあ、確かにキミの生き方には合わないかもね」

「……」

「だがキミは本能のままに生きる獣とは、違うだろうか？」

機を伺い、狡猾な罫を仕掛け、いざという時に勝負に出る。

ふふ、そういう所は野生的だけど、待てや我慢がウエイトできる分理性的なのさ」

「……それって犬と同じじゃねえか」

「不服かい？ フッフ、冗談だよ」

自分を認めているように聞こえるベリアルという言葉に、帝統は眉を顰めた。

彼を買っているようにも、突き放しているようにも聞こえるそれは、相変わらずベリアルアルの真意を濁すものではない。自分の腹の中を読み取ろうとする帝統に、ベリアルは笑った。

「さて、キミの仕事は此処までだ。

帰ってお仕事に戻ると良い」

「おいおい、そりやねえだろう。にいちちゃん。

折角此処まで来たんだ。最後まで付き合うぜ」

「……ほう。意外だね」

「あのなあ、俺だって餓鬼じゃねえんだ。

それに……気になるからな。にいちちゃんが何をしようとしてんのか」

「フフフ……。なら存分に働いてもらおうじゃないか」

乗ってしまった船から、今更降りようとは思わない。

付き合うなら最後までという面倒見の良さの持ち主でもある帝統だが、今回ばかりは自分の好奇心が優先された行動である。それを隠して、彼は快活に笑った。

それに、ベリアルルの動向にも興味があるのも事実だが、何よりも帰ったらゲームの相手してもらわねばならないのだ。此処で引き下がるなんて、勿体ないにも程がある。と彼は心の中でこつそり呟く。

ばちん、とワイシャツやスーツに付いているタグを切ると、テーブルに鋏を戻した。

「んで、にいちちゃん上着は？」

「ああ。少し汚れてしまつてね。」

「残念だけどあれじゃもう着れないな」

「なら新しいの買えば良いじゃねえか」

「んー。そうなんだけど……。少々面倒でね」

「変なトコ面倒臭がるよなあ……。」

「半裸でいるわけにもいかねえだろ」

「そうかい？オレは楽で良いんだけどな」

「……。通報されて終わりだぜ、にいちちゃん」

「フッフ、……。監禁プレイか。それもやらないとね」

一郎に憑依した悪魔により血濡れとなつた上着は、寂雷により剥ぎ取られ感染性廃棄物として処分されてしまった。故に上半身は何も纏つていなかったのだが、今はスーツを着るとしても、今後困ることになるだろう。

だが、そもそもベリアルルの服は、魔力を練り上げて作ったものであつた。なので即座に再生が可能であり、正直困ることはないのである。なので取り合えず、呆れたような目を向けて来る帝統に、気が向いたら買いに行くのも良いかもしれないと、何とも気紛

れな言葉を返しておくことにしたのであった。

「仕方ねえな、ほら」

差し出されたシャツに袖を通すと、帝統の指がそのボタンを素早く留めていく。

どうやら甲斐甲斐しく世話を焼く気であるらしい。

ズボンやベルトを手渡すと、最後に上着をベリアルに着せた。

「……へえ、案外似合うんだな」

「フッフ、それは何よりだ。」

キミも着てみたらどうだい」

「……気が向いたらな」

一つ一つが洒落た作りをしており、ベストやワイシャツはベリアルの特徴に合わせ作られたような色合いをしていた。意外にもネクタイの締め方を知っていた帝統は、その首元にまた一つ色を添えた。

気品高く仕立てられたスーツは、どうやら未完成であつたらしい。

それをベリアルが身に纏ったことで、完成したのだと思えるほど、全てがびったりと当て嵌まっていた。

ほう、と思わず息を零した帝統は、少し高い位置にあるベリアルの顔を見上げる。

「そんで……。俺は何をすれば良い？」

「フッフ、簡単なことさ——」

蝶がその羽を休ませるが如く、ゆつくりと細められた瞳。

その優雅さに似合わぬ不穏な光が、奥深くで瞬いた。

\*\*\*

「上官」

後ろから掛けられた声に、ベリアルは足を止める。

そのような呼び方をするのはこの世界では一人であるので、振り返らずとも誰であるかはわかった。

その長い脚は、いつもよりも少し歩幅を大きくするだけで、あつという間に距離を詰めることが可能だ。

横に並ぶことはせず少し下がった距離で、理鶯はベリアルへと敬礼した。

軍に所属する彼にとって、それは自然な動作であった。

しかし、出会ってまだ一日も経っていない相手に対してそれをしたことに驚いたのは、他でもない理鶯自身であったのだ。

「うん？ どうしたんだい」

「……いし、失礼した……いし」

典型的な縦社会である軍組織に浸かりきった理鶯は、敬意を示すべき相手にそうすることに疑問を感じたことはないし、守るべき相手に尽くすことは苦痛と感じたことはなかった。少なくとも彼自身が軍人として、その軍服を身に纏った瞬間から『とある瞬間』までは。

社会に生きる人間であれば誰しもがぶつかる可能性のある壁。とある日に理鶯はそれ**にぶつかったのだ。**

彼にとって一番の苦痛は、敬服せざる上司じょうかに、礼を尽くすことである。とはいえ、色々

な同僚や上官と仕事をしてきた理鶯は、その対応の仕方やあしらい方もそれなりに熟知していたつもりである。

しかし、彼にとって悪夢の日は突然やってきた。人間的に態度が悪いだけではなく、仕事に関しても無能な人間という最悪な上官が、直属の上司となり、早速任務のため戦地に飛んだ。

結果的に司令塔が機能せず、彼の所属するチームに多くの負傷者が出たのだ。その中には理鶯の友人がいた。理鶯はただただ戦慄した。このままでは、一人の上官の力不足で大事な友人が、チームが壊滅してしまう。だが彼にできることは何もなかった。上層部を動かせるような力も、下剋上を目論む力も、彼は持っていなかったのである。そう、理鶯にはどうにも出来なかつたのだ。

その反動であつたからなのかもしれない。

偶々訪れた夜の街で、突然現れたその男の的確な指示に胸を打たれたのは。

この男ならば、自分を上手く使うだろう。たった数分の間で彼の胸の中にそんな確信が生まれていた。

それを『縫い』と呼ぶのだろう。ベリアルを見る理鶯の目に、それは映っていたのだ。

「フッフ……。愚直なニンゲンは、嫌いじゃない」

す、と流れたその瞳が理鶯を見る。

だが今の彼には、その赤に映った侮蔑を理解することは不可能であろう。

ベリアルにとって、『信仰』は『思考停止』を意味するもの。故に、迷いを抱え何かに縋ろうとする彼の姿は、一種の思考停止なのである。

ベリアルには、それが都合が良かった。なので態々それを指摘しなかった。

つくづく運の悪い男だと思っただけである。そこには同情も哀れみもない。ただの事実であった。

しかし、そんな彼をベリアルは突き放しはしない。

その理由を上げるのならば至極簡単なことである。そのようなニンゲンは扱いやすく、好きに操りやすいことは何よりも知る存在であるし、古来より悪魔とはそうやって神の造った人間を惑わせ続けて来た。

それとは別にもう一つの理由が存在する。

ベリアルの前には、軍で鍛え抜かれた肉体が、些か窮屈そうにスーツに収まっている。日本人離れしたガタイの良い体は、中々にベリアル好みであるのだ。

もう少し年を重ねて成熟をすれば、かつて何処かで見た『黄金比』と同等になる可能性を秘めていると、ベリアルは考えていた。更に言えばその瞳である。澄んだ青に見える



隠れする、絶望や失望、悲しみや怒りといった負のそれ。天秤の如く揺れるそれは、もどかしくもあり、愉快でもあった。

「なあ、キミは何色の空が好きだい？」

「空……？空は、青いものだと」

「どうして？」

「……それは、」

「太陽と共に青空があり、月と共に夜空がある。

これは理でも何でもないのさ。ただそうである必要なんてない」

「……」

雲が晴れ快晴を迎える青い空を見上げたベリアルは、唐突に問い掛ける。突拍子のない問いに、疑問符を浮かべながらも理鶯は真面目に返答をした。彼らしいその答えに、ふと笑みを浮かべたベリアルは静かに目を伏せる。

「俺は青よりも赤い空の方が好きでね。

そうだな全てをゼロへと戻す、業火のような赤が良い。」

「つ、赤、は……」

「赤は嫌いかい？」

「……火が、熱が、俺の大事な物を奪っていく。」

毎晩毎晩、そんな夢に魘されて……。そうしている間に苦手な色に、

トラウマともなっているのだろう。毎晩のように理鶯は、傷ついた友たちの夢を見ていた。

夢は更に悪い結末を彼に見せつける。死んでいない筈の友が、惨たらしく死んでいるのだ。

毎晩毎晩、いつその事もう殺してくれと叫びたくなるほど拷問まがいの仕打ちを受けて、やっと死んでいく。その周りに散る夥しい血と、炎の赤が、目覚めた後の理鶯に残り火となって燦る。

満足に眠ることの出来ない日々が続くにつれて、理鶯は赤色を忌避するようになっていた。

「大事？キミが大事にしているものって？」

「戦友。苦楽を共にした……。掛け替えのないもの」

「ふうん、だが彼らは同時にキミの足枷になっているのだろうか。」

「あし、……かせ……?」

「立派な両翼モを持ちながら、キミは飛べないのでなく、飛ばうとしない。

抱えられない重りが枷になっているから」

「……そんな……! 貴方まで、見捨てろというのか!」

俺は、彼らがいいたから此処まで生きて来れた! 彼らは家族も同然であり、守るべきものの一つだ!

それを、それを……切り捨てろと!」

「キミは今、共闘者ではなく……守るべきものと言った。

それが答えだよ。」

如何に理鶯が強靱な精神を持っていたとしても、堪えきれないことだつてある。

大きく揺らいでは傾き、を繰り返していたその天秤が遂にとある一方へと傾こうとしていた。

夢ではない、現実の中にある鮮やかで暗い二つの赤が、理鶯に闇を見せる。

夢とは違い、逃げることの許されない忌まわしい赤が、理鶯を闇へと誘う。

理鶯はまた絶望した。ペリアルル言葉の一部は、自分が失望した上司と同じもので

あつたのだ。

動揺に目を見開き拳を震わせる理鶯に、ベリアルはうつそりと囁く。

「それにキミの答えは、もう出ている。

だからオレに付いて来たんだろう？」

それだけを言うと、踵を返して理鶯に背を向ける。

ベリアルからすれば全ては戯れに過ぎなかつたが、時間つぶしにはなつたと、腕に巻かれた時計に視線を向けた。

「……。俺は」

先に行くベリアルの背中を見つめながら、理鶯はふと夜のことを思い出した。

仮眠室で休んでいた彼は、何気なく目が覚めた。それは珍しく悪夢によるものではなく、偶々のことであつたのだ。水でも飲むかと部屋を出た理鶯は、寂雷とベリアルが何かを話しているのを偶然聞いてしまった。とはいえ雷鳴により、途切れ途切れにしか

聞こえなかったが。

『キミの質問に答えよう。』

——ご明察の通り、オレはニンゲンではない』

人間でないのならば、一体何だというのだろう。その前までは、穏やかに理鶯と話していた寂雷の動揺した声が聞こえて来たが、内容まではわからなかった。

ちやんと聞こえたことを理鶯は分析してみた。冷静沈着で滅多なことで動じない彼であるが、何かとんでもないことを暴いているような気がして、この時ばかりはかつてない程胸が高鳴っていたのを憶えている。

ベリアル。上官と呼ぶその男の名前を、脳内でなぞる。

それはとある悪魔の名前であることは知っていたが、まさか本当にそうだというのだろうか？

まさかと理鶯は頭を振った。そんな漫画やアニメのようなことはあり得ない。

後の言葉は完全に聞こえなかったので推測でしかないが、何かのジョークだった可能性だつてあるのだ。

そうして彼は、騒めく胸を無理やり抑え、何か予感のようなものを無理矢理呑み込んだ。

「……上官は、俺の話聞いてくれた」

伝わらない言葉がどれだけ虚無であるかを知る理鶯にとって、それは重要なことである。

それは彼にとってチャンスの訪れと同義であった。

歩みを止めかけていた彼が、もう一度前を向いて歩くための、光芒。ならば、何としてでも離すわけにはいかなかった。

「Grasp<sup>幸</sup>の<sup>運</sup>Fortune<sup>女</sup>by<sup>神</sup>the<sup>は</sup>forelock<sup>前</sup>」

後悔は後ですれば良い。今はただ信じることを優先しよう。

彼の上官と同じ言葉を言ったとしても、意味は違う筈だと、理鶯は足を一歩踏み出した。

理鶯が呟いたのは、とある諺の一つで『チャンスの女神には前髪しかないのです、通り過ぎた後にあわてて捕まえようとしても後ろ髪がなく掴む場所がない』という意味を持つ言葉であった。

彼が答えを導き出すのに掛かった時間だけ、ベリアルとの距離は離れてしまってい

た。

理鶯がその背中を追って走り出したのはそれから直ぐのことである。

悪魔、降臨せし時 ☒

そこは一言でいうと、色彩の溜池であつた。

シツクで落ち着いた「黒」を基調とした空間に、煌びやかな貴重品、所狭しと置かれた花々、宝石を砕いたような光を放つシャンデリアなど、一流店の品格を保ちつつも、ホストクラブとしての輝きを誇る店内では、端正な顔をした年若い青年たちがそれぞれの席についていた。

席には所謂お客さんが座っており、その殆どが着飾った女性であつた。

彼女たちはホストたちの饒舌なトークを楽しみ、チップとして酒や食べ物を注文する。

色鮮やかな容姿をしたホストたちが、席と席を行き来する姿はまるで蝶のようだ。

「席、空いているかい？」



今日も今日とて開店からそれほど時間が経過していかないにも関わらず、満席御礼状態である。

エントランスに立ち次々と客を案内していた男は、かつん、と響いた靴音に顔を上げると、ぱつと顔を明るくした。

「あつ……！　べ、ベリアルさん……！」

「オレをご指名さ。できれば、静かな席が良いね。

フフフ……恥ずかしがり屋でね、声を聞かれないらしい」

「つ、あ、す、すぐに、ご案内します……つ」

「フフ、頼むよ。あとでキミも混ざるかい？」

「い、いえ……つ！　そ、それは……」

店の正面口から入ってきたベリアルを出迎えた男は、黒服の青年であった。

彼は縁の下の力持ちとして、店を支える黒服の1人であり比較的古株である。

もちろんこの店では、黒服が客をもつことは許されていないのだが、自由奔放な“新人”はこうして戯れの言葉を口にするのだ。それに翻弄されそうになる自分を、“客の前”だと律した。

「それとも、キミがオレを指名してくれるのかな?」

くすくすと造作の良い顔で、それは嗤う。

この黒服にとつて、ベリアルは近寄りがたく、でも拒絶できないものであった。

ある日突然、店のNo.1である一二三かんぼんによつて紹介されたベリアルという男は、一二三の口添えもあり、いきなり客の前に出ることになった。

通常新人は、先輩について所作を学び、雑用をしながら店に馴染んでいくのがしきたりのようなものだが、オーナーと一二三そしてベリアルが『なにか』を話し合つた結果、そうなつたらしい。当然ながら苦情はあがつたが、それもすぐに止んだ。

オーナーが行つた模擬接客しげを見たとき、誰もが口を噤んだのである。

店によつてまちまちであろうが、この店は主に「教養」や「頭の回転の速さ」が求められる。簡単に言うると、それだけレベルの高い客が訪れるところであり、それを相手取る彼らも求められるハードルが高いということだ。ベリアルはそれに応えるどころか、飲み込んでみせた。

相手の本心を見抜き、相手の求める言葉を解す。

これが基本となるスキルであるが、彼はそうはしなかつた。

それらを理解しながらも、返すのは意味深な微笑のみ。

造作の良い顔に浮かぶ笑みに、性別を問わず皆一様に魅入る。

柔らかな、鋭い赤い瞳は、言外に相手に「すべて」をわかっていると告げるのだ。

言葉を失った客に、やつとベリアルは口を開く。

「キミが言いたいのはそんなことかい？」

「もつとオレに、キミの汚い本音をぶっかけてくれよ」

「しゃぶりつくして、飲んでやっても良いんだぜ？」

蛇の如く、赤い唇の間から舌を覗かせて、囁くようにいった言葉は品がないに尽きるが、同時に動いた指先と視線は優雅なものであった。

それだけだ。たったそれだけで、魔法にでもかかったように、その場はベリアルのものである。気が付けば我を忘れて、それが試練だということも忘れて、オーナーは話し始めていた。

黒服は思う、この日のこの時から、オーナーの「様子」が変わった気がする。

「い、い、い、あんない、します……！」

黒服も、その場に居合わせた1人であり、その時のことはよく憶えていた。仕事中に惚けそうになる自分を知ったし、彼は慌てて席へと案内する。

この時、ぱりつとしたスーツに身を包んだ黒服はあるまじきミスを犯す。ベリアルが連れてきた客を、一度も見えていなかったのだ。

「……さて」

黒服の案内のままに、席に着いたベリアルは足を組んで相手を見る。

このような接客はまずありえないといつて良いのだが、もはやベリアルの言動に口を挟むものは皆無に等しい。唯一それが可能である一二三は、No.1の肩書に相応しい忙しさで、ベリアルに構う暇はないようだ。

「継続者さんか、〴〵新規さんかって聞くのは野暮かな。

少し雑談に付き合ってくれないか？ なに、本番前のお遊びだ。

キミとは『長い付き合い』になりそうだからね、じっくりとお互いを知っておこうと

思つて。——ダメかい？」

身を乗り出して膝に腕を付くと、手を頬にあてて視線を滑らせる。

「フフフ、……アリガトウ。

お礼にコレをあげよう」

差し出されたのは『1枚の黒い羽』であった。

一目見ただけで鳥のものとも違うとわかるそれは、黒曜石のように鈍い輝きを放っている。

「不思議そうな顔をしているね。

もしかして……それに見覚えがあるのかい？

いや、いい。別にキミがそいつを知っていようが、関係のない話さ」

ベリアルはじいと相手の顔を見つめたかと思うと、体を起こしてソファアールへともたれ、足を組む。そうして愉快だと言わんばかりに目を細めた。

「オレの力が必要なら、いつだって『よ』んでくれよ。  
なあ——」

ひとつ、ひとつ、強調するために切り取られた言葉は、甘く、つめたく蕩けるような、さげすむような響きを孕んでいた。

溢れていた『色』は消え去り、2つの『赤』だけが仄暗い光を放つ。

墮天司の加護はいつだって……たわむれ気紛れであるのだ。

\*\*\*

颯爽と歩いていく後ろ姿に迷いはない。

むしろ迷うことがあるのだろうか、帝統はぼんやりと考えながらその背中を追う。協力を申し出はしたものの、帝統はベリアルに何一つこれからのことを聞いていなかった。

『何を目的に自分が使われたのか』はもちろん、これから自分たちが向かう先でさえ、知らない。

「なあ、」

帝統が呼び掛けると、ベリアルは目線だけを帝統に投げ返す。

深い色をした瞳は愉快そうにも退屈そうにも見えた。

さてどうしたらベリアルは答えをくれるだろうと、考えたのは呼び掛けた後で、帝統は一度口を閉ざした。俺を焦らすつもりかい？とベリアルは笑う。そんな2人に行き交う人間たちの視線が注がれていた。

豪胆な一面を持つ帝統は、いつもならばそんな雑踏に視線に怯むことはない。

色々な意味で視線を向けられることに慣れていたからである。

しかし今は、*“らしくない恰好”*をしている所為か、いまいち落ち着かない様子を見せていた。

「フフフ、人間が初めて羞恥を覚えた時の顔をしているね。

だがキミは*“裸”*ではないだろう？　むしろ立派な服を着ているじゃないか。

ああそれとも……キミには、着ていることに興奮する性癖があるのかい」

「ないっ！　ないない！　ぜ——つたないから！」

変なこと言うなよ、にーちゃん」

「別に変なことじゃないだろう？」

安心しなよ。キミがどんなにヤバい性癖を持っていても……。

オレはそれを否定する気はない」

「……いや、だから、俺はノーマルだって」

聞こえによつては優しい言葉かもしれないが、勝手に特殊性癖の持ち主にされかけている帝統にとってはとんでもなく酷い言い草であった。

揶揄われているのはわかっていたが、ついつい反応してしまう帝統の素直さは、墮天司の恰好の餌食となっていたわけである。彼は喰つてかかるわけでもなく、眉を下げて情けない表情を見せながら、離れた距離を少し詰める。

「ねえ！ あれって——」

ただの偶然かそれとも、彼の醸し出す『何か』を察知してのことか、行き交う人の群れは、ベリアルを前にして自然と割れる。特に女性たちと、すれ違う度に耳にするベリアルを指す言葉に、帝統は改めて「あのバトル」の反響の大きさを知った。



注目されているのは帝統とて同じではあるが、正体不明の番狂わせの存在は早くも伝説と化しており、尻尾スキャンダルを掴もうと付け狙う輩もいるほどである。SNSにはベリアルの出没情報や、カメラ目線の隠し撮り写真、動画をはじめ、訴えれば勝てそうな個人情報が多くあげられているが、その正体にたどり着いたものはいない。それがまた、パパラッチの欲を擽っているのだ。

携帯やコンパクトカメラ、さらには一眼レフカメラのレンズが向けられる。がらりと変わった街中は、モデルの撮影を通り越して記者会見会場のようでもあった。

最新鋭の技術の結晶レンズがぎらぎらと光を反射する。

それを愉快そうに見下ろしたベリアルは、帝統の肩に腕を回すと、目を細めて口角を上げる。慣れた様子でポーズを取り始めたベリアルに、一拍置いて黄色い歓声と野太い唸り声が上がったのであった。

「フフフ、今夜の賭け金チツは足りそうだね」

「マジかよ……」

「彼らが絶頂した証拠さ。いや待てよ……」

フフフ、こういうサービスもありかもしれないな」

「こういうサービス？　よくわからねえけど……」

にーちゃんがそういう目してる時って、大抵ろくでもねえんだよなあ」

何だかんだでノリの良い帝統は、突発的に始まった撮影会を愉しんでいたが、ポケットや、シャツ、ベルトの間に挟み込まれた“紙”を見て、啞然とした。

法律など詳しいことは知らなかったが、流石に違法ではないかと思ひ、それに触れることは躊躇われた。一括りにしてしまえば素行の悪い部類に入る帝統だが、その内面は筋を通す男であり、根は真直ぐなのである。

しかし、そんな彼の躊躇など気にも留めず、ベリアルは平然とした顔で“己の胸元”に押し込められた“それ”をすべて抜き取ると、帝統に持つように指示をする。幾度かの視線の攻防戦があったものの、渋々と帝統がそれを受け取りしまうと、ベリアルは鬱蒼と笑った。その顔を見た帝統は、口角を引き攣らせた。

それが、何か良からぬことを思いついた顔であることは、経験上わかりきっていたのだ。

「さて、そろそろ行こうか」

「そーいや、俺たち何処向かってんだ？」

「もうすぐそこだよ。あそこに見えるだろうか？」

「んん……う？」

まだまだ人の群れは続いていたが、もう興味を無くしたとでもいうようにベリアルはあつかりと背中を向けると、再び歩き出す。帝統もベリアルに倣いながら、先ほどからずっと問いたかったことを聞いた。すると、ベリアルが顎で示した先には、如何にもお堅そうな“会社があつた”。

でかでかとした会社名が壁面に掲げられており、帝統はその会社名を耳にしたことはなかつたが、医療関係であろうことはわかつた。だが、新たな謎は生まれる一方である。なぜそんなところに何の用があるのか、再び問おうにも目的地はもう目の前まで来ていた。

都心特有のビルは横にも縦にも長く、真新しいデザイン性溢れるものではなく、どちらかというところからずつとそこにあるような

医療を扱う仕事だからだろうか。壁面は真白く、清潔な印象を与えている。

スーツを着た社員と思われる人間たちが出入を繰り返しており、忙しそうだ。

彼らの胸元でぷらぷらと揺れる社員証を眺めながら、帝統は目を細める。

「おいおい、そんな不機嫌そんな顔しないでくれよ。

まあキミが退屈するのはわかるケド、これもお仕事だ」

そう言つて軽笑を湛えながらベリアルは、入口で控える警備服を着た人間に片目を閉じてみせる。ヒトの本能を擽る墮天司のウインクは、果たしてどのような意味があつたのだろう。人間という生き物は、〃自分にとつての最良を常に吟味〃し、〃帳尻合わせのために尤もらしい理由を付ける〃ものだ。ヒトの愚かさを理解し、受け入れ、そしてそれを糧にしてきた彼だからこそ、人間の感情の揺れは手に取るようにわかる。

こうして哀れなことに、意味深な目配せを受けた警備員は、文字通り魅了されたといふわけである。

「な、なにか……その、ご用でしょうか？」

「逢瀬デイトの予約をしているんだけど、入っても良いかい」

「で、でーと……う？」

「ああ別に、中ナカでナニなにかするつもりはないよ。

ただどうしても合わなくちゃいけないね」

「え、えつと……お約束されているなら、受付で、どうぞ」

「おいおい、マジかよ。チョロ口過ぎんだろ。と口を引き攣らせた帝統を横目に、ベリアルは建物へと足を向けた。弁舌を操る、というよりも相手そのものを操っているかの如く、警備員はあっさりとベリアルと帝統を受付へと案内した。」

「受付のテーブルへ腕を付いたベリアルは、首を傾けると目を白黒とさせている女性に向かつて微笑む。年若い彼女は、有り体にいうと受付嬢であろう。綺麗に切り揃えられた髪と、手入れされた指先、派手すぎない化粧、そしてきつちりとした制服が清楚な雰囲気を実際立させていた。」

「受付嬢はベリアルの仕草に目を丸くしたものの、流石客対応には慣れていいのか事務的な手続きを進めようとする。手元にあった来客の予定が記されている紙をぺらりとめくると、あ、と小さな声を溢した。」

「営業部の観音坂とお約束されていた方ですね、ええと……ベリアル、さま」

「そうだよ、彼はいるかい？」

「大変申し訳ありません、観音坂は今……」

「名簿に記されていた名前を見ると、受付嬢は申し訳なさそうに眉を下げた。」

おそらく『不在』だと口にしようとしたのだろう。控えめな色のグロスが塗られた唇が、次の言葉の形をつくった、その時である。するりとベリアルベリアルの瞳が滑った。

「失礼。あなたがベリアルさまでしょうか？」

当社営業の観音坂と本日打ち合わせのご予定の」

「キミはどっ」

「私は観音坂の上司で、下部といひます。」

申し訳ないことに観音坂は不在でして、恐れ入りますが打ち合わせなら代わりに私が」

後ろから掛かった声は、落ち着きを払っており穏やかで丁寧な印象を相手に与える。ベリアルは緩慢な動きで振り返ると、いつの間にか後ろに2人の男が立っていた。

下部と名乗った男は、観音坂独歩の上司だという。

彼が不在であることを告げた下部に、ベリアルは特別反応を示さなかった。

それどころか下部を視線で一蹴すると、その隣にいた男を見てふと表情を変える。

その変化はすぐ隣にいた帝統にしかわからないくらい、微々たるものであったが。

「それでは、私はここで」

「ええ、ありがとうございます。天国先生」

「いいえ、またお伺いします」

下部の一步後ろにいた男が、そういつて軽く一礼をした。

“天国先生”と呼ばれたそれは、灰に近い髪をツートンにわけ、特徴的な黒と白の革ジャンを着こなす洒落た男であった。

ベリアルベリアルの視線に気付いたのであろう。顔を上げた男の、金色にも見える瞳と深紅が交差する。男が何かを口にしようとする、ベリアルはついと目を逸らして帝統を見る。

「どうやら、ご指名のようだ。」

「キミはどうする?」

「……行く」

「そう、いい子だ。」

「それじゃ案内してもらおうか」

「……。ええ、こちらです」

下部は2人のやり取りを静かに聞くと、先導するように一步前へと出る。そして男に一礼をすると、先を歩き出した。ペリアルはそれに続く姿を見た帝統は、ちらりと後ろを振り返える。

「……………」

男はまだ立ち尽くしており、冷えきった暗い「金」がどこかをじいと感じていた。帝統はその姿に薄ら寒いものを感じて無意識に体を強張らせると、わけのわからない焦燥感のままに踵を返す。そうして、先に行く黒い背中を追い駆け始めた彼を、男は見えていなかった。

\*終わり\*



## 悪魔、降臨せし時

“清潔”をそのまま映し出した部屋は、白一色の世界だ。

つい最近まで使われていたそこは水道や電気などはまだ生きており、かつての賑やかさが失われたことを除けば、在りし日のままであった。

そんな部屋の隅に置かれた丸椅子に座り、壁に寄り掛かった寂雷は、ただ一点のみを見つめる。組まれた長い足も、腕も、瞳も、動く気配はない。その置物のような姿は、言うならば精巧な人形のようなものであった。

紫とも灰ともとれる瞳が見つめる先、そこには――

白い壁や床、そしてシーツを染め上げる“赤”があった。

首を半分引き千切られた際に垂れ流された血は、もちろん相当な量である。

心臓から脳へ至る、そして脳から心臓へ至る筈であったそれは、輸血用血液パックをそっくりそのまままぶちまけたが如く、ベッドに染み込んでしまっている。このベッドはもう使えないだろう。

寂雷は昨晚のことを何度も、何度も、何度も、脳内で思い出す。

致命的な“赤”の中心に佇む“悪魔”が、首を半分失った状態で啜う。

寂雷が開けた扉から差し込んだ光は、暗い部屋を照らし影を落とす。

その時、彼は息を呑んだ。床に描き出されたベリアル影に違和感を抱き、そしてその違和感を凝視する。それが何かに気付くのは、少し時間が必要だった。

『うふふふ……、はははははっ！』

天司ね、オレがそう呼ばれるのは、何千年ぶりだろう』

『ああ、本当にキミは勘が良い。』

今のでわかつちやっただかな？』

『答えを出すのは、いつだって人間の役割さ。そうだろう？』

ベリアルという男が、*“恐ろしいモノ”*であることを寂雷は*“はじめから”*気付いていた。

いや、と寂雷は頭を振る。彼はいくつか仮説を立てていたが、『マイクを持つものうち、*“適性者”*となる可能性を持つものは皆、感じる事ができる』のだろう。これは仮説であるものの、ある程度の確信を持っていた。

—— *“適性者”*

それは今や絶対的と言って良いほどの力を持つようになった中央区が血眼となり探

しているもので、第一候補として自分がリストアップされていることを、寂雷は勘付いていた。そしてそれを巡って、さまざまな策略が動いていることも同様に。

「……誰の掌の上にいるのか、それが問題となる」

カチリ、と時計の針は動く。

しかしその部屋だけは、違った。寂雷の目の前に広がる「赤」は「黒」に変化する様子は一向にない。通常酸素に触れた血は、やがて酸化し黒となる筈であるにも関わらず。まるでそれがあるべき姿だというように、そこに存在し続ける。

寂雷は自分の頬に手を当てる。観察する時や思考の海に沈む際の、彼の癖であった。

「もし彼が、書物に示された通りの悪魔ならば——」

その存在が新たなる火種となると、寂雷は直感していた。

一層のこと番狂わせとなり、この日本を掻き乱して欲しいとさえ思ったが、そう上手くはいかないだろう。立場によって姿が変わるのは人間も、神も、悪魔も変わらない。

問題は「誰にとっての悪魔」か、そこを見極めようと寂雷は動いていた。

答えはまだ、わかっていない。

伊弉冉一二三に「協力」したり、観音坂独歩を「助けよう」とも「陥れよう」ともしたり、その言動を理解しようにも次の瞬間には変化するので、未だ掴めないのだ。

だが、何かを成そうとしているのは明確な事実であった。

そしてその目的のために、ヒプノシスマイクを持つものと接触している。

利用しようとしているのだ、と寂雷は思った。現に有栖川帝統という男は、彼の「犬」となっている。帝統が『浅はか』とは思っていないが、ベリアルが一枚も二枚も上手であったのか、それともまだ帝統に思惑があるのか、判断を付けるのはまだ早いとは思うが、良い観察対象にはなるだろう。

「ふむ、此処まで手を貸したことは「間違えではなかった」ということかな。

……私は、ただで利用される気はないけれど」

くすりと零れた笑み。寂雷の口元には笑みが浮かんでいたが、いつもの穏やかなそれとは違う。どこか歪で、どこか狂氣的な、そう「既視感」すら感じるほどの色を帯びたものであった。

頭で冷静に思考を回してはいるが、寂雷の胸は高揚に打ち満ちていたのだ。

何度も、何度も、リフレインする『その光景』は、一言でいうと残酷に尽きる。ホラー映画の如く血肉に塗れたワンシーンだ。人によっては嫌悪感や吐き気を催すであろう。だが、寂雷は戦場にすら赴いた経験のある医者であり、飛び出た内臓や千切れた手足など日常茶飯事で「救っていた」彼が、その光景に絶句したのは真逆の意味であった。

——うつくしい。なんて、うつくしいのだろう

白と、黒の世界に、彩られた赤は、寂雷の目にひどく鮮明に映る。

見慣れた世界は、その中心に佇む存在によって覆された。

「……私は、」

肉眼で直接見てしまった背德的光景は、寂雷にとって「宗教画」にも等しかった。

その画は寂雷の心を蝕み、喰い破っていく——。

翻弄し、翻弄される世界で、医師として導くために先陣を切ってきた寂雷は、己の心の片隅にあった残滓を見て見ぬフリをし続けてきた。それは葬り去ろうと足掻いてきた彼の過去であり、「生」へと手を伸ばす足枷でもある。

両の手は穢れ、両の足は枷に囚われた寂雷が「画」を通して視たもの。そして、彼がその「画」にタイトルを付けるとすれば、——「解放」。

寂雷はただ、ただ、あの瞬間を思い描く。  
時が止まった部屋で、ただひたすらに――。

\*\*\*

「……ベリアル？ ああ、最近なにかと “お騒がせなイイ男” ね。

もちろん、知っているわよ」

「マジで!？」

カウンターにしな垂れた “女性” は、激しい剣幕のままに飛び込んできた来客に眉一つ動かすことなくそう告げた。そうして、ウエーブの掛かった髪をかき上げると片目を閉じてみせた彼女は、 “鼻<sup>かわい</sup>真<sup>がつて</sup>している” 客の顔色を見てその用件を把握した。オツドアイが特徴的の3人兄弟の仲は良好過ぎるほどで、特にこの二郎は兄である一郎に傾倒している。おそらく、一郎に何かあつたのだからと彼女<sup>かれ</sup>は目を細めた。

「いち兄との連絡が付かねえんだ！

多分、だけど絶対にーちゃんと一緒にいる！」

「……ふうん？　確かにイチローちゃんと噂の『ベリアルちゃん』が仲良くしているって情報はあんだけど、そこまでの仲だったのねえ」

駆け落ちかしら、と冗談ぽく笑った彼女に、二郎は頭が真っ白になる。

目を見開いて動きを止めた二郎を見て、あら、と彼女は声を溢した。

シンジユクのBarで働くこの女性は、安僧祇潤と言つて裏で情報屋を営んでいる。山田兄弟も御用達である安僧祇の情報は、ジャンルを問わず幅広く、それでいて正確なものばかりだ。それにあまりふっかけることはしないので、この界限では良心的ともいえよう。ただし彼女に気に入られさえすれば、の話であるが。

「彼、おもしろいわよねえ」

「え……。彼つて……？」

「ベリアルちゃんよ、もちろん。」

拠点の場所は知っているけど、それ以外なんの情報も入らないの。

少なくともこの国で生まれた人間には戸籍があるわ。まあワケありつて場合もあるけどね。

彼にはそれもない。例え戸籍がなくとも生きていけば、何処かに足跡が付く筈よね。

依頼があればそれを迎るのが情報屋私たちとか探偵さんなの。最近増えているらしいわよ。彼を探ろうとする動きが。でも未だ、有益な情報を得ることはできていないの」

はあ、と深い溜息を吐いた安僧祇はこれまで以上に、ベリアルの情報収集に難儀しているらしい。ぼやきを聞いた二郎には、なんとなくそれが当然のことのように思えた。

「……じゃあ、情報はねえんだな」

「ふふ、やあねえ、早まらないで頂戴よ。

確かにカレの身の上はわからないわ。

でも、『出沒』場所なら……」

「つ！ ま、マジで!? 知ってんのか!」

「モチのロンよ。私を誰だと思って?」

その代わりいくらジローちゃん相手でも、今回は代金を要求するわ」

「へ!?!」

「今一番の話題の星の情報よ?」

情報は旬なの。青魚よりも足が早いんだから」



「そ、そんな……。つてか魚つて足ねえだろ」

「たとえよ。た・と・え。」

よくお勉強なさいな、中学生クン？」

「……うぐつ、う、うるせえな！」

そ、それでいくらなんだ？」

「あら、払う気？」

「そりゃ、……俺に払えるなら」

覚悟を決めたように唇を噛み締めた二郎に、安僧祇は唇だけで微笑んだ。

どうやらこの少年は本当に、一郎とベリアルが一緒にいると信じているらしい。

安僧祇にはその真偽は掴めていなかったが、二郎が動いているということは、弟の三郎も動いていることだ。ある程度の根拠がそこにはあるのだろう。少なくとも、ベリアルという男に関する情報は、直接接触したことのある二郎の方が握っていることになる。

安僧祇の持つ情報は、——とある夜の騒動のほんの一幕であった。

一握りのそれにすらどれほどの価値があるか、目の前の少年はよくわかっていない。だからこそ、安僧祇にとってこれはチャンスでもあったのだ。

「うふふ、あなたからお金を取ろうなんて思っていないわよ。」

「将来の投資にしておくつもりですもの」

「……なら俺にどうしろってんだ？」

「目には目を、歯には歯を、情報には、情報をつてね。」

「あなたの知っているベリアルちゃんを教えてもらおうじゃない」

「ベリ兄を？　でも俺は、」

「ふふ、わかっているわよ。」

「プロの私たちでもこんなにも掴めてないんですもの。」

「だから、これから知れば良いじゃない」

「……っ？」

「んーもう、鈍いわねえ。」

「お友達になりなさい、つて言ってるのよ」

「と、友達い!?!　ベリ兄と!?!」

「イチローくんとも仲が良いなら、あなたもいけるわ」

「ちよ、ちよつと待てよ！　それって、その」

「ふふ、<sup>スバ</sup>潜入捜査とも言うかもね。」

ジローちゃんには少し難しいかしら」

酷いようだが、二郎と言葉を交わしているのは情報を生業としている人間であるのだ。

いくら鼻根をしていようが、越えられない一線というものはある。逆にいうとそれだけ安僧祇が、ベリアルの情報欲を欲していたということでもあった。

それでも「相場」からすれば大サーピスなのだが、問題は果たしてこの性根の優しい少年がそれを呑むか、である。情報のためにお友達しんみっになるというのは、態々罪悪感を抱えることでもあり、プロでも人を選ぶ行為であった。自分を演じることのできる人間、嘘を吐くことに長ている人間、簡単に裏切ることのできる人間が最適であろうか。下手をすれば、逆に安僧祇側の情報を抜かれる可能性があるが、情報を操る彼は自分の身の守り方も心得ている。この時、安僧祇は焦れていたのだ。そして情報屋としてのプライドを刺激されていたのかもしれない。探れば探るほどに謎を深めていく、1人の男の正体に。

二郎とて、安僧祇が何を求めているかを察していたし、自身が兄の背中を追って片足をつ突っ込んだ世界にはルールがあるということもわかっていた。

目先の餌に飛び付くだけでは生きていけやしない。が、今食いつかなくては、自分の

世界を失つてしまうと、一郎の足取りが掴めなくなつた日から明滅を続ける脳内の警報が告げていた。二郎は失うわけにはいかなかった。彼にとつて一郎は、一番星なのだ。例えそれが、憧れを抱いたもう一人を犠牲にするとしても。

「……いいぜ、その条件呑んでやる」

「一皮剥けたわねえジローちゃん。ふふ、素敵だわ」

ふと息を吐いた二郎は、安僧祇を見据えた。

瞳に込めたのは、固き意思か、それとも兄への想いか。

言葉にせずともその瞳が全てであつた。

安僧祇はそつと目を伏せた

「決めたんだ、……いち兄を守るためなら、何だつてするつて。そうアイツと決めた」

——「ぜん」を捨てて「一」を守る。

二郎と三郎は、幼き日に誓い合った想いがあつた。

善だろうが全だろうが、いち兄を守るためならば……。

「いいわね、その目。すつごくタイプよ。

いいモノを見せてくれたお礼に、少しだけサービスしちゃう」

目を細めて蕩けるように笑った安僧祇は、二郎に座るように言うのと、一度奥へと入っていった。暫くして戻って来た「「r・b・彼女 >かれ」」の手には白い皿があり、その上には赤と白の果物が乗っていた。

「うさぎ……林檎」

「そう、可愛いでしょ?」

この林檎ちゃん、お客さんから貰ってね。

蜜がたっぷりですごく甘い。よかつたらどうぞ」

艶のある赤い耳が魅力的な林檎のうさぎは、安僧祇が言うように随分と蜜を蓄えているようだ。二郎が銀のフォークでうさぎを突くと、安僧祇はワイングラスを片手に話始める。それは短いながらも、二郎が最も欲していた答えであった――。

気が付けば、日が傾き夕暮れ時を迎えていた。

都会というのは自由に見えて不自由だ。あまり遅くなつては、警官が見回りをはじめ行動が制限されてしまう。慌しく礼を口にして店を飛び出した二郎は、ひたすらに駆け出した。

走りながらポケットの中にあつた携帯を取り出すと、指先で何度かスワイプをする。そして耳に当てると、数コールの後に聞き慣れた声が流れ始める。

「なに?」

「なにつてお前……! おにーさまに向かつて!」

つてそんなん言つてる場合じゃねえ!

いち兄の居場所がわかつた!

さつさとお前も来い、三郎!

「え? うそ、マジ?」

「マジだ、マジ! 場所は——」

口早に場所を告げると、電話越しに三郎が何かを言っているのを無視して、二郎は走るスピードを上げた。マツピングは頭の中で完了しているので、あとはただ走るだけである。

ビルの隙間から差し込むオレンジの陽は、赤々と空を、都市を染め上げ、ヒトをも呑み込もうとしているようにも見える。行き交う人の群れを器用にかき分けながら、二郎は走った。

そうして辿り着いたのは、大通りからは一変した閑静な路地である。迷路のように入り組んだ細い道を進むと、ぼつりと佇む一つのビルが見えて来た。

傍の看板には病院と書かれているが、人の気配は全くしない。

本当に此処にいるのだろうか。やっと足を止め、その建物を見上げた二郎に不安が過る。

これまで情報屋の情報に誤りがあったことはないし、此処まで来たのだから行くしかない。二郎は再び足を動かした。

「もうっ、ほんつと馬鹿なんですから!!」

「いってええええ!!」

ばしーん、と乾いた音が路地に響いたと同時に、二郎の背中にそれなりの痛みが走る。そして開口一番に発せられた罵声に、二郎は目を白黒させた。

目の前には腰に腕を当てた三郎が立っており、肩を揺らし荒い息を繰り返していた。一瞬状況判断が遅れたが、どうやら彼も走って来たらしい。ということとは、この近くにいたということであろう。しかし何故、自分は後ろから奇襲されなければならないのか。いつものように二郎は三郎へ文句を言おうとして、止めた。

「……一人だけで、いち兄にカツコ付けようっていうなら許しませんから」

何でいつも先に行くんですか、と小さな声で呟いた三郎に、二郎は自分が何も言わず勢いのままに家を出たことを思い出した。突然一郎が行方不明になった今、頼りはお互いだけなのである。二郎までもし行方が分からなくなった場合、三郎はひとりぼっちだ。

軽率だったか、と二郎は頭を掻いた。今の今まで二郎の行方がわからず、不安であったのか口には出さないものの、声は震え、瞳は潤んでいた。

「……。わかってるっつーの、悪かったな」



「なにソレ。気持ち悪るっ」

「はあ!? お前がそんな顔すつから、俺が大人の対応してやっただけだろーが!」

「僕がどんな顔をしてたつていうんですか。」

「さっさと行きますよ、ジロ兄」

「……おう」

二郎を追い越して先を歩き始めた三郎は、兄に背中を向けている間だけ小さく笑った。

正直、まだ言いたいことは山ほどあった。しかし、二郎がいつも通り無事でいたことを確認すると、もうどうでも良くなったのだ。

ひんやりとした空気に包まれたそこは、人氣がなく物寂しい場所だ。

幽霊が出ると言われれば信じてしまいそうな、そんな場所で二つの笑い声は何処までも明るく響いたのである。

\* 終わり

## 悪魔、降臨せし時☒

恐る恐る開かれた扉は、きいと小さく音を立てた。

明かりが落とされていたが、傾いた陽の光が窓から入って来るために視界は悪くはない。  
い。

夕暮れのオレンジ色が病院特有の白い床と壁を染め上げ、誰もいない病院内は静かに彩られていた。

鼻を刺す消毒液の匂いの中を、二郎は1つ1つの部屋を見て回る。  
かつかつ、と2人の歩く音が、静謐に包まれた病院に響いていた。

「おーい、いち兄い！……あーくそつ、何処にいるんだ!？」

探し人の名を呼び回る二郎は、人の気配をまるで感じない病院に不気味さすら感じながらも、折角見つけた手掛かりを前に逃げ帰るわけにはいかなないと必死に足を進める。

そうして、診察室前の通路を通っていた二郎はふと窓ガラスを見た。

良く磨かれたガラスは、夕暮れに染まる外の景色を綺麗に映し出している。

よくよく見ると自分の顔も見えて、疲れた顔をしているのがわかった。

「はあああ、ほんと何処行つたんだよ」

そう肩を落とした二郎は、後ろにいる三郎に声を掛けようとして、とある違和感に気が付いた。

窓ガラスに映るのは、外の景色と、薄らとだが診察室も映っている。そして、二郎も。そのまま足元に目を向けると、そこには二郎の影が廊下に伸びていた。

「———どうしたんですか?」

「ん? あ、ああ、なんか……、おかしくねえか?」

「え? なにが、です?」

「……なにつて、お前」

二郎の後ろから聞こえてくるのは、年齢相応の、少し高めの声だ。

それに違和感はない。ない、はずであった。

廊下に伸びる「1つ」の影を見て、二郎は気付いた。気付いてしまったのだ。

むしろ何故今まで気付かなかつたのだろう、と二郎は固唾を呑む。

この三郎というクソ生意気な弟は、基本的に「一郎意外に敬語を使わない」。

そして、基本的に「一郎意外に笑顔を見せない」のだ。

確かに最近イレギュラーは増えたが、そのスタンスは変わっていない。

なのに何故、後ろの少年は「そんな言葉で二郎に語り掛け」、  
「そんな顔」で二郎を見ているのだろう。いや違う、と二郎は体を強張らせる。潤んだ瞳を歪ませたその顔は、一郎を見るそれとは違う。あの男、<sup>ひと</sup>だ。あのヒトを、見る目に近い。

「ねえ、……じろ兄」

しなる指先が、二郎へと向けられる。

何でもない、少年にしては細めだが普通の指だ。

普通の指である筈なのに、それを視界に収めた時二郎の背中に氷が這った。

それは恐怖という名の氷であることを、彼は本能で理解する。

「ひっ」とも「うあ」とも取れぬ悲鳴を溢した二郎に、三郎は鬱蒼とした笑みを浮かべる。

ゆつくりと、舐るように、上がっていく口角は、生々しい艶やかさがあつた。

——「既視感」。なんて感じ取る余裕はもはや二郎には残されていない。

理解が、追いついていないのだ。

だって、三郎は、自分の弟は、窓ガラスに映っていない。傾いた夕日がつくり出す影も、1つしか伸びてはいない。

それなのに何故、自分は“それ”を知覚しているのだろう。

「無視、しないでくださいよ。ねえ」

かつん、と白い床を靴で叩いた音がする。

それは一歩、二郎へと近付いた音である。

二郎は、それ以上動くことはできなかった。

その恐怖は、二郎の本能を蝕み、思考を停止させる。

指先1つ動かすことのできない、圧倒的な恐怖であった。

「じろ、」

「ちがうつ………！」

お前は、三郎じゃ、いや俺の弟じゃねえ……!!」  
「……あははつ、それ、冗談のつもりですか？」

恐怖に凍てつく二郎を救ったのは、彼の「言霊」であった。

恐怖はいわば自己暗示である。未知なるもの、得体の知れないものに感じる、それを彼は言霊で払拭しようとしたのだ。力を持った言葉は、目の前の三郎を否定した。その姿は真実ではないと、告げたのだ。

しかし目の前の三郎は、相変わらず歪な笑みを浮かべるだけだ。  
それは、二郎の言霊では敵わない存在であると、暗に告げていた。

「酷いなあ、この弟を否定するなんて。ねえ、じろ兄？」

「つ、……つぎっけんな、誰が、だまされるかよ……！」

弟を、間違えるほど……俺は、」

「あれ？ おかしいな、だって、さっきまで気付いていなかったじゃないですか」  
「それは……！」

かくりと首を傾げた三郎は、口元は緩めたまま蔑むような目で二郎を見る。

それもまた真実だった。二郎が三郎の違和感に気付いたのはたつた今のことだ。それまでは、この三郎にせものを三郎おとうととして、接していたのだから。

「あはつ。偉そうなことを言つて、大したことないんですねえ。

ああ、元々……大したことないか。だって、いち兄がいらないと何も出来ないヒトですものね」

「なつ、」

「ふふふ、ふふふふふ……。いいこと思いつきました。

順番を入れ替えましょう。

どうやら、じわじわと追い詰められるよりも、一気に蹴り落された方が、効果がありそうだ」

くすくすと、それは服の袖で口元を隠して笑む。

猫のように細められた瞳に、言い知れぬ恐怖がまた二郎を襲った。

かつ、かつ、とそれが歩く音に、また近付いて来るのかと息を詰めたが、どうやら違うらしい。音に敏感な二郎の耳は、それが「遠退いていく」のを聞き取った。

「な……なんなんだ、いったい、……なんなんだよっ!!」

その気配が消えて、どこかの扉が開いて閉じた音がした。

しかし二郎はそれを追うことはできなかった。何故ならば、その体がふと崩れたかと思うと、彼はそのまま廊下の床にへたり込んでしまったのだから。

力が入らない二郎の体は、かたかたと小刻みに震えていた。

—— // 誰もいなくなってしまった //

そんな筈はないし、それを認めるわけがないのに、心に浮かんだ言葉は消えてはくれない。

さらに追い打ちをかけるように、病院を包み込む静謐が彼の心を歪ひずませる。

力の入らない体をずりりと壁に凭れかからせた二郎は、自分の膝を抱え込むと顔を埋める。

何が起きているのかさっぱりわからなかったが、何かが起きていることだけはわかった。何かそう、大変なことが起きて、取り返しのつかないことになるうとしている。それだけは、はつきりと理解していた。それでも、二郎は動けなかった。

弟ではない何かに怯み怖じ惑うだけの自分が情けなくて、ただ足を竦めさせるだけで何もできなかった自分が悔しくて、二郎は心の中で、何度も兄の名を呼んでいた。にい、



ちゃん……と、零れたのは言葉だけではない。彼が体を震わせる度に、ぼたりぼたりと、白い床に落ちる透明な粒が、声なき慟哭を形にしていた。

——かつん。

再び、二郎の耳に足音が聞こえた。

二郎がその音を理解する前に、彼の涙がぴたりと止まった。

リズムと音を肝とするラップをする彼にとって、音を聞き分けることは朝飯前である。

あの三郎もどきの音とは違い、重みがあり、少し遅い、ワザとゆっくりと歩いているのだらうか。気が付けば、二郎は恐怖を忘れその音に集中していた。

段々と近付いて来るそれに、二郎はゆっくりと顔を上げる。

二郎の視界に、黒い影が伸びてくる。かつ、かつ、かつ、と近付いて来る音の方を二郎は、ただじつと見つめる。

「おっと、此処にいたのかい。探したよ」

二郎がその足音から思い描いていた人物と、同じ男が姿を現した。洒落たスーツを着ている以外いつもと変わらないそれは、そう二郎に声を掛けた。黄昏時は終わりを迎え、下りはじめた夜の帳がその顔に陰影をつける。

「フッフ、いい顔をしているね。誰にイジメられたんだい？」

目を見開いて己を見る二郎の瞳から、ぼろりと雫が零れ落ちた。

オッドアイの宝石のような瞳にぷくりと膜を張り、きらきらと落ちるそれは、とても清らかでうつくしいものに見える。ひと粒落ちれば、またひと粒と、溢れ出す宝石の粒に、「赤い瞳」はゆっくりと弧を描いた。

そうして、壁に凭れ座る二郎の前まで近づいたベリアルは、片膝を付いてその白い指先を伸ばす。眼前に迫る血の気を感じさせない指先からは、先ほどのような恐怖は一切感じなかった。ひんやりとした指が、二郎の顎に触れる。その指に微かに力が込められれば、二郎の視線は上を向いた。

零れる涙を拭うわけでも、慰めの言葉を言うわけでもなく、ベリアルはただ二郎を見

つめる。  
柔らかな微笑を浮かべながら向けられるその瞳を、蛇のようだと二郎はぼんやりと思つた。

「ふうん。……キミは、強いんだね」

いいコだ、と瞳を緩めたベリアルに、くしやりと二郎の顔が歪んだ。

「つと、積極的じゃないか」

そうして二郎の体が動いたのは、本人にも無意識のことである。

勢いのままにというか、感情のままにがばりと飛び付いた二郎を、ベリアルは体勢を崩すことなく受け止める。ぼふんと固い胸に顔を埋める形になったが、ふわりと鼻を擦る香水が、必死に押し殺していた感情を解きほぐしていく。

二郎の胸を占めるのは、ただひたすらの安堵感と、微かな罪悪感であった。

「よしよし、かわいいそうに。」

キミのおニイさんが行方不明になったんだらう？

それでキミは、必死に探し回って……。ここに辿り着いたわけだ」

「つ、う……………うう、……………にいちやんが、かえって、こなくて、おれ、」

「わかるよ。大事なもののほど喪うのは恐ろしい。」

だから、一番大切モノのは一番奥に隠し持っておくのが良いんだケド……………。

中々うまくいかないのが現実さ。困ったことにね」

「でも、おれは……………。にいちやんがいないと、なにも……………できないから」

「フフフ、そんなコトはないさ。」

キミは一人で此処まで辿り着いたじゃないか。

それってすごいコトなんだぜ？」

「……………え、？」

「キミは、兄弟を助けたいかい？」

「つ！ と、とうぜん、だ……………！」

「なら、体位を変えようじゃないか。」

フフフ……………。今度はキミが主導権を握る番ってことさ。

そんな情けない面じゃ、萎えちまうぜ？」

悪戯な言葉は、優しくも二郎を奮い立たせるような声音によって告げられた。ぱつと顔を上げた二郎に、ベリアルは微笑を湛えたまま囁く。

「オレも、力を貸してあげよう」

男の肉体であるが故に柔らかさは皆無であつたが、その品のある香りとぬくもりによつて、二郎は落ち着きを取り戻す。強い光を取り戻したオッドアイに、ベリアルが残念そうな顔をしたのを、二郎は知らなかつた。

「な、なあ、兄ちゃん。」

「そもそもなんで、兄ちゃんが此処にいるんだよ?」

「オレが此処に来なければ、キミはずっと濡れたままだつただらう?」

「少しは感謝してくれたつて良いんだぜ」

「……っ! ま、前から思つてたけど……。」

「兄ちゃんの言い方なんか、アレだよな」

「うん? オレの言い方がなんだつて?」

「つ、そ、その、なんつーか、えっと、」

「フッフ、駄目じゃないか。物事ははつきり言わないと」

「だつ、だあああ!! 一々、ヤらしいんだよっ!」

「ははつ、思春期真つ盛りのボウヤには刺激が強かったかい？」

でも、この方が感じるだろう?」

「も、もうしらねーっ!」

漸く床から立ち上がった二郎は、ふと疑問を口にした。

ベリアルが来てくれたことは、彼にとつての僥倖であると同時に疑問でもあったのだ。

しかし返つて来るのは、案の定戯れの言葉ばかりである。

違うことを連想させる言葉の数々に、顔を赤らめた二郎はベリアルから顔を背けた。

そうやって、年相応の反抗的な口調とは裏腹に素直な反応を見せる彼は、ベリアルにとつては良い玩具であったのだろう。愉快だといわんばかりに軽薄な笑みを湛えたまま、二郎の肩に手を置くと、くつりと喉を鳴らしたのであった――。

「イイ感じに夜も更けて来たし、さっさとイこうか。」

——お愉しみはこれからだ」

\*\*\*

——舌から染み入る“味”は、鉄のそれだ。

噛み締めれば、噛み締めるほど、濃厚でまるやかで、甘くて。

飴を転がすように、ワインを味わうように、口の中で舐り呑み込む。

時折こみ上げる嘔吐感すら心地よく思えるほどに、その味に酔い痴れていく——。

「おーい、無事かー！　　つて、なんだこりや!？」

薄暗い部屋で、ベッドに寄り掛かりながら、何も考えられずただその行為だけを繰り返していた耳に、どたどたという廊下を走る音が聞こえて来た。特に施錠をしていなかったドアがばんつ！と開かれ、入って来た男は自分よりも年若い見覚えのない人物であった。

「ちよつ！　いくらなんでも乱暴すぎでしょ！」

どつぽちん、吃驚するからつ！　ねえ、聞いてる!？」

「うっせ。にいちやんに、もう限界だろうから様子を見てやれ」つて言われなきや、好き好んで男の部屋なんか来ねーよ！」

「だからそのにーちゃんつて誰なんだつて！　あ、ちよつと乱暴は止めてよねつ！」

「にーちゃんはにーちゃんだつて！」

ほら、アンタも手伝えつ！　大変なことになってんじやねーか！」

「うっせ、どつぽちん大丈夫!？」

近所迷惑、という四字熟語が真つ先に頭を駆け抜けたくらい騒がしい2人組は、部屋の主である独歩に駆け寄った。そうして、*「何かが抜け落ちたような」*独歩の虚ろな目を見た乱入者の1人である帝統は、あつちやーと自分の額を抑える。

あの「謎」の会社訪問の後、ベリアルからの指示を受けた帝統は、独歩の住むアパートへとやって来た。インターフォンを鳴らすと、運が良いのか悪いのか偶々仕事が休みであった一二三が出て来たので、大分ぎつくりと事の詳細を話すと彼を押し退けて中へに入ったのである。見知らぬ男が突然訪問してきて、突然中に押し入ったのだ。当然の



ことに一二三は、驚き戸惑った顔を見せた。

しかしそれも、あえて一二三が開けようとはしなかった独歩の部屋のドアを、その男が無遠慮に開け放ったことで変化した。

「まあ、想定よりはマシってか」

帝統からすれば、〃かなりヤバい状況〃を想像するに禁じ得なかった。

なにせ、あのベリアルが『彼、ヤバいかもね』と言っていたのだ。ホラー映画の如く部屋の中で惨殺されているのでは、とまで思っていたくらいである。

しかし中に入ってみると、部屋は至って普通であった。帝統が想像したようなことは一切なかったし、そもそも部屋も荒れておらず、男性の部屋にしては綺麗で清潔感がある。悪く言えば生活感があまり感じないのだが、そこはベリアルの部屋も同じである。

そのような部屋だからこそ、ベッドに寄り掛かり天井に虚ろな目を向けている独歩の姿は余計異様に映ったのだ。ちなみに帝統は、独歩や一二三とは今回が初対面ではあったのだが、のんびりと挨拶をしている暇はなさそうである。帝統は、腕に着けた〃お守り〃を擦った。

微かに香る鉄の匂いは、おそらく血であろう。

その匂いのもととは言わずもがな、座り込んだ男である。

指先と、唇から、赤いそれが滴っており、焦点の合わない目は何処も見えていない。

「おい、おいつてば！ 聞いてる!？」

両肩を掴んでがたがたと揺さぶりながら、一二三は悲痛な声を上げた。

帝統は腕を組むと、独歩の様子をじつと見る。

『おそらく、彼はヒプノシスマイクの使い手であるが故に、中途半端に壊されてしまっているだろうね』とベリアルは帝統に告げたが、その言葉通りの状況となっている。

「……」

帝統は眉を蹙めて、改めてベリアルの指示を思い出す。

何故あのベリアルが、独歩を助けようとしているのか。帝統はずつと疑問に思っていた。

彼から見ても、ベリアルは態々蟻地獄に落ちた蟻を助けるような性格はしていない。

それならそこに、何らかの理由がある筈と、彼は考えていたのだ。それが何であるかはわからないが、もしそれがわかれば、ベリアルの意図を掴めるだろう。帝統の瞳が、煌めいた。

「おい、兄ちゃん。アンタもマイク持ちだろ?」

「あ、ああ、持つてるけど?」

「よっし、やんぞ」

「へ? やるって……何を?」

「そりや、マイクが2本ありややることは1つだろっ!」

帝統がマイクを起動させると、独歩の部屋は一瞬にして精神の世界となる。

ヒプノシスマイクを持つものたちは、こうして現実の世界から離れた場所を展開して戦うこともできるのだ。3人のいる場所はあつという間に、選ばれし戦士たちのみが入ることのできる戦場と化した。

「じゃあ、いくぜ! 有り金筆り取ってやるよ!」

「……。そういうことかい。」

仕方ないなあ、あんまり乱暴なことはしたくないんだけど」

「ははっ、つまんねーこと言うなよ。」

やるからには、本気で来なっ」

「わかつてるさ。いくぜ、どっぽちん！」

帝統が展開しただけあり、辺り一面は金色を基調とした派手な装飾に変わっている。

このように展開した者によって、ステージは様相を変えるのだ。

おそらくカジノをモチーフとしてつくられたであろうステージに、2人は立つ。

独歩は一二三の傍でしゃがみ込んだまま、相変わらず精気の抜けた顔をしていた。

少々荒療治となるが、独歩もまたマイクを持つ人間である。

ラップバトルによって独歩の精神を引き戻そうと、帝統は一二三と独歩をこのステージに引き摺り込んだのだ。状況的には2対1であるが、実質一二三が独歩を庇いながら戦う形になるので、彼の負担は大きいだろう。帝統は2人の関係を明確にしらなかつたが、同居している以上それなりに仲は良いのだろうと思つた。同居人が自分を庇い傷ついでいく姿を見ても、戻らなければ、その時は――。

「させねえよ！」

ステージを彩る金色にも負けぬ輝きを持つその男は、真直ぐに帝統を睨み付ける。まるで帝統の考えを全て見抜いているかのような、眼差しであった。一瞬だが目を見開いた帝統は、ふと口元に笑みを浮かべる。そうして夜のバトルは幕を開けた。

—— 鳴り響く音楽は、魂を揺さぶる。

紡がれる言霊は、精神を奮わせる

手に剣<sup>マイク</sup>を握り締め、2人は言霊をぶつけ合う。

その姿はまるで、戦場で切り合う戦士のようにであった——

## 悪魔、降臨せし時 ☒

すっかりと陽が落ちて、夜の帳に包まれた病院を二郎は歩いていた。

つい先ほどまで、眩しいほどの夕日に照らし出されていた世界は、先が見えるかどうかとも危うい闇の世界へと一変した。どうやら、電気さえも通っていないらしい。

辺りを見回してもただひたすら黒が広がるだけで、まるで目隠しでもされているようだ。

視界に映る寒々しい光景に、いつか兄弟でプレイしたホラーゲームを思い出した。

そのゲームはよくある展開を詰め合わせたような、チープなものであった。

しかしよくある展開というのは、実際にありうるかもしれないことを描いたものである。

——暗闇から突然何かが顔を出すかもしれない。

——後ろから突然何かに追い駆けられるかもしれない。

そんな「かもしれない」を思い描くと、二郎の背筋は粟立った。

二郎は落ち着かなく視線を彷徨わせると、暗闇の向こうに何か動いた気がして、

ぴやつと飛び上がった。その拍子に反射的に手近にあった“それ”を掴む。

「うん？ どうしたんだい？」

二郎が掴んだのは、目の前に垂れ下がっていたベリアル尻尾……ではなく、ベルトである。

咄嗟のことで力加減ができず、思いのほか勢い良く掴んでしまったのだが、その体は揺らぐことはなかった。

闇の中にあっても、いやむしろ闇の中だからこそ爛々と輝く赤に、二郎はほつと胸を撫で下ろした。

現状、二郎が正気を保っていられるのも、前を歩くこの男の存在があるからこそである。

同時に何とも情けない気持ちに苛まれるが、二郎にはもうどうしようもなかった。

よくわからない状況だが、兄と、そして弟が消えてしまったのに、どうしてじつとしていられようか。

「ひよつとしてキミ……」

振り返ったベリアルは、二郎に視線を合わせる。

垂れ目がちな彼の目には、はつきりとその感情が見え隠れしていた。

「な、なんだよ……」

「フフフ……。何でもないよ。」

「それよりも、携帯持っていないかい？」

「携帯、あれ……。そーいや、何処にしまったかな」

「……。何処かに落としたのかもね。」

「そんなキミに、これをあげよう」

「か、懐中電灯！ こんなモン、どこで……」

「この主は随分、用心深かったようだね。」

「何本もあつたからー本拝借したんだ」

ベリアルの言葉に、服のポケットを探りはじめた二郎へ懐中電灯が差し出された。

至つて普通の懐中電灯であつたが、こういう非常時にはこれ以上ないほど心強い道具となる。



それにしても、いつの間に携帯を落としていたのだろうか。と二郎は顔を蒼くした。

「此処を出たら探せば良い。

どうせ、今あつても役に立たないだろうしね」

「それって、電波入んねーとか？」

「おや、良くわかったね。ご明察、その通りだよ」

「だろーな。こういう時そういうの鉄則だつて」

ふう、と深く息を吐いた二郎は、帽子を被り直す。

やはり近くに言葉を交わせる存在がいることは、とても大きなことである。

恐怖のどん底に落とされ攪乱寸前であつた二郎の精神は、再び平静を取り戻しつつもあつた。

ベリアルから手渡された懐中電灯で闇を照らす。

ひどく限定的な光ではあるが、無いよりはかなりマシだ。

どんなに怖いものであつても、見えないよりも見えた方が良い。

彼にとって、一郎や三郎をうしなうよりも怖いものはないのだから。

「それにしても、この廊下って何処まで続いてんだ？」

「さあ、てね。地獄の底までって言ったらどうする？」

「……。ベリ兄が言うのと、洒落になんねーよ」

二郎はこの場所を病院と表現したが、正式には入院機能を持たない所謂クリニックである。

そのため規模としては小さく、施設面積もそれほど大きくはない。だというのに何故か、2人の前にはまだ廊下が続いていた。ずっと、ずっと歩いたにも関わらず、行き止まることのない廊下に、顔を引き攣らせた二郎がベリアルに問うた。しかしベリアルは、表情一つ変えず笑みを浮かべたままにそう返したただけだ。

その顔をじっと見た二郎は、このベリアルはすべてをわかつているのではないかと思う。

この場所についても、そして自分の兄弟についても……。

ふと阿僧祇との会話が頭の中に浮かんだ。

目の前の男は、プロの情報屋を以てしても、その尻尾を掴むことが難しいという謎深い存在で、今尚何を考えているのかも全くわからない。ひよつとしたら、ベリアルがこの事態を引き起こしている原因である可能性だって、捨てきれないのだ。

そこまで考えた二郎は、自分の手にしているベルトに視線を映した。

「ま、行つてみりゃわかるよなっ！」

今までの考えを振り払うが如く、二郎は明るく声を上げた。

彼の持つオッドアイが星のように輝き、今までの怯えが嘘のように霧消する。

ほう、とベリアルは内心で感嘆した。

ベリアルもまた、二郎が己へと向ける「疑念」に気付いていたのだ。

それでも二郎はその疑念を呑み込んで、自分と行動することは見通していた。

先ほど味わった恐怖により受けたダメージを考えれば、それを想像することは容易かつたのだ。

人間は許容を越えた恐怖を味わうと、無意識に「誰か」を求めずにはいられない。

精神的に訓練されていれば別だが、少なくとも二郎は普通の少年である。

ヒプノシスマイクを持つということを考慮しても、完全に乗り越えられることはないだろう。少なくともベリアルはそう考えていた。

結果として、ベリアルの想像以上に二郎は強かつた、ということだ。

「キミなら、可能性はあるかもしれないな」

か細い光を手先を歩き始めた背中に、掛けられた言葉。それを紡ぐ声音は、隠しきれぬ愉悅が露わとなっていた。

\*\*\*

意識を取り戻してまず感じたものは、口に広がる「あまい味」であった。

喉奥にまでその味が残っており、寝る前に口にしたものを思い出そうとする。

だが霧が立ち込めるが如く、思い出そうとすればするほどに記憶は曖昧になっていく。

甘過ぎない、好みの味であった。美味いと感じたそれだけは忘れないようにと、舌を転がす。

そうしてやっと身体を起こすと、自分の着ている服が変わっていることに気付いた。

黒を基調としたそれは、見覚えがあり過ぎるものであった為に、誰のものかすぐにかかった。

身長もそれほど変わりなく、体格差については意識したことがなかったので、大体同

じくくらいであろう筈なのに、所々布が余っていた。確かに、最近SNSで良くあがっている写真を見るに、細身ながらしつかりと筋肉が付いていたが、と肩を落とす。

「……目が覚めたようだね。良かった」

「つ!? せ、……先生、」

「気分はどうだい? 吐き気や、気持ち悪さは?」

「ええと、大丈夫です。」

でも何で先生が? それに、ここ……病院?」

「混乱するのも無理はない。何せ私自身まだ理解が追いついていなくてね」

自分一人だと思っていた空間に、突然響いた声。驚いて声の聞こえた方を見ると、そこには壁際に置かれた椅子に座る見知った男の姿があった。壁に背を付けた男——  
寂雷の、その静かな瞳と目が合う。

「そうだ、寂雷先生。俺、なんか食べてました?」

「……。どういふことだい」

「いやなんか、口の中に残ってんすよ。」

こんな美味しいモン、俺食べたっけ？」

「……」

「センセ？」

「それは、どういう味かな？」

「そうっスね。肉の、赤っぽいとこ食ったような感じ……」

あ、いや生肉じゃなくて、

「ふむ。ステーキで言うとうエルダンってところかな」

「あ、そう。ソレです！」

甘みがあつて、ジューシーな感じ」

此処が何処であるか、何故自分が病院らしき部屋のベッドに寝ていたのか、それらを聞く前に口から出た疑問は、口腔内に残る謎の味についてであつた。

それを口にする、ふと寂雷の目が変わった気がした。

あくまでも、一郎がそう感じただけであるので見間違えかもしれないが。

寂雷は腕を組んだまま頬に手を当てる。そうして問診でもするようになり、いくつかの質問を投げかけた。

「……そう、か。とりあえず歯磨きをしてくると良い」

「え、寂雷先生……?」

「キミが何を口にしたか、それは私にもわからない」

目を細めた寂雷は、厳かという表現の似合う声でそう断言した。

「どうやら、寂雷の見ていないところで、自分は何かを口にしたようだ。それなら彼が知らないのも無理はあるまい。」

「そっか……」

「洗面台は、部屋を出て左手だ。」

「使い捨ての歯ブラシが置いてあるから、行ってきなさい」

「あざっす！ちよつくら行ってきますす！」

「ああ、行っておいで」

しっかりと睡眠をとったからか、驚くほど体が軽い。

一郎は飛び跳ねる勢いで、部屋を出て行ったのであった。

「……」

じつとその様子を見送った寂雷は、ポケットの中から“とあるもの”を取り出した。ガラス製の細長い管にいれられた“それ”は、脈打つようにたぶんと揺れる。現在寂雷が勤める病院の研究室に持ち込めば、成分的な解析などは可能だろう。だがそれらを解析して、証明したところで、一体何が明らかになるというのか。アレが人間ではない。だから、何だというのだろう。

「……いふ、」

部屋の“明かり”に透かしたそれは、相変わらず“うつくしい赤”を保っていた。それから反射した“赤”が寂雷の灰紫色と重なり、赤紫の色を生み出す。

「毒か、それとも……」

濃いルビーを溶かしたようなそれを、彼は『肉のように美味い』と言った。

それは寂雷とは違った。“極上のワインのような芳醇な香りと味”のするどちらか



というところ、フルーティー”に感じるそれを、一郎はそう表現したのだ。

寂雷は両手でガラス管を握ると、そつと胸にあてる。

そうしてそつと、その瞳を閉ざした――。

\*\*\*

「た、多重……？」

「そ。多重空間に迷い込んだってワケさ。 ”奴ら” にそんな能力があるとはね」

「……っ、それってやっぱマイクの力なのか？」

「んー。さて、どうかな。」

これだけ幾重もの空間をつくり出せるのは……」

ベリアルはそこで言葉を切ると、近くにあった診療室のドアを唐突に蹴り上げた。だああん！という轟音は、その一蹴りの威力を的確に表している。

突発的な行動にびくりと肩を震わせた二郎であったが、すぐその違和感に気付く。

ドアを蹴り上げた音が、何重にも重なり消えていったのだ。

山で聞こえる木霊のように響いては消えていくそれは、言い知れぬ不気味さを二郎に

与えた。

「キミのおニイさんが消えたのも、それが原因さ。

彼の場合は相当魅入られていたからねえ。

随分深くまでイっちまったんじゃないかい」

「っそれ……！ どういうことだよ！」

「聞きたいんだが、キミは皮被りかい？」

「……へ？」

「フフフ、デリケートな質問だったかな。

本当の芯は奥深く、皮に守られたトコにあるんだ。

キミの大事な芯の部分に、他人を近づけたいとは思わないだろう？

だからキミはオレと此処にいて、キミのおニイさんは芯の近くにいるんだよ」

「ちよ……っ！ 俺は別にほうけ、じゃなくて!!

もう少しわかりやすく説明してくれっ！」

「言っただろう？ 大事な部分は、皮を被っているって。

ひよっとして、キミはズル剥けの方がお好みかい？」

くすくす、と控えめに笑う姿は品を感じさせるが、その口から飛び出す言葉は真逆のそれである。

ベリアルのお話を纏めると、この病院は何らかの仕掛けがしてあり、空間が幾層も存在する謂わば多重空間となっているらしい。そのうちの二層に紛れ込んだ二郎は、偶々同じ空間にいたベリアルと会うことができた。しかしそれは、他の空間にいる兄と弟にこのままだと二度と出会えないことを示している。

ミルフィーユやバウムクーヘンのように、層を形成しているものを想像してもらえるところとわかりやすいだろう。真ん中の空洞部分に、この事態を招いた真犯人がおり、その真ん中に近い部分に兄である一郎と、三郎がいるだろうとベリアルは言う。

ヒプノシスマイクの性能にそのようなものがあるとは、驚きでもあり納得できる部分があった。

まだまだ未知の性能が多いマイクは、あらゆる可能性を秘めている。

そのうちの1つに、多重空間をつくるというものがあっても特別おかしなものではない。

「さて、状況は理解しただろう。」

このままでは平行線を辿る一方だ。

此処からの脱出することは実に簡単さ。

キミが血を分けた兄弟を見捨てるなら、ね。

でもそうじゃあない。キミは、兄弟を助けに此処に来た。

……それなら、やるコトは1つだよ」

「方法が、あるのか……？」

「そりゃね。何のためにオレがひと肌脱いだと思っっているんだい。

だがオレは別に、彼らに執着はないものでね。キミの力が不可欠だ」

「それで俺は、どうすれば……！」

「ぶち抜けば良いのさ。キミのその太いモノでね」

「ぶ、ぶち抜くって」

「なに、そう難しいことじゃない。

男なら本能が知っている。例えキミが童貞ヴァージンだとしても、感覚を研ぎ澄ませればイけるだろうさ」

平行に空間が存在するなら、縦にぶち抜けば目的の空間へと辿り着けるだろう。

そしてぶち抜く為には、ベリアルベリアルの力だけでは不十分であった。

貫通させるだけならば非常に簡単で、そもそもベリアルならばこんな面倒な多重空間

など、一握りで潰すことは容易いことである。しかし敢えて、この山田二郎という人間に力を貸し、協力するのにはおそらく何かしらの理由がある筈だ。

「オレは貫通させるのは得意だケド、繋ぐのは苦手だね」

多重空間を貫通させるだけでは、探し人のいる空間へと辿り着くことは不可能であろう

ベリアルの言った「彼らに対する執着がない」という言葉はそのまま、空間を繋げる為には「引き合うもの」が必要になる。そしてそれはひとえに「絆」と呼ばれるものであった。

「思いつきり共鳴ハウリングさせてやるんだ。

——キミのご自慢のモノでね」

ベリアルの言葉に、二郎は自分のマイクを手にするとじつと見つめた。

ヒプノシスマイクを持つ者同士は不思議と引き合うもので、時に感覚を共有することも可能である。特に血の繋がった存在同士であれば、さらに精度は高くなる。

「……」

す、と息を吸つて、吐き出す。

そうして二郎が精神を集中させると、すぐにベリアルが言ったことの意味を理解する。

ごく近くに、そしてすぐく遠くに、見知った気配を感じたのだ。

「探しモノは見つかったようだね。

そうしたら、手を伸ばしてごらん。

自分の感覚を触手に見立てて、そう肌を這いずるように」

二郎が見ているのは、相手の精神体である。魂と言ひ換えても良い。

例えそれが見えたとしても、この多重空間は肉体だけでなく魂すら閉じ込める場所である。

もし此処で息絶えでもしたのならば、魂ごと封じられ永久にこの空間から出られなくなるだろう。

そのまま集中を続けると、多重空間の姿が見えて来た。幾重もの層を形成し、一層一層に何らかの気配を感じる。層の奥へと意識を集中させればさせるほど、濃厚になっていくそれに、ずきりと頭が痛むのを感じた。

二郎は意識のみの探索を続けながら、まるで深海のようだと思った。

多重空間という大いなる海を、ゆっくりゆっくりと潜水していく。

深くなるにつれて光は失われ、未知なるものが姿を現す。

サルベージでもするように、二郎はただ探す。

深く、そしてさらに深く――。

「つ………！」

それは、突然のことであつた。

ゆつくりと沈んでいた二郎の足に、何かが巻き付いたような感覚が走る。そうして次の瞬間にはものすごい力で、引っ張られ、あつという間に奥へと――。